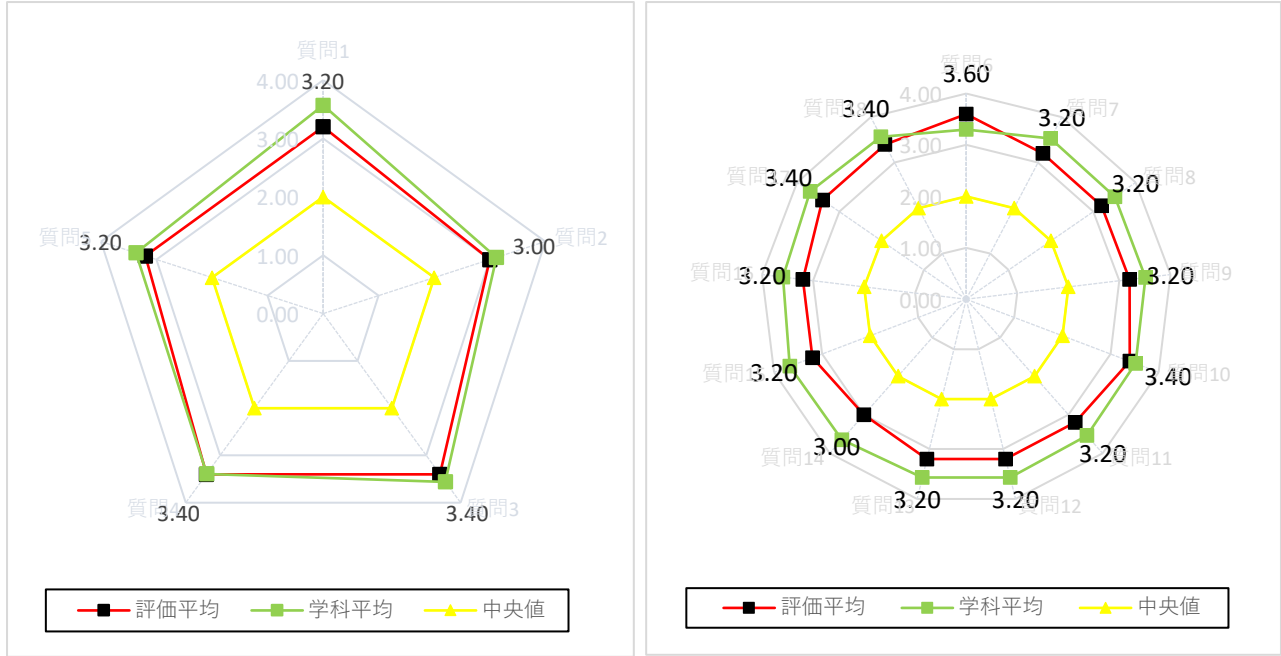


学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ 基礎（初 年次教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

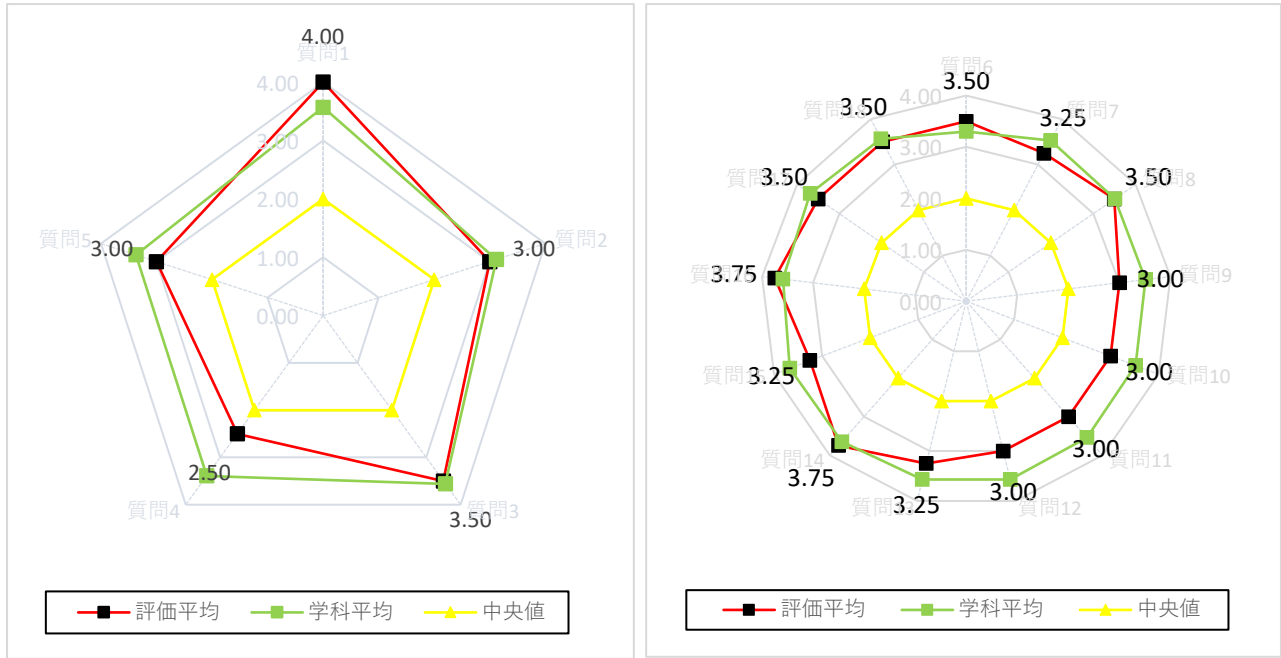
7人中5人が回答した。
遠隔授業がほとんどで、年度当初は戸惑い気味であったが、後期は、対面授業もあり、全体に落ち着いてきた。ゼミのZOOMでの授業でもうまく意見交換ができた。無事、1年を終えられたことにほっとするとともに、学生の授業への協力に感謝している。

（３）次年度に向けての取り組み

オンラインでのゼミ活動のやり方は、次年度も続くことになるだろう。学生相互の理解とよい関係の構築に何が大事か、よく省察して改善していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ 基礎（初 年次教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

本科目受講学生の回答率は、担当学生7名中4名で、回答率57%であった。本科目への総合評価は3.29（前年度3.50）、学生自身の取り組みに関する評価は3.00（前年度3.33）で、前年度と比較するとやや低傾向であった。低評価の項目は、学生自身のこの授業に対する工夫、また、学生への公平性、授業内容の工夫や方法等についての満足度が低い結果となった。コロナ禍において、例年行っている体験活動へ参加の極小、および対面による授業回数の減少とオンラインによる授業方法の工夫が不十分であったと考える。

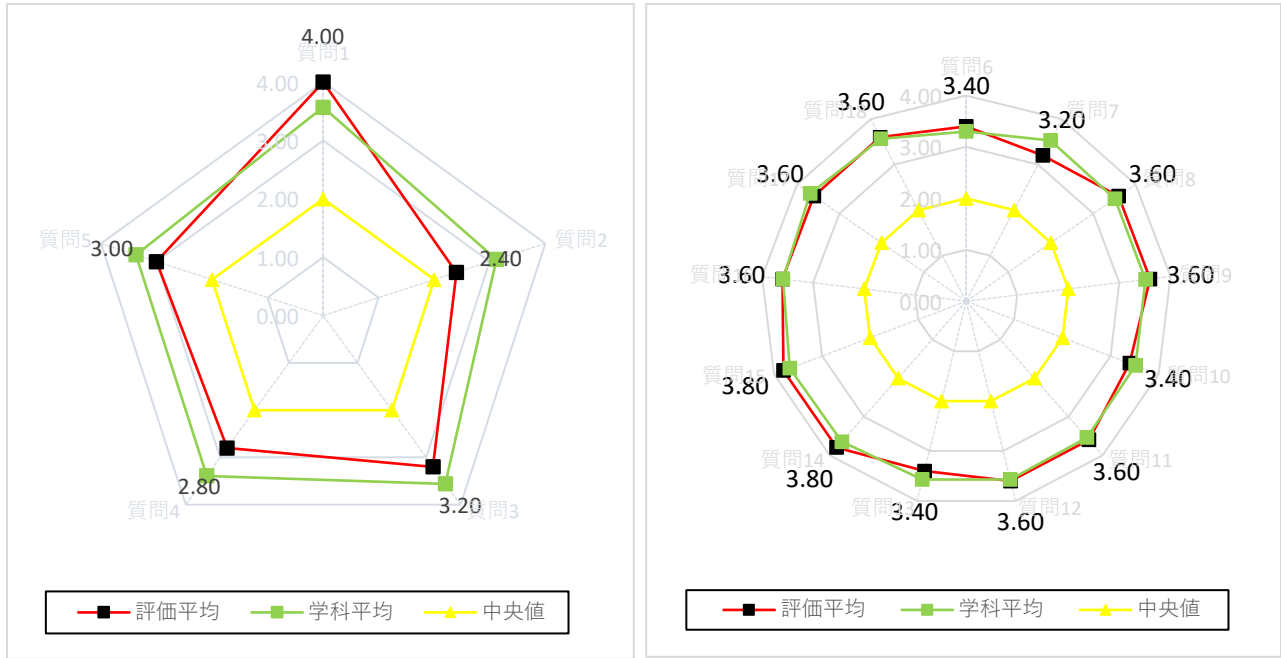
（３）次年度に向けての取り組み

（３）次年度に向けての取り組み

来年度は、まず学生全員からの回答が得られるように、授業時に計画的な投げかけを、さらに意識を高く持ち、授業に取り組んでいきたい。授業については、オンライン及び対面授業の方法をあらためて検討し、学生一人一人の受講状況を把握しつつ、引き続き細やかな指導を行っていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろうⅠ 基礎（初年次教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

出席率に関しては、自身が担当するゼミに関しては、学科平均よりも高かった。その背景として、今年度はコロナ禍に伴いオンライン講義と対面講義を併用して展開するという変則的なスタイルだった為、担当ゼミ学生に対しても、細目に連絡を連絡をいれ、講義開催について事前にアナウンスするように心がけたことが1つの要因としてあげられる。

一方、シラバスの活用に関しては、担当したゼミ学生自身も上手く活用できていない実態があきらかになった。

今後は、毎回の講義をおこなう冒頭において、本講義がシラバス上記載しているどの部分に該当するのか、到達目標との関連をより噛み砕いて説明するといった工夫・配慮が必要になると考える。

（３）次年度に向けての取り組み

おおむね、いずれの項目においても、高い評価を得ることができたと読める。

その中でも、質問7・13の2項目に関しては、今後、講義展開をおこなう上で、より丁寧な工夫・配慮が必要になると考える。

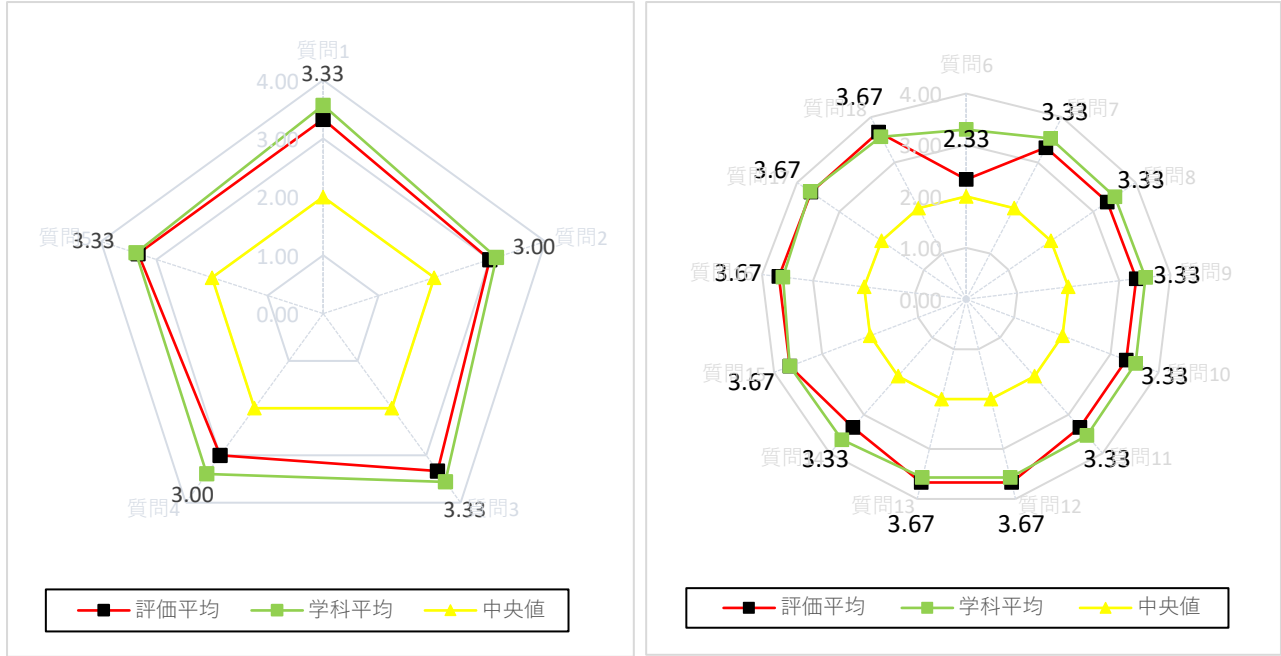
質問7に関しては、先述したように、各講義の冒頭において、講義のねらいや問題提起をより噛み砕いておこない、受講生の学ぶ動機を高めてから講義展開をおこなうような工夫が必要になると考える。

また、質問13に関しては、今年度はオンラインということもあり、各学生の受け取りのあり方や、つまづきの有無等（非言語的な様相等）を実際に直に確認することが非常に難しかったことが反省点として挙げられる。

オンライン形態での講義をおこなう際には、より丁寧に受講生の状況を確認し、つまみながら授業を進めていく配慮が必要であると考え。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ 基礎（初 年次教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

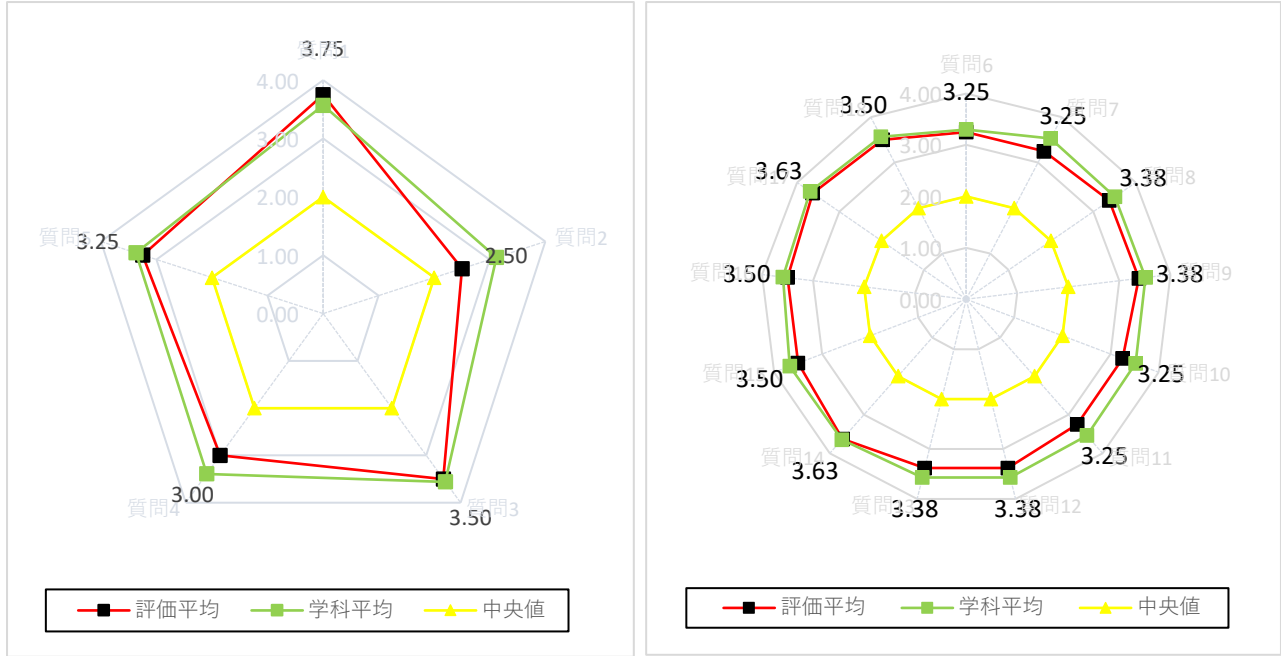
3/7の解答である。自由記述では、とくにコメントはなかった。
 1年生の初年次教育の授業であり、また担当者が着任後初めての授業であり、さらにリモートでの授業であったことを考えると、一定の成果と課題がみられた授業であったといえる。質問4の学生の工夫に関しては、工夫促す教員の工夫が不足していたのではないかと反省をした。また質問6では、統一シラバスであることから、とくだん担当者からの説明をする機会をつくらなかったが、全体説明でのことなのか個別の授業でのことなのかは不明である。質問14では、学生の質問には誠実に対応したつもりであったが、そう感じていない学生がいたということであろうと推測される。

（３）次年度に向けての取り組み

1年生に対してリモート授業での指導は、難しいと感じた一年間であった。
 高校生とはちがう学び方、一年間を通じて学ぶこと、大学生としての自覚や将来への展望を育むことのできるような授業内容を構成していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ 基礎（初 年次教育含）	8名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

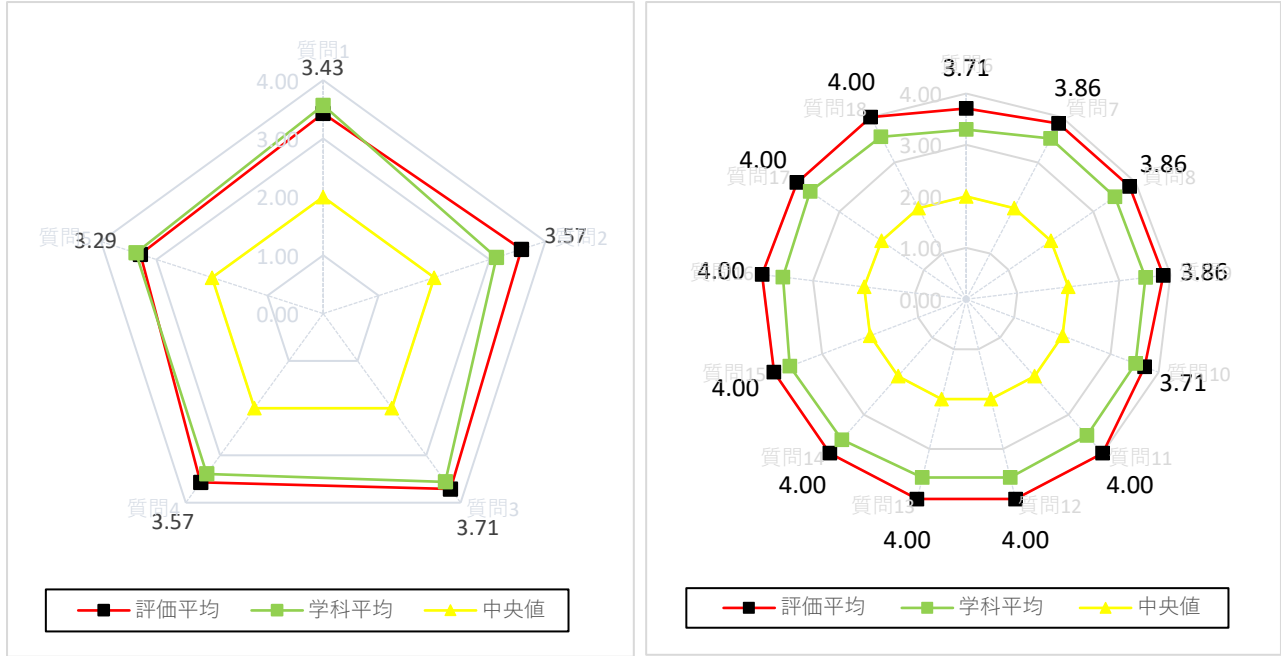
回答率100% (8/8)
総合評価：3.35
自由記述：わかりやすく楽しい授業だった。パワーポイントを初めて自分で作成し、発表してみても楽しかったしこれからもこのような事があるだろうから勉強になった。他の人の発表も面白かった。社会人基礎力大切だと思った。
本授業の目標は、大学での生活を快適にするための知識習得・環境構築と、大学生としての学びを可能にするためのスタディ・スキルの習得を通して、学士力養成のための学習基礎を定着させることである。
質問14～18の「教員の対応」について、3.50～3.63と高かった。
質問6・7・10・11のシラバスの説明、到達目標の明確化、視聴覚機器等の使い方、教科書等に関する項目が3.25と低い結果となった。シラバスの内容を細分化して学生に配布したが、配布した内容とシラバスが連動していることを周知していなかった。

（３）次年度に向けての取り組み

シラバスの活用について、学生に分かりやすいように提示することに加えて、全体でもシラバスの内容についての詳細を周知する必要がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろうⅠ 基礎（初 年次教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

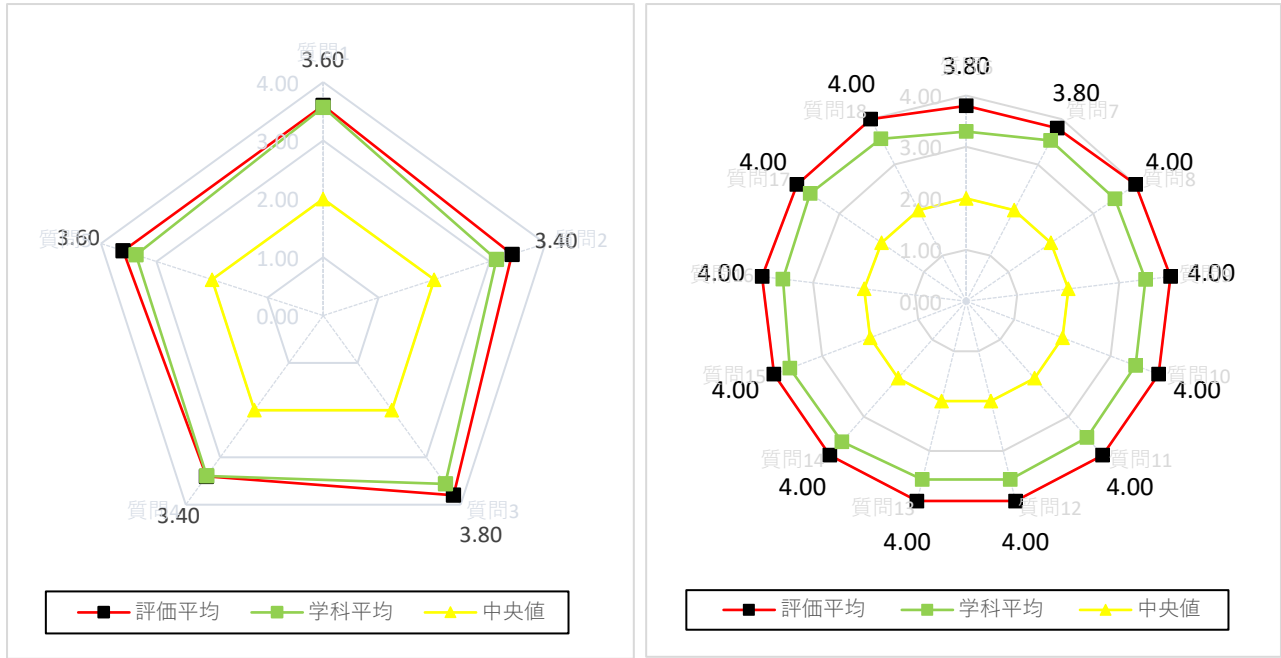
概ね高い評価を得ているため、まずは現状を維持するように心掛けたい。ただ、シラバスの説明等で不足している箇所が見受けられる。より丁寧な説明が必要になる。また、多くの講義において、オムニバスであったため、評価においては各個人の教員の評価というよりも、全体的なものと捉えることが重要であろう。授業担当者それぞれが共通認識を持ちながら、上記の項目を説明していくことが求められる。なお、新型コロナウイルスの影響により、遠隔授業もあり、説明が充分ではなかったことも考えられる。そして、内容が多方面にわたっていることから、学生自身の講義に対する認識の明確化が十分でなかったことも考えられる。

（３）次年度に向けての取り組み

まず、現状維持を基本として、オムニバスのため、各教員がより学科ポリシー等の共通認識を持ちながら、進めることが重要であろう。主には、シラバスや各回の講義において、すべきこと、目的、達成度について、明確に説明することが求められる。新型コロナウイルスの影響により、ZoomやTeamsを用いると、このような箇所が十分に伝えられない可能性があるが、一度だけではなく、2度伝えるなりして、周知を図りたい。また、ZoomやTeamsを用いる場合も、連絡から課題、提出などの作業を無駄をなくして、スムーズに講義を受けられる環境を整えていくことを行いたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ 基礎（初 年次教育含）	6名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

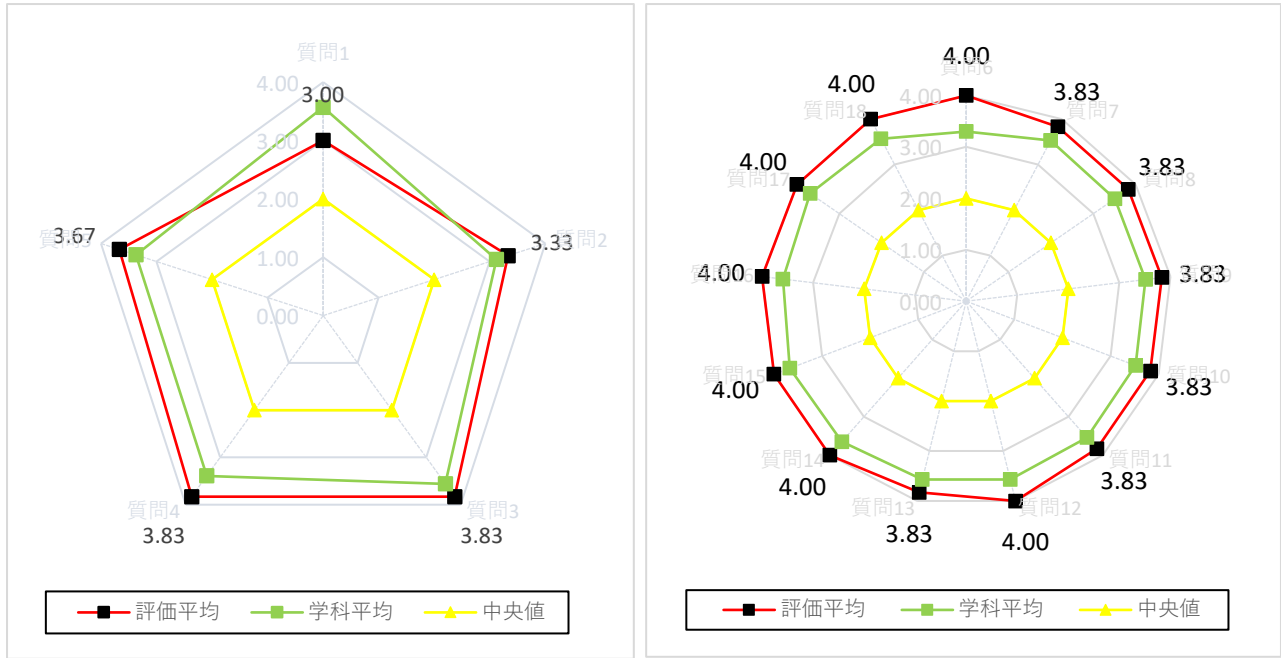
コロナ禍の下、対面・遠隔を併用しながら「学生の本分」や「本学の精神」等を踏まえ、「大学での学びの基礎」づくりに取り組んだ結果が、評価に現れていると思う。特に対面授業の時には、「あたりまえ」のことを「喜び」、「感謝」している学生の姿を実感した。「あすなろうⅠ基礎」の授業をとおして、「教育は人なり」、「師弟同行」、「?啄同機」等を再認識できたことについて、学生に大いに感謝するところである。

（３）次年度に向けての取り組み

次年度は担当せず

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ 基礎（初 年次教育含）	8名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

昨年度の反省に「生きた知識として定着させるために、手立てや見通しを明確に持って授業に臨んでいきたい」「学生個々に確かな学力（スタディ・スキル）を身に付けさせていきたい」「学生一人一人が自分の学習成果を可視化できること」「学生一人一人が自己肯定感や自信を持って臨めるような教師の声がけの工夫」「ポートフォリオの効果的な活用」などを記した。

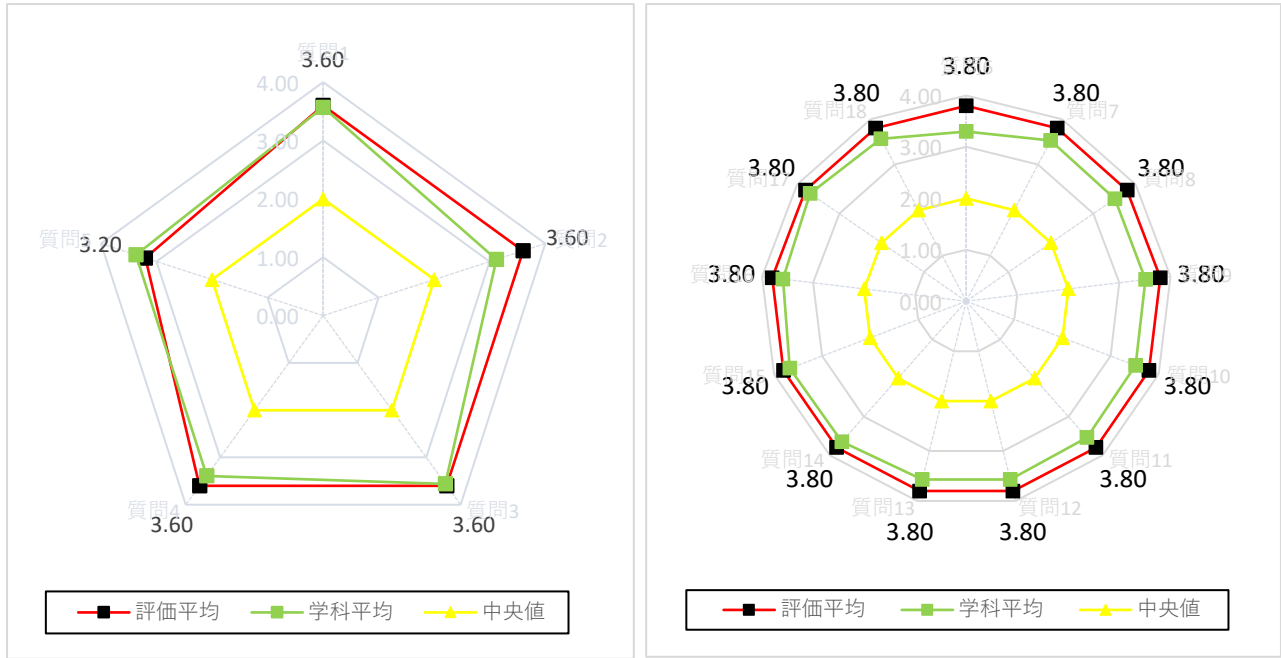
これらのことが有機的な効果を及ぼし、本学に来て最も高い評価を得ることができた。この結果が生まれた要因としては、本年度からのテキスト使用により学修の内容が明確になったこと、シラバス（授業計画）が明確であったことなどが挙げられる。

（３）次年度に向けての取り組み

次年度は担当としての取り組みはできないが、学科全体として、本年度の成果を踏まえたさらなる実践を期待している。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろうⅠ 基礎（初 年次教育含）	6名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

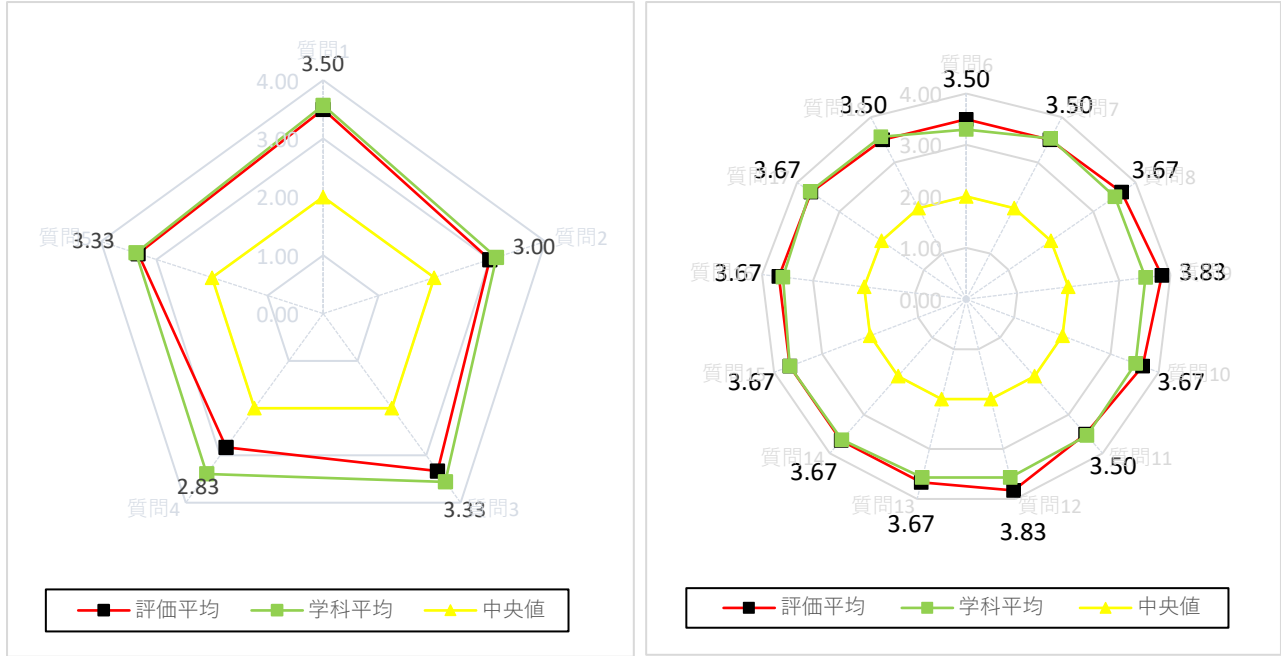
学科平均より、全項目について高い評価を得た。

（３）次年度に向けての取り組み

毎回シラバスを用いて、授業内容を学生と共通理解に努めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ 基礎（初年次教育含）	6名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

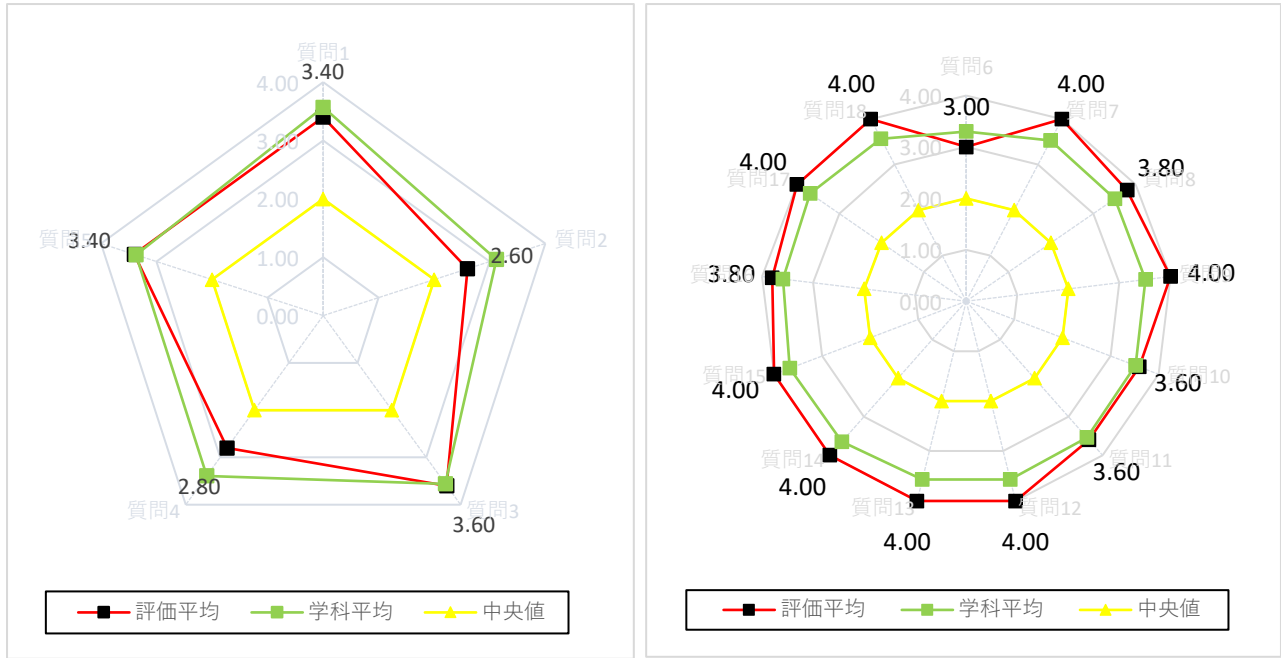
全体的に学科平均と同じかそれよりも高得点である。今年度はZOOMでの講義が主であったが、学生が真摯に対応してくれたおかげであると言える。

（３）次年度に向けての取り組み

今年度も昨年度同様に、1年次のゼミとして学生自身の考える力の育成を目指し、テキストの身ならず、ディスカッションの時間を多くとり学習を深めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ 基礎（初年次教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

「あすなろうⅠ基礎」については、年度計画において全体で行われるもの、ゼミごとに行われるものに大別される。さらに、全体の中で進められたものであっても、それを踏まえてゼミに持ち帰ってさらに一人ひとりが活発に意見し、メンバーで考えるという討論の機会が設けられており、より発展したものになるよう方向づけがなされている。本年度は、コロナ感染防止の観点から入学式・ガイダンスが中止となり全体が集まることもできない中での大学生活の始まりであった。あすなろうのゼミとしてもなかなか対面で行うことができず、皆で何かをテーマに討論するというような機会も少なかった。ただその中でも、プレゼンテーションについて、学生の出身地を紹介するというテーマでパワーポイントを作成し発表することができた。これについては学生間で質問等も積極的に出されて深めることができるよい機会であった。また、対面のみではなく、zoomによるオンライン授業をしっかりと活用することができたことは経験としてプラスであった。

一方、あすなろう体験についてはコロナによってなかなかボランティア活動などする機会が少なかったため、経験不足に終わってしまった。

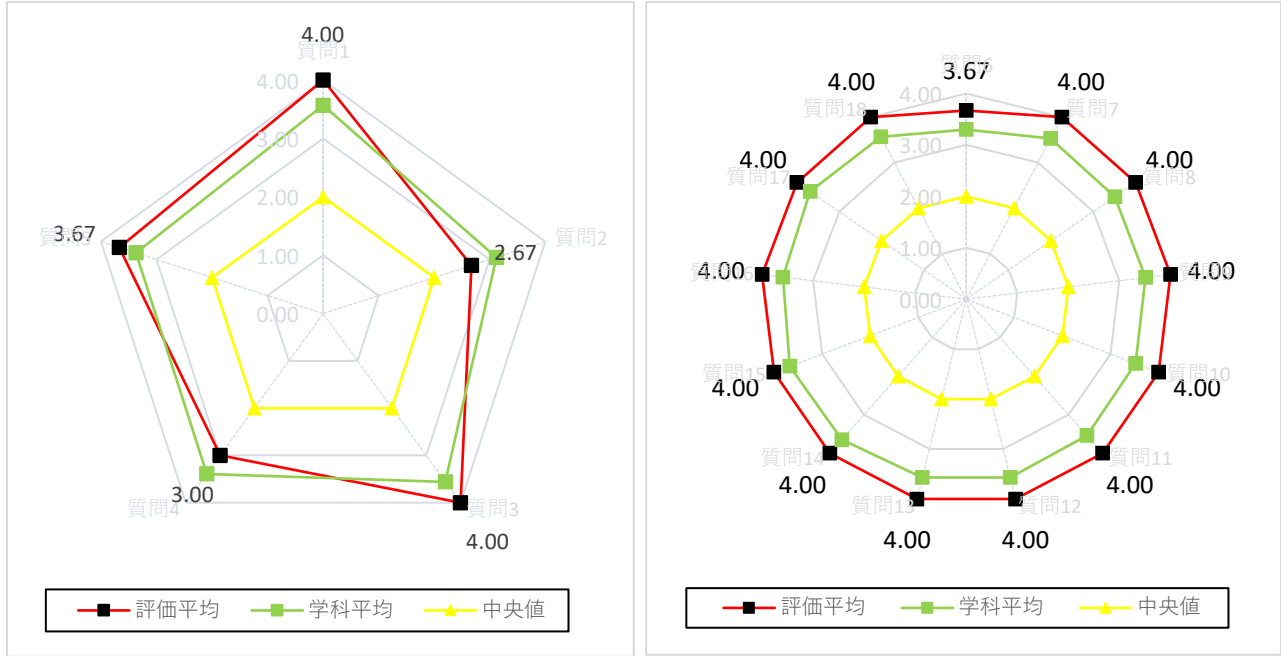
（３）次年度に向けての取り組み

次年度においては、コロナ収束が課題ではあるが、対面・オンライン授業のそれぞれのメリットを活かし、さらに一人ひとりの学生がより充実した大学生活を送ることができるよう細やかな配慮やサポートが必要であると考えます。

また、学生間でのかかわりが深まるような工夫を行い、精神面でもしっかりと学生に寄り添ったかかわりをしたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ 基礎（初 年次教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

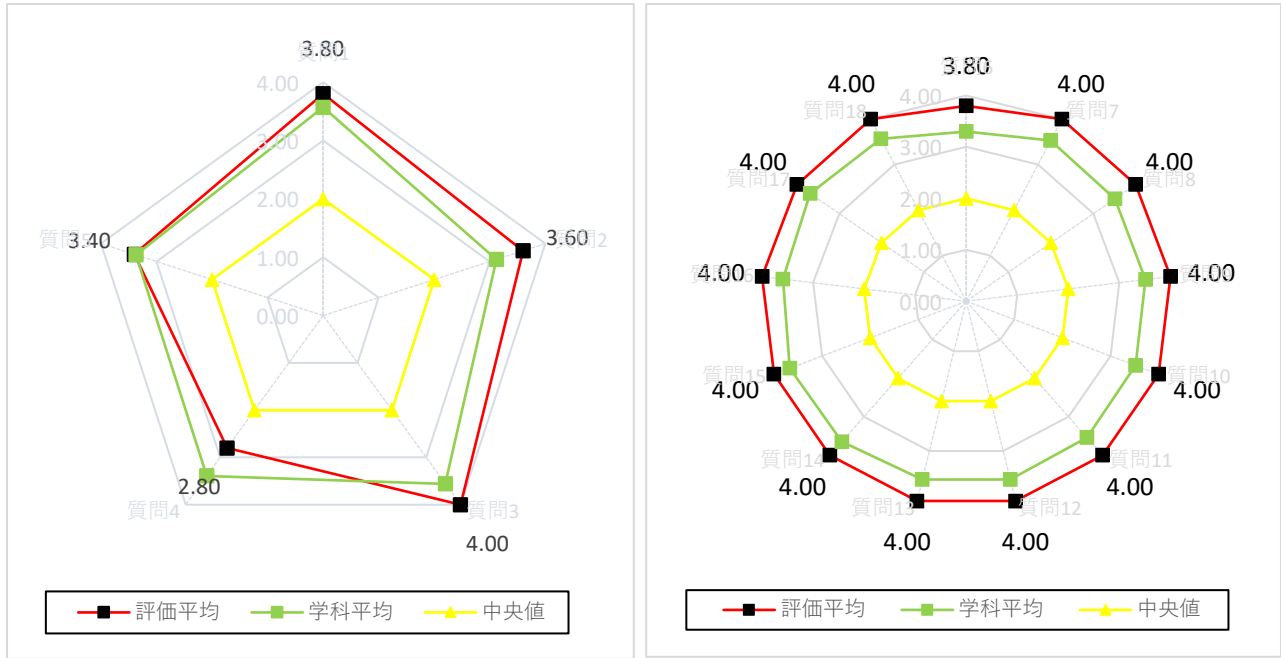
・評価平均はほとんどの項目で学科平均を上回ったが、シラバスの活用や学習における自身の工夫の点で平均を下回った。

（３）次年度に向けての取り組み

・シラバスの内容の理解を促し、学生が目的を明確化し、自分自身で工夫しながら主体的な学修が定着するよう工夫していく。本科目が社会人基礎力の向上を目指していることを折に触れて確認しながら、学生自身が目的を確認しながら取り組むことを習慣化し、社会人としての素養を高める意識の涵養を図る。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろうⅠ 基礎（初 年次教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

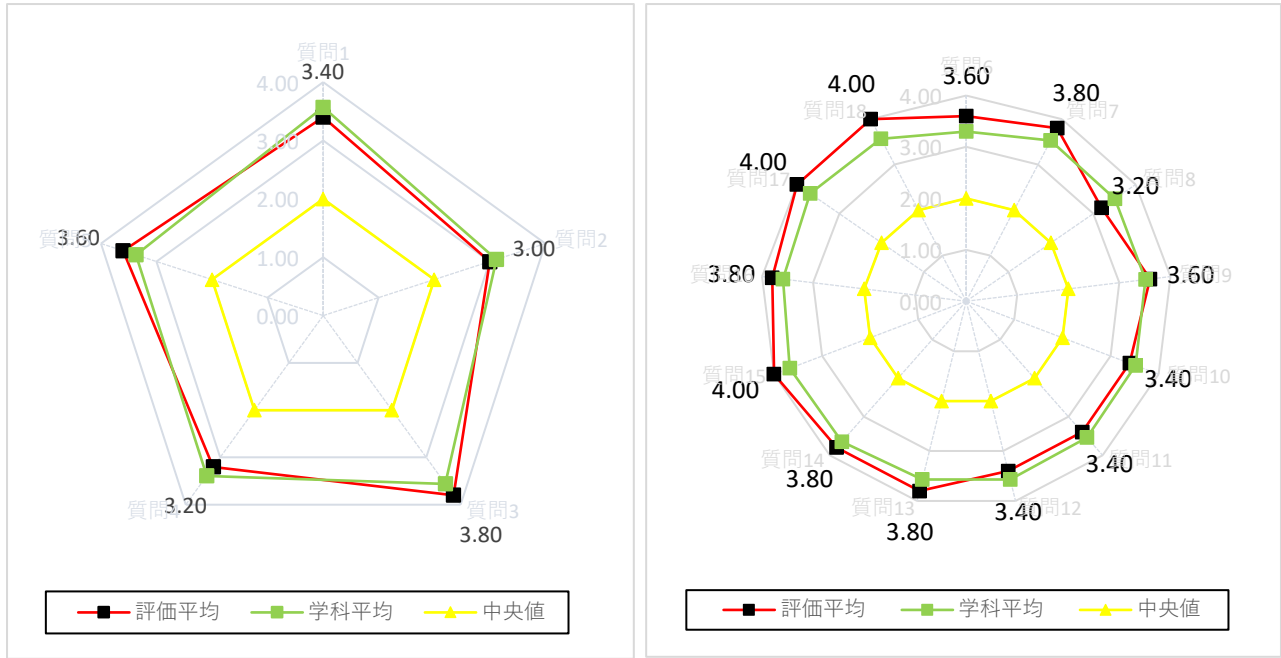
学科平均に比して高い評価となった。
今年度は新型コロナウイルスの関係で遠隔授業が多い状況ではあったが、修学ポートフォリオを含めて、できる限り個別的な声掛けを行い指導支援を行った。
学生からは自由記述において対面授業時の指導に高評価を得た。各学生の理解度に合わせた指導の仕方や各学生へ公平性を期して指導を行ったことも評価されたと思われる。
一部の学生の回答が得られなかったため、次年度は十分な回答時間を確保したい。

（３）次年度に向けての取り組み

次年度においても、全体へ向けては指示の明瞭さに留意し、また学生には誠実・公平に接する姿勢を重視して、教育に取り組んでいく。
また、一人一人のポートフォリオも小まめに確認し、あすなろう体験実習の進度や生活状況などを把握するなかで、気になることがあれば早めに声をかけることで、学生が大学生活を滞りなく送ることができるよう支援を行いたい。
次年度は、最終講義回で十分な回答時間を設けて回答を促していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろうⅠ 基礎（初 年次教育含）	6名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

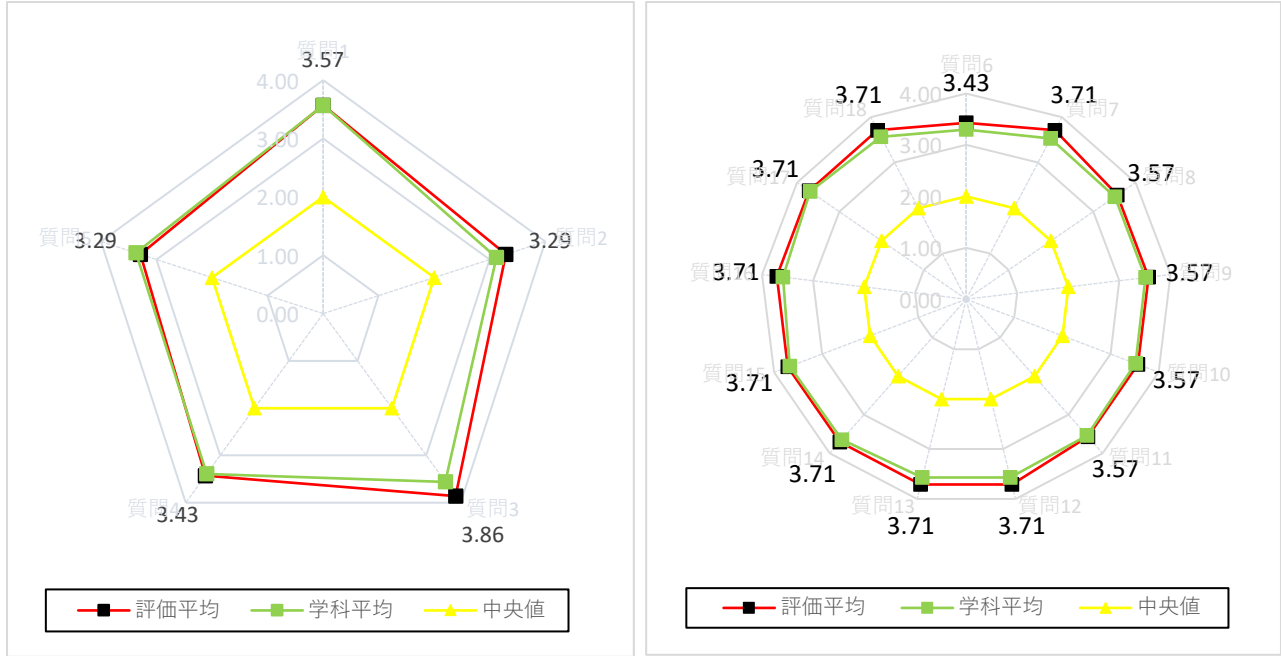
教員の授業態度に関してありがたい評価を得た。しかし、教材や授業の構成に関する項目はやや課題が残った。対面授業を前提とする授業計画が遠隔授業でやや効力を失ったことが考えられるが、作文や日本語問題集など手書きで行われる宿題の確認や、宿題の内容にもとづいた学生間の相互学習を、遠隔授業下ではどうしても画面上でしか行うことができない。

（３）次年度に向けての取り組み

COVID-19の影響によるが、可能な限り対面による学生同士の交流を大切に、授業を行いたいものである。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ 基礎（初 年次教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

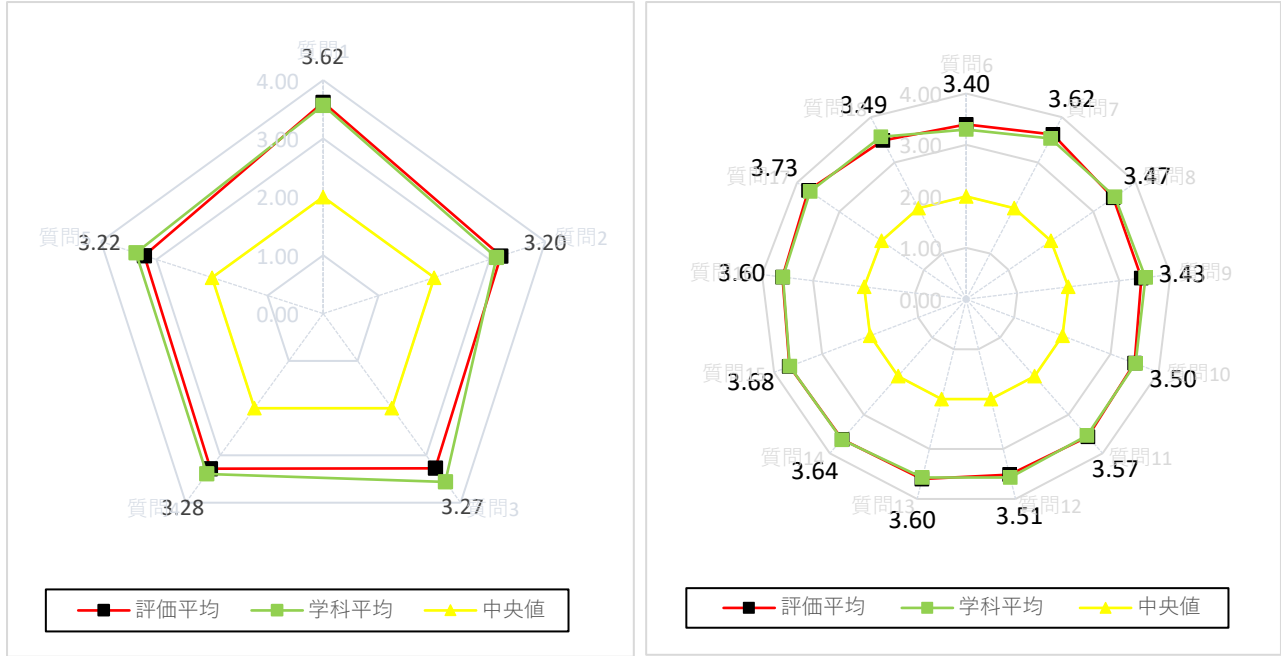
例年は全ての回の授業を対面で行っているが、今年度はコロナ対策として遠隔で行うことの方が多かった。PCの画面越しでのやり取りではあったが、学生たちは活発に意見発表を行いながら熱心に授業に参加していた。質問6から質問18の教員への評価に関する項目の評価は、全体的にみるとバランスは良い。しかし質問6のシラバスに関する説明での評価のみが、やや低いという結果であった。授業時の最後には、毎回、教員は次週の学習内容について事前に伝えていたことから、評価が若干低かったとはいえ、学生の戸惑いは見受けられなかった。

（３）次年度に向けての取り組み

今年度のコロナ禍における授業経験を踏まえ、必要に応じてコロナ対策を講じながら授業を行っていく。この科目は、共通教育科目として一づけられており、学科全体で取組んでいる。そのため、他のゼミ担当教員との連携を図りながら、自らのゼミ生の教育にあたっていく所存である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		教育基礎論	107名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

92/107人の解答である。概ね学科平均に達しているようである。自由記述では、「教育についての原点などが分かりました。」「教科書だけでは難しいところや、教科書に書いてないところなどをパワーポイントで作っていただいたのでわかりやすかったです。」「初めて聞く内容が多くあったが、どれも興味が湧き、とても面白い教科だった。教育の基礎でもあるため、学習したことは応用していきたい。」「動画などもふまえながらだったためわかりやすかったです。」との回答があり、好評であったことが伺える。

しかし一方では、「スライドが大まかな内容、説明しか書かれておらず少し口頭の説明だけではわかりづらいつと感じる場面があった。」「個人的には、とても難しく感じました。」「パワーポイントもわかりやすく助かりました。課題の内容が授業だけでは聞き取れない部分があったので、授業の中で大切なことは強調してほしいと感じました。」といった回答もみられた。

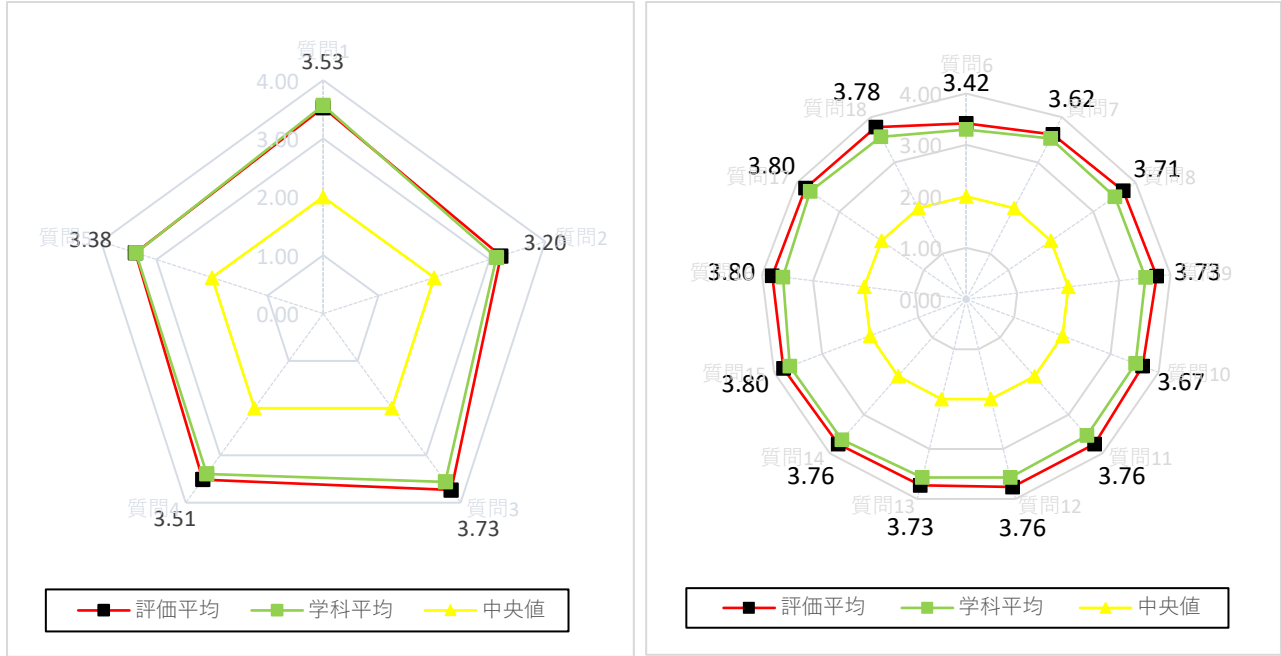
リモートでの授業方式の限界を感じさせる意見ではあるが、リモートなりのわかりやすい授業が求められていることがわかる。

（３）次年度に向けての取り組み

概ね好評であったことから、次年度も今年度の内容を継続する予定であるが、アンケートの自由記述のなかに「要望としては、課題を授業の最初に提示してもらえれば、より授業に集中して取り組むことができると思った。」との意見があった。次年度は、リモートでもつたわりやすい方法の改善をはかるとともに、授業の冒頭に本日の課題を提示するなどの工夫をして臨みたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学概論 I	46名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

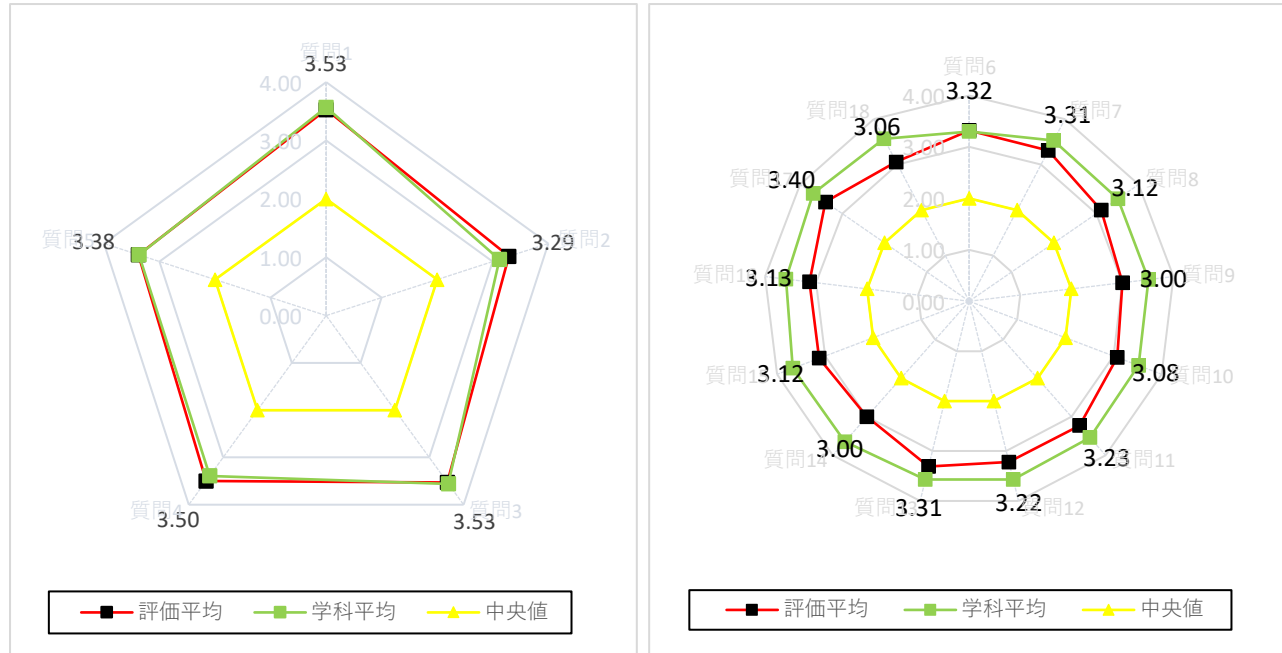
概ね、高い評価を得ているため、現状を維持できるようにしたい。一方で、質問6シラバス（授業計画）について説明がありましたか、の質問に関しては、評価が低いわけではないものの、他に比べるとやや見劣りする結果となった。これには、新型コロナウイルスの影響で、遠隔授業になり、教員側も見通せない状況であったため、説明が不足していた可能性が挙げられる。また、教員側が新型コロナウイルスに関する対応で四苦八苦しており、従来からあるシラバスへの説明が行き届かなかった可能も挙げられる。また、学生の側に立つと、シラバスを十分に活用していない可能性もうかがえることから、シラバスを活用した講義方式を積極的に活かしていく必要性が挙げられる。同時に、学生側も新型コロナウイルスの影響により、戸惑っている中であったため、シラバスよりも教員側からのポートフォリオ上の連絡やメールを頼りにしていたと思われる。そのため、学生側に立った場合でも、シラバスを活用した形式を練っていく必要があると考えられる。

（３）次年度に向けての取り組み

シラバスをどのように活用すべきか、さらに詳しく明示していく。まず、教員が1回目において、シラバスに沿って授業計画を丁寧に説明していく。そして、各講義において、シラバス上に記載されている予習するポイントや復習するポイントを絞って、学生に伝える。そして、学生が自宅に帰った際にも、わかるようにポイントを明示しておくなどの工夫が必要であるとする。ポイントになるところは、心理学検定の試験問題と関連する箇所であったり、公認心理師の試験問題に関連する箇所であるなどの具体例を明示しながら、伝えていく必要があると思われる。このようにすることで、自分で学修したと実感してもらうことに繋げる。結果として、質問5あなた自身の総合自己評価も、学生自身が本講義で学修したという実感を抱くことに繋げていきたい。また、定期的に講義時にシラバスを配布するなどして、学生自身の学びの立ち位置を定期的に示すなどの工夫も行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育原理	111名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

110人中78人が回答した。

一方的に教え込む授業を避けることは基本的な考えであり、事前学習を課し、その学習成果を元に授業で学生に返していく反転授業の形にした。学生同士の討論は、受講者の人数が多すぎることと、オンラインでの討論を有効にするには、学生に討論の経験がないので難しすぎると判断し、授業者の解説によって、学生自身の気づきや意見を交錯させて疑似討論とし、授業のポイントを整理して伝える形を実践した。

また、以前から紙媒体で行ってきた自己評価のシステムを学修ポートフォリオ上で実施した。授業方法や学習観の大きなパラダイム転換を伴うので、オンライン授業という新しい試みの中、学習成果が上がった学生が多くいる一方、やり方に不満を持つ学生もいたことが分かる。オンラインの場合、授業外でのコミュニケーションがとれないので配慮すべき点があることに気づいた。

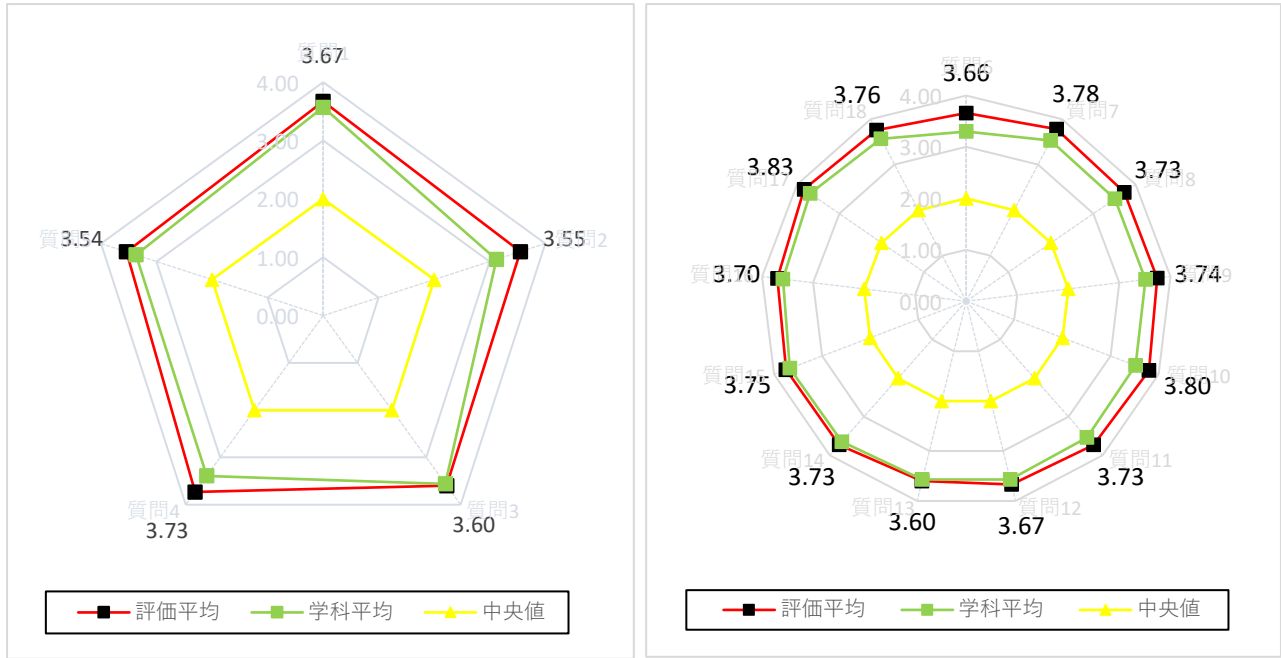
全般に学生の学習態度には目を見張るものがあり、よい学習成果を上げることができた。多くの学生が毎回の授業に協力してくれたことに感謝する。学生からの質問にはすべてメールや授業後のZOOMで対応し、丁寧に説明して理解を得ることができた。

(3) 次年度に向けての取り組み

上述したように、今年度は、初めてのZOOMを使った遠隔授業で、事前学習や学習の自己評価を徹底して行ったので、学生からの戸惑いの声も多かったが、授業者にとっても授業運営の困難も多かった。学生の授業を受ける環境や新しい経験であることを考えて、課題提出の期限を柔軟に延期したが、システム上、個人対応ができずすべての学生を巻き込むことになり、課題を残した。次年度は、学生自身の経験もあるので、いかなる理由があれ、課題等の提出期限の変更を行う対応は止めることにする。その点を学生に周知徹底して授業を進めることとしたい。今年度の走りながら考えるような状況での新しい遠隔授業の取り組みであったことを振り返り、様々な観点から深く省察し、そこから出てくる反省点をよく検討して次年度に生かしたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		発達心理学	109名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

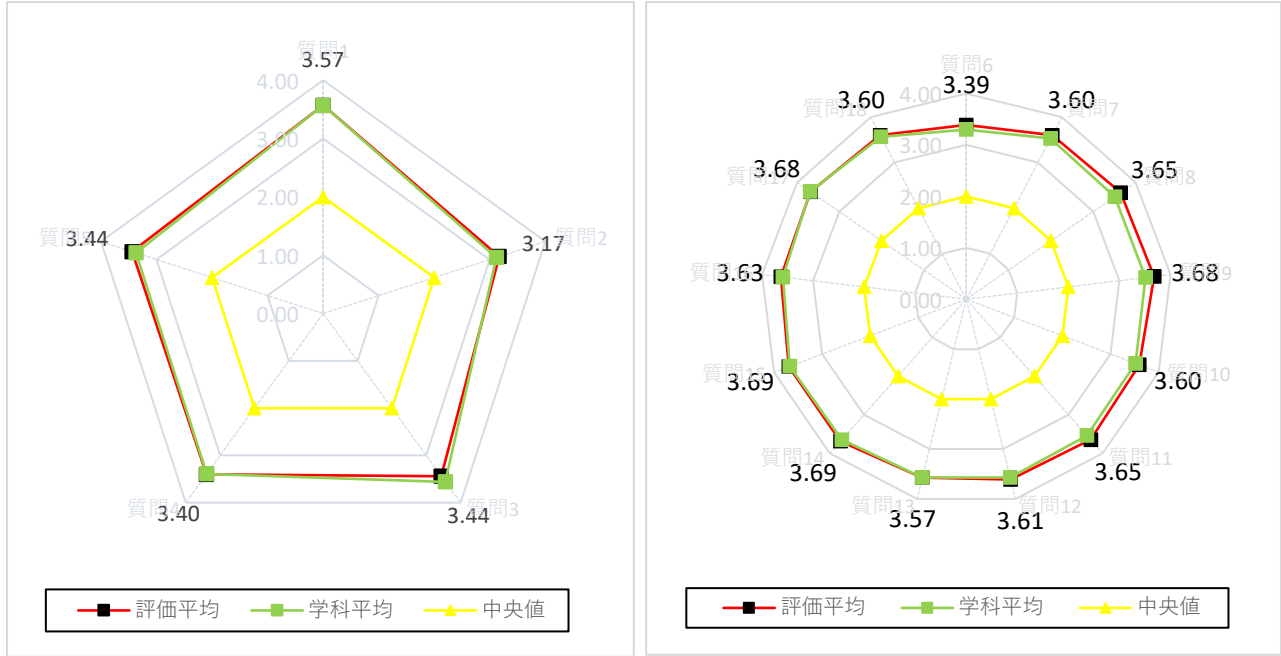
ほとんどの項目において、学科平均より0.1高い評価となった。特に「質問17 教員は熱心に授業に取り組んでいましたか」は3.83と高く、授業者の熱意がそのまま反映された評価となった。このような授業の継続が求められるものと自覚し、実践を重ねたい。ただし「質問13 授業の進む速さは適切でしたか」は学科平均点が3.56に対し、授業者の点数は3.60とほとんど差がなかった。これはしっかりと反省すべきである。

（３）次年度に向けての取り組み

受講者が1年生であることをしっかりと意識して、授業の速度を調整すべきものと思われる。授業速度を遅くすると教授内容を少なくしないといけない。教授内容の精選が課題となる。これに取り組むべきものと思われる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		特別支援教育総論	110名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

・評価平均が、学科平均よりすべての項目で高い評価点になっている。特に、質問 8， 9 の項目が高い評価であった。その理由としては、障害のある子どもとかかわった経験が少ない学生が多かったので、各障害（知的障害、肢体不自由、病弱、視覚障害、聴覚障害）についてDVDを視聴しながら説明していくことで、学校現場の様子が理解しやすかったのではないと思う。視聴覚教材の活用が必要である。実際にかかわれる時間が取れるとよいが、遠隔授業では、また人数が110名の受講者であるため、困難である。

・シラバスの活用があまりなされていなかったのは、zoomでの授業になったため、ワークショップの時間が取れずに、シラバスを変更してしまい、あまり活用されてなかったようである。

・パワーポイントを使い、その資料も配布して講義を進めていった。そのため、教科書は予習・復習に使うようにしたが、あまり、予習復習が行われていない。

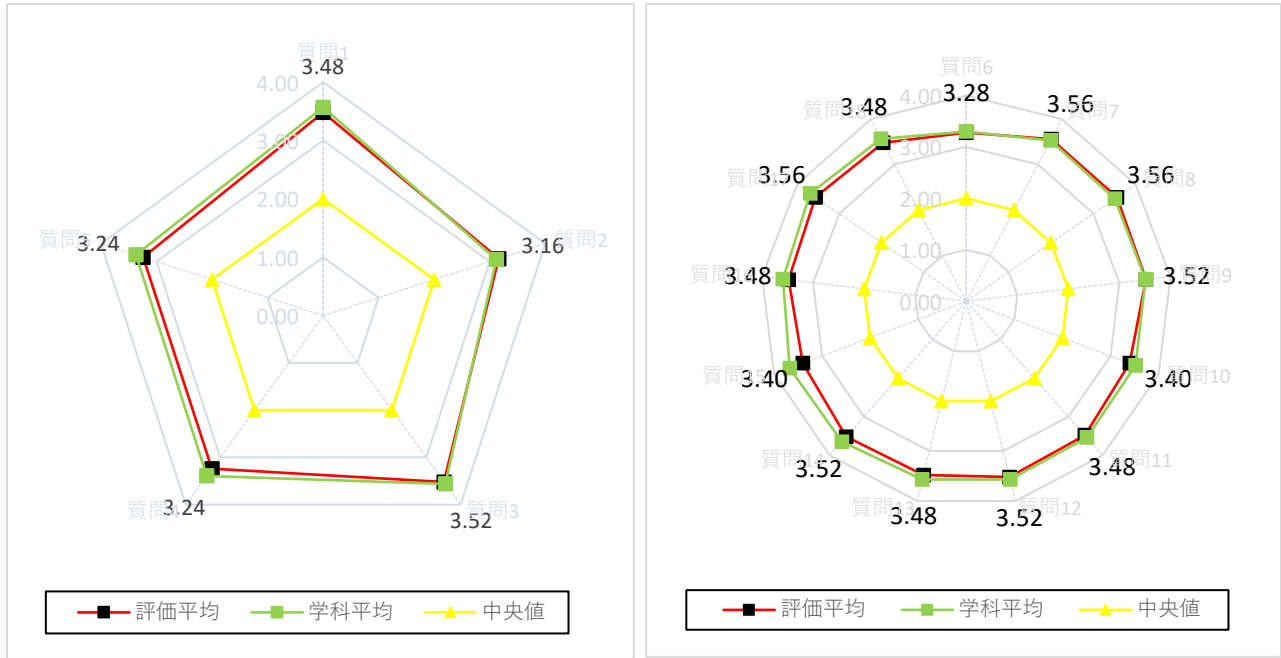
・毎回授業終了前に、課題を出して、ポートフォリオにアップロードしてもらい、授業の復習を行っていった。その課題については、次の授業の前に回答を示し確認をしていった。

(3) 次年度に向けての取り組み

- ・DVDなど視聴覚機器の活用は有効であるので、次年度も活用したい。
- ・次年度は1年生が受講する科目として、基礎的・基本的な知識を中心に進めていく必要がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理カウンセリング概論	51名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

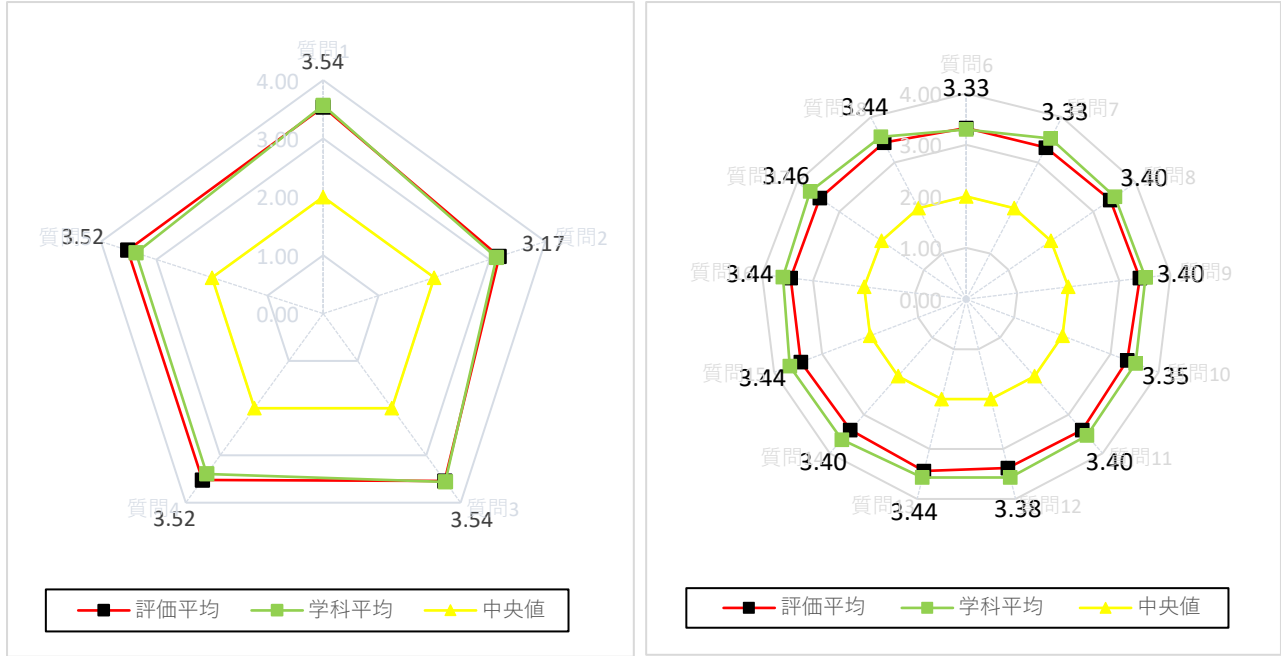
授業開始時はコロナ感染拡大のため、オンラインでの授業であったため、双方に戸惑いもあったが対面授業を徐々に取り入れ授業を展開していった。その中でオンラインでの授業開始時戸惑いの多い学生に対して、対面でも指導等を行った。そのことが学生には公平に対応していないようにとらえられたのかもしれないと思った。やはりきちんと説明をしながら全体に配慮が必要と感じた。そのほかは3.5前後の評価をもらっているので学生も授業内容を理解し授業にも臨んだのではないと思われる。授業に対しても出席率も高く授業を受ける態度も良好であった。

（３）次年度に向けての取り組み

次年度もコロナ状況がどうなるのか不透明ではある。オンラインでの授業に対して、きちんと対応できるよう資料等の準備をしたいと思う。また最初にシラバスをきちんと説明し授業概要を把握してもらうことを行いたい。また、学生に対して全体を把握しながら理解不足の学生に対しても細かな対応ができるようにしていきたい。授業の終わりには、質問用紙を配布し、その場で質問に答えながら多くの学生が興味を持つような授業を行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		教師論	96名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

48/96の回答である。ちょうど半数の回答である。教員免許を取得する学生にとっては、必修の科目である。結果をみると、3.4ポイントと概ね好評である。しかし、学科の平均と比べてみると、下回っている項目がみられる。学科の他の先生方のご努力には及んでいないようである。

リモートでの授業は難しく、教師の動きを理解するためにどうしても動画の視聴が求められる。それに対して、「zoomで電波が悪く観られなかったビデオをわざわざ対面で流してくださり、ありがとうございました。」との意見がある一方で、「ただDVDを見るためだけの為に、新型コロナウイルス感染のリスクを背負い学校で観させる事に疑問を感じた。対面授業ではないと伝わらないことのみ対面授業を実施するべきだと感じた。」との意見があった。

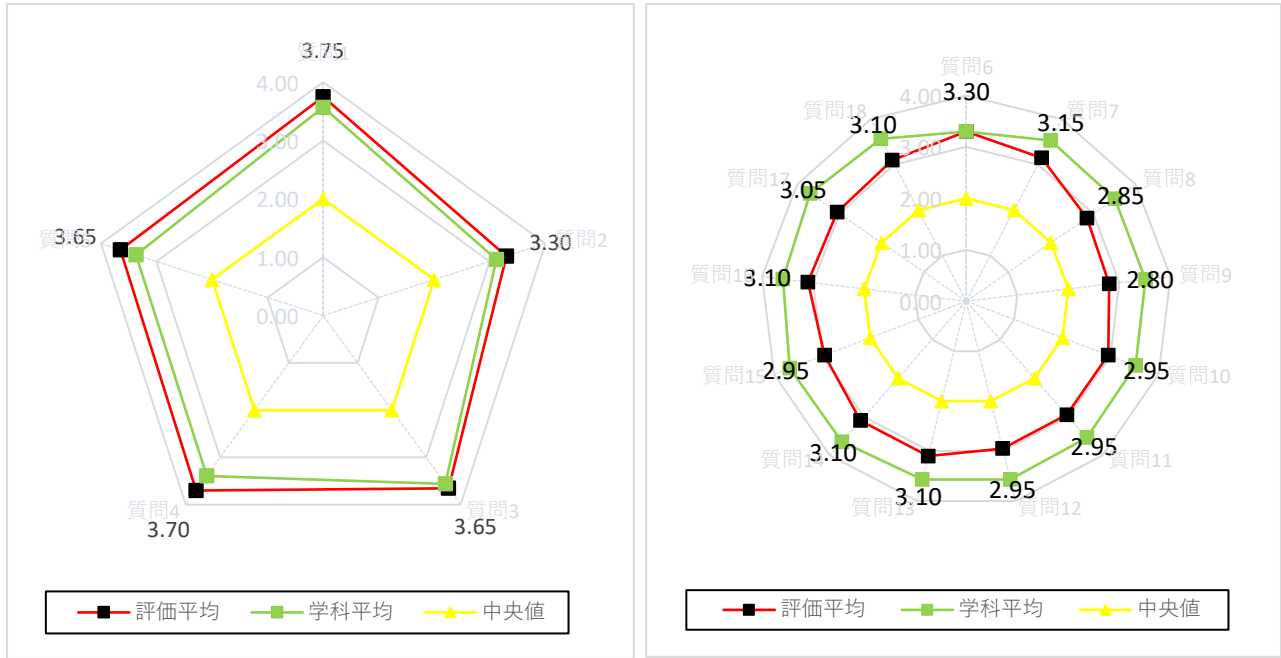
同一の授業に対する相反する意見である。が、反省すべきは、より丁寧な学生への説明をすべきであった点である。

（３）次年度に向けての取り組み

教師論としては、教師の実践を理解するためには動画の視聴は不可欠である。次年度は、学生に対して最初に丁寧な説明を心がける。なぜ、動画を見るのかといったシラバス上での必要性について、繰り返し説明を行う。その上で、通信環境の悪い学生に対して、研究室内で映像でを映し出し、それを視聴できるような環境整備を行い、少しでも理解しやすいような方法を試みる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼児教育課程論	55名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

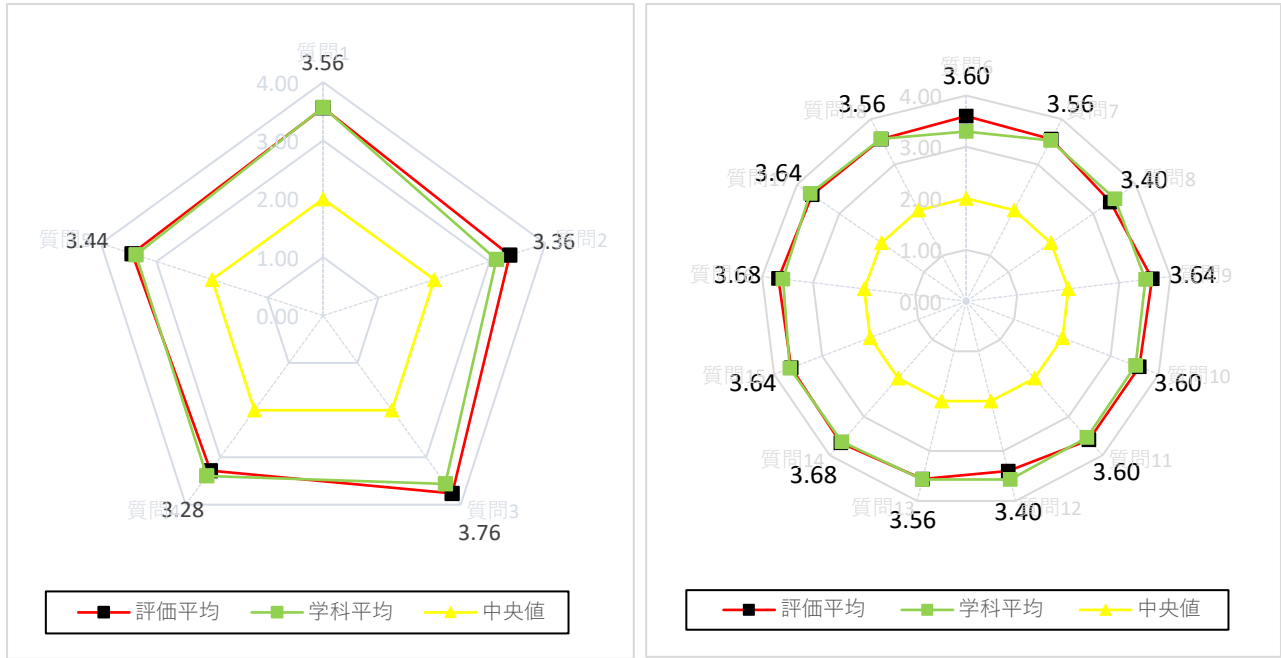
はじめてのZOOM授業で、トラブルも生じたし、受講する学生も授業者も慣れないことが多く、運営に難しさがあった。その割には、学生の受講態度も熱心であったことを実感していたが、授業アンケートにそれが反映されていた。学生は、毎回の課題にもよく答えてくれた。とくに、慣れないシステムの授業なので、課題提出が遅れる学生にも配慮し、提出の機会を確保したいと思い、課題提出期限を、それぞれの事情を考慮して延長すると、すべての受講者に影響が及ぶ。遠隔授業の環境をすべての学生が満たしているわけではないので、画一的な対応をすることはできないと判断したための措置である。学修ポートフォリオでは、システム上、個別の対応をすることができず、配慮すると全体に影響することが避けられない。これが大きな課題である。学生からの不満の声も多かったが、授業運営の困難も多かった。振り返って、何より授業の新しいシステムにもかかわらず、授業者に協力し、真摯に授業に向かってくれた学生に感謝したい。

(3) 次年度に向けての取り組み

上述したように、はじめてのZOOMを使った遠隔授業で、学生からの戸惑いの声も多かったが、授業運営の困難も多かった。走りながら考えるような状況での新しい遠隔授業の取り組みであったが、様々な観点から、反省点をよく検討して次年度に生かしたい。とくに事前学習と自己評価の取り組みはさらに深く研究してより良いやり方を開発していきたい。また、オンライン授業では、学生の学習状況をよりの確に把握できるようになり、対面授業にない良さもあることが確認できた。今後、オンライン授業のメリットを生かす方向で、より良い授業デザインを求めている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学研究法	58名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

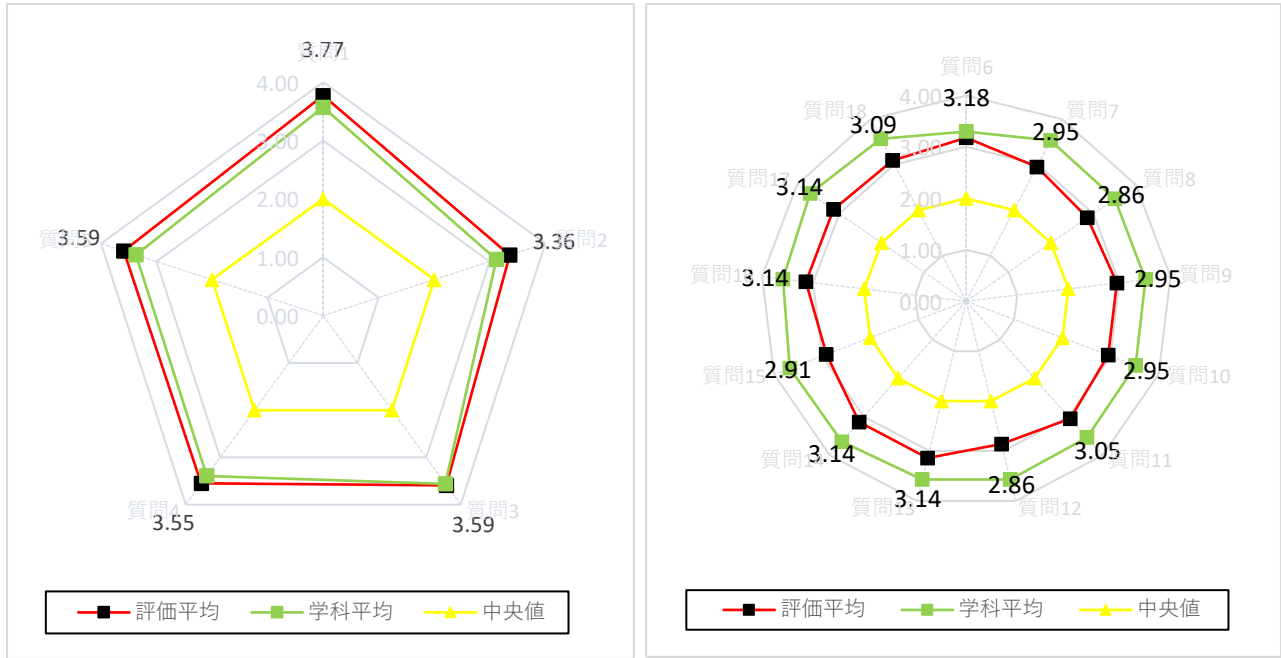
前年度に続き、堅調な評価を得た。遠隔授業により教材を事前配布することになったが、当日の配布時間の節約や学生の準備学習に対して有効であったかもしれない。

（３）次年度に向けての取り組み

可能な範囲で、教材の事前配布による遠隔授業へと移行する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼児教育方法論	59名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

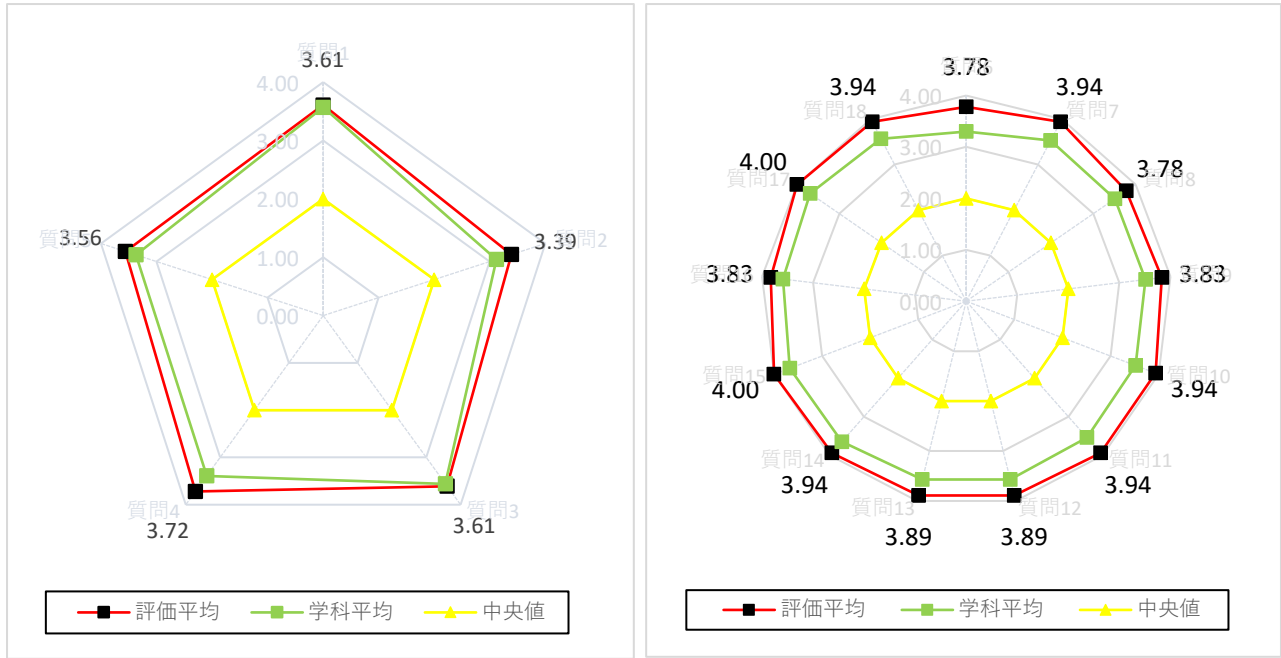
はじめてのZOOM授業で、トラブルも生じだし、受講する学生も授業者も慣れないことが多く、運営に難しさがあった。その割には、学生の受講態度も熱心であったことを実感していたが、授業アンケートにそれが反映されていた。学生は、毎回の課題にもよく答えてくれた。とくに、慣れないシステムの授業なので、課題提出が遅れる学生にも配慮し、提出の機会を確保したいと思い、課題提出期限を、それぞれの事情を考慮して延長すると、すべての受講者に影響が及ぶ。遠隔授業の環境をすべての学生が満たしているわけではないので、画一的な対応をすることはできないと判断したための措置である。学修ポートフォリオでは、システム上、個別の対応をすることができず、配慮すると全体に影響することが避けられない。これが大きな課題である。学生からの不満の声も多かったが、授業運営の困難も多かった。振り返って、何より授業の新しいシステムにもかかわらず、授業者に協力し、真摯に授業に向かってくれた学生に感謝したい。

(3) 次年度に向けての取り組み

上述したように、はじめてのZOOMを使った遠隔授業で、学生からの戸惑いの声も多かったが、授業運営の困難も多かった。走りながら考えるような状況での新しい遠隔授業の取り組みであったが、様々な観点から、反省点をよく検討して次年度に生かしたい。とくに事前学習と自己評価の取り組みはさらに深く研究してより良いやり方を開発していきたい。また、オンライン授業では、学生の学習状況をよりの確に把握できるようになり、対面授業にない良さもあることが確認できた。今後、オンライン授業のメリットを生かす方向で、より良い授業デザインを求めている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学統計法	46名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

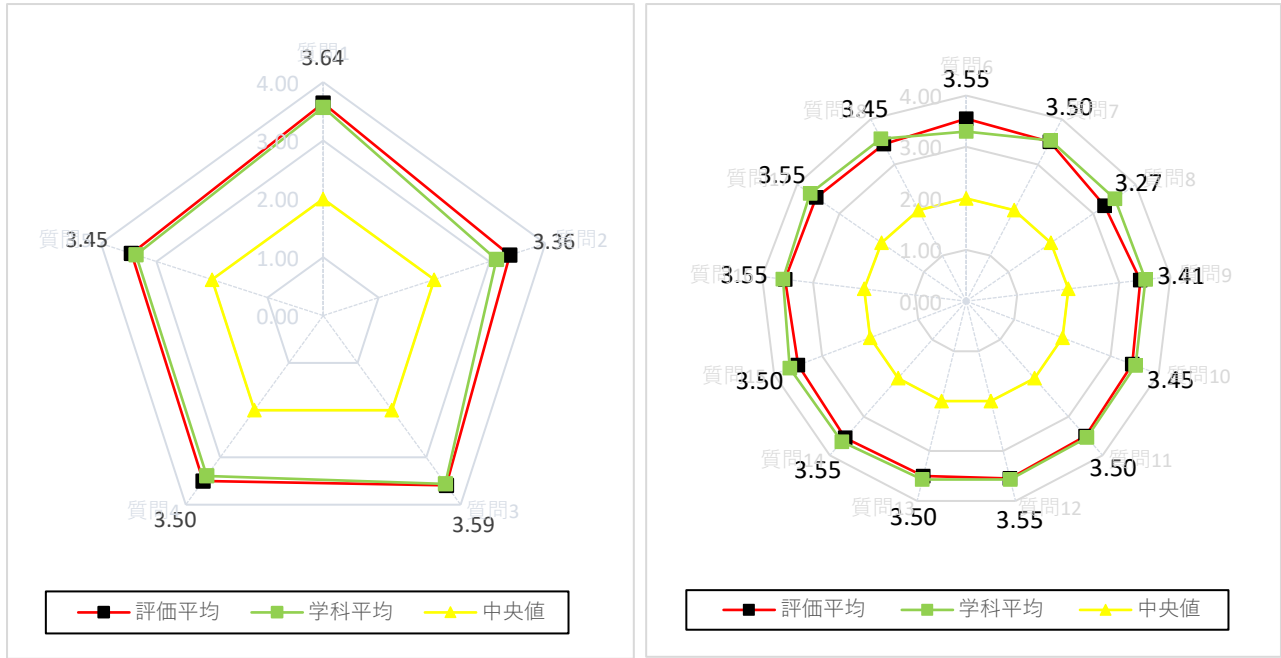
ほぼ満額の評価に授業者自身驚いている。年末からのCOVID-19の流行により統計解析ソフトの演習が、その場での実演から、動画と課題によるものに変更を強いられたが、これがかえって学生をより内容理解に動機づけたかもしれない。

（３）次年度に向けての取り組み

2020年度のスキームを活用した授業実施を検討する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学実験 I	46名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

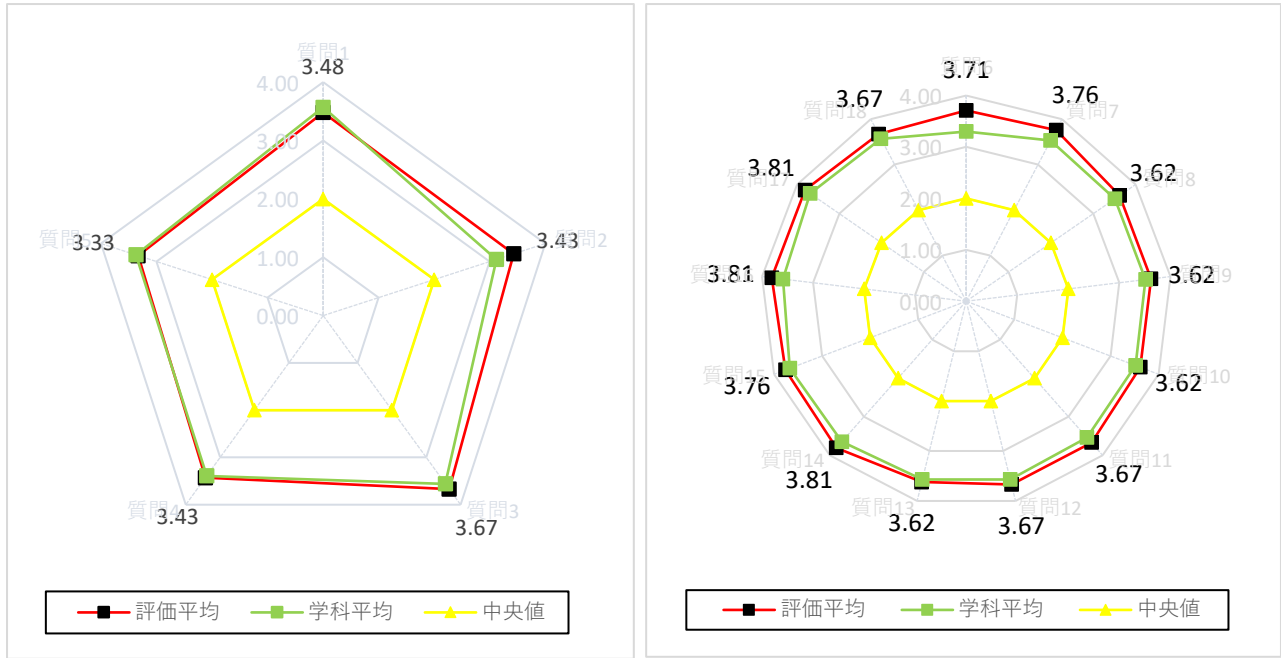
前年度より全体的評価が上昇した。前年度作成された教材を見直して、時間や学生の特徴に適合した授業が展開できるようになったと考える。

（３）次年度に向けての取り組み

2020年度の遠隔授業のために作成された教材・課題をうまく活用しながら、実験に関する知識やレポートの書き方のいっそうの向上を目指す。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学実験Ⅱ	43名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

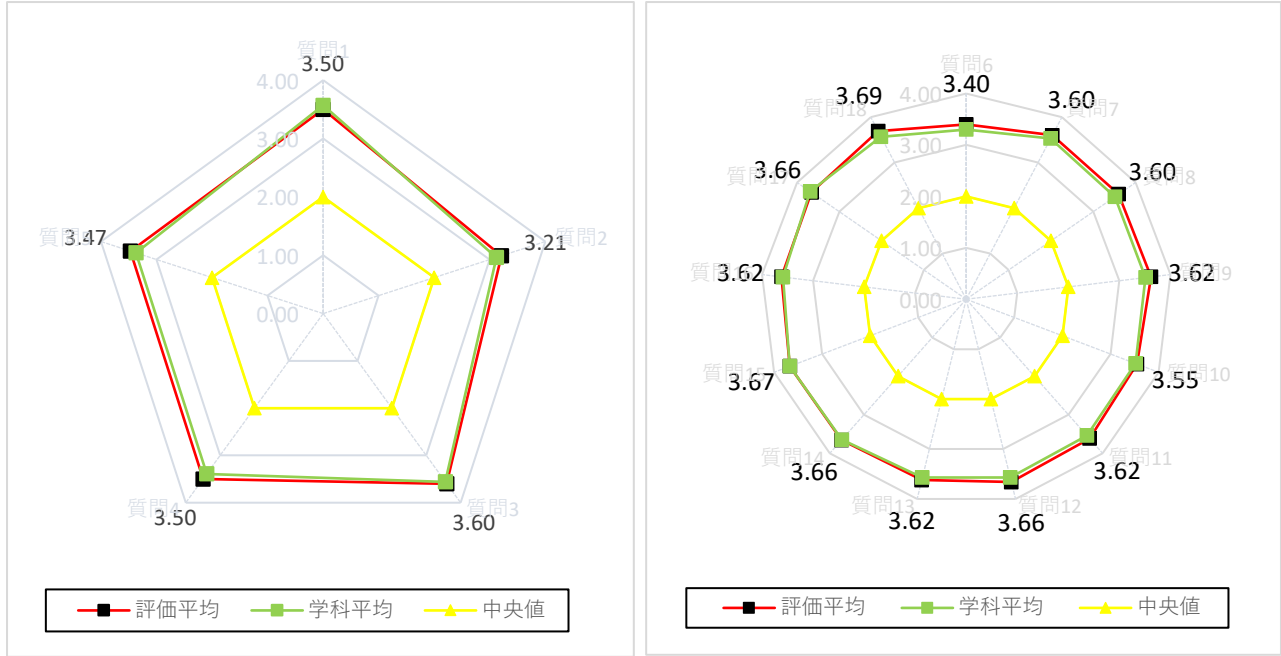
学科平均と同等、もしくは高い評価を得た。

（３）次年度に向けての取り組み

シラバスを授業内で用いて、学生との授業進行把握に努めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育内容総論	78名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

学生の授業評価については、すべての項目で一定以上の高い評価を得ている。新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から対面授業が1回しか行えず、オンライン授業が主体となった。オンライン授業であっても一方通行の授業にならないように、ブレイクアウトセッション機能を使うなどできる限り双方向的な授業であるアクティブラーニングを意識して進めたことがこのような評価につながっているのではないだろうか。

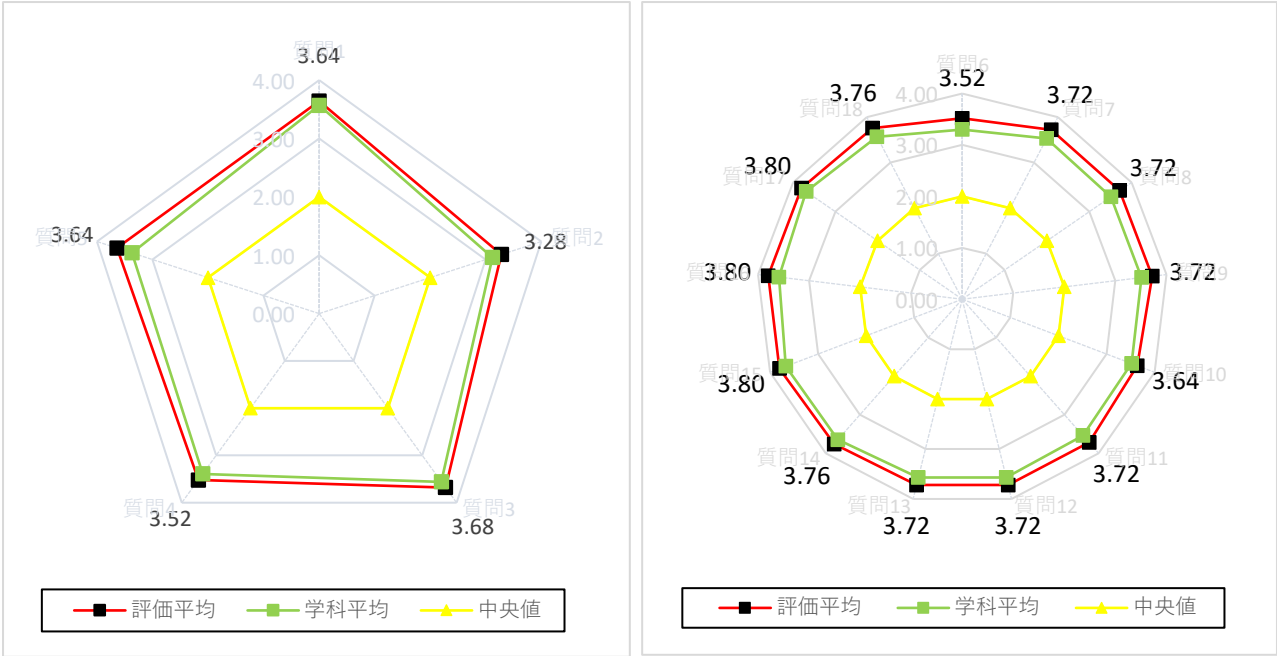
また、本授業は1年次後期の授業である。次年度には初めての実習体験をすることを視野に入れて、学生が子どもの姿や保育所・幼稚園の1日の流れをイメージできるような授業が期待されていると考える。そのため、特に保育現場で求められる「記録」の取り方については実際にワークをとおして重点的に行った。その成果は現場での実習に活かされると期待する。

（３）次年度に向けての取り組み

令和3年度についても、新型コロナウイルスの状況に影響を受けることが考えられる。基本的には今年度と同様の方法で授業を展開したいと考えている。実際に保育現場に実習に出る際に、その成果が発揮されるよう細かくサポートする体制が必要である。今後も、より現場に即した内容の授業ができるよう、アクティブラーニングの形で行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育内容指導法（健康）	55名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

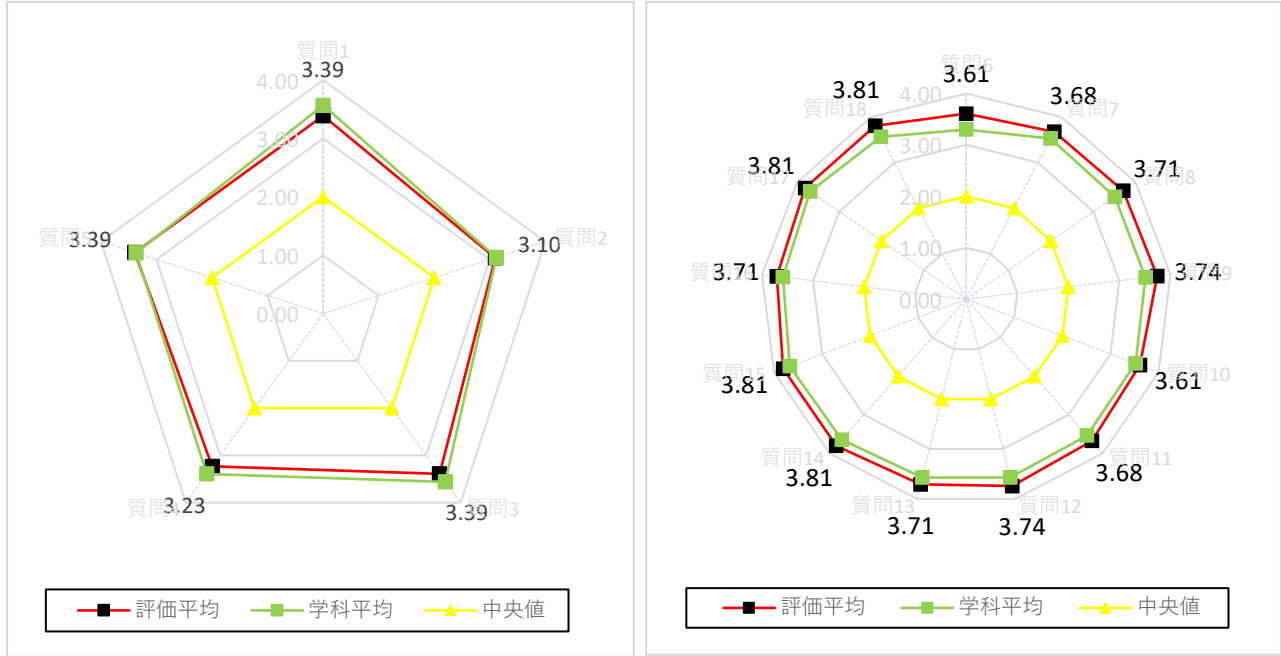
全ての項目で学科平均より高く、高得点であることは満足しているところである。前半の講義の部分がZOOMでの授業であり、後半の模擬保育は対面で行ったが、学生が真摯に対応してくれた成果であると言える。

（３）次年度に向けての取り組み

今年度も昨年度同様に、前半の理論編はオンラインであるが、昨年度よりも話す内容を減らし、考える時間を増やすことで一方的な講義にならないようにする。後半の模擬保育の部分は学生同士にディスカッションの時間を取り、質の高い模擬保育を目指す。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理的アセスメントⅠ	46名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

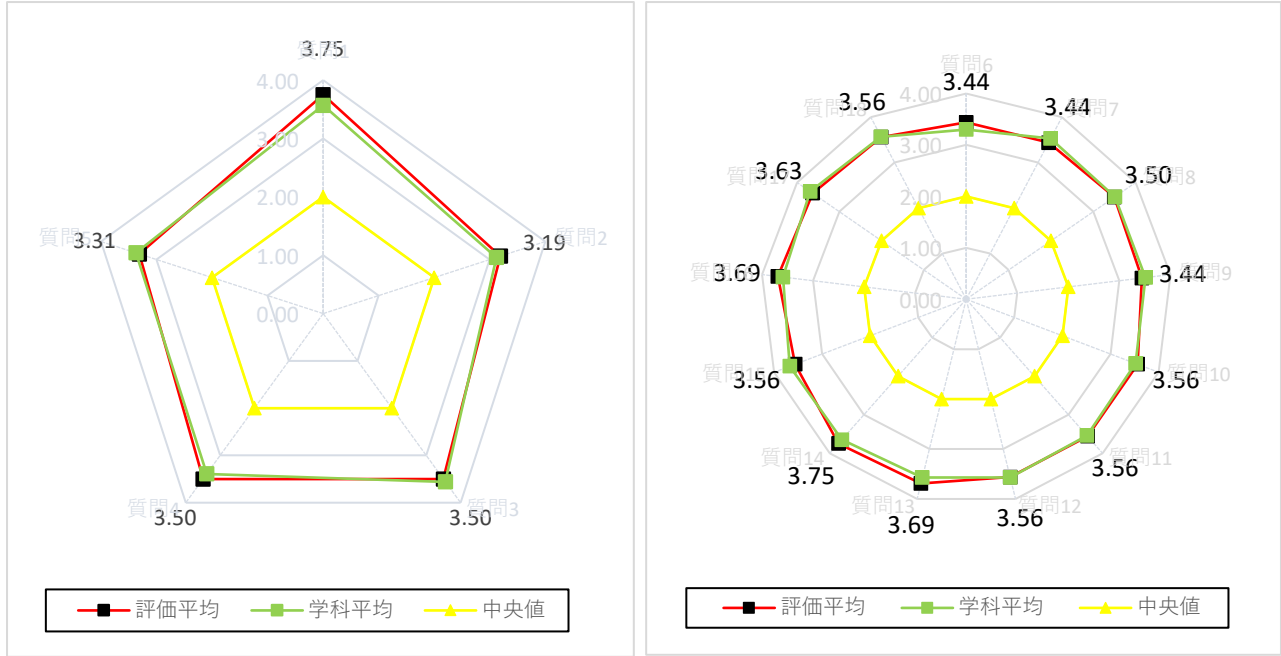
全ての項目で学科平均を上回る結果となった。
令和2年度は新型コロナウイルス感染防止のために遠隔形式での授業を行ったが、重要な点を穴埋め式にした資料を事前配付し、講義では重要点の解説を行うことで授業に集中できる工夫を行った。オンデマンド式授業形式の際は、詳細な解説コメントを付記し、授業外課題で理解度を測るとともに質問の機会を確保した。Zoomによる同時双方向型授業の際には、チャット機能を用いその場で疑問点を確認できるようにし、更に授業外課題でも理解度把握や質問の機会を設け、翌日に疑問点に答えるなどすることで、疑問を疑問のまま持ち越さないように配慮したことが、質問14の評価につながった。
自由記述では、「説明がわかりやすく、生徒からの疑問や質問にも答えてもらえ身になった」との評価も得たため、今後も双方向性のやり取りを重視し、質問等への誠実な対応を引き続いて行っていきたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度においても、各回の感想・疑問を求める形式を踏襲し、授業内で生じた疑問等に適切に対応したい。資料の工夫や授業外課題等での理解度把握などの取り組みは次年度以降も行い、学生の理解に合わせた授業進行に留意していきたい。
令和2年度は遠隔授業形式で行ったため、学生同士のディスカッションの機会を設けることができなかったが、次年度以降ディスカッションの機会なども提供していきたい。
今回、授業時間や遠隔形式での授業形態のために、授業評価の回答を行っていない学生もいたため、次年度は講義内での授業評価回答時間を確保していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育内容指導法（人間関係）	55名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

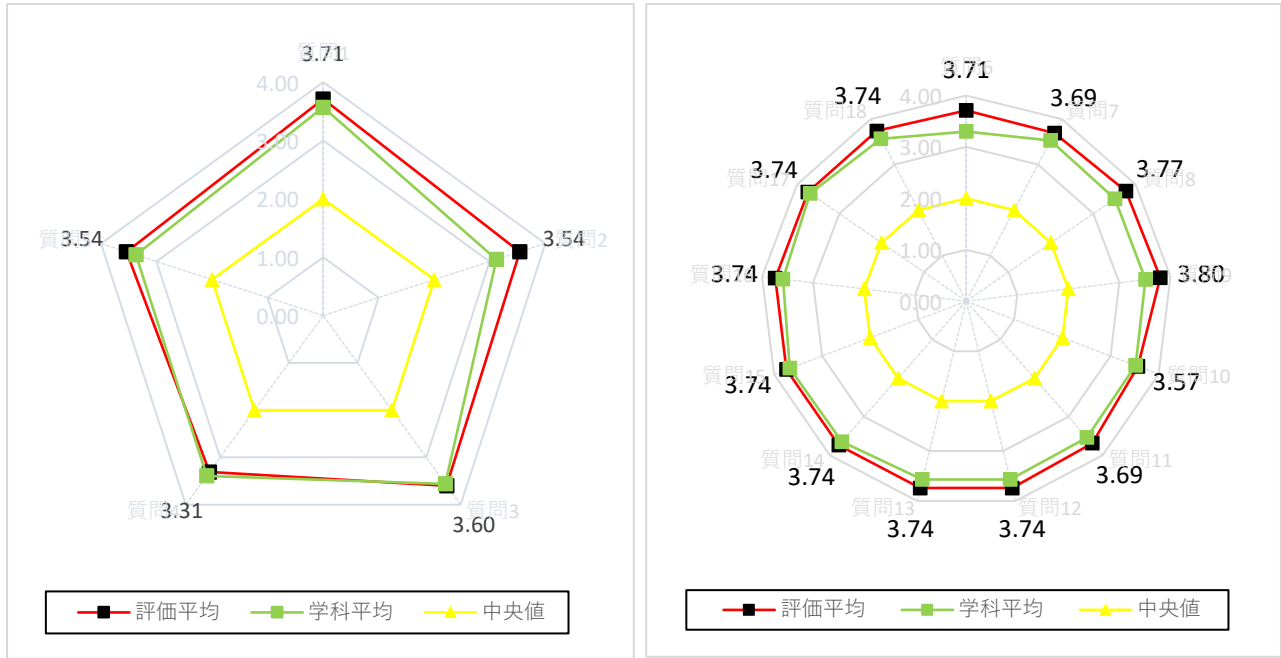
今回は、例年のような授業内容ではなく、対面授業を5回、Zoomを6回、ポートフォリオによる課題を4回行った。有難いことに実習により3歳児から5歳児までの人とのかかわりを実際に学べたので、自己評価が比較的にあった。自己評価に繋がるのは2点あると考える。①人とかかわりに関する力の保育について自分の考えを深められた事②実習経験エピソードを記述し、仲間と共有し、それをもとに分析した事。授業の分析は、力を入れていた部分の評価が高かった。重要な資料や教科書を活用し、実践的な話を心がけ熱心に問いかけた。授業方法としては学生の参加を重視し、発表する機会や手遊びの発表経験を公平に入れていった。また、授業後にチャットやポートフォリオに感想を入力したりし、学生の反応を把握していった。ビデオは「人とかかわる力の発達と課題」「子どもを支える保育者の役割」という点で、実際のドキュメンタリーを見ることが出来たが、例年とは違い、抽出した場面のみ、機器を駆使して行ったのでうまくいかなかった面もあった。Zoomの途中でチャットを見て反応して欲しいという要望があった。リモート授業の技術習得の難しさを実感している。

（３）次年度に向けての取り組み

内容的なことは毎回の明確な授業到達点を置き、学生の反応を見ながら深める必要がある。伝わるような話術と深まるような問いかけを行い、今後とも授業感想を取りたい。また、人間関係における実習体験を大事にし、子どもの内面をどう捉え、かかわっていくかディスカッションをし、学び合いを深めていきたい。課題は時間の確保である。理解と互いの学びの共有が鍵になるので、毎回発言しやすい雰囲気を作っていく。更には模擬保育における保育実践力の高まりを工夫し、学びのプロセスに繋がるように組み込みたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		カウンセリング基礎演習	46名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

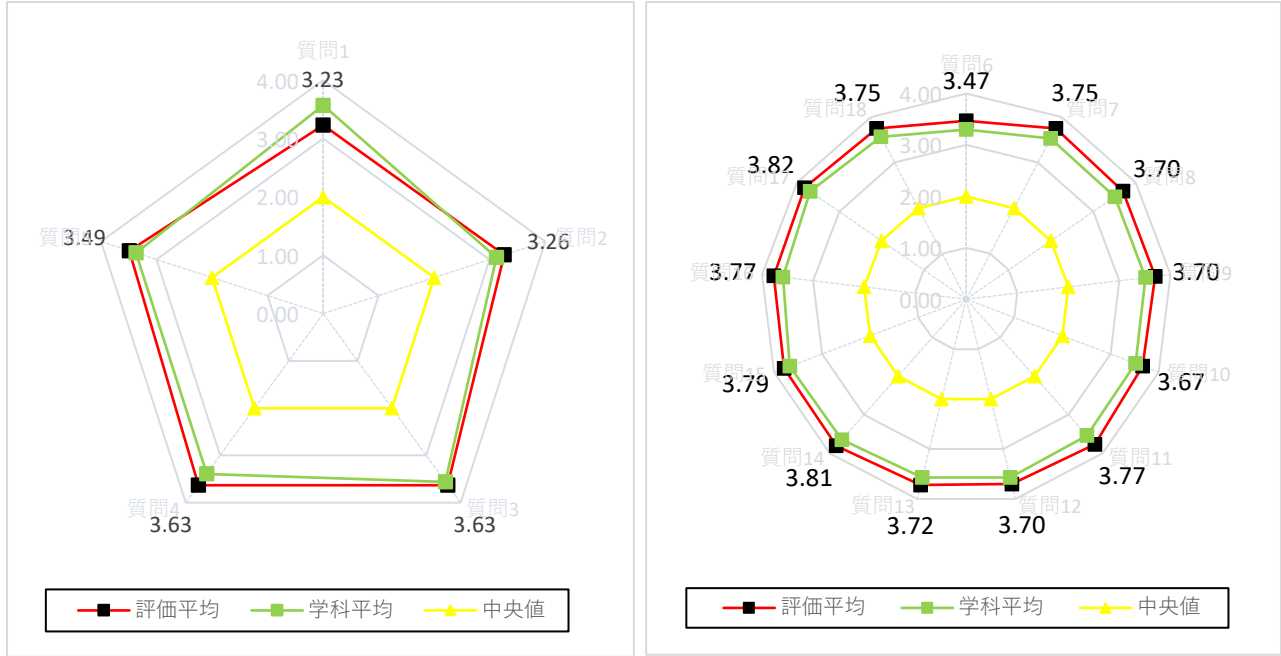
遠隔授業との併用であったが、前年度と同様に堅調な評価を得た。ただし、自己理解を深めるためのワークシートやレポート課題においては自己を過度に掘り下げる例もあり、臨床心理教員が見守る中でこれを実施することの重要性を知ることができた。

（３）次年度に向けての取り組み

可能な限り対面授業の形態をとりつつ、これまで同様に学生の様子を見ながら授業を実施していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育内容指導法（言葉）	85名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

毎年、本授業のオリエンテーションにおいて、同じことを語っている。それは、幼・保、小を見通した教育の展開である。また、昨年度の振り返りでは、どの学生に対しても「子どもの前に立つ喜びと責任の重さ、使命感の大きさ」を感じさせていきたいと書いた。

本年度も授業の中で事例や経験を通して、前述した思いを語り続けることができた。その結果、受講生からも一定の評価があったと考えている。

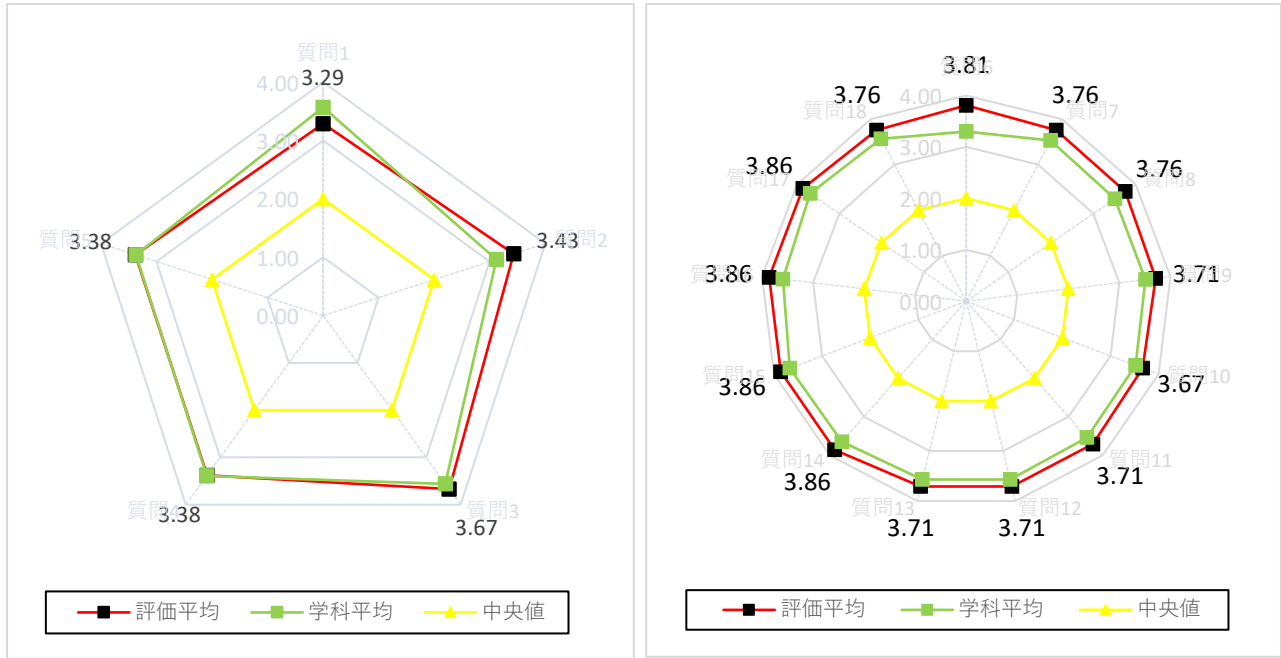
（３）次年度に向けての取り組み

本科目『保育内容指導法（言葉）』（幼免必修）は、後期に開講される。また、次年度の前期、新科目『幼児と言葉』（幼免は必修）が入り、『国語』（小免は必修）は幼免必修ではなくなる。結果、幼児教育を中心に学ぶ学生の中には、『国語』を受講しない学生が多く出ると予想される。

そこで、次年度はこれまで以上に、本科目において言葉（国語）の力を高める指導の充実を図っていきたいと考えている。具体的には、毎時間の授業において、基礎的・基本的な知識・技能の獲得、教育に携わる上での心構えの習得、保護者への対応など、スキル面とともに態度面にも力点を置いた授業実践に努めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		カウンセリング実践演習	44名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

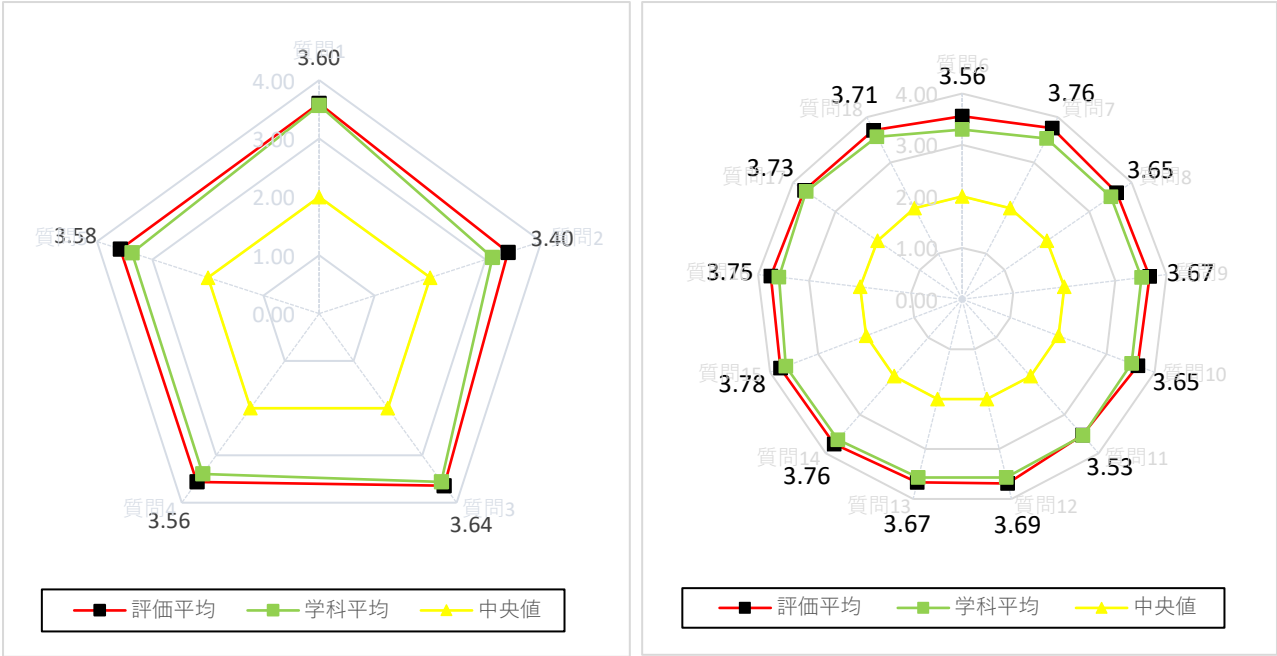
前年度よりも高い評価となった。見学実習を中心に授業計画の変更が多かったが、その都度新しい授業計画を配布して状況を共有したことで、学生が安定した気持ちで授業を受けることができたと考えられる。また、当初は共同制作だった最終レポートがCOVID-19の影響により個別制作となったことで、作業中の役割関係をめぐる不公平感を学生が感じることはなかったことも挙げられる。

（３）次年度に向けての取り組み

2020年度の成果を参考にした授業展開を行うが、共同制作については、その意義を明確にして可能ならば実施していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育内容指導法（表現）	78名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

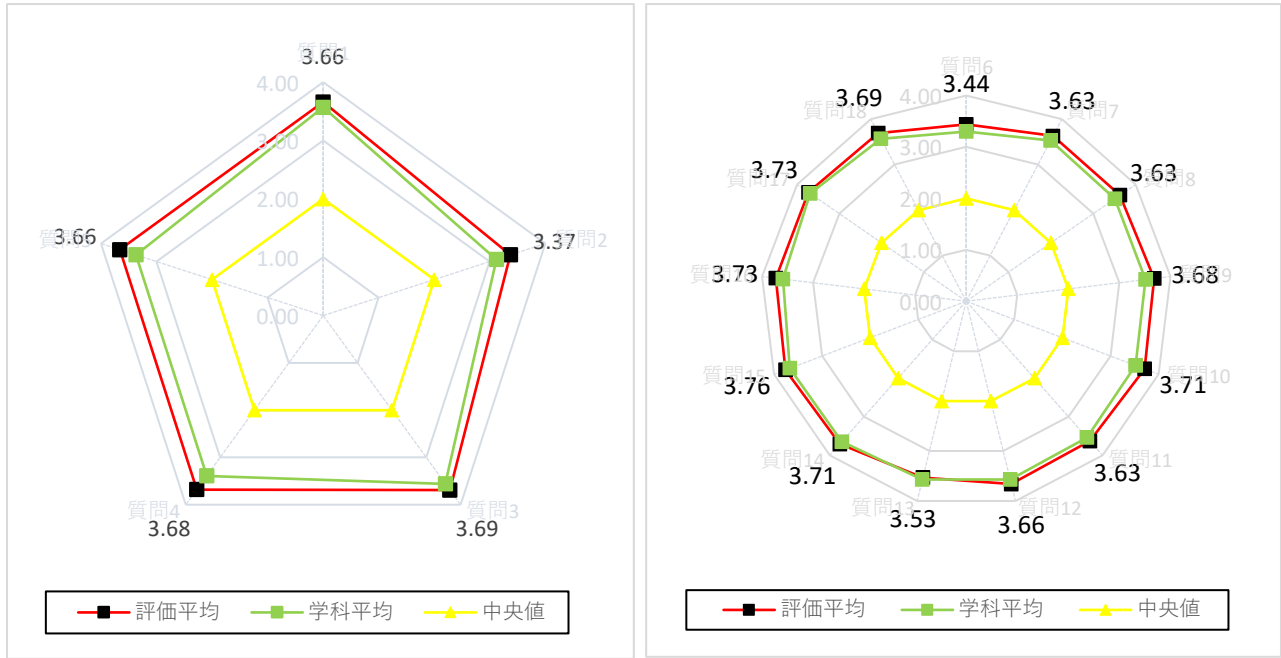
全ての項目において、当該科目の評価は学科平均値を上回っていた。実技を組入れながら展開して行く授業内容であるため、コロナ対策は特に入念に講じて授業を行った。学生たちも状況をよく理解し協力してくれたことにより、予定していた授業内容を無事に終えることができた。

（３）次年度に向けての取り組み

令和2年度のコロナ対策における経験を踏まえ、次年度も必要な対策を講じながら取り組んでいく。また、個々の学生へのきめ細やかな指導を心掛けながら、より一層授業内容の充実を図っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼児理解の理論と方法	84名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

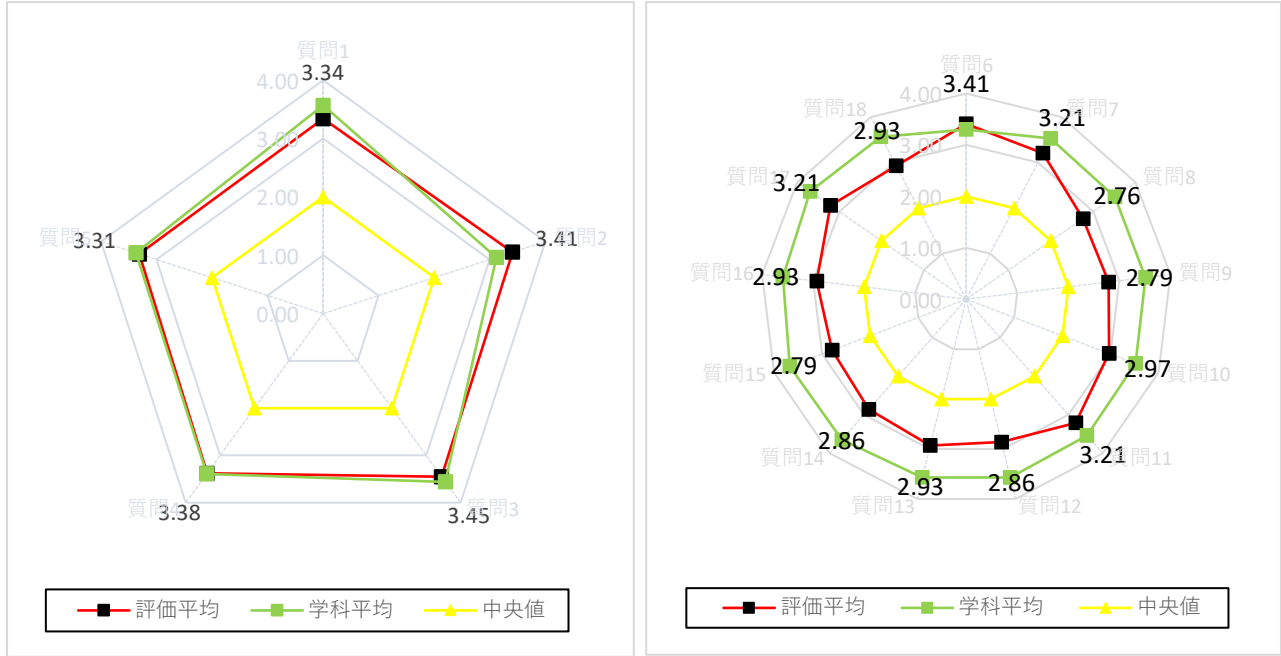
全ての項目で学科の平均値を上回る評価を得られた。総合評価は3.69であり、学科平均を0.11上回った。この中で、「質問13 授業の進む速さは適切でしたか」は学科平均点が3.56に対し、授業者の点数は3.53であり、唯一学科平均を授業者の平均が低位となった。

（３）次年度に向けての取り組み

教えたい、教えるべき内容が授業時間数の8コマに比して多いために、授業者が少し急いだ面があった。反省すべきである。加えて受講者が1年生であることもしっかりと意識して、授業の速度調整するべきものと思われる。そのためには、授業内容の精選が欠かせない。これに取り組むべきものと思われる。他は反省すべきところは見当たらない。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		教育行政学	96名

(1)
学生による授業評価結果



(2)
結果の分析と評価

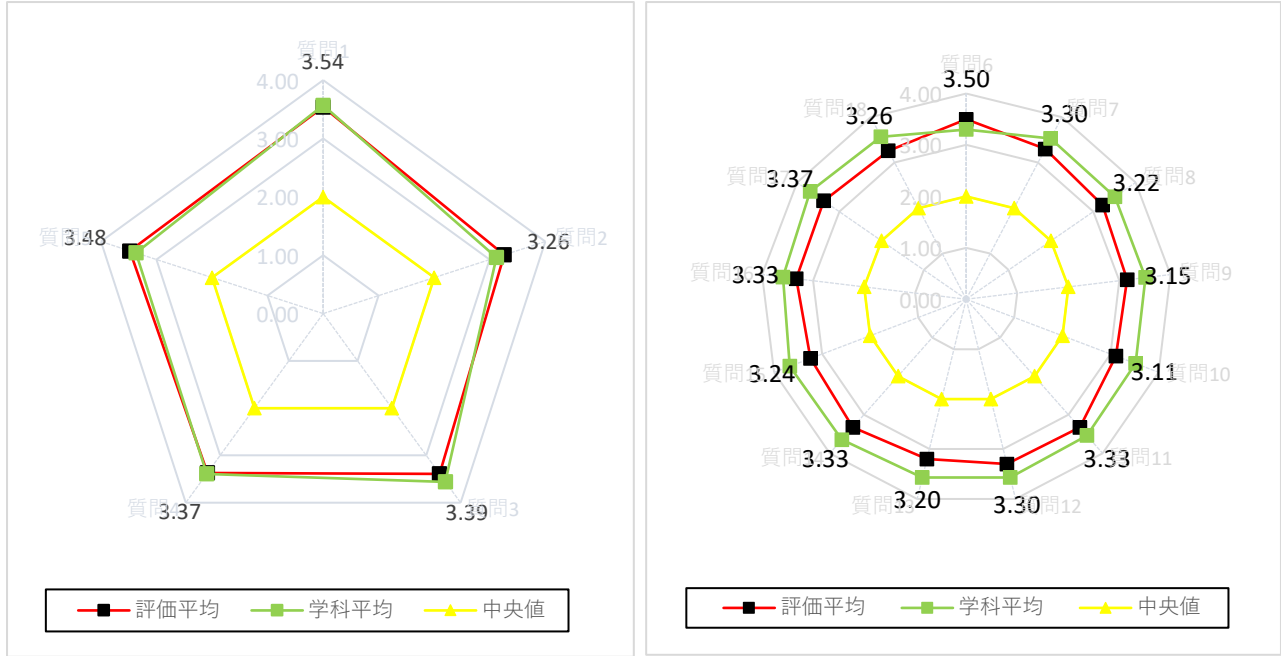
96人中29人が回答した。
全般に、自己の学習態度の評価は良いが授業のやり方はやや低い結果となった。とくに、ともに、ほとんどの項目にわたって、1と2をつける学生が一定数おり、自由記述にも不満をぶつける記述があった。かなり厳しい評価であると受けとめている。しかし、大半は3か4であるので、少数者の意見に耳を傾けつつ、一貫した授業方針として再考することが大事だと考える。
課題提出については学修ポートフォリオのシステムのため一括的な対応ができないことと、様々な理由で学習が遅れる学生への対応について試行錯誤し、混乱した。このことがもっとも反省すべきことと思う。今回は、オンライン授業の戸惑いと学生個々のネット環境の多様性から来る授業不満もある。3年後期は、幼稚園実習で休講・補講が発生するだけでなく、五月雨式に介護等体験で授業を公欠する学生がおり、授業運営の難しさがあった。学生にも学習のペースを整えるのが難しい中、授業には熱心に参加し、真摯に課題に向き合い、授業に協力してくれたことに深く感謝する。学生からの質問にはすべてメールや授業後のZOOMで対応し、丁寧に説明して理解を得ることができた。

(3)
次年度に向けての取り組み

上述したように、はじめてのZOOMを使った遠隔授業で、学生からの戸惑いの声も多かったが、授業運営の困難も多かった。走りながら考えるような状況での新しい遠隔授業の取り組みであったが、様々な観点から、反省点をよく検討して次年度に生かしたい。とくに事前学習と自己評価の取り組みはよく研究してより良いやり方を開発していきたい。また、オンライン授業では、学生の学習状況をよりの確に把握できるようになった。対面授業にない良さもあることが確認できた。なお、本授業は、法規を扱い、理論的な科目なので、実践的な科目よりもずっと精神的に抵抗のある内容である。その前提のもとに、オンライン授業のメリットを生かす方向で、より良い授業デザインを求めて再考したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		カリキュラム論	96名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

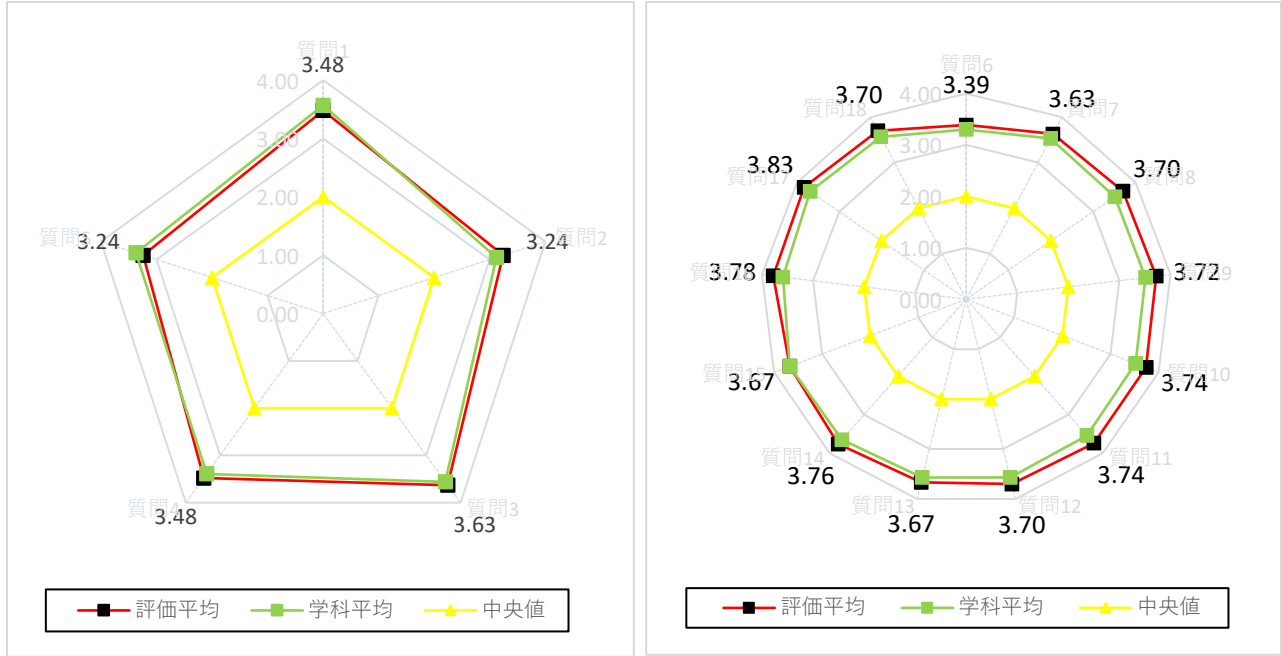
96人中46人が回答した。
はじめてのZOOM授業で、トラブルも生じたし、受講する学生も授業者も慣れないことが多く、運営に難しさがあった。その割には、学生の受講態度も熱心であったことを実感していたが、授業アンケートにそれが反映されていた。学生は、毎回の課題にもよく答えてくれた。とくに、慣れないシステムの授業なので、課題提出が遅れる学生にも配慮し、提出の機会を確保したいと思い、課題提出期限を、それぞれの事情を考慮して延長すると、すべての受講者に影響が及ぶ。遠隔授業の環境をすべての学生が満たしているわけではないので、画一的な対応をすることはできないと判断した。学修ポートフォリオでは、システム上、個別の対応をすることができず、配慮すると全体に影響することが避けられない。これが大きな課題である。学生からの戸惑いの声も多かったが、授業運営の困難も多かった。
振り返って、何よりこのような突然の事態にもかかわらず、授業者に協力し、真摯に授業に向かってくれた学生に感謝したい。

（３）次年度に向けての取り組み

上述したように、はじめてのZOOMを使った遠隔授業で、学生からの戸惑いの声も多かったが、授業運営の困難も多かった。走りながら考えるような状況での新しい遠隔授業の取り組みであったが、様々な観点から、反省点をよく検討して次年度に生かしたい。とくに事前学習と自己評価の取り組みはよく研究してより良いやり方を開発していきたい。また、オンライン授業では、学生の学習状況をよりの確に把握できるようになった。対面授業にない良さもあるように感じた。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		発達心理学 I	47名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

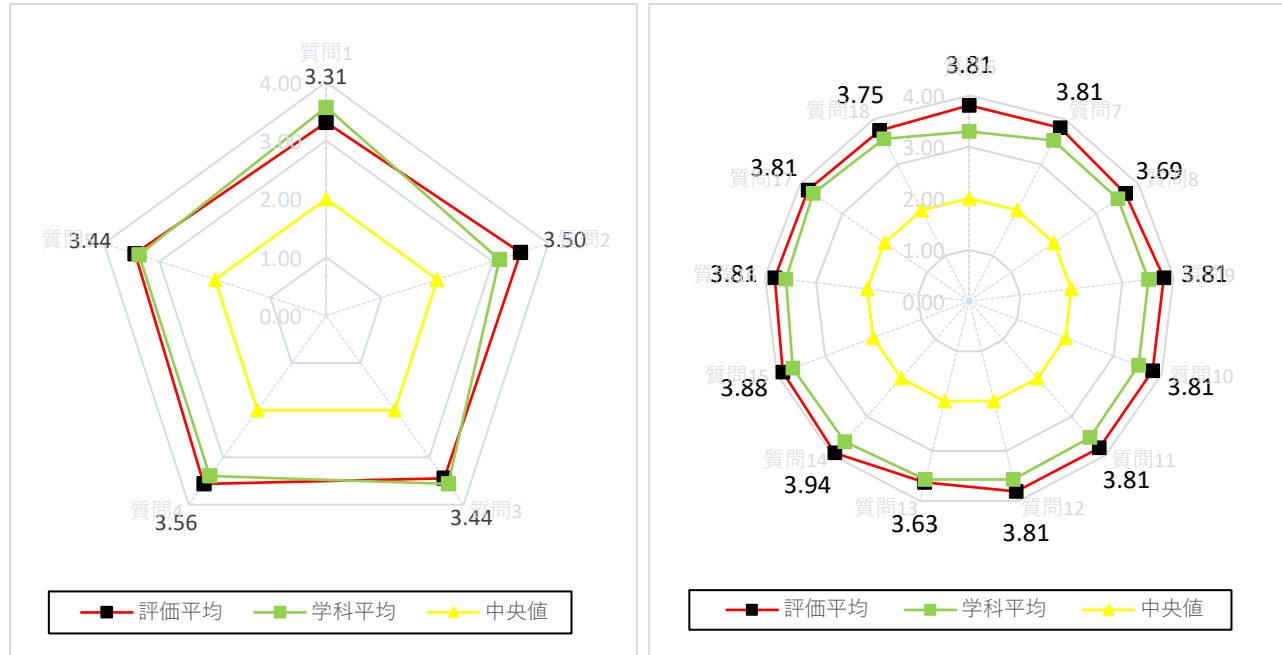
コロナ禍の中の新入生であり、それも前期の入学後間もない学生への授業で双方に不安を抱えながらの開始であった。
最初からオンラインでの授業すあり、教科書の説明も含めてシラバスについても説明を行った。画面上でややもすると音声のみの授業になりがちであるが
名前と顔を一致させたいということを伝え画面上で全員の表情を確認しながら授業を展開させた。
最初の授業でもあり熱心に受講してくれた。後半対面授業が可能となり視覚教材も使いながら授業を行った。質問時間も設け、直接質問できない学生には紙面上で質問を書いてもらい、それに答えていくように心がけた。授業評価も平均より高い評価を受けており。丁寧な授業を心がけることの大切さを感じた。

（３）次年度に向けての取り組み

次年度も、コロナ感染拡大に伴いオンラインでの授業が展開される可能性もあるが、できる限り工夫しながら対面授業を心がけたい。
その中で、不安の多い 신입生に対して、丁寧かつ細やかな指導を行いながら授業を展開したいと思う。また、授業を通して質問をしやすい雰囲気を出しできるだけ理解につながるようにしたいと思う。特にこの授業は、公認心理師受験資格の科目として位置づけられており、心理学の基礎科目として修得できるように努めたいと思う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		社会・集団・家族心理学Ⅱ（家族心理学）	44名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

令和2年度の回答者数が少なかったことは課題である。教員への評価は全ての項目で学科平均を上回った。本授業は、covid-19の影響や時間割の関係で同時双方向型の遠隔授業形式にて行った。家族心理学に関する様々なテーマに関して、学生が調べたことを発表し、テーマに関連するグループでのディスカッションを取り入れ、教員が解説を行う形で行った。令和2年度はカリキュラム変更の関係で3年生と4年生合同の授業となり、人数80名程度、グループワーク時は15グループほどと多く、またZoomによる機能の問題によりグループワーク中に教員が全てのグループの進行状況を確認することが難しい状況であった。授業終了時の感想では、「グループワークで色々な意見が聞けて良かった」との感想が見られていたが、授業評価の自由記述には、学生の発表やグループワークの割合と解説の割合についての意見もあり、学生の主体的学修推進のための授業形式であることの周知や、発表・グループワーク・解説の時間のバランスをとることが今後求められる。

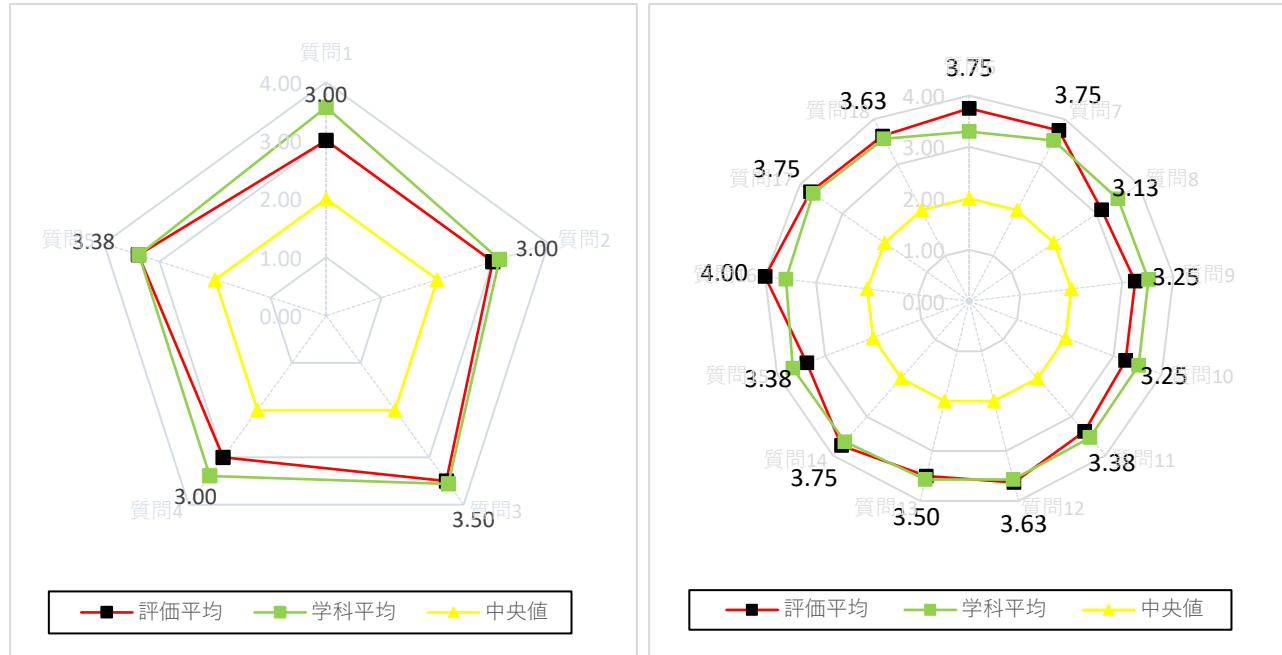
（３）次年度に向けての取り組み

次年度以降は、授業評価への回答時間を授業最終回に十分に確保し、回答数を増やすことを意識したい。

また、学生の主体的学修推進のための授業形式であることの周知を初回時に徹底することが令和2年度以上に必要と考える。可能ならば遠隔でなく対面式の授業を行い、グループワークの取組みの際に学生の主体的な取り組み状況を把握することが求められる。また、令和2年度はもともと学生の発表の時間の目安を提示していたものの、その目安を上回っての発表が行われた回も多く、次年度以降は学生の発表と教員の解説の時間のバランスを意識して進行を行っていききたい。公認心理師資格試験の過去問解説などは、今後も継続していききたいと考える。視聴覚教材の視聴により理解を深める機会が配信容量等の問題で令和2年度はもてなかったため、次年度以降は対面形式での視聴覚教材視聴なども行っていききたいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		家族心理学	39名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

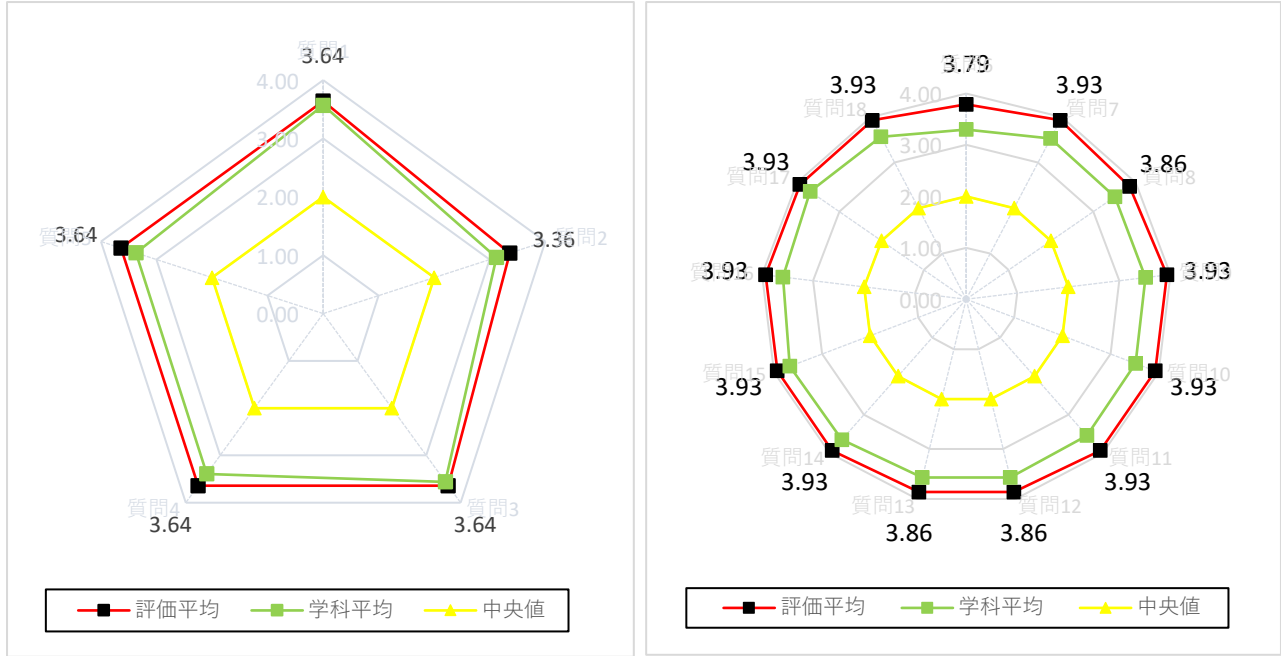
令和2年度の回答者数が受講者の一部となったことは今後の課題である。本授業は、covid-19の影響や時間割の関係で同時双方向型の遠隔授業形式にて行った。家族心理学に関する様々なテーマに関して、学生が調べたことを発表し、テーマに関連するグループでのディスカッションを取り入れ、教員が解説を行う形で行った。そのような授業形式で進んだことが質問8・9・10などに反映していると考えられる。令和2年度はカリキュラム変更の関係で3年生と4年生合同の授業となり、人数80名程度となり、グループワークが15グループほどと多く、またZoomによる機能の問題によりグループワーク中に教員が全てのグループの進行状況を確認することが難しい状況であった。授業終了時の感想では、「グループワークで色々な意見が聞けて良かった」との感想が見られていたが、授業評価の自由記述において、「グループワークへの参加度について学生の差が大きい」「発表やレポートで成績評価が行われているがグループワーク取り組み状況が反映されていない」などの回答も見られており、それらの思いが質問15の評価につながったと考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度以降は、授業評価への回答時間を授業最終回に十分に確保し、回答数を増やすことを意識したい。また、可能ならば遠隔でなく対面式の授業を行い、グループワークの取組みの際に学生の主体的な取り組み状況を把握することが求められる。また、令和2年度はもともと学生の発表の時間の目安を提示していたものの、その目安を上回っての発表が行われた回も多く、次年度以降は学生の発表と教員の解説の時間のバランスを意識して進行を行っていききたい。公認心理師資格試験の過去問解説などは、今後も継続していききたいと考える。視聴覚教材の視聴により理解を深める機会が配信用両党の問題で令和2年度はもてなかったため、次年度以降は対面形式での視聴覚教材視聴なども行っていききたいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		コミュニティ心理学	37名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

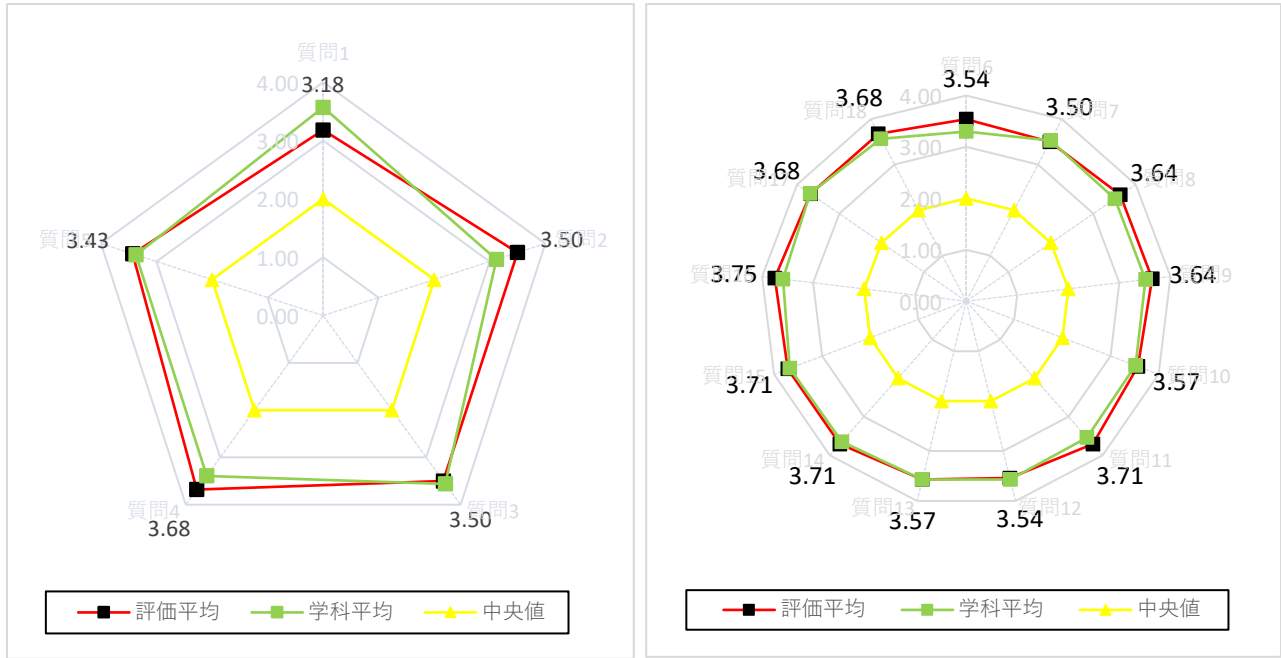
いずれの項目においても、比較的高い評価を得ることができた。
今年度は、コロナ禍に伴い本講義に関してはリアルタイム形式でのオンライン講義をおこなった。
受講生らの学習動機や意欲を維持しながら、半期受講してもらうためにも、毎回のポータルサイト上でのレポート確認時のコメントは一人ひとりより丁寧におこなうように心掛けたことがよかったと考える。
また、各講義の冒頭においても必ず前回の講義のQ & Aの時間を確保し、学生のためや理解が不十分だった点についても、1つ1つ拾い上げ可能な範囲でフィードバックをおこなっていったことも良かったと考える。

（３）次年度に向けての取り組み

おおむね、いずれの項目においても高い評価を得ることができていた。
中でも低かった項目6に関しては、オリエンテーションや毎回の講義において、より丁寧に本講義の到達目標やねらいを伝え、学生に周知してもらった上で講義展開をしていく工夫・配慮が必要であるとする。
今年度の講義は、Zoomを活用したオンライン講義であったが、学生との相互のやりとりを如何にして取り入れ、授業展開していくのか、創意工夫することが非常に試された。より質の高い講義を受講生らに提供できるためにも、この点は今後も検討しこれからの講義の中で生かしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		教育相談の基礎と方法	97名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

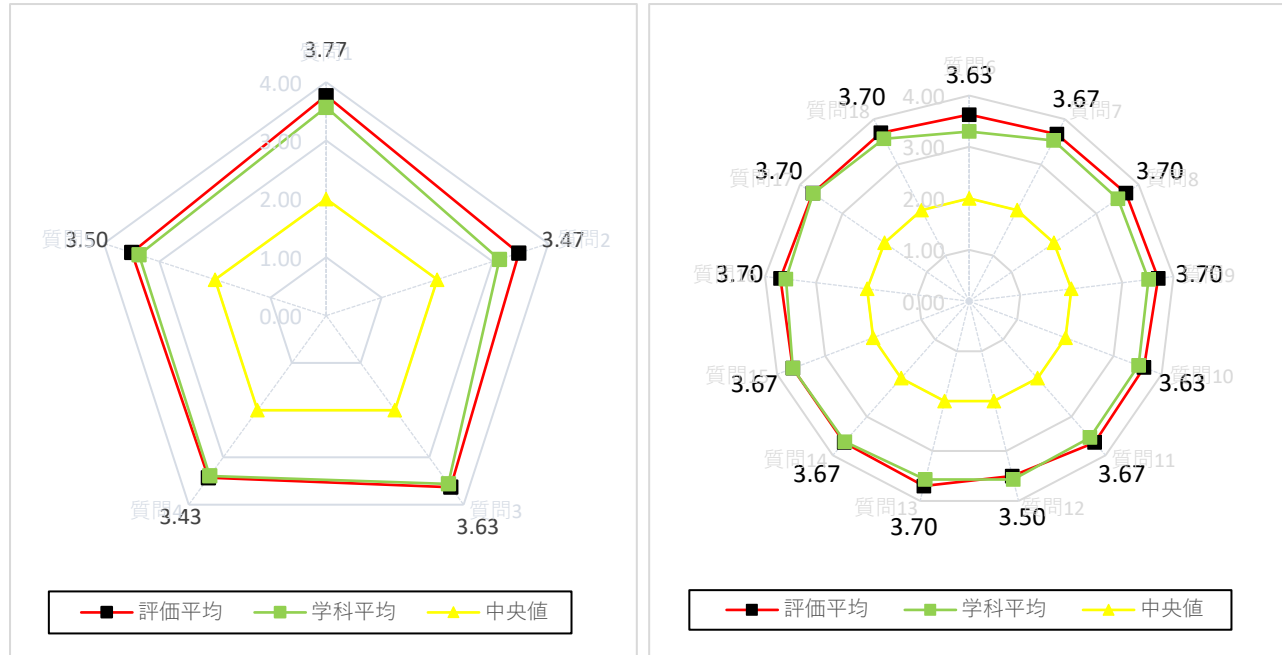
他の担当科目に比べて、学生自身の授業に対する取り組み、授業に対する評価共にその評価が低い。3年生であることの要因が大きいと思われる。ただし、例年に比べると、授業に対する評価は良好であった。12事項の中で、学科平均より高かったのは10項目においてであった。総合評価においては、3.68であり、平均に比べて0.1高かった。他の項目は微小の差で平均より高い評価となった。一方「質問7 授業の到達目標を明確にして、授業を展開していたか」と「質問11 教科書・配布資料は役に立ちましたか」の2項目について低い評価となった。到達目標のことについては、学生の評価がそのまま当たっている。また、教科書・配布資料についてもその通りである。

(3) 次年度に向けての取り組み

「質問7 授業の到達目標を明確にして、授業を展開していたか」と「質問11 教科書・配布資料は役に立ちましたか」の2項目について低い評価となった。到達目標のことについては、真摯に反省したい。到達目標を明示しながら授業を展開したい。また、教科書・配布資料についても反省すべきであろう。配布資料はしっかりとしたものであったと思うが、教科書の活用が不十分であったことは厳に反省すべきことである。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		思春期・青年期心理臨床	52名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

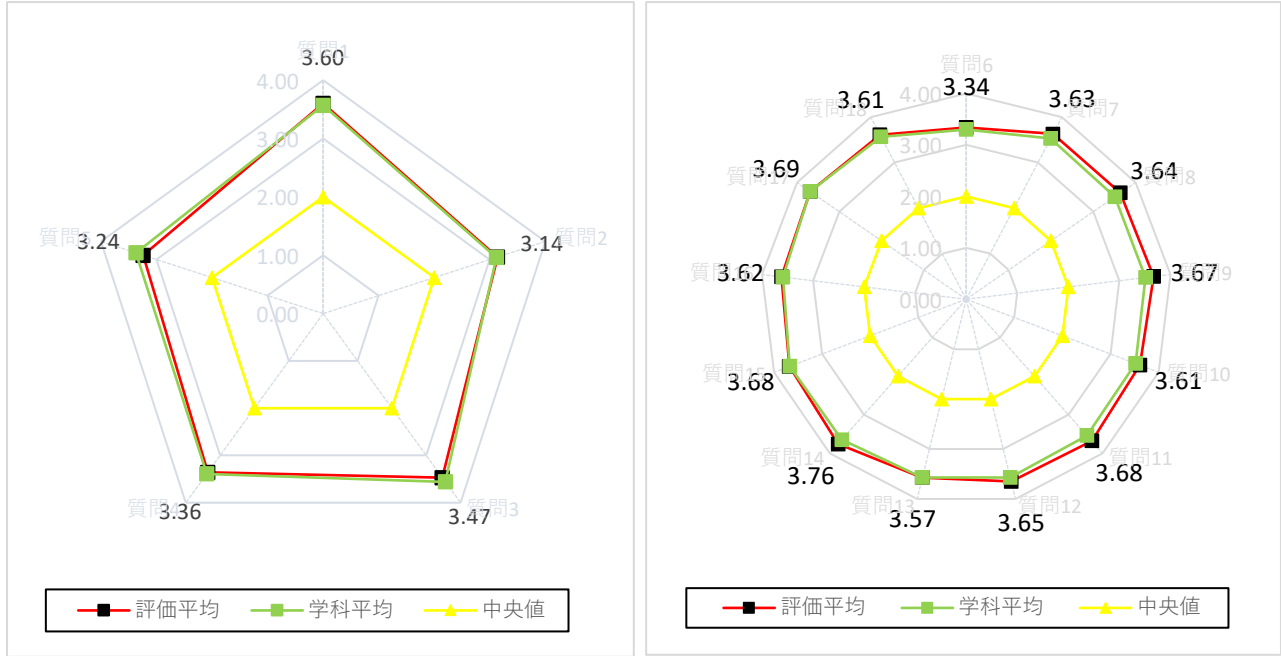
おおむね、いずれの項目においても高い評価を得ることができていた。
 質問2に関しては、毎回の講義の冒頭で「本日の講義のねらい」やそれを学ぶことの意義や背景をしっかりと伝えて、学習意欲や興味・関心を引き付ける導入をおこなっていたことがよかったと考えられる。
 また、講義内容が「思春期・青年期」をテーマとしたものであり、今まさに学生らがそのライフステージに立っている為、色々な視点から自分自身と講義内容とを重ね合わせながら受講できるよう工夫・配慮したことがよかったと考えられる。
 今後も、より高い評価を得るためにも、学生を飽きさせない授業展開や双方向のやり取りをさらに意識的に取り入れていくことが課題であり、必要であるとする。

(3) 次年度に向けての取り組み

本科目は、オンデマンド形式での遠隔講義であった。そのため質問12に関しては他の質問項目の中でも低く評価が出ている結果であるとする。
 今年度の前期は特に、コロナ禍の影響もあり、学生もWEB操作が慣れない中でのオンライン受講であることが想定された。
 また、ネット環境の良し悪しや使用するICT機器にも様々な状況の受講生がいることが想定されたため、その不安定な状況および不測の事態にも確実に対応できるためにも、教材配信型の遠隔講義のスタイルをとった。
 配信する教材は、より見やすく、学生らにとってもより伝わりやすい内容になるように、試行錯誤・工夫しながら作成していった。
 この点に関しては、オンラインのみならず今後の再開されるであろう対面講義においても、生かされる視点であり、引き続き意識的に取り入れ、より効果的な教材を活用できるように努めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		特別の支援を要する子どもの理解	119名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

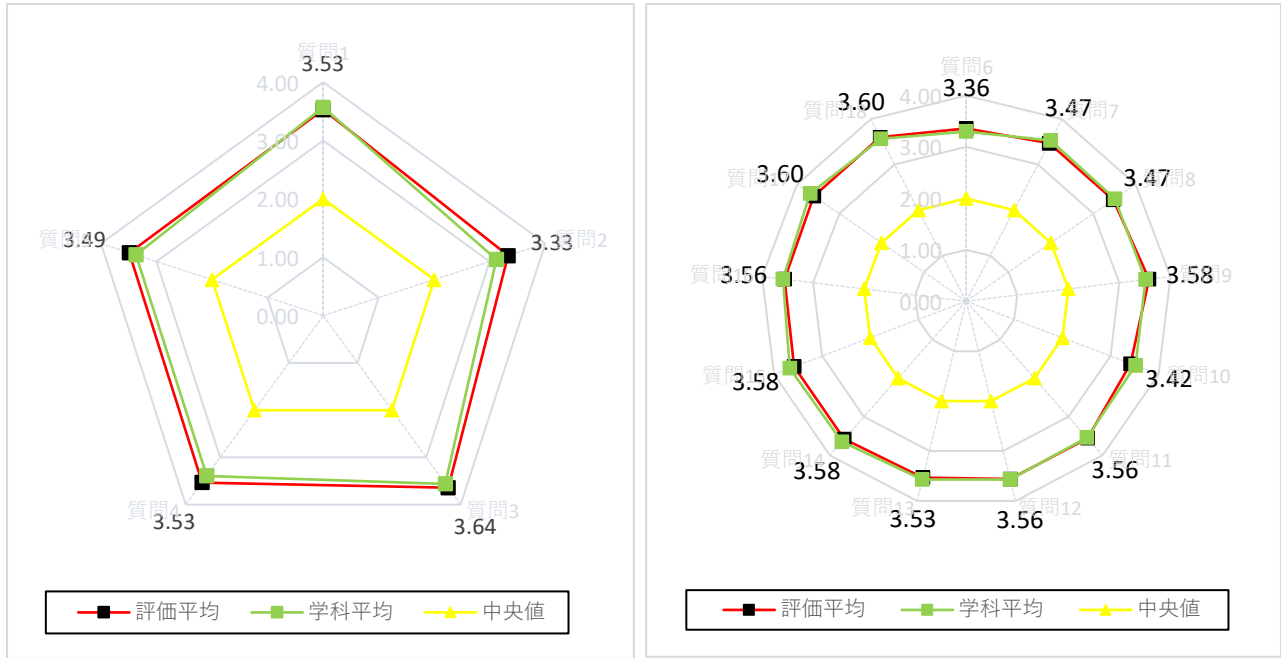
回答数：98/119
総合評価：3.56
自由記述：配布資料がわかりやすかった。前回の授業で出た質問などを挙げられて回答してもらえて自分でも少し疑問に思ったことにまで触れられていたのでいい授業が受けれていたとの評価があった。ZOOMの授業で、ペースが速いと感じる場面がいくつかあったとの記述もあり、改善が必要である。
本授業の目標は、特別支援教育の理念や課題を踏まえ、特別の支援を要する子どもたちへの支援・指導の在り方についての理解を深めることである。
質問7～18は3.57～3.69と高い評価であった。質問6のシラバスについての説明が3.34と最も低かった。質問17の教員の授業への熱心さが最も高かった。

（３）次年度に向けての取り組み

シラバスに関する説明
遠隔授業でのスピードを考慮する。
質問への回答は継続したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		国語科指導法	95名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

本年度は「具体性を大事にした活動のある授業展開」をめあてに置き、中でも、授業前の学習に力を入れてきた。前時の復習と本時のめあての確認、授業資料の事前配付、予習の奨励などである。また、授業中の音読、授業後の振り返りの記入などにも継続して取り組んだ。

しかし、遠隔授業の影響もあったのではないかと感じた。受講生同士、教師と学生間の共有・交流（場の確保はしたものの）が十分ではなかった。実際の生活場面で互いの言葉を交わすという、言葉（国語）の本質に関わる部分は、遠隔授業だけでは補えないと感じた。言葉だけでは通じない。言葉以外の手段（ノン・バーバルコミュニケーション）の大切さを実感した一年であった。

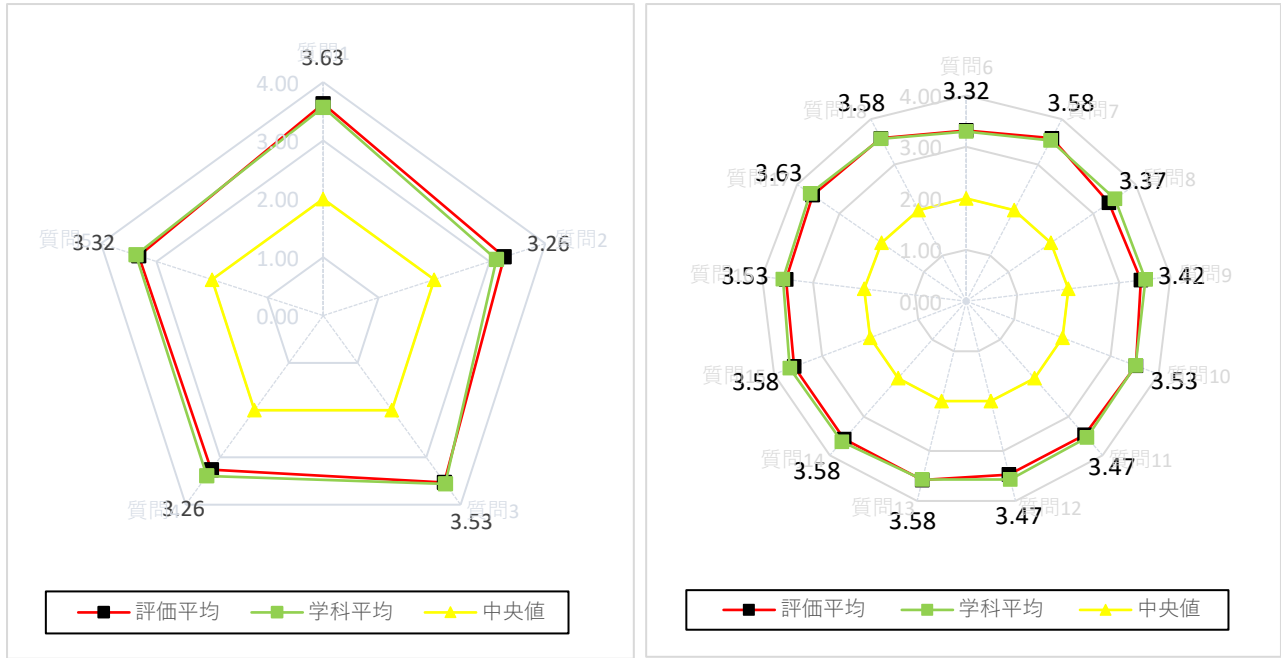
(3) 次年度に向けての取り組み

すべての教科の基礎である国語科授業をどうつくっていくか、活動を通して学生に学ばせていくとともに、そのための授業を私自身がいかに構築していくか、改めて、言葉や国語の本質に立ち返った授業づくりに取り組んでいきたい。

具体的な観点としては、「この教材で何を教えるのか」「子どもたちにどんな力を身に付けさせるのか」「どんな発問をするのか」「どんな板書をするのか」などが挙げられるが、その前提において、指導者としての構えを理解し実践していこうとする実践的態度を身に付けさせたいと思う。「教えるとは何か」「子どもに何を考えさせるか」を具体的な場面に即して理解させていくとともに、国語に関する知識・技能、コミュニケーション能力、読解力や表現力、書写力など、指導者・社会人としての「国語力」を高める学習の場を随時設けていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		神経・生理心理学	44名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

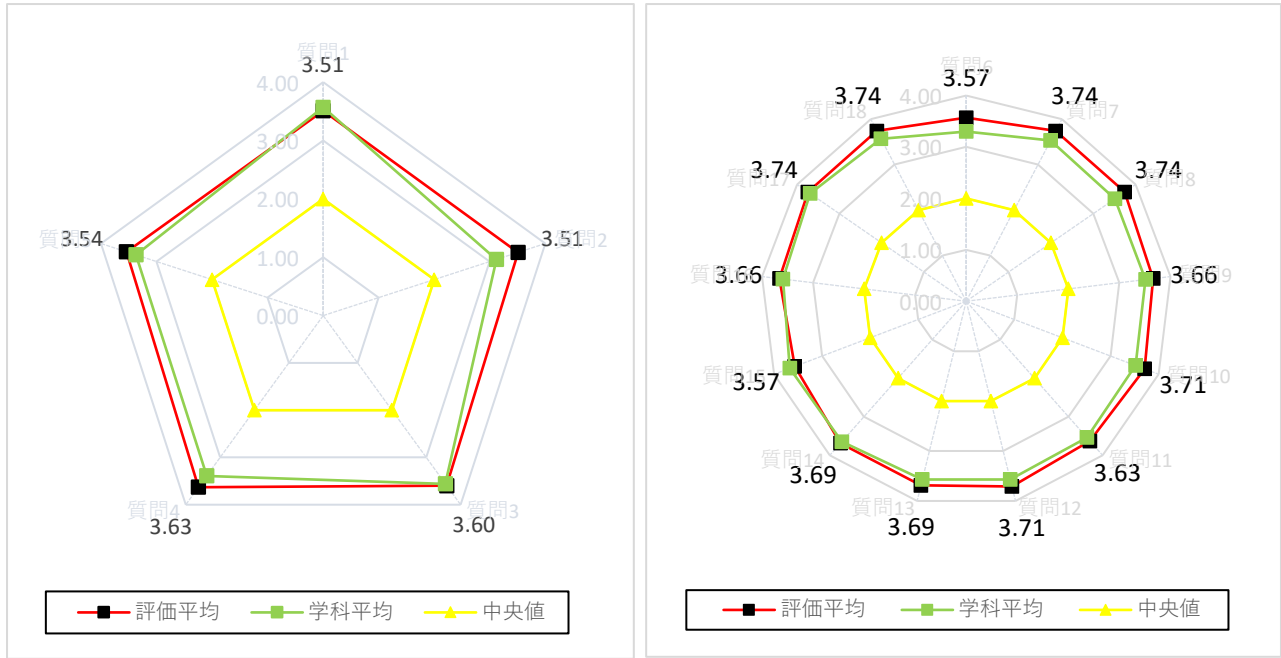
ほぼ学科平均と重なる結果となったようです。この年度の授業はすべて遠隔で行い顔が見えない状態でした。表情が見えないので反応が分かりづらかったのですが、毎回のレポートをきちんと期限通りに提出する学生が多数いました。そのコメントにわかりやすかったとの言葉もいただきました。脳の話で難しいところもありましたが熱心に授業を聞いてくれた学生には評価してもらえたと思います。

（３）次年度に向けての取り組み

次年度はどのような形態の授業になるかわかりませんが、どのような形態であっても顔が見えて質問に答えもらったり双方向での授業ができるようにしたいと思います。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		体育科指導法	72名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

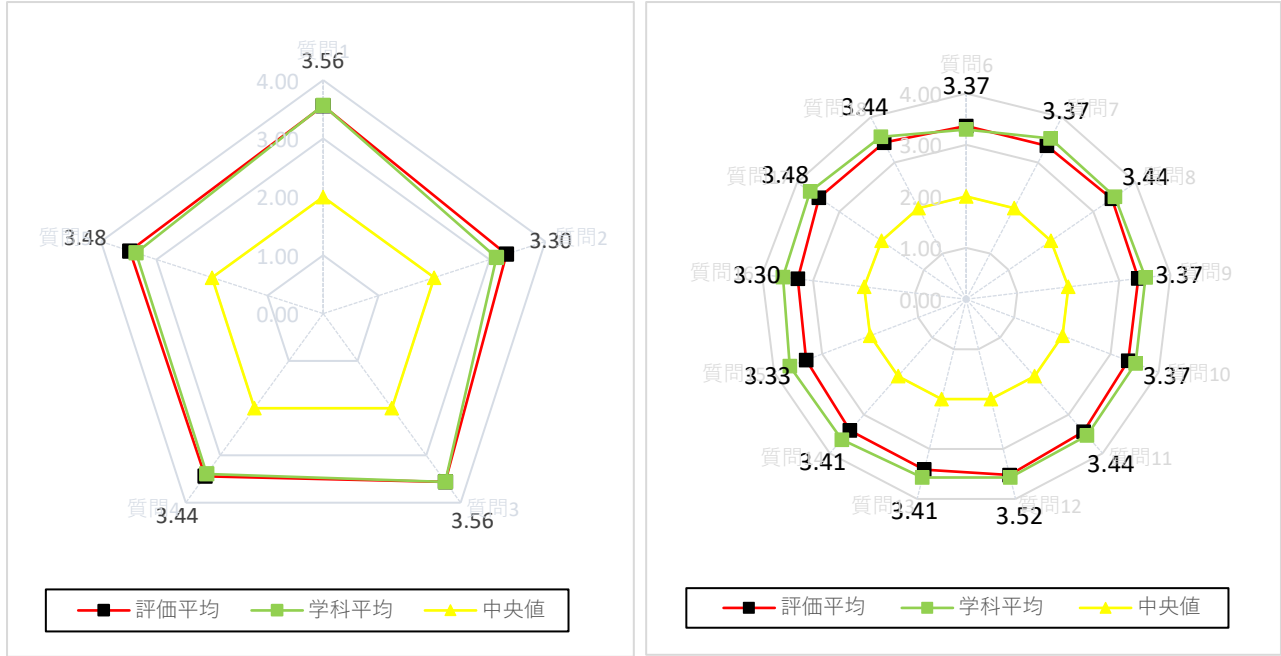
ほぼすべての項目で学科平均かそれ以上である。その点は高評であると捉えている。唯一15の項目のみ学科をわずかに下回っている。この点は、模擬授業等でなかなかグループディスカッションが上手く出来な学生への対応であると捉えている。この点は改善したい。

（３）次年度に向けての取り組み

今年度は理論編から模擬授業という流れを変えて、模擬授業から理論編へと変更した。これは学生自身が自分で考え授業を作ることより重視したためである。また話し合いが上手く出来ていない学生やグループにはこれまで以上に積極的に関わっていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		音楽科指導法	96名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

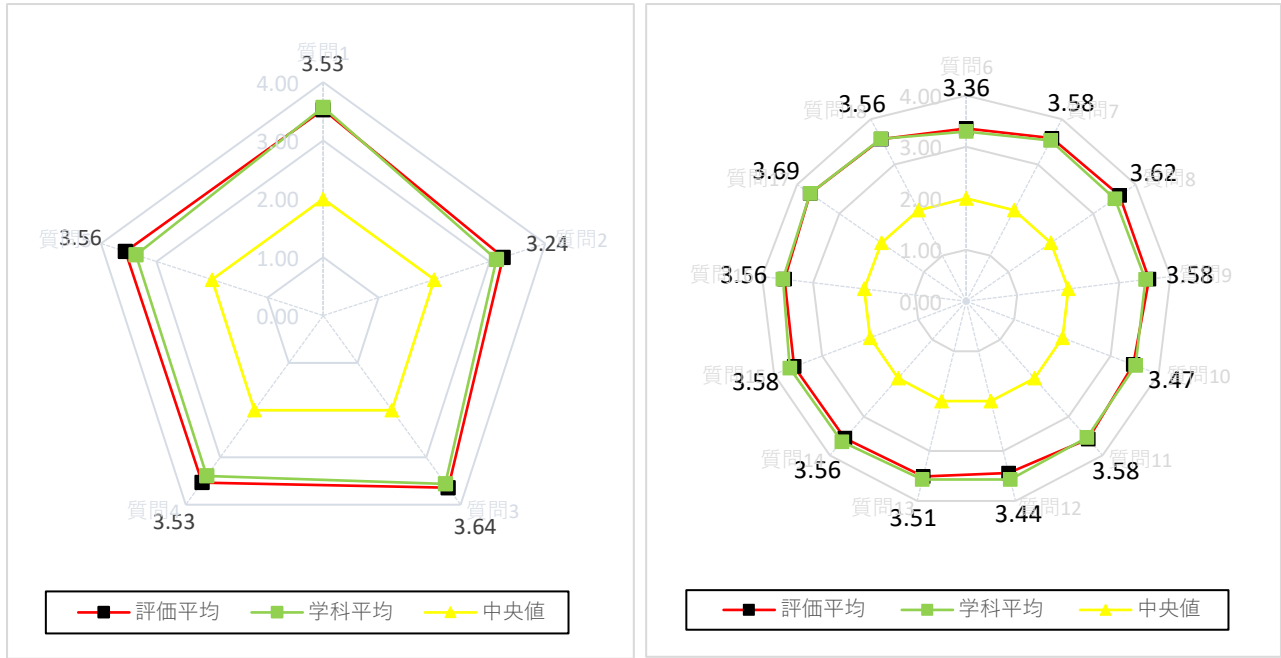
学生の自己評価項目および教員の評価項目のいずれにおいても、突出して大きく評価が落ち込んだ項目はなかった。調査項目全体を見ると、おおむねバランスの取れた結果であったと言えよう。この授業では、実技を組入れながら実施する必要がある。そのため、教員側には、コロナ禍であることを踏まえ、対面授業を実施できる期間のうちに、なるべく授業内容を進めておきたいとの思いが強くあった。そのため、例年よりも、やや授業の進度は早目であったし、学生とのやり取りの時間もじっくりとすることはできなかった。これらは、反省点として挙げられる。

（３）次年度に向けての取り組み

令和2年度のコロナ対策での経験を踏まえつつ、次年度は授業内容の進捗および学生とのやり取りの時間確保を重視することによって、個々の学生に対して丁寧に指導を行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育・教職実践演習 (幼・小)	82名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

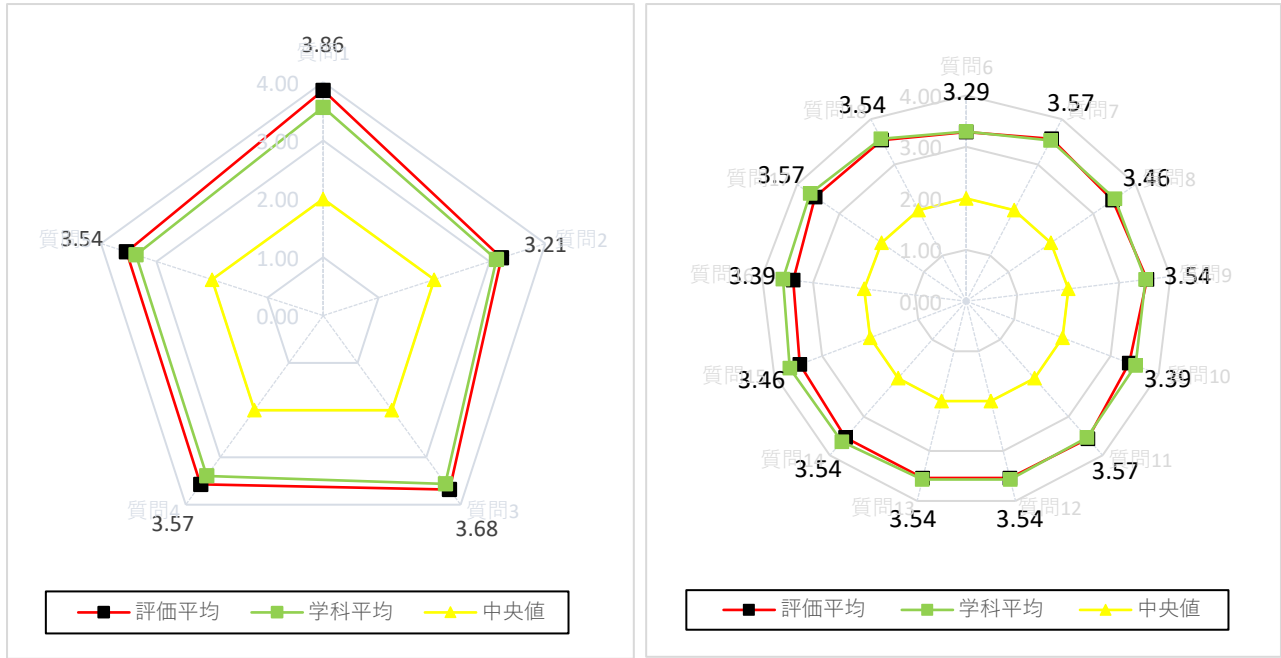
小学校教育実習が後期10月12日(月)～11月27日(金)に変更となったことに伴い、保育・教職実践演習も11月30日(月)から毎月曜日1・2限連続して、対面・遠隔併用での実施となった。慣れない環境の中での授業であったが、保育・教職のまとめの授業ということで、各自概ね良好な授業態度であったと分析・評価している。

(3) 次年度に向けての取り組み

コロナ禍で見通しが難しい状況にあるが、保育・教職のまとめということで、対面・遠隔授業のいずれにせよ、園・学校や児童生徒・保護者の実態、指導要領や社会・保護者のニーズ等を踏まえ、卒業後の進路に役立つような授業を確実に行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		発達障害者教育総論	59名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

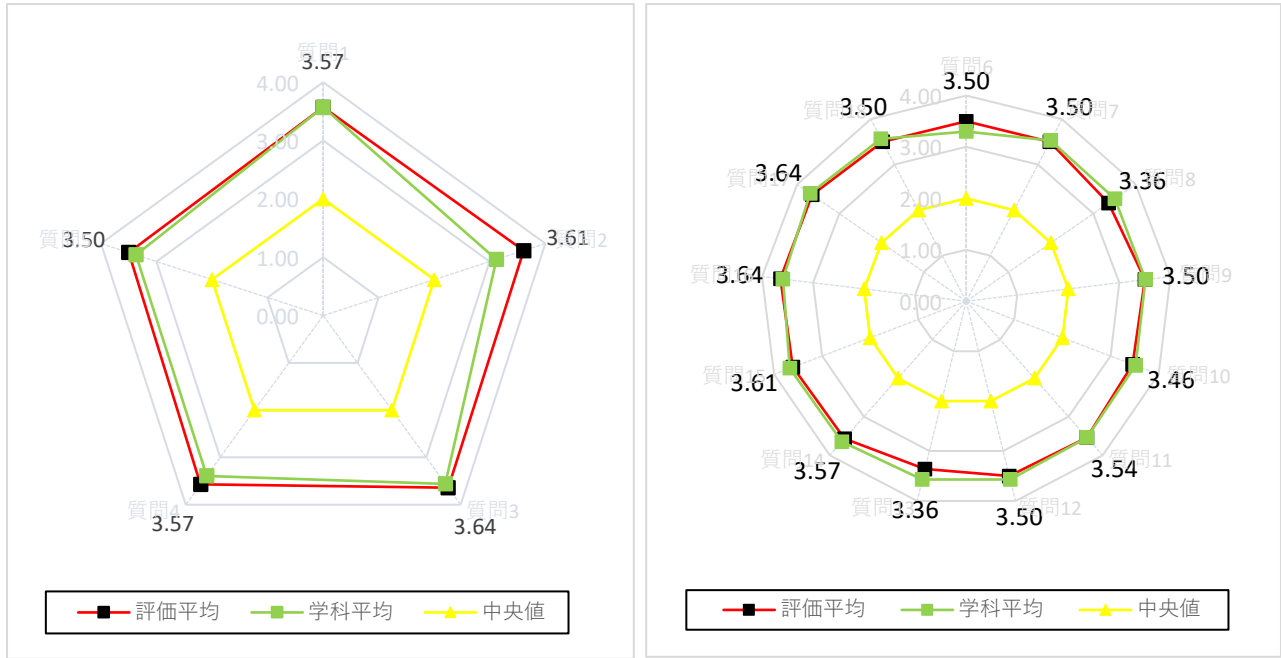
質問15 公平に学生に対応しましたか。
 質問16 教員は双方向的なやり取りをしながら、授業を行っていましたか。
 について、学科平均よりやや下回る評価となっている。

(3) 次年度に向けての取り組み

今年の授業はオンデマンドで行ったため、学生への対応に距離が生じてしまったと考えられる。
 次年度は、双方向的授業をオンラインで行えるように工夫したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		知的障害者の心理・生理・病理	63名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

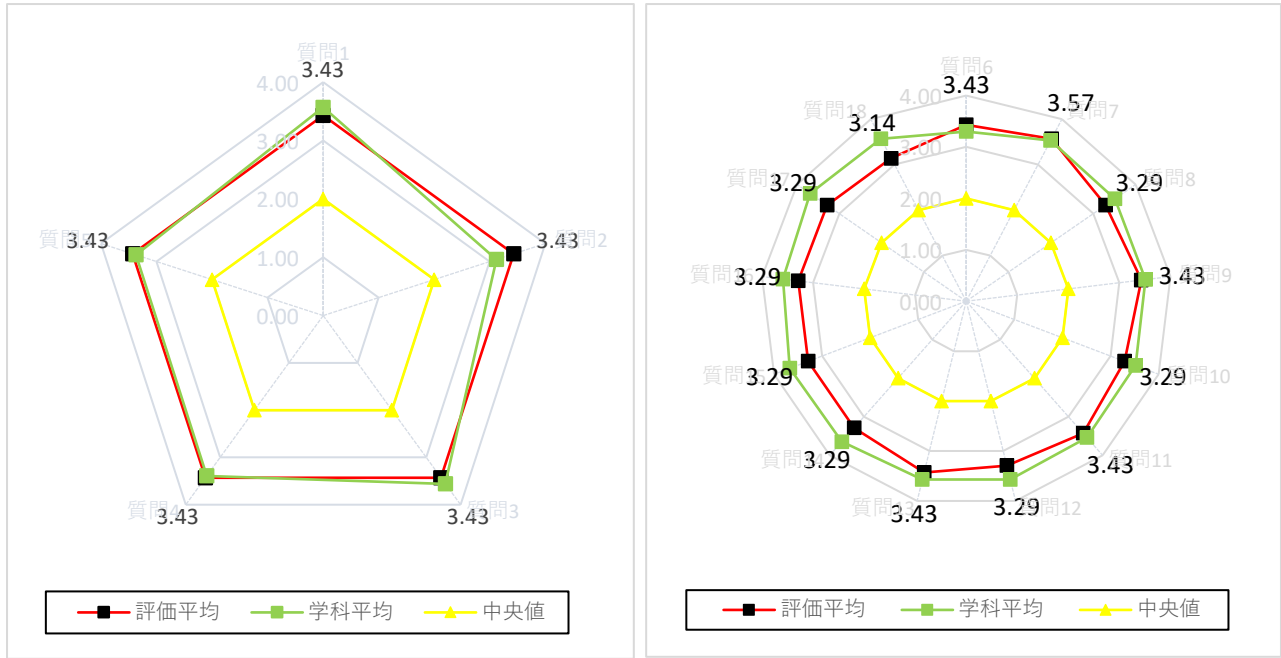
回答数：28/63
総合評価：3.55
自由記述：少し内容が難しいところもあったが、興味深い内容で面白かった。後半の先生の授業で4.5限が始まってから終わるまでずっと映像を付けっぱなしにしておくように指示されていたが、初めと終わり、出席確認の時だけ付けるようにして欲しかった。
本授業は、知的障害心理に関する基礎知識や、心理機能と発達支援、知的障害児(者)に対するに心理検査やアセスメントについて理解することを目的とした。
質問6～18の評価については、3.36～3.64の範囲であり、昨年度の評価より微増している。

（３）次年度に向けての取り組み

オムニバス形式の授業のため、評価についての分析には課題がある。
オンラインでの受講形態については、検討の必要がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		知的障害者教育	53名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

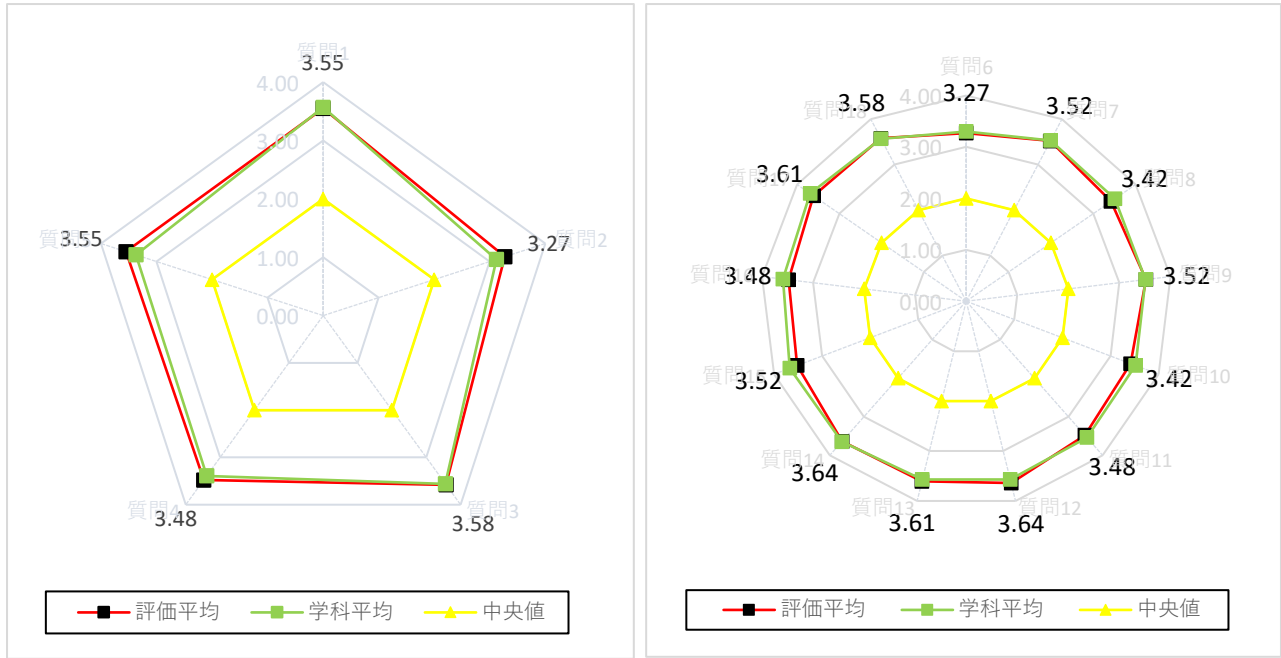
- ・各項目の評価平均はすべて3点台で、おおむねよい値と思われるが、多くの項目で学科平均をやや下回る結果であった。
- ・自由記述には、前回授業の課題の解説により疑問が残ることなく、理解して毎回の授業を集中して受けることができたとのコメントがあがっていた。

(3) 次年度に向けての取り組み

- ・引き続き、講義とグループワークやディスカッションなどの活動とのバランスを図りながら、双方向的な授業の工夫を行う。
- ・知的障害教育における実践的な内容の取扱いに努め、遠隔授業においても学習指導案の作成などの具体的な活動を効果的に盛り込む方を検討していく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども 心理カウンセリング		家庭支援論	58名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

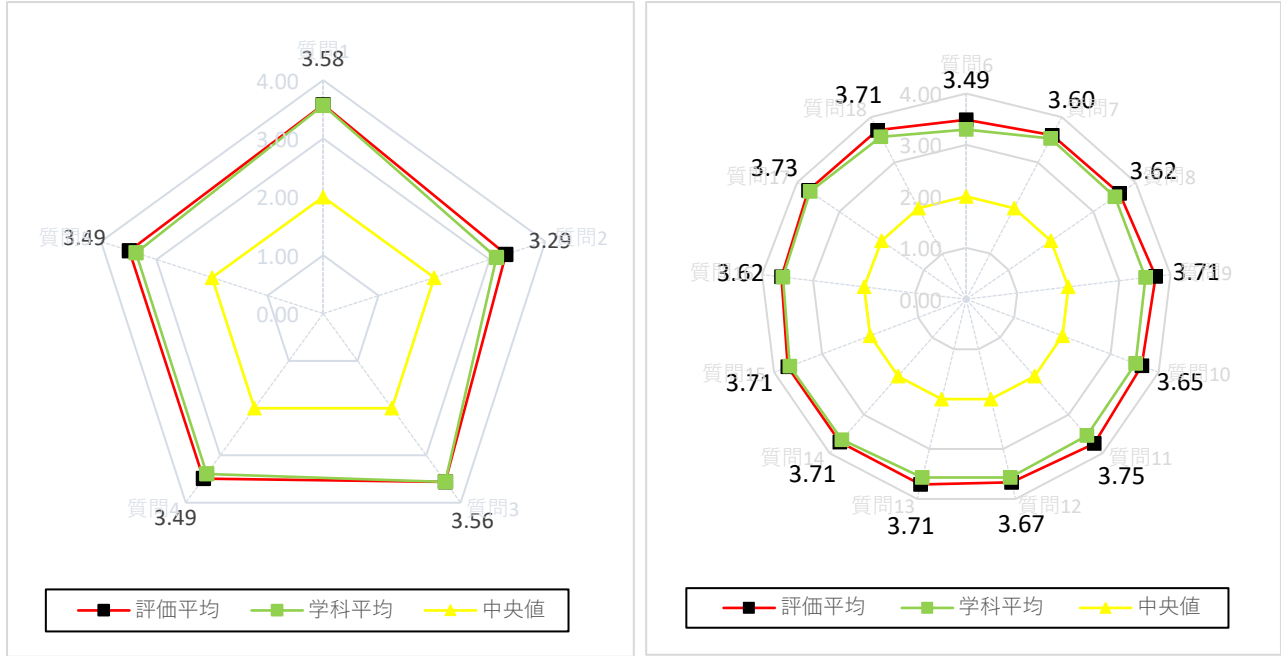
本科目受講学生の回答率は、48名中33名で、回答率57％（前年度44％）で約6割であった。本科目への総合評価は3.51（前年度3.46）と高評価であり、学生の総合自己評価は3.55（前年度3.45）、授業に関する評価は3.58（前年度3.42）と共に高評価であった。学生の感想として、例年のように、事例の紹介と検討、考察ができたことが有意義であったとの自由記述が多かった。本授業はオンラインで実施したことから、事例の考察に関する直接的やりとりを行いたかったとの声が多く上がった。実践につながる具体的な学びの方法をさらに工夫する必要がある。

（３）次年度に向けての取り組み

前年度より回答率は上昇傾向ではあったが、学生全員からの回答が得られるように、授業時に計画的な働きかけを意識していきたい。授業については、今年度同様、基礎的な学びと事例紹介と考察を重視した応用的内容を大切にしながら進めていくが、オンライン授業での学生へのアドバイス方法の検討を行いたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		知的障害者教育総論	87名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

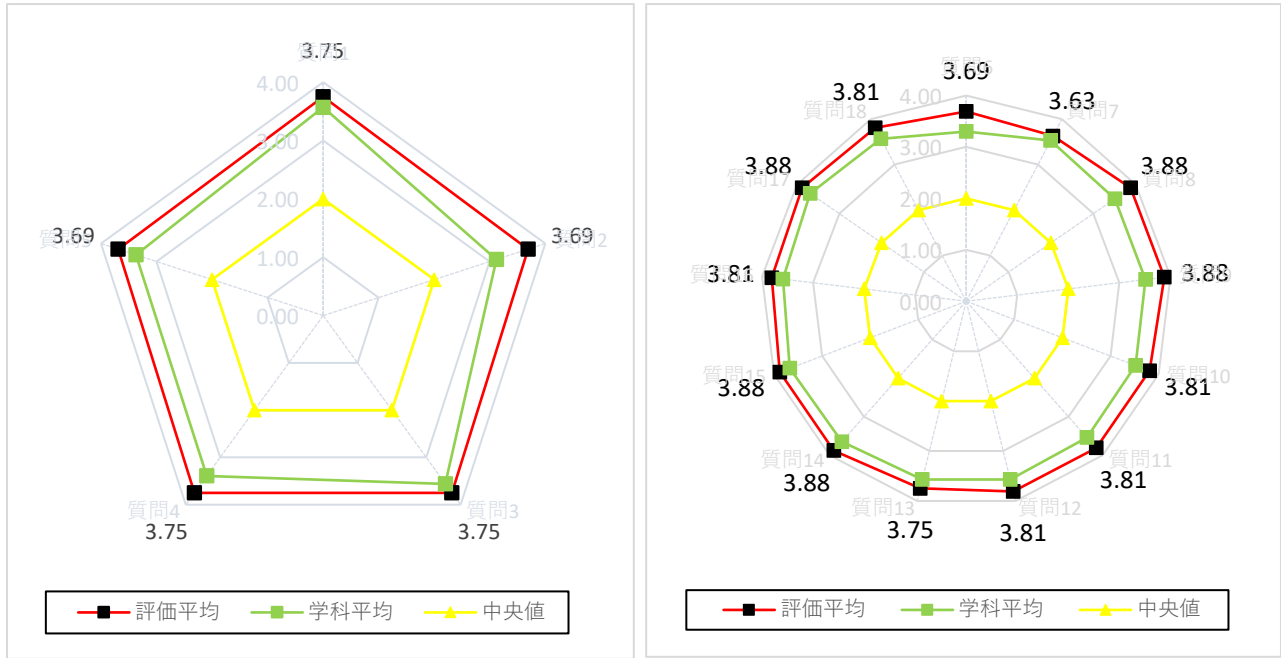
- ・すべての評価項目について、評価平均は学科平均程度かそれをやや上回る結果となった。平均値も3.5程度から3.7程度であり、おおむね良好な結果であったと思われる。
- ・PDFの資料や配布資料がたくさんあり、復習時に活用ができた、といった意見が見られた。

（３）次年度に向けての取り組み

- ・次年度も引き続き授業の内容の充実を図る。学科の特別支援教育関係の専門科目の中では最も早く履修する科目であることも踏まえ、以降の学びにもつながる基本的な事項の理解を徹底することを軸に授業を構成する。また、遠隔授業を行うにあたっては、他の学生の意見を基に自身の意見をブラッシュアップしたり、他者の意見に対して適切にコメントするなどの思考・表現的な活動を行うための方策を検討しながら進める。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育相談支援	46名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

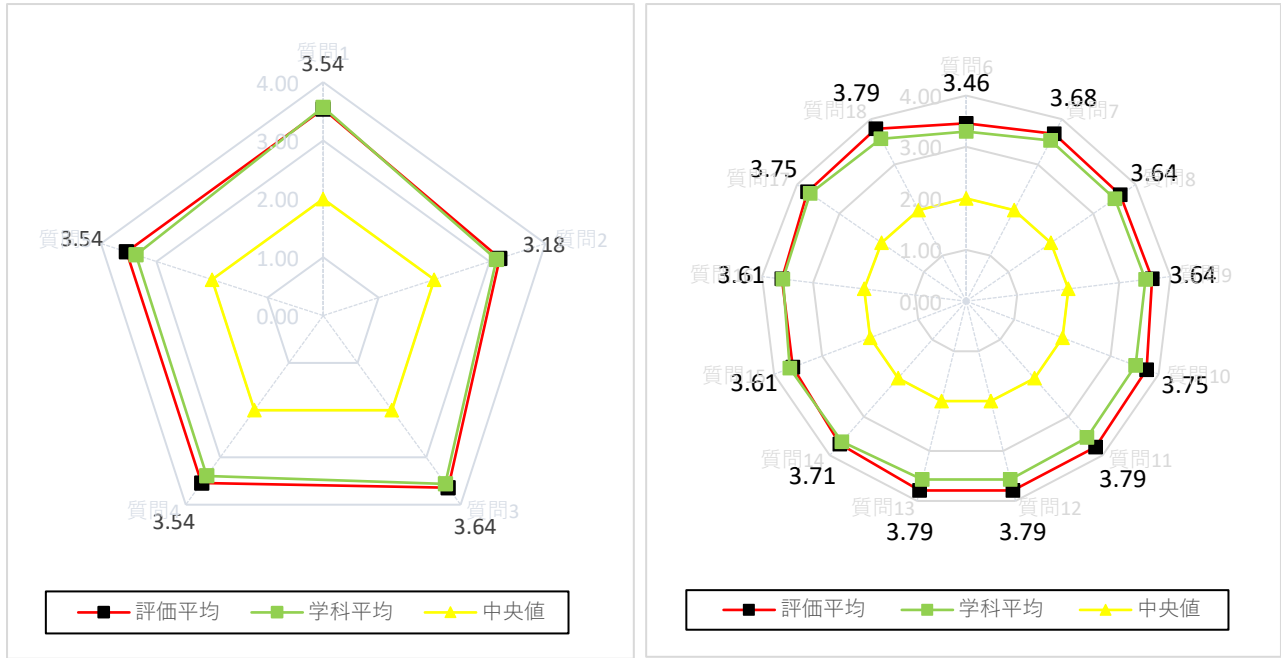
本科目受講学生の回答率は、46名中16名で、回答率35%と大変低かった。その上での分析となるが、本科目への総合評価は3.78と高評価であり、学生の総合自己評価は3.69、授業に関する評価は3.81と共に高評価であった。回答した学生は大変熱心に取り組み、学びを進めたことが窺える。

(3) 次年度に向けての取り組み

来年度は、学生全員からの回答が得られるように、授業時に計画的な投げかけを、さらに意識を高く持ち、授業に取り組んでいきたい。授業については、今年度の授業内容及び方法を振り返り、シラバス及び授業到達目標を受講生に明確に伝えることを意識しつつ、実施する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども家庭支援論	48名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

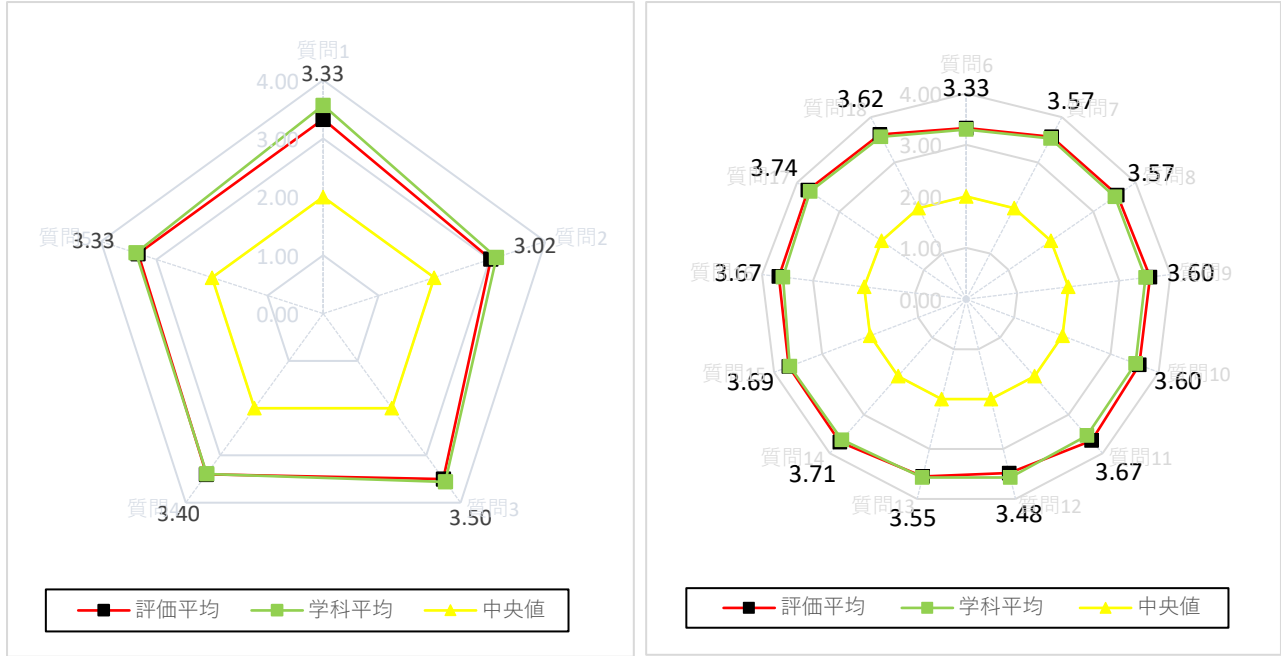
本科目受講学生の回答率は、48名中28名で、回答率58%であった。本科目への総合評価は3.64と高評価であり、学生の総合自己評価は3.54、授業に関する評価は3.79と共に高評価であった。学生の感想として、事例の紹介と検討、考察ができたことが有意義であったとのコメントが多く届いた。実践につながる具体的な学びは学生にとって、興味関心が深いと言える。

(3) 次年度に向けての取り組み

来年度は、学生全員からの回答が得られるように、授業時に計画的な投げかけを、さらに意識を高く持ち、授業に取り組んでいきたい。授業については、今年度同様、基礎的な学びと事例紹介と考察を重視した応用的内容を大切に、オンライン授業を進めていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		社会的養護 I	64名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

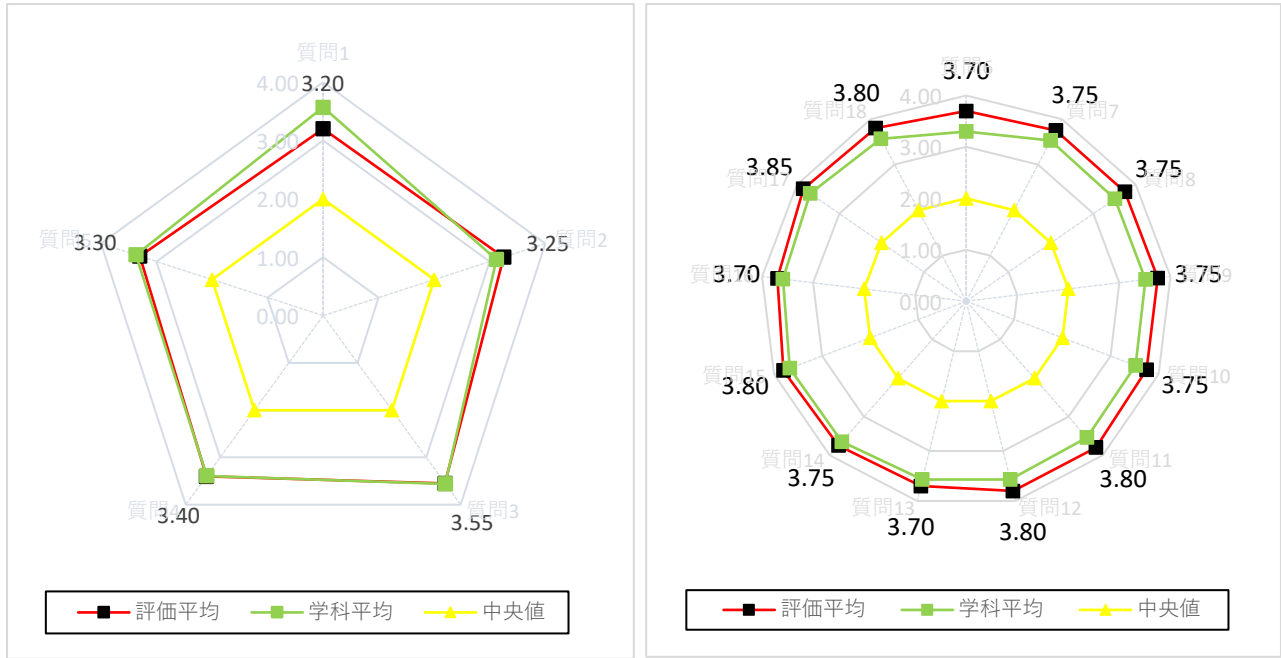
本科目受講学生の回答率は、63名中42名で、回答率67％（前年度56％）であった。本科目への総合評価は3.52と高評価であり、学生の総合自己評価は3.33、授業に関する評価は3.62と共に高評価であった。中でも教員の熱意、学生の質問等への誠実な対応、学生への公平性が高評価であり、一方、オンライン授業での、声の大きさ・明瞭さ、速度については、再度検討を重ねていくことが必要であるとする。

（３）次年度に向けての取り組み

来年度は、学生全員からの回答が得られるように、授業時に計画的な投げかけを、さらに意識を高く持ち、授業に取り組んでいきたい。授業については、今年度同様、熱意を持って取り組み、オンライン授業での教授方法の検討を重ねていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		遊戯療法	42名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

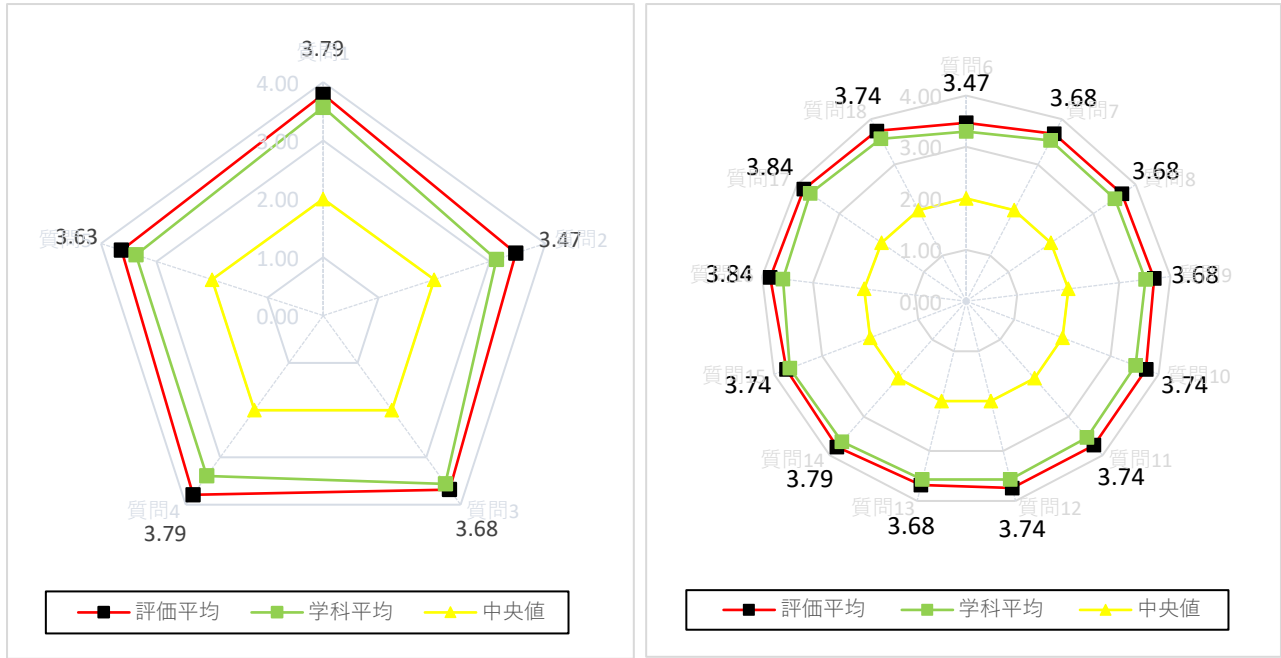
コロナ禍の中、実践演習を取り入れるため対面授業を必要とする科目であった。前半は理論的な講義はリモートで行いレポートを課しながら授業を展開した。その後、対面授業の中で、遊戯療法に関する技法について演習を行った。理論を学びながら演習で確認していく作業であった。学生からは高い評価を得ており学科平均を上回る評価である。より臨床心理学に関心を持ったとレポート等に書いてあった。

（３）次年度に向けての取り組み

次年度もコロナ感染拡大が不透明であり、授業の展開が難しいが、できるだけ工夫しながら対面授業ができるように行いたい。またリモートの場合の授業についてリモートでの演習の在り方など検討したい。人数を少人数に分け、遊戯療法について実践ができないか検討していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども家庭支援の心理学	47名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

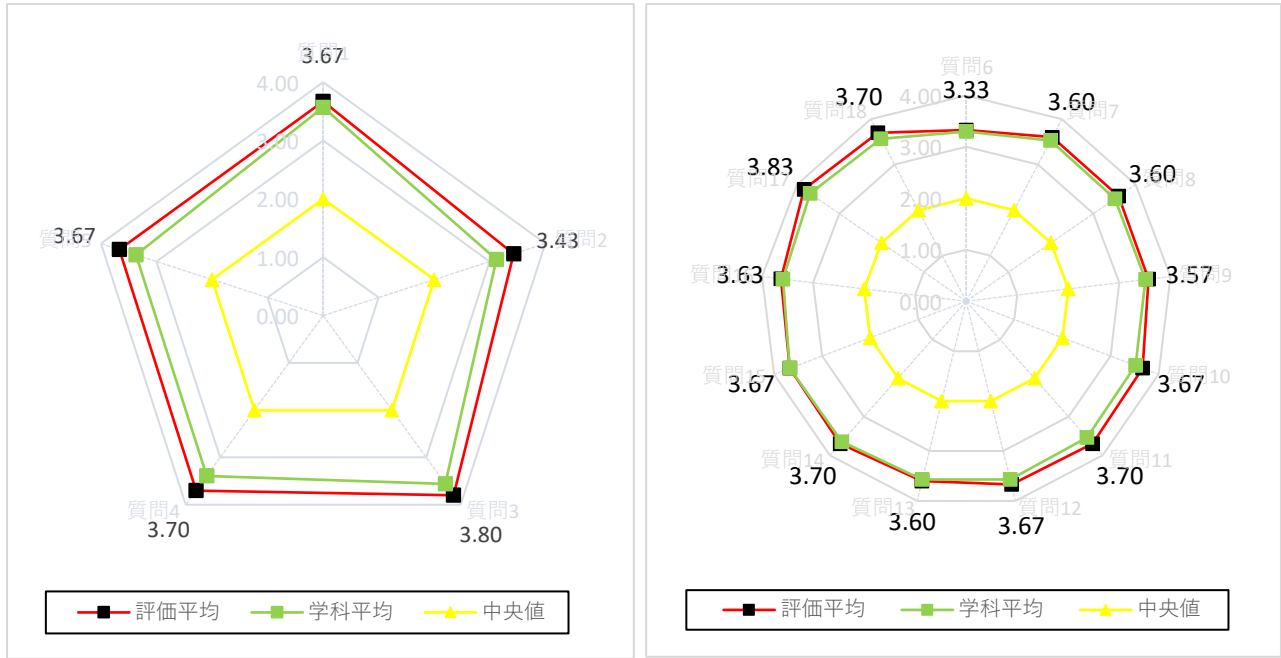
全ての項目において、学科平均を0.1以上高い評価となった。特に「質問17 教員は熱心に授業に取り組んでいましたか」は3.84、「質問16 教員は双方向的なやり取りをしながら、授業を行っていましたか」は3.84、と高い評価を得た。これは、受講学生が40名程度であったこと、教授内容が具体的な子どもの様態をテーマとするところ、授業者が双方向を心がけたことが反映されたものと思われる。同じような質問である「質問14 学生の質問等に誠実に対応しましたか」についても37.79と高い評価が与えられていることから、授業者の意図したことがそのまま学生の評価となって表れたものと思われる。

(3) 次年度に向けての取り組み

全ての項目において、学科平均を0.1以上高い評価となった。こうした授業実践を継続していくべきであろう。ただし、そのためには適性な受講者の数が条件となる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子どもの理解と援助	53名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

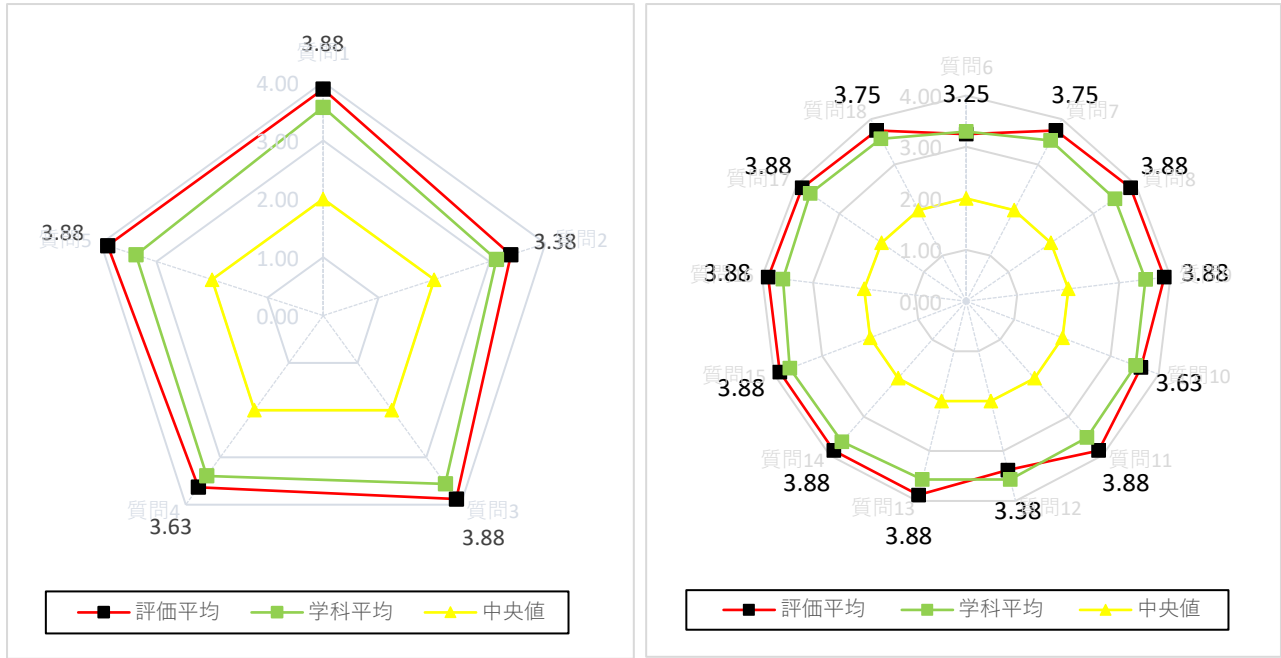
この科目はこれまで担当したことのない科目であった。科目の趣旨に沿って、自本授業ではできるだけ「保育現場」を想定しながらの教授とした。8回の授業で5回目まではオンデマンドでの展開となった。終盤の6回、7回、8回を対面の授業とした。学生が自らを評価した結果、教師の授業を評価した結果、両結果とも、子ども学科の平均値により良好な評価を得ていた。具体的には、教師の授業に対する評価は、総合評価で3.7であり、学科平均の3.58を0.12上回った。良好な評価を得ていると言える。個別にみていく。平均値との差異が最も大きかった事項は「質問17 教員は熱心に授業に取り組んでいましたか」である。授業に対する熱意が伝わったものと思われる。次に差異の大きかった順に「質問10 視聴覚機器や板書の用い方は適切でしたか」「質問11 教科書・配布資料は役に立ちましたか」と続いている。授業展開の中で、教材を工夫して提示したことが評価されたものと思われる。ただし「質問6 シラバス（授業計画）について説明がありましたか」については、0.06と微小だが低い評価であった。

（３）次年度に向けての取り組み

「質問6 シラバス（授業計画）について説明がありましたか」については、0.06と微小だが低い評価であった。この授業においてはこの点についてのみ今後改善すべきことと思われる。基本的に今回の授業実践を継続することにする。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		経済学概論	30名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

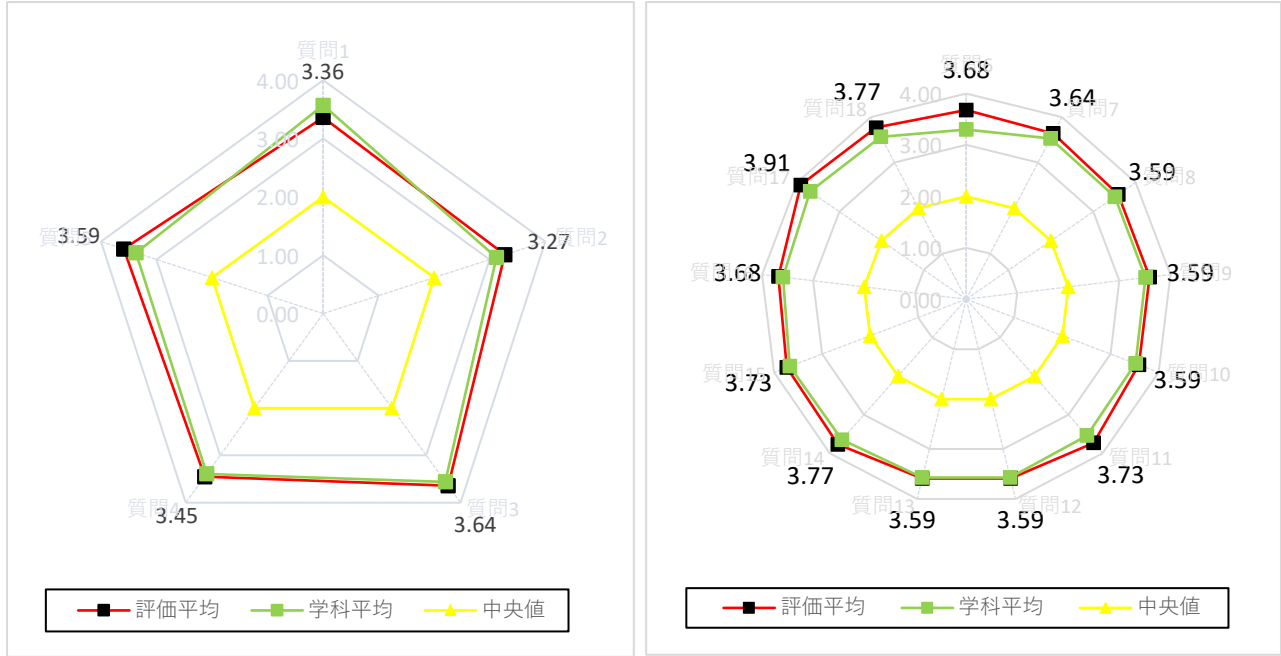
授業評価の結果は、概ね学科平均を上回るものとなった。わかりやすい説明を心がけた結果だと思われる。経済の知識を習得していくことが授業の狙いであったが、授業評価から鑑みてこれは達成できたものと考え
る。□

（３）次年度に向けての取り組み

丁寧な説明を心掛ける。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		人格心理学	38名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

全ての項目で学科平均と同程度、もしくは学科平均を上回る結果となった。

令和2年度は新型コロナウイルス感染防止のために遠隔形式での授業を行ったが、重要な点を穴埋め式にした資料を事前配付し、講義では重要点の解説を行うことで授業に集中できる工夫を行った。そのような配付資料の工夫が質問11の結果に反映されたと考えられる。

オンデマンド式授業形式の際は、詳細な解説コメントを付記し、授業外課題で理解度を測るとともに質問の機会を確保した。Zoomによる同時双方向型授業の際には、チャット機能を用いその場で疑問点を確認できるようにし、更に授業外課題でも理解度把握や質問の機会を設け、翌日に疑問点に答えるなどすることで、疑問を疑問のまま持ち越さないように配慮したことが、質問14の評価につながった。

自由記述では、「丁寧に解説が行われたので満足度の高い授業だった」との評価も得たため、今後も解説を細やかに行い、また質問等への誠実な対応を行うことで学生が理解を深められるような授業を進めていきたい。

（３）次年度に向けての取り組み

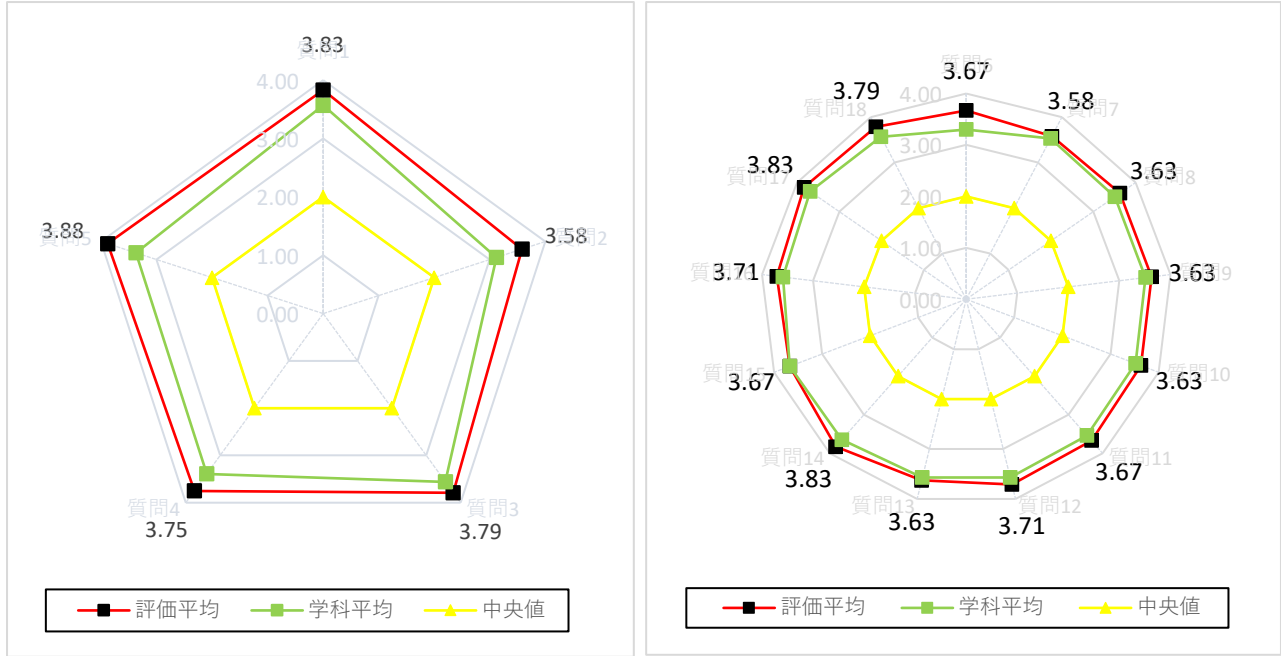
次年度においても、各回の感想・疑問を求める形式を踏襲し、授業内で生じた疑問等に適切に対応したい。資料の工夫や授業外課題等での理解度把握などの取り組みは次年度以降も行い、学生の理解に合わせた授業進行に留意していきたい。

令和2年度は遠隔授業形式で行ったため、学生同士のディスカッションの機会を設けることができなかったが、次年度以降可能であればディスカッションの機会なども提供していきたい。自由記述において、遠隔でなく対面での講義を望む回答もあり、教員側としても脳機能に関する分野などでは、視聴覚教材の利用が制限されたことによる難しさも感じられたため、対面授業を行うことも検討していきたい。

今回、授業時間や遠隔形式での授業形態のために、授業評価の回答を行っていない学生もいたため、次年度は講義内での授業評価回答時間を確保していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習Ⅰ（保育所・施設）	42名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

保育実習Ⅰでは、大学で習得した知識・技能を基礎にして、実際に保育の現場において実践を通してその役割や子どもの発達状況、1日の流れを把握することが目標となっている。また、専門職としての保育士の役割や職務内容について、実際に保育士の仕事内容を経験しながら理解することが必要とされる。

本年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、実習を断られるケースが相次いだ。特に施設実習については何度も計画の立て直しを迫られることになり、実習期間も11月末まで延びることになった。そのような中であつたが、逆に学生としては感謝して実習に臨むという気持ちが強く、授業評価が高いことに繋がっていると考えられる。

この体験的な学びを基盤にして、大学において振り返りを行い、抽出された課題や問題点を解決できるよう各自が努力していくこと、さらには教員がそれをサポートしていくことが必要であるとする。

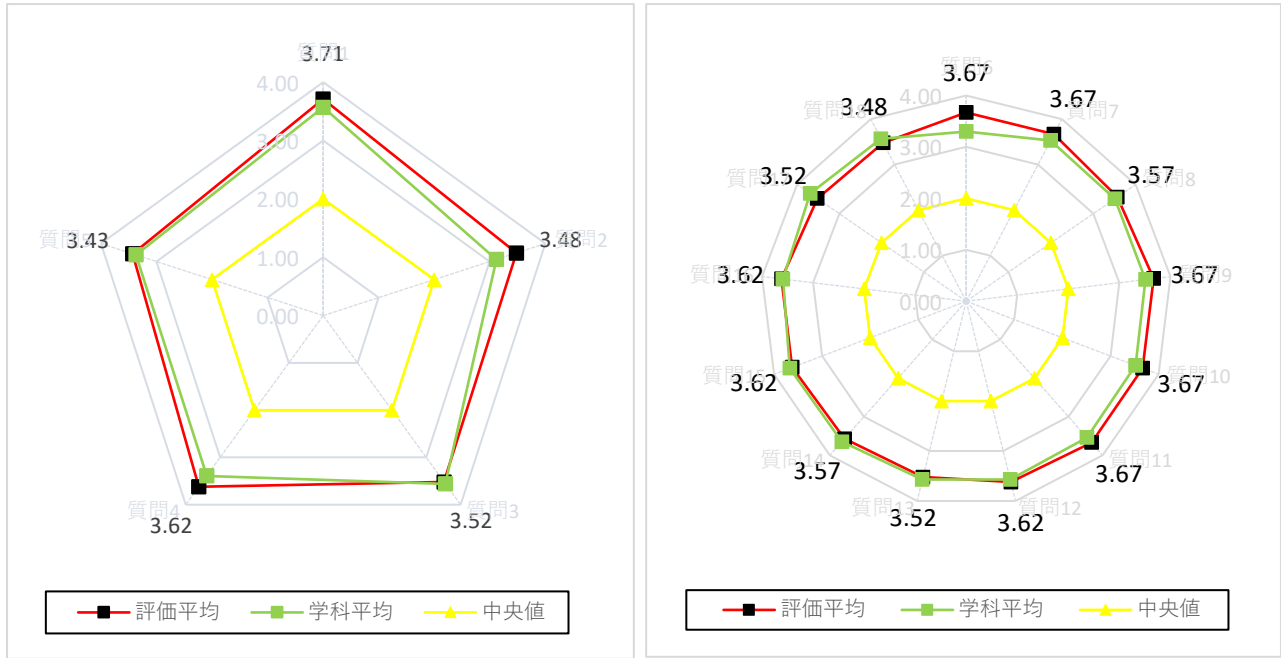
（３）次年度に向けての取り組み

令和3年度についても、新型コロナウイルスの状況に影響を受けることが考えられる。実習担当者として臨機応変に対応できるよう心がけたい。保育実習Ⅰ（保育所・施設）は、学生にとって初めての外部実習である。それぞれの学生の体調管理をはじめ、実習に臨むにあたっての姿勢をしっかりと確立させたくて保育現場に送り出す必要があると考える。また、マナーや明るさ、積極性、闊達さ等の人間性が問われる実習でもあることを再度確認させる必要があろう。保育者に求められるこの部分が重要であることは言うまでもないことであるため、個別指導を行う必要性もある。

これらを踏まえ、令和3年度は実習園ともさらに緊密な連携を行い、進めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		障害児保育	61名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

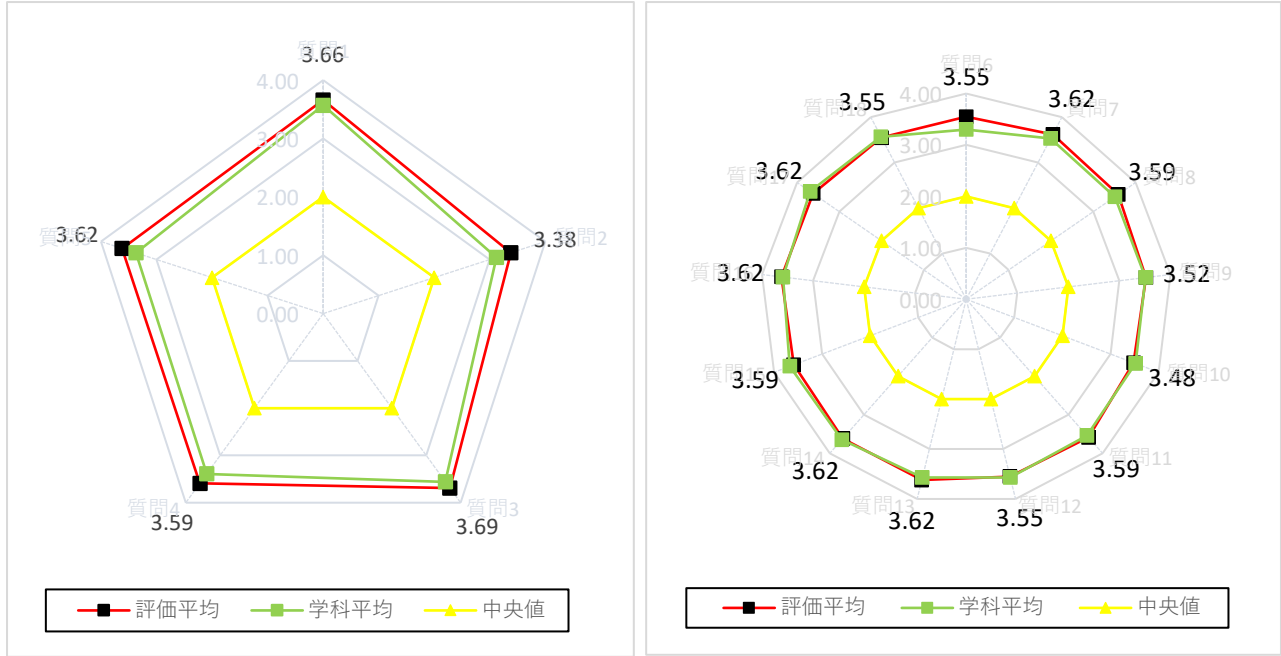
回答数：21/60
 総合評価：3.59
 自由記述：学生の質問に毎回答えていて分かりやすく良かった。事例を取り上げながら授業を進めていたため、とても分かりやすかった。等の意見があった。
 評価は、3.48～3.62と比較的高い評価を得た。

(3) 次年度に向けての取り組み

遠隔授業であっても、学生の質問に真摯に答えることが評価につながったのではないかと考えています。今後も継続していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習Ⅱ（保育所）	49名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

保育実習Ⅱでは、保育実習Ⅰにおける経験と課題を踏まえ、各保育所の特性や一人ひとりの子どもの実態、保護者の状況等を理解し適切な援助を行うことが目標となっている。また、専門職としての保育士の役割や職務を理解し、自らの保育観や倫理観をさらに深め、新しい学習課題を発見する機会としてとらえることが必要とされる。

本年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、実習を断られるケースがあった。他の保育所に改めて実習依頼をするなど、代替案を考え実行することによって全員が実習を終了することができた。学生にとっても不安を感じながらの実習であったが、実習をさせていただけることに感謝の気持ちが大きく、その気持ちをもって行動することができた。この評価については、一人ひとりの学生がそれぞれの実習園でさまざまなことを学び、その過程や結果について自己評価をしたものであるが、質問内容が実習そのものにはあまりそぐわない内容ではあるものの、おおむね一定以上の評価をしている。

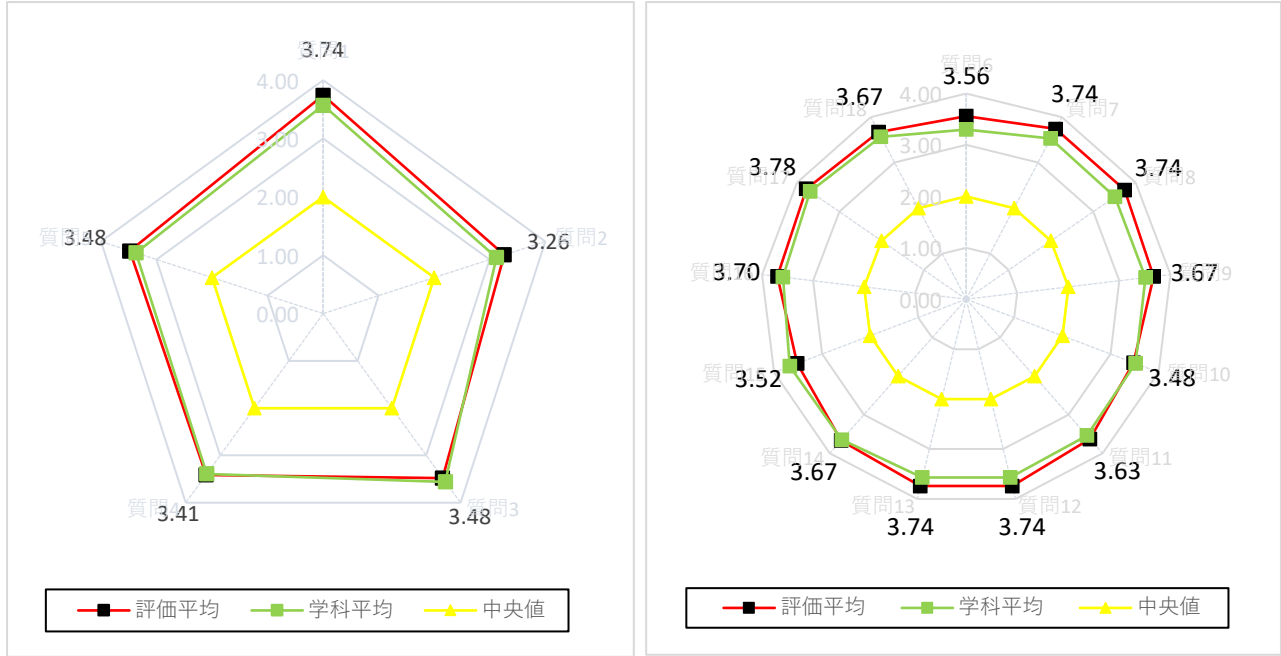
（３）次年度に向けての取り組み

令和3年度も、新型コロナウイルスの状況に影響を受けることが考えられる。実習担当者として臨機応変に対応できるよう心がけたい。保育実習Ⅱは、最終学年である4年生で行う仕上げの実習である。自らの今後の進路を定めるうえでも非常に重要な実習であると言える。特に地域社会における保育の現状、子育て支援、保護者支援に対する理解やその実践についての学習、さらには、さまざまな社会資源との連携の実際などについても学習することが求められており、その内容は多種多様である。

これらを踏まえ、令和3年度は実習園ともさらに連携を密にし、学生一人ひとりの保育観や倫理観を確立して行けるよう、サポートしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		芸術療法	43名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

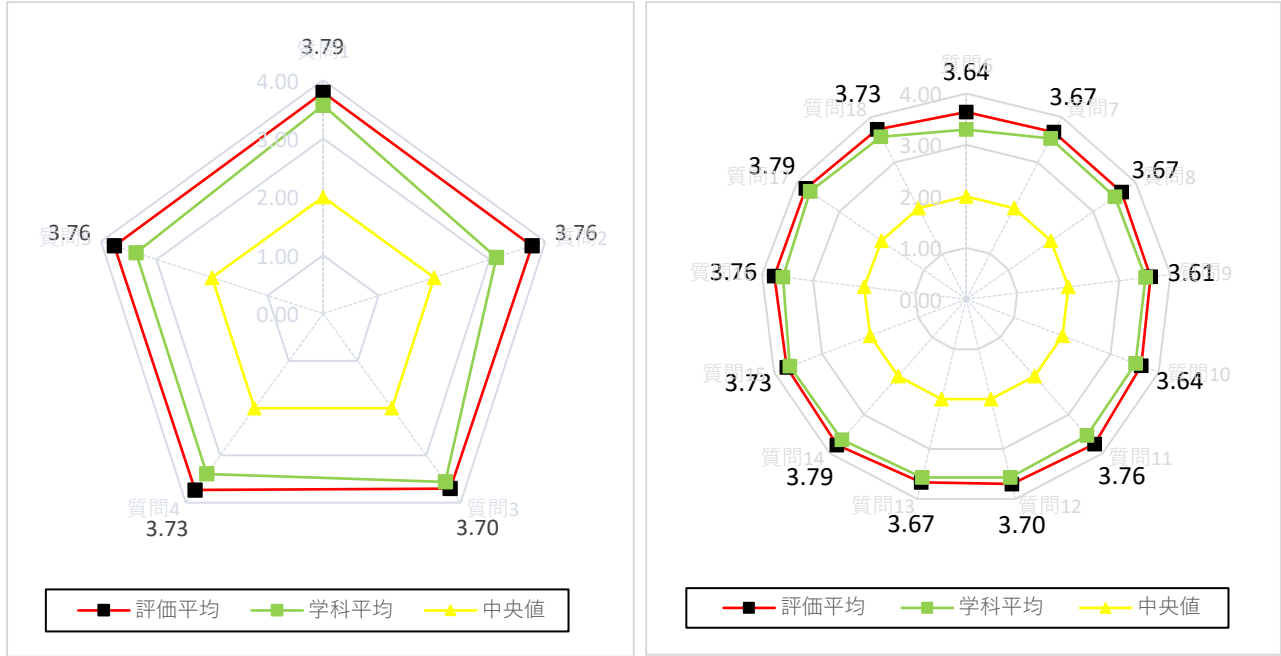
コロナ禍の中、前半はリモートを使い理論的背景について講義を行うレポートを課した。その後、集中講義の形で演習を行った。TAを利用しながら授業を展開させ全員に芸術療法の体験ができるようにグループを分け実践した。学生の評価は高く、臨床心理学に関心を示すようになり、体験を通して自己理解や他者理解が深まったと感想をもらった。

（３）次年度に向けての取り組み

芸術療法は、理論的背景を理解したうえで、実際に経験することが自己理解・他者理解につながるといわれている。コロナ禍の中で授業の展開が不透明であるが、できるだけ対面授業ができるよう、時間等の配慮をしながら実践方法も工夫しながら授業をすすめていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習指導Ⅰ	82名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

本年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、対面授業が可能になったのが6月中旬であった。実習そのものも変更せざるを得ない状況が多く発生し、それに伴って実習指導については臨機応変な対応を迫られた。初めての外部実習である施設・保育所実習に向けて、実習の意義・目的・心構えを学習するとともに、対象となる子どもや利用者の年齢や状況に応じた保育・支援、また指導計画・支援計画立案等さまざまな内容を習得できる指導を行うよう心がけた。特に学生にとっては、経験のない未満児や障がいをもつ利用者についての理解が非常に難しいため、視聴覚教材等を適切に使用したり、保育現場の保育者や指導員を招へいし、具体的な指導を盛り込むなどの工夫をしている。

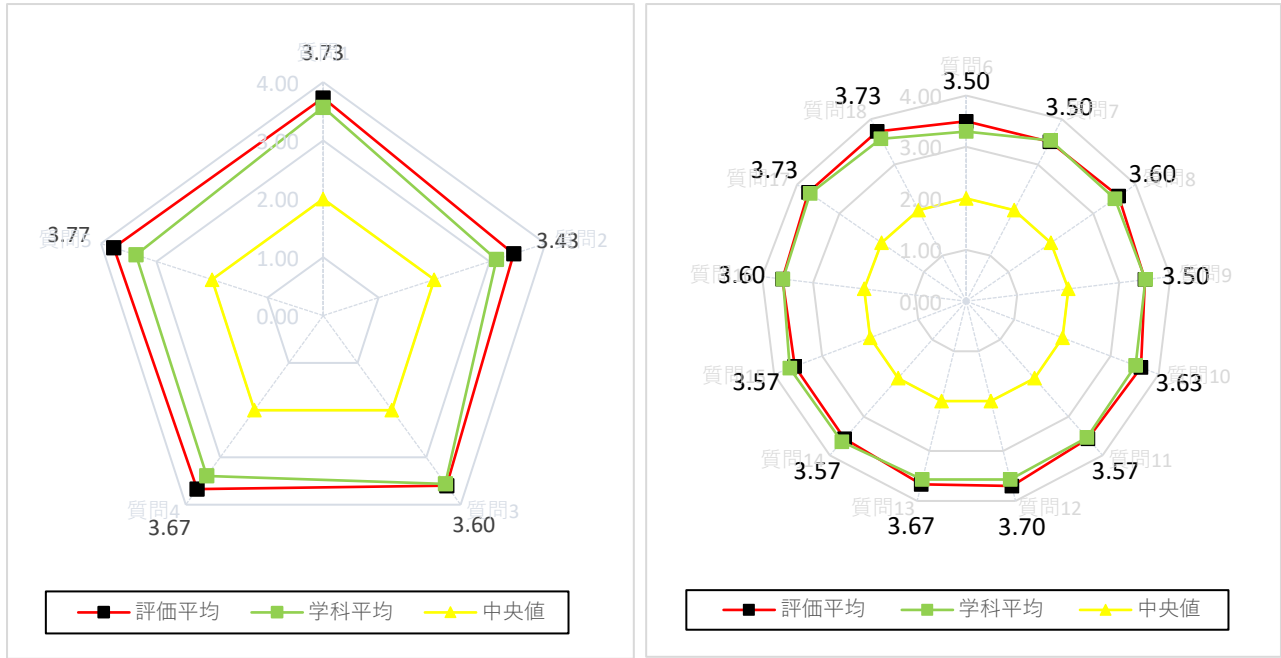
授業評価については一定以上の高い評価を得ている。学生も不安を抱えながらではあったが、より以上に真剣に取り組むことが高い授業評価につながっていると考ええる。

（３）次年度に向けての取り組み

令和3年度も、新型コロナウイルスの状況に影響を受けることが考えられる。実習担当者として臨機応変に対応できるよう心がけたい。学生が日頃あまり経験のない未満児や障がいをもつ利用者についてしっかりと理解した上で実習に臨めるような工夫が必要である。また、記録や指導計画・支援計画等の書き物については、書くことが苦手な学生も多くいるため、「書く」というたくさんの経験ができるように視聴覚教材等の適切な使用も含め、工夫して授業を進めていきたいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習指導Ⅱ	49名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

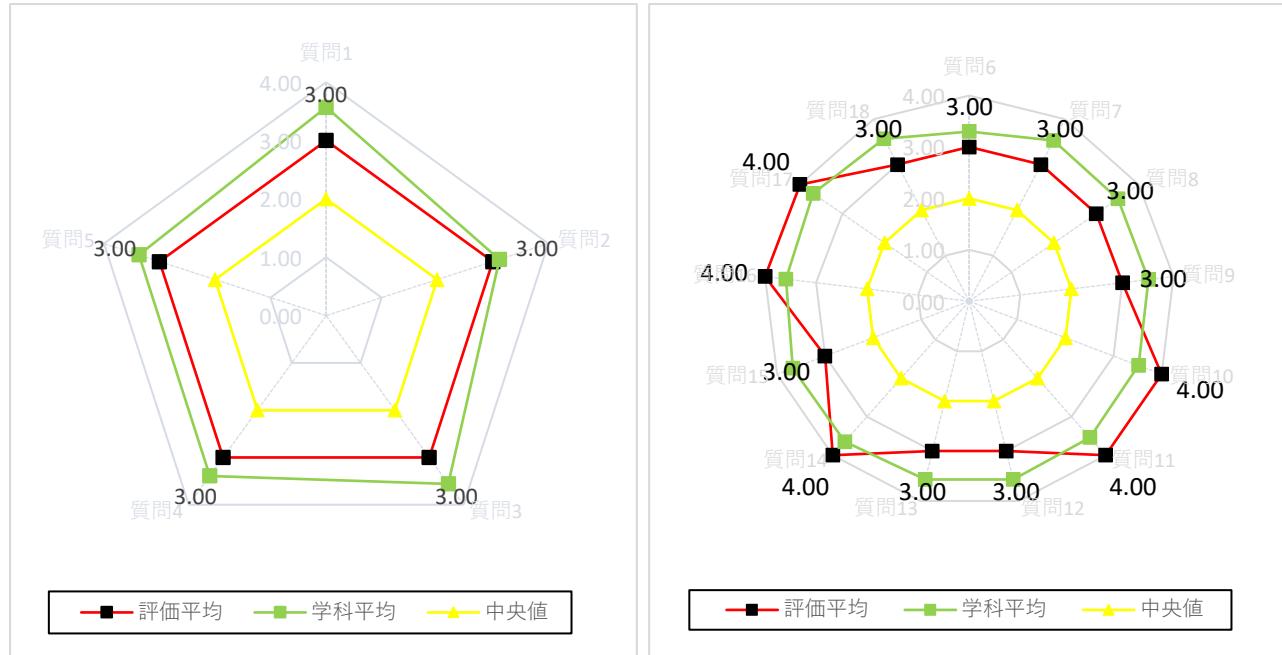
保育実習Ⅱは、保育実習Ⅰにおける経験と課題を踏まえ、各保育所の特性や一人一人の子どもの実態、家庭の状況などを理解し適切な援助を行うことが目標となっている。コロナ禍で先の見通しが持てないまま、半分の授業はオンラインで課題提出となった。子どもの発達、実習園の保育方針や特徴、指導案作成、教材研究など個人でできることに取り組んだ。これまでは模擬保育をし、保育技術や保育の展開を学べたが、それが出来ず、対面授業が4回出来た中で、口頭で確認することとなった。グラフでは、授業の目標が明確に打ちだせていなかったのは、そこに理由があると考えられる。コロナ禍で有難いからこそ、学生のどんな授業をしたいのか意識をもつことと教員側の魅力ある取り組みが課題であることが突きつけられている。Zoomの授業が分かりやすくて良かったということだったので、工夫して取り組めたという数値がやや高かったと思われる。進む早さや公平性は気をつけていたのでやや高かった。今年度も真剣に取り組む学生が多く、助けられた。今後も専門職としての保育士の役割や職務を理解し、自らの保育観・倫理観を深め、新しい学習課題を発見する機会として捉えること

(3) 次年度に向けての取り組み

保育実習Ⅱは、保育の実地の学びの集大成になる。自らの今後の進路を決める上でも非常に重要な実習であると言える。特に地域社会における保育の現状、子育て支援、保護者支援に対する理解や実践についても求められており、その内容は多種多様である。今後も実習の自己評価を行い、実習を振り返ると現場でどのような保育を目指したいかを明確にしている学生も多く見られた。これらを踏まえ、コロナ禍でありながらも臨機応変に授業を組み立て、実習園とも連携を密にし、各自の保育観や倫理観を確立していけるよう支援していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習Ⅲ（施設）	6名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

保育実習Ⅲでは、保育実習Ⅰ（施設）における経験と自らの課題を踏まえ、各施設の特性や一人ひとりの利用者の実態、保護者の状況、各社会資源との連携等について理解し、利用者に対する適切な支援を行うことが目標になっている。また、専門職としての保育士の役割や職務を理解し、自らの保育観・倫理観をさらに深め、新しい学習課題を発見する機会としてとらえることが必要とされる。本年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため時期の変更や代替施設での実習への変更など臨機応変な対応が求められた。そのような中であったが、学生は感謝して実習に臨むという気持ちが強く、授業評価が高いことにつながっていると考えられる。

仕上げの実習として、大学において振り返りを行い、課題や問題点を解決し、社会に出ていけるよう各自が努力していくこと、さらには教員としてそれをサポートしていくことが必要であると考えられる。

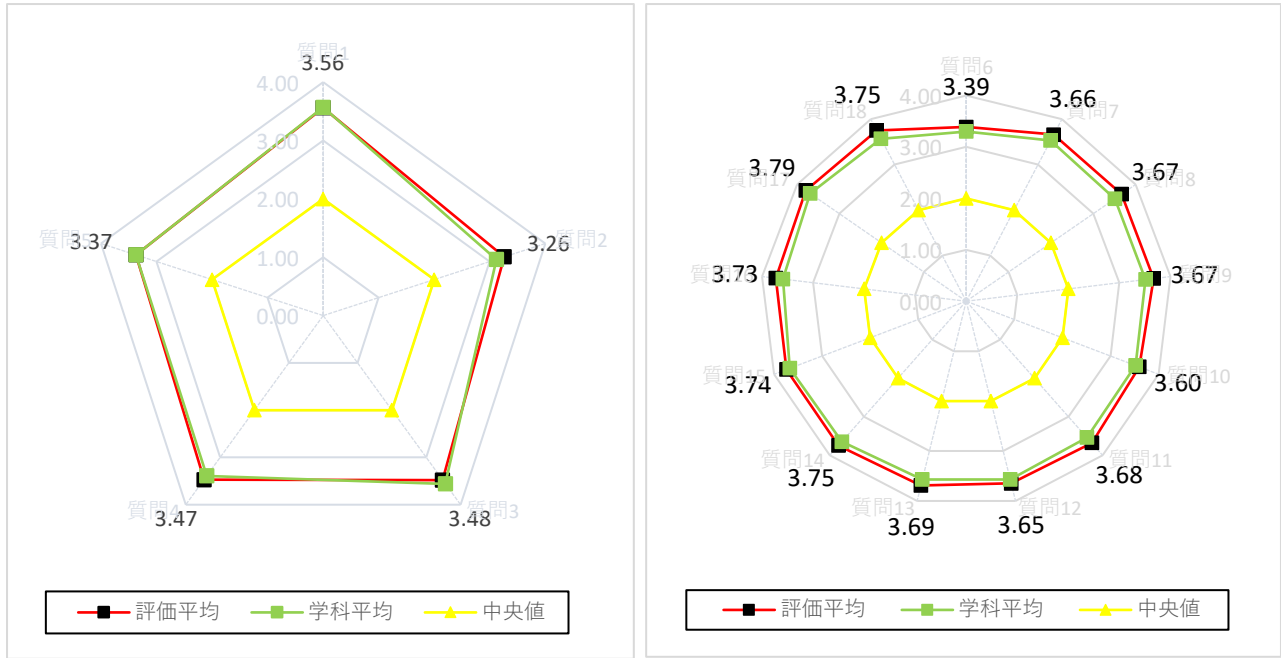
（３）次年度に向けての取り組み

令和3年度も、新型コロナウイルスの状況に影響を受けることが考えられる。実習担当者として臨機応変に対応できるよう心がけたい。保育実習Ⅲは、最終学年である4年生で行う仕上げの実習である。自らの今後の進路を定める上でも非常に重要な実習であると言える。特に支援を必要とする利用者に対する個別支援や地域社会における支援の現状、保護者支援に対する理解や実践についても求められており、その内容は多種多様である。

これらを踏まえ、令和3年度もなお一層実習施設とも連携を密にし、学生一人ひとりの保育観や倫理観を確立していけるようサポートしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		国語	117名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

各項目で平均を上回り、一定の評価が得られていると思う。「国語に対する意識が変わって、苦手意識がなくなった」「毎回毎回、学びの楽しさを実感できた」「分かりやすい授業であった」「小学校の教師になりたいと思った」などの声が多く聞かれたことは、授業者として嬉しい限りである。

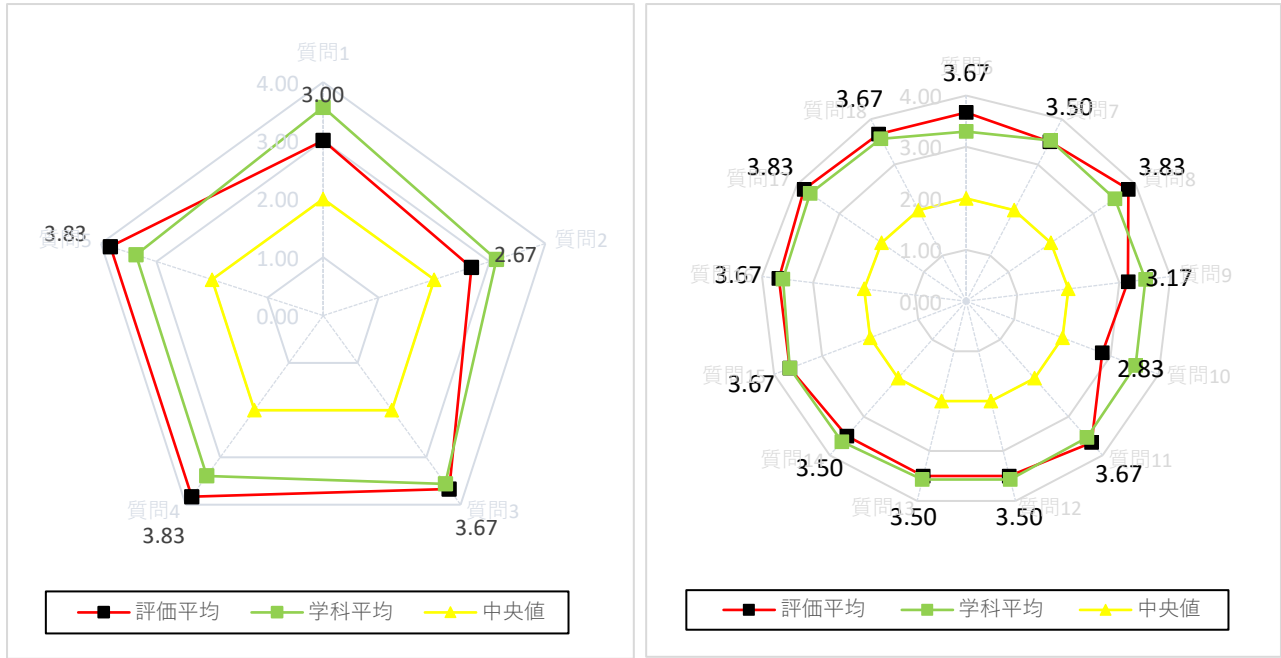
（３）次年度に向けての取り組み

次年度は本学に来て５年目を迎える。改めて、「国語力とは何か」「とりわけ、時代が求めている読解力とは何か」「表現力とは何か」などについて、自身の研究（学修）を深めながら、学生一人一人の国語力の向上に努めていきたい。

国語力は人間力である。言葉を大事にする、国語を尊重する人づくりが社会の発展につながる。保育士や教員養成に携わっている学科に身を置く者として、学生が言葉に関心を持ち、国語を好きになっていく日々の授業実践に努めていきたい。取り組みの重点は、読書指導、新聞を活用した読解力及び表現力の指導である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		カウンセリング実践演習Ⅲ	23名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

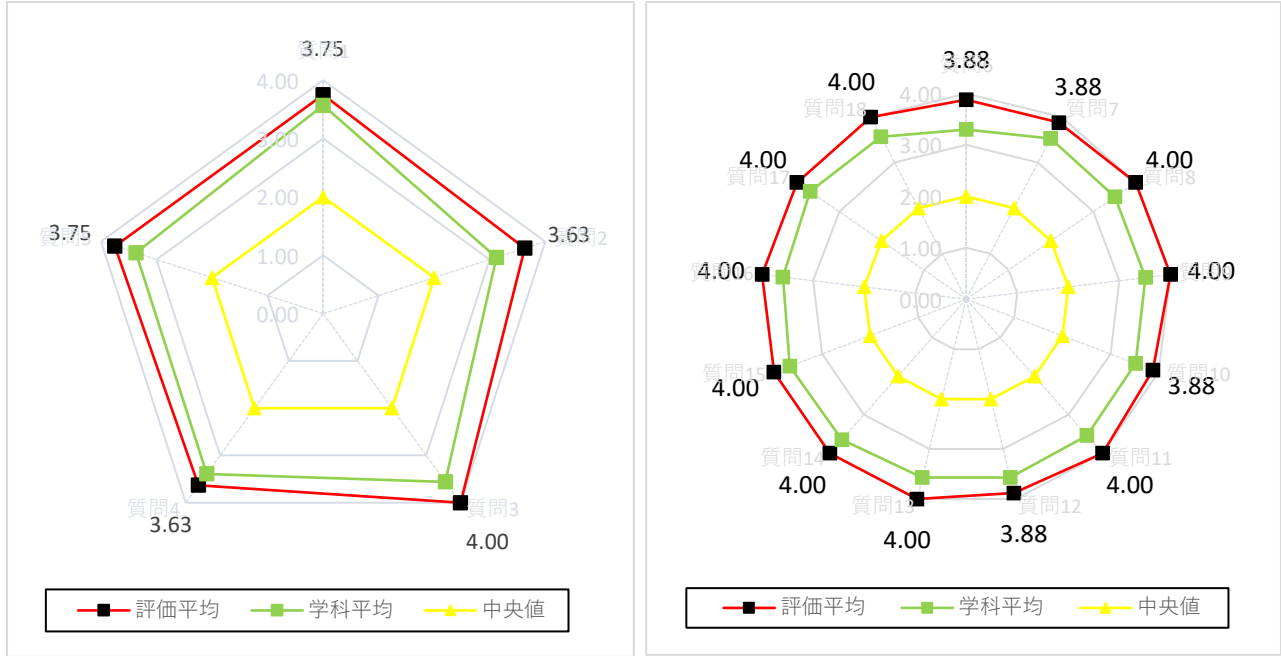
この科目は、小城市内の小学校や福祉施設等で実践活動を行う科目である。本年度はコロナ禍の中で、福祉施設での自tう戦は中止となり小学校も6月からの開始であった。授業を行う機会がなく、現場での実践を多く取り入れている。最後に報告会としてPWを使い各グループが小学校での活動を報告してもらっている。学生自身週に1回3時間の実践活動で大変ではあったが、学生同士が協力し合い最後まで活動を行い終えることができている。学生自身が成長したと報告会でも述べている。

（３）次年度に向けての取り組み

次年度はカウンセリング実践演習がカリキュラムの変更でなくなるが、小城市内の小学校での実践活動は「あすなろう3」で地域支援の一環として行われる。「子ども支援サポーター」として小学校に入る予定である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども 心理カウンセリング		子どものストレスマネジメント論	28名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

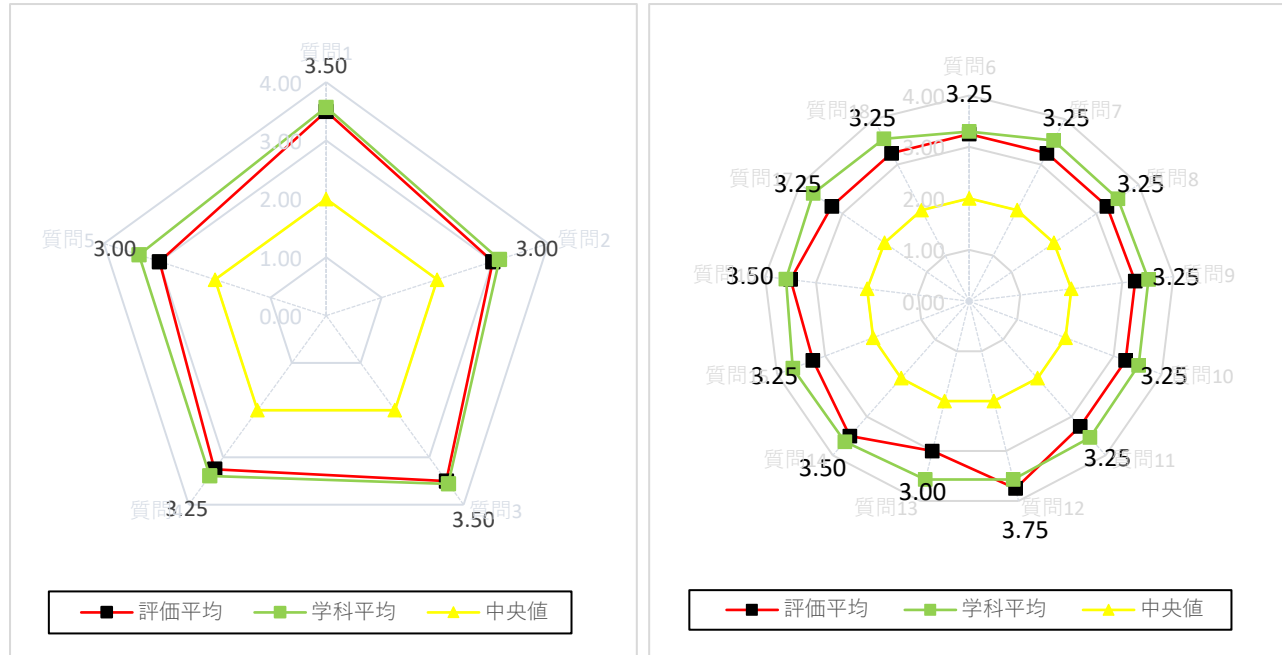
おおむね、学科平均を上回る評価を得ることが出来ていた。
中でも質問4が低いものであり、この点に関しては、如何にして学生の学習動機を高め、本講義内容への興味・関心を引き付けていくのか、その工夫や配慮が求められると考える。受け身ではなく、自ら問題意識や探求心を持って、学び進めていくための授業展開の工夫や教材研究をおこなっていくことが、今後の課題であるとする。

（３）次年度に向けての取り組み

いずれの項目においても、高い評価を得ることができていたと考える。
本科目は遠隔スタイルでの講義であった。如何にして受講生らの学習意欲を維持していくかが非常に考えさせられたが、毎回のレポートに対するコメントやフィードバックを1人1人より丁寧におこなうことをより意識し取り組んでいった。
この点においては、今回のオンライン講義のみならず対面講義においても同様のことが言えるとする。
今回、授業展開していく上で工夫したり意識的に取り入れたことは、今後の講義にも是非生かしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習指導Ⅲ	12名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

保育実習指導Ⅲについては、対象となる学生が少ないため、ゼミ形式で授業を進めている。

本年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から対面授業ができるようになったのが6月中旬であった。実習先の変更や時期の変更もあり、学生自身にも臨機応変な対応が求められた。実習先施設の種別としては、養護系・障がい系、利用者についても児童・者であるなどさまざまである。その前提のもとでの指導であるため、指導方法に配慮を要する。状況に応じて全体的に進めたり、実習直前期は可能な限り個別に対応するなど、指導の方法を工夫して臨んだ。

授業評価については、特に質問1から5の自らの学びの評価が低いようである。もう少し、学びの目標を明確に設定し取り組むことができるようサポートする必要があると考える。

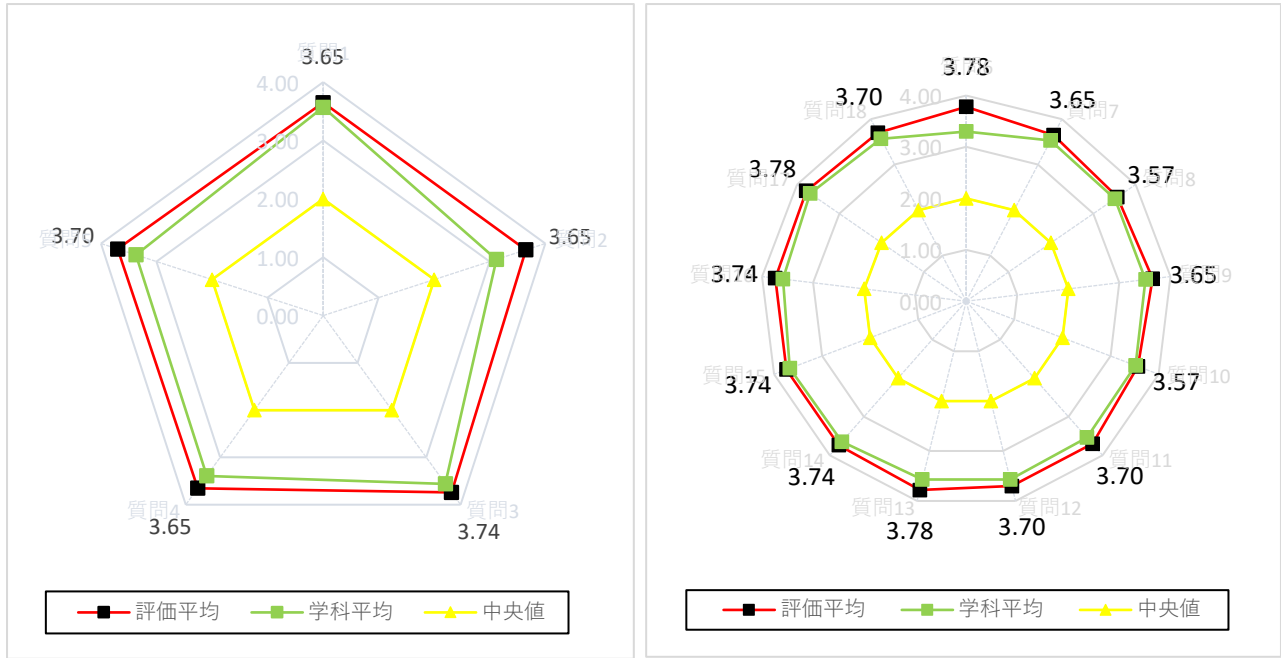
(3) 次年度に向けての取り組み

令和3年度も新型コロナウイルスの状況に影響を受けることが考えられる。対象学生は2名であり、どちらも児童養護施設における実習を予定している。基本的にはゼミ形式で進めるとともに、オンライン授業になっても一人ひとりの学生の学びを受講者で共有できるようアクティブラーニングの形で進めていきたいと考える。

そのためには、学生それぞれが実習に臨むうえで事前に調べたことや、実習後に学んだことを報告する機会を設けて、学生間で双方向的に学習できるような環境を整える必要がある。また、教員もその環境の中に存在することによって適切な指導やサポートができるよう努力したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼稚園教育実習Ⅱ	59名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

幼稚園教育実習Ⅱでは、幼稚園教育実習Ⅰにおける経験と自らの課題を踏まえ、各幼稚園の特性や一人ひとりの子どもの実態、保護者の状況等を理解し適切な援助を行うことが目標となっている。また、専門職としての幼稚園教諭の役割や職務内容を理解し、自らの保育観や倫理観をさらに深め、新しい学習課題を発見する機会としてとらえることが必要とされる。

この授業評価については、一人ひとりの学生がそれぞれの実習園でさまざまなことを学び、その過程や結果について自己評価したものであるが、質問内容が実習そのものにはあまりそぐわない内容となっている。しかしながら、一定以上の高い評価をしており、この経験が学生にすばらしい影響を与えていると考えられる。

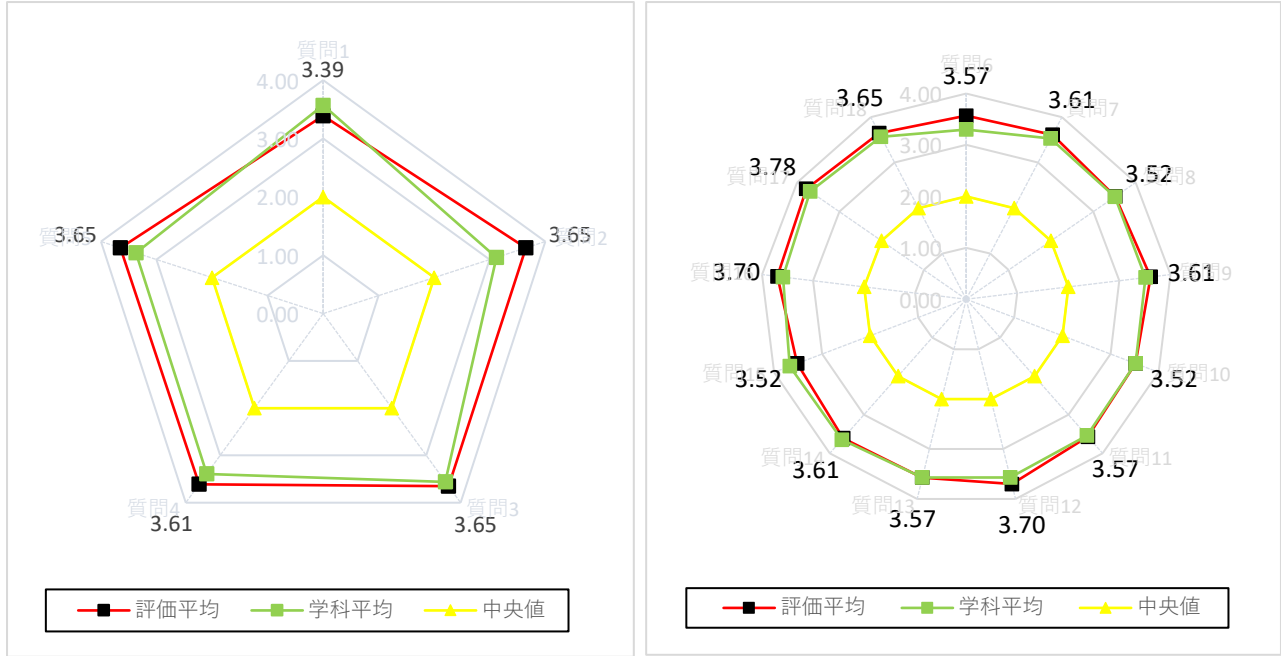
（３）次年度に向けての取り組み

幼稚園教育実習Ⅱは、3年生で行われる幼稚園教育実習の仕上げの実習である。自らの今後の進路を定めるうえでも非常に重要な実習であると言える。特に地域社会における保育の現状、子育て支援、保護者支援に対する理解や実践についても求められており、その内容は多種多様である。

これらを踏まえ、令和3年度は実習園ともなお一層連携を密にし、学生一人ひとりの保育観や倫理観を確立していけるよう努力しサポートしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼稚園教育実習指導	60名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

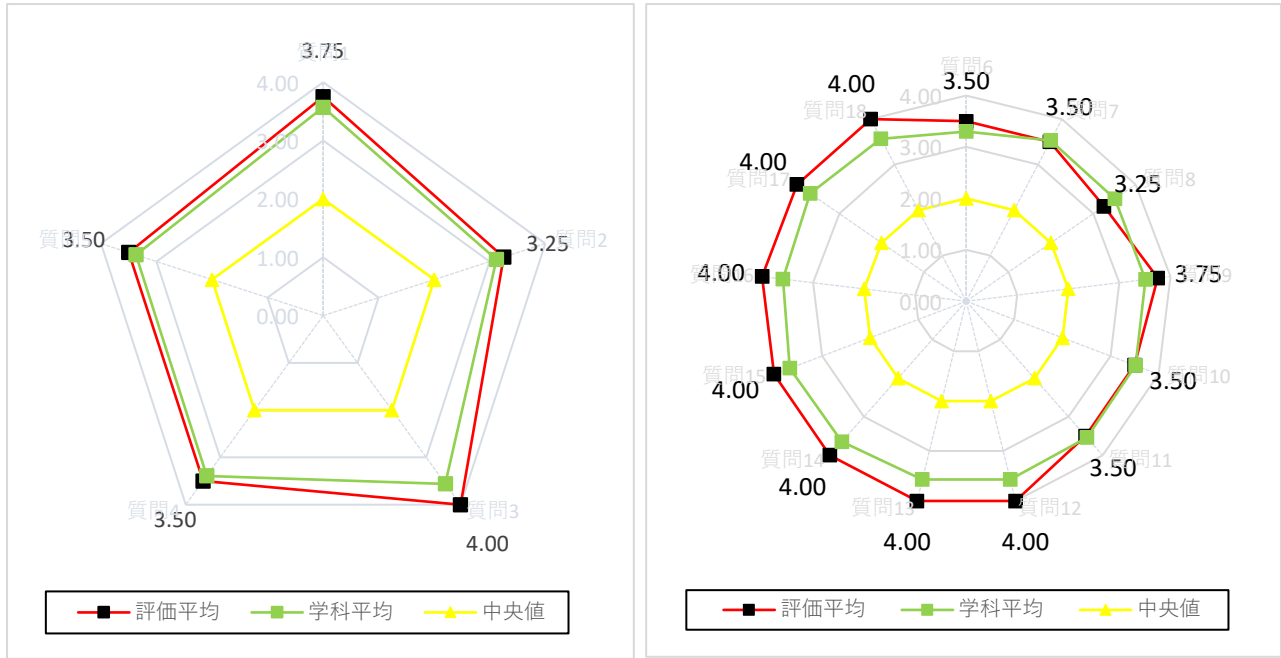
幼稚園実習指導については、幼稚園教育実習Ⅰを踏まえ、グループで実習で学んだことのテーマを絞り、図解作成に取り組んだ。そこから明確になった課題と目標を持って取り組んでいた。オンライン授業の課題とZoomで、幼稚園教育実習Ⅱの実習事前・事後の活動は、各自が自覚を持って実習に向けて準備をしていた。積極的に参加した結果が数値に表れているのかと推測している。授業評価では公平性のところが少し数値が低く、コロナの影響で対応が難しかった面もあると考える。しかし、幼稚園教育実習Ⅱの後の個人テーマによる図解作成は意義深いものでった。Zoomにて、一人7分の発表と質疑応答で、コロナ禍での衛生管理・食育・喧嘩の対応・小学校接続に向けての課題や援助など、具体的で保育の奥深さや喜びを感じるものであった。個人で全て評価が高く授業内容に興味関心が持てたのではないか。学内の実習体験の基盤をもとに学外実習へ各々がそれぞれに取り組んだが、日誌の書き方のスキルアップ、指導案を立てるのは個人の努力によるものだった。。授業評価では、分かりやすさ・工夫・視聴覚の活用・誠実さ・双方向なやり取りで高評価であったので、今後も大事に進め

（３）次年度に向けての取り組み

個人がそれぞれの実習園で学んだ事を、テーマを設定し、さらに深めて図解作成を行っている取り組みは有効であった。図解作成に苦戦しながらも懸命に取り組む姿が見られ、個人の発表も充実し全体の学びに繋がった。学び取ったものを共有し、今後の保育の見方や実践に刺激になったものと考えている。今後とも礼儀やマナーを身につけ、謙虚な姿勢で実習に臨みつつ、日誌や指導案の基本的なことを復習していきたい。さらには、4年間で専門を学ぶ大学生ならではのスタイルで、子どもの成長発達を願い、保護者や地域に目を向けることが出来、向上心が持てるように取り組んで行きたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナール I	8名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

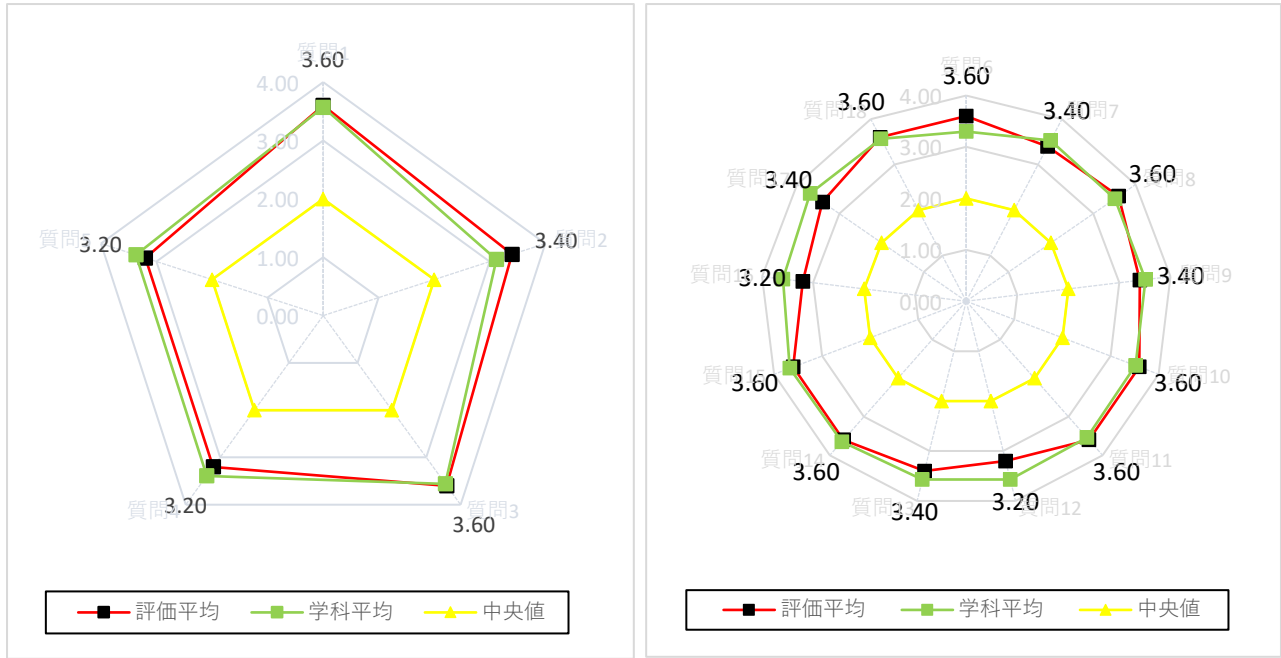
全項目において、学科平均より高い評価を得た。

（３）次年度に向けての取り組み

次年度も引き続き、今年度と同様の授業を行う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナールⅠ	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

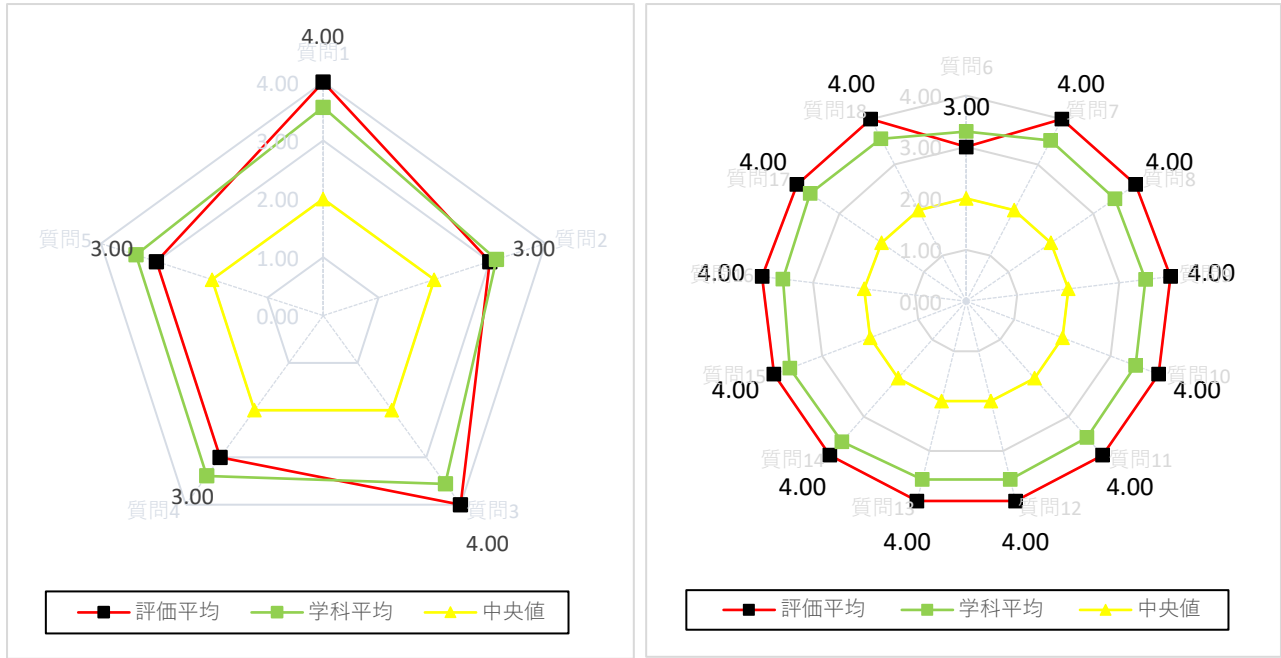
双方向的なやりとりという点において、やや満足度が低いものとなった。遠隔授業であったこともあるが、課題の点検・フィードバックが不十分と受け取られたかもしれない。

（３）次年度に向けての取り組み

提出された課題に対し、より丁寧に確認・フィードバックを行うようにする。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナールⅠ	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

本科目においては、出席率も高く受講生自身も居眠り・私語等をせずに受講することが出来ていた。ただ、評価内容からも分かるように、自ら学ぶ姿勢や受講生自身の自己評価が比較的低い結果となっていた。

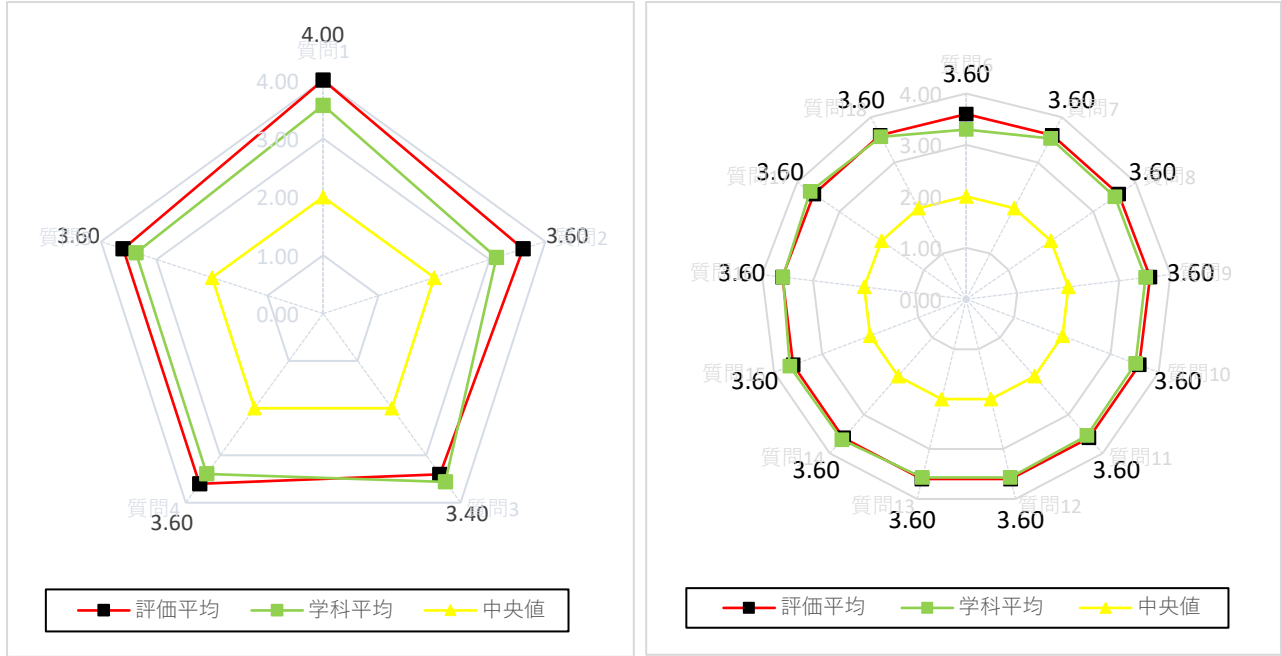
「本科目を何のために学ぶのか」「学んだことが今後どのように生かされるのか」といった、本科目の位置づけや受講の意義を、学生にもより分かりやすい形で繰り返し伝え続けていくことが必要であるとする。この点に関しては、次回本科目を担当した際にも自身の課題として取り入れていきたい。

（３）次年度に向けての取り組み

おおむね、高い評価を得ることが出来ていたが、質問 6 に関しては相対的に低い評価となっていた。この点に関しては、本科目のオリエンテーション時のみならず、各講義の冒頭においてシラバスと照らし合わせながら、「何を学び」「何をねらいとしているのか」より学生にイメージしやすい形で分かりやすく伝えていく工夫・配慮が必要であるとする。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナールⅠ	8名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

本講義はゼミ指導・個人指導と学科全体での授業形式とが混在しており、ゼミ指導においても各教員の指導体制が揃うよう、事前に調整を行って授業が行われた。評価として、学科平均同程度、一部項目では学科平均を上回った。

ゼミ指導で使用した教材はアカデミック・スキルの向上を目指すものであったが、卒業論文とのつながりなどモチベーションを上げる言葉かけなどを意識した。学生自身が自らの興味関心がある文献の収集や分析等を行う課題については、随時個別的な指導を行いながら進めたことで、学生の主体的な取り組みや総合自己評価が上がったものと思われる。

質問6～9の結果は学科平均を上回っていた。特に前期はCOVID-19の関係で遠隔授業が主となったため、資料については文字数の調整を行い視覚的にわかりやすい資料を利用するとともに、授業時や授業前に資料を配布することで学生が授業時間以外にも復習等ができるようにしたことが反映していると考えられる。授業評価回答数は、最終回で十分な評価時間の確保ができず、一部学生の評価が得られなかったため、次年度以降は評価時間を十分確保することを意識したい。

（３）次年度に向けての取り組み

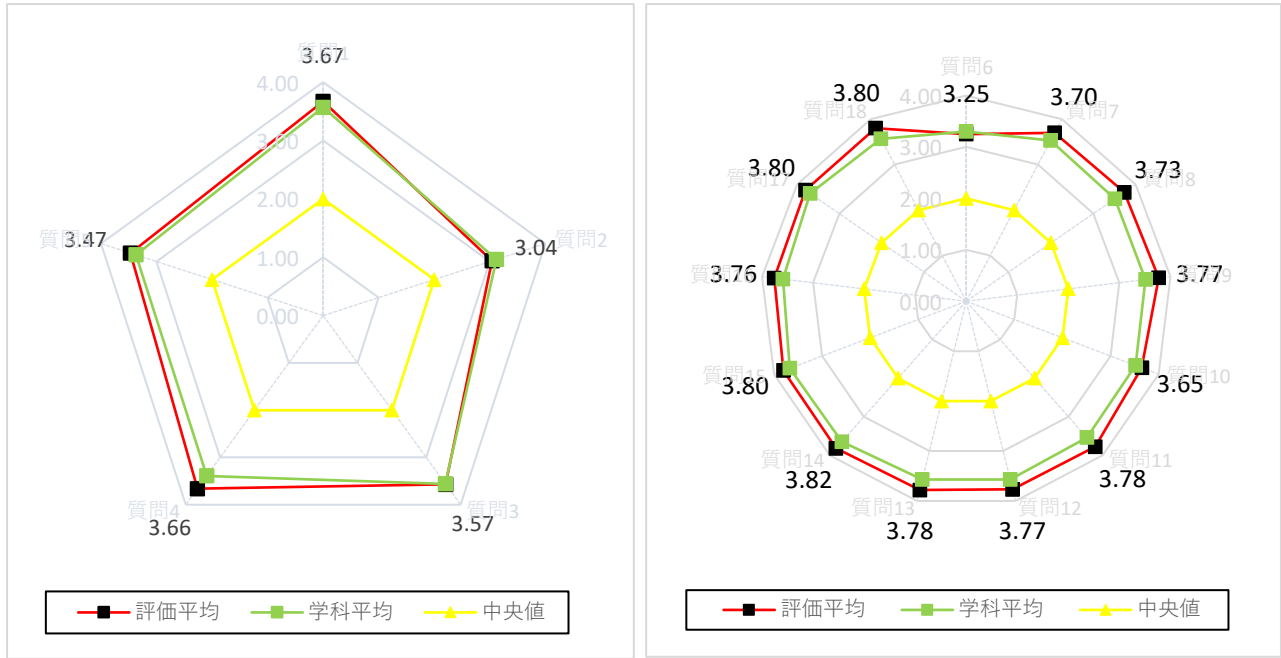
今年度同様授業担当の複数教員で授業内容や教授方法などについて十分話し合いコンセンサスを得る時間をとることで、より分かりやすい授業構成を目指したい。また、上記にも述べたように、個別ゼミ指導で使用した教材が卒業論文に向けてどのように関連するかなどの見通しを詳細に伝えることで、課題に取り組むモチベーションを上げるよう工夫したい。

対面授業・遠隔授業どちらにおいても、資料提示の工夫や全体指導・個別指導、授業外課題などをバランスよく行うことで学生の学修の向上につなげたいと考える。

授業評価回答数は、最終回で十分な評価時間の確保ができず、一部学生の評価が得られなかったため、次年度以降は評価時間を十分確保することを意識したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		音楽	107名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

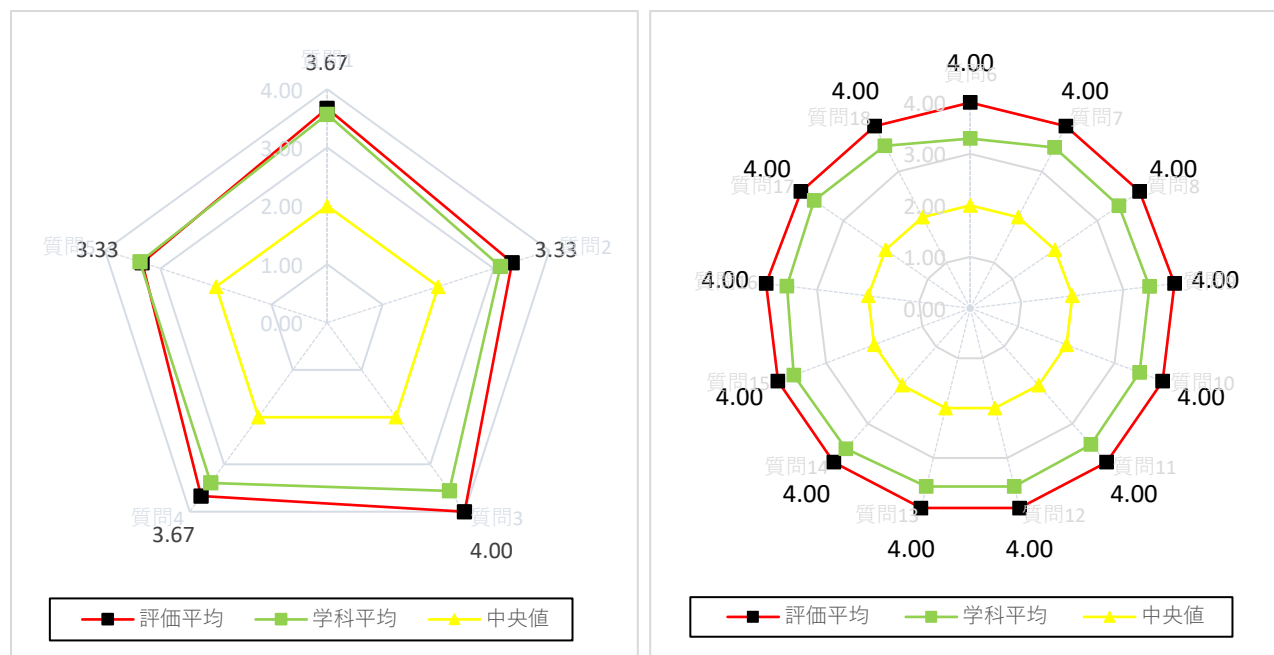
「音楽」は子ども学科1年次生を対象に開講しており、楽典に関する内容を中心に扱っている。例年の授業では、音楽室内の楽器を用いた演習を絡めながら進めているが、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止への対応の為、6月中旬の対面授業開始前までは遠隔授業を行った。それに伴い、毎時に取り上げる授業内容の順番を調整し、理論的事項を先行して取り上げていった。質問2の「シラバスを活用に関する項目」における学生の自己評価は、例年よりも低い結果となった。しかし、質問14「質問等への誠実な対応」、質問16「双方向的なやり取り」、質問17「教員の熱心さ」、質問18の「総合評価」での教員への評価は、高評価であった。これらの評価は、毎回、授業内容に関する個々の学生からの質問に対し、速やかに返信し続けていったことによるものであると思う。今後も決め細やかな対応を行っていきたい。

（３）次年度に向けての取り組み

今年度の後期は対面で授業を行うことができていたものの、未だ新型コロナウイルス感染症は収束してはいないため、次年度に向けては、遠隔授業も視野に入れた準備を進めておく必要があると思っている。遠隔であろうと対面であろうと、授業形態にかかわらず十分な教育成果が得られるよう、予め準備を整えておく必要があると考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナール I	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

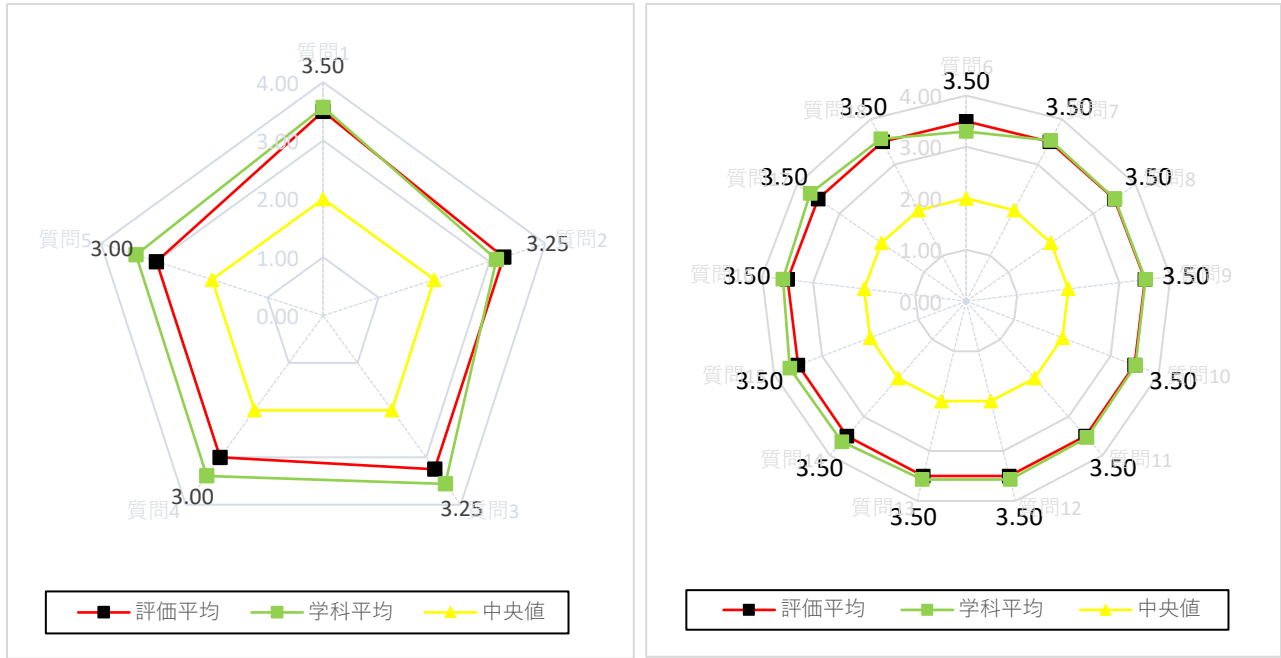
概ね、授業評価は高いものと判断できるため、現状を維持できるようにしたい。また、オムニバスでの実施している講義内容が一部あるため、不明確な部分が多いこともあると思われる。次に、質問5、あなた自身の自己評価に関して、学生の評価がやや落ちている。この箇所は、学生がどれだけ主体的に授業に関わったか、また該当科目に関して学修していることを実感しているか否かという点と結びついていると考えられる。そのため、学生側に立って目線での達成感などを得られる学修内容にすべきかもしれない。しかしながら、一部オムニバスを採用している講義科目でもあるため、他の教員との意見のすり合わせも、今後は必要になると思われる。最後に、ゼミナールでの形式であるため、否定的な評価はしにくい点も考慮すべきであろう。そのためには、この結果を鵜呑みにせずに、他のアンケートや資料などを活用しながら、授業を改善していくことも必要であると思われる。

(3) 次年度に向けての取り組み

まず、現状を維持しながら、さらに高い評価を得られるように工夫していかなければならない。それには、まず学生が主体的に関与できるように、ワークやディスカッションを取り入れることも検討しなければいけない。本年度は新型コロナウイルスの影響により、対面授業ができず、グループワークやディスカッションなどが十分に行えなかった。一部、Zoomでのブレイクアウトルームなどを用いたが、学生同士が慣れていないせいもあり、十二分に活用するまでには至らなかった。今後は、こうした反省を踏まえて、Zoomでの講義を想定した講義計画が必要になる。そのため、シラバスにも明記したり、講義時にも丁寧にアナウンスするなどして、ワークなど主体的に取り組む学修を増やしていきたい。また、これに関しては他の教員とのすり合わせ、調整も必要になるため、学期前に提案するなどして、オムニバス形式の箇所に関して、刷新していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナールⅡ	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

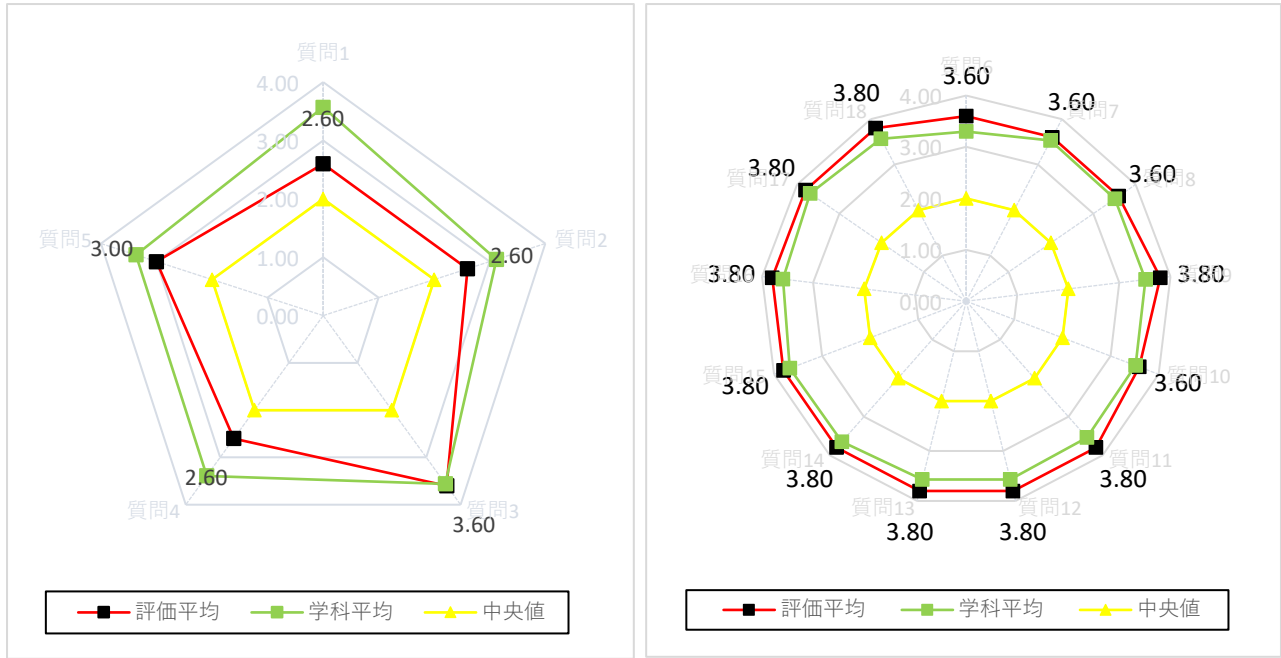
教材や教員に対する評価に悪いものはなかったが、受講生の中には欠席や遅刻をしがちな者もみられ、自身が自己満足感をもってこの授業に取り組めなかったようである。

（３）次年度に向けての取り組み

欠席や遅刻に対して教員ができることは少ないと考えられるが、最終レポートの遂行計画を自分で立てさせるなどにより主体性を持たせることを試みようと思う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナールⅡ	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

本講義はゼミ指導・個人指導と学科全体での授業形式とが混在しており、ゼミ指導においても各教員の指導体制が揃うよう、事前に調整を行って授業が行われた。教員に対する評価として、全ての項目で学科平均を上回った。後期は、学生が自らの興味があるテーマについてのレポートのまとめや発表を行うための指導に十分な時間をとり、各学生に対面・遠隔双方で個別的な指導を丁寧に行ったことが評価につながったと考えられる。

資料については文字数の調整を行い視覚的にわかりやすい資料を利用するとともに、授業時や授業前に資料を配布することで学生が授業時間以外にも復習等ができるようにしたことが評価に反映されていると考えられる。

授業評価回答数は、最終回で評価を行うよう伝達したが、遠隔授業形式のため学生の回答状況が即時に確認できず、一部学生の評価が得られなかったため、次年度以降は評価時間を十分確保することを意識したい。

(3) 次年度に向けての取り組み

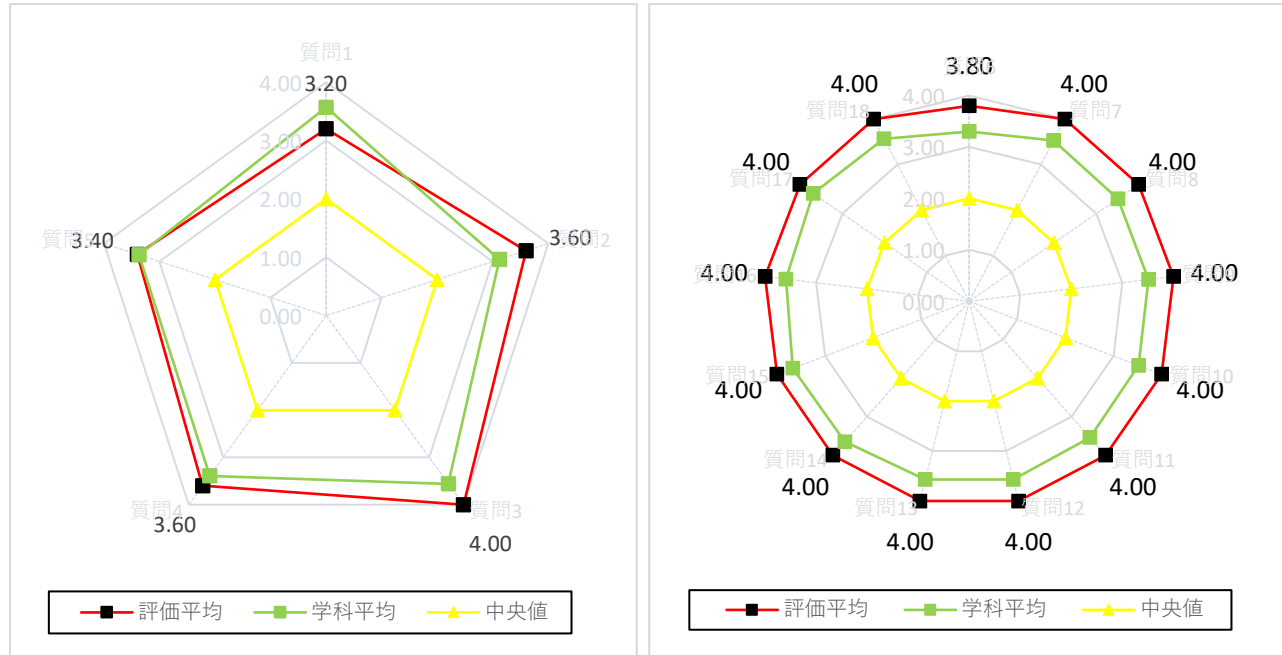
次年度も、今年度同様授業担当の複数教員で授業内容や教授方法などについて十分話し合いコンセンサスを得る時間をとることで、より分かりやすい授業構成を目指したい。また、上記にも述べたように、個別ゼミ指導で使用した教材が卒業論文に向けてどのように関連するかなどの見通しを詳細に伝えることで、課題に取り組むモチベーションを上げるよう工夫したい。

対面授業・遠隔授業どちらにおいても、資料提示の工夫や全体指導・個別指導、授業外課題などをバランスよく行うことで学生の学修の向上につなげたいと考える。個別指導において公平性・双方向性を担保しながら次年度も進めていきたい。

授業評価回答数は、最終回で十分な取り組み確認ができず、一部学生の評価が得られなかったため、次年度以降は対面授業形式の中で評価時間を十分確保することを意識したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナールⅡ	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

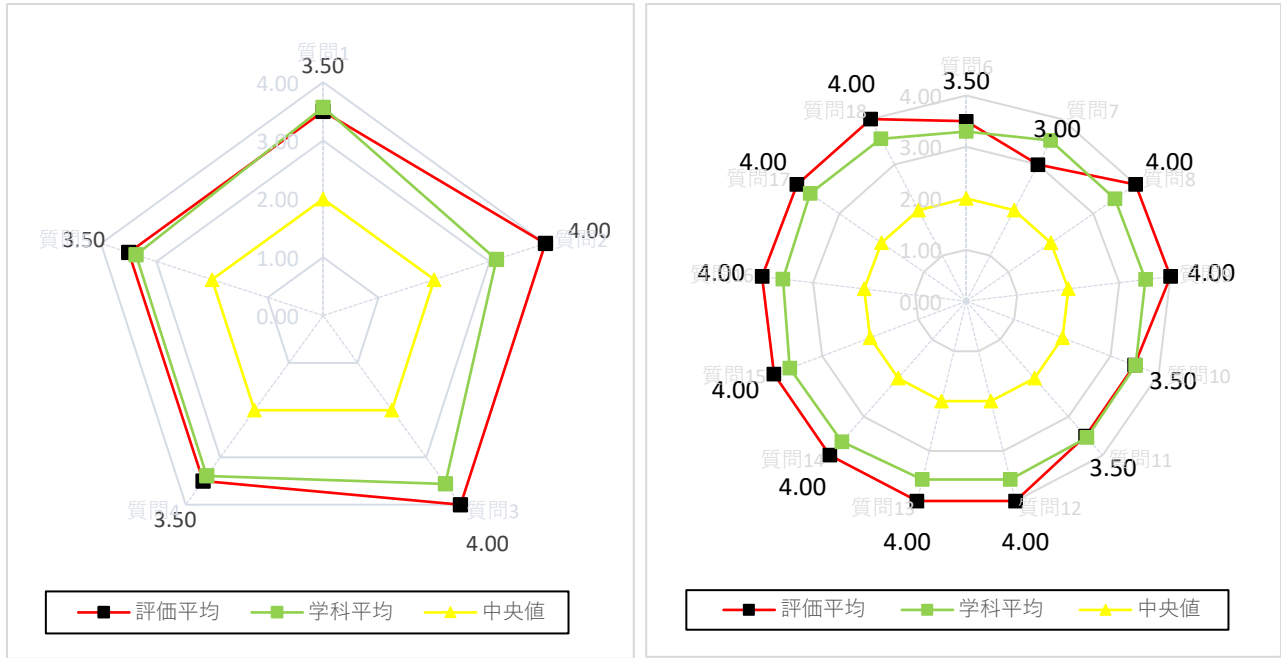
概ね、授業評価は高いものと判断できるため、現状を維持できるようにしたい。また、オムニバスでの実施している講義内容が一部あるため、不明確な部分が多いこともあると思われる。次に、質問5、あなた自身の自己評価に関して、学生の評価がやや落ちている。この箇所は、学生がどれだけ主体的に授業に関わったか、また該当科目に関して学修していることを実感しているか否かという点と結びついていると考えられる。そのため、学生側に立って目線での達成感などを得られる学修内容にすべきかもしれない。しかしながら、一部オムニバスを採用している講義科目でもあるため、他の教員との意見のすり合わせも、今後は必要になると思われる。最後に、ゼミナールでの形式であるため、否定的な評価はしにくい点も考慮すべきであろう。そのためには、この結果を鵜呑みにせず、他のアンケートや資料などを活用しながら、授業を改善していくことも必要であると思われる。セルフゼミナールⅠと異なる点として、発表や自主的な活動が中心となるため、引き続き話しやすい、相談しやすい雰囲気づくりを維持することが望まれる。

(3) 次年度に向けての取り組み

まず、現状を維持しながら、さらに高い評価を得られるように工夫していかなければならない。それには、まず学生が主体的に関与できるように、ワークやディスカッションを取り入れることも検討しなければいけない。本年度は新型コロナウイルスの影響により、対面授業ができず、グループワークやディスカッションなどが十分に行えなかった。一部、Zoomでのブレイクアウトルームなどを用いたが、学生同士が慣れていないせいもあり、十二分に活用するまでには至らなかった。今後は、こうした反省を踏まえて、Zoomでの講義を想定した講義計画が必要になる。そのため、シラバスにも明記したり、講義時にも丁寧にアナウンスするなどして、ワークなど主体的に取り組む学修を増やしていきたい。また、これに関しては他の教員とのすり合わせ、調整も必要になるため、学期前に提案するなどして、オムニバス形式の箇所に関して、刷新していきたい。セルフゼミナールⅠと異なる点として、発表や自主的な活動が中心となるため、コロナ禍においても、メール等を用いてサポート体制を維持し、利便性を高めていく工夫を行いたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナールⅡ	8名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

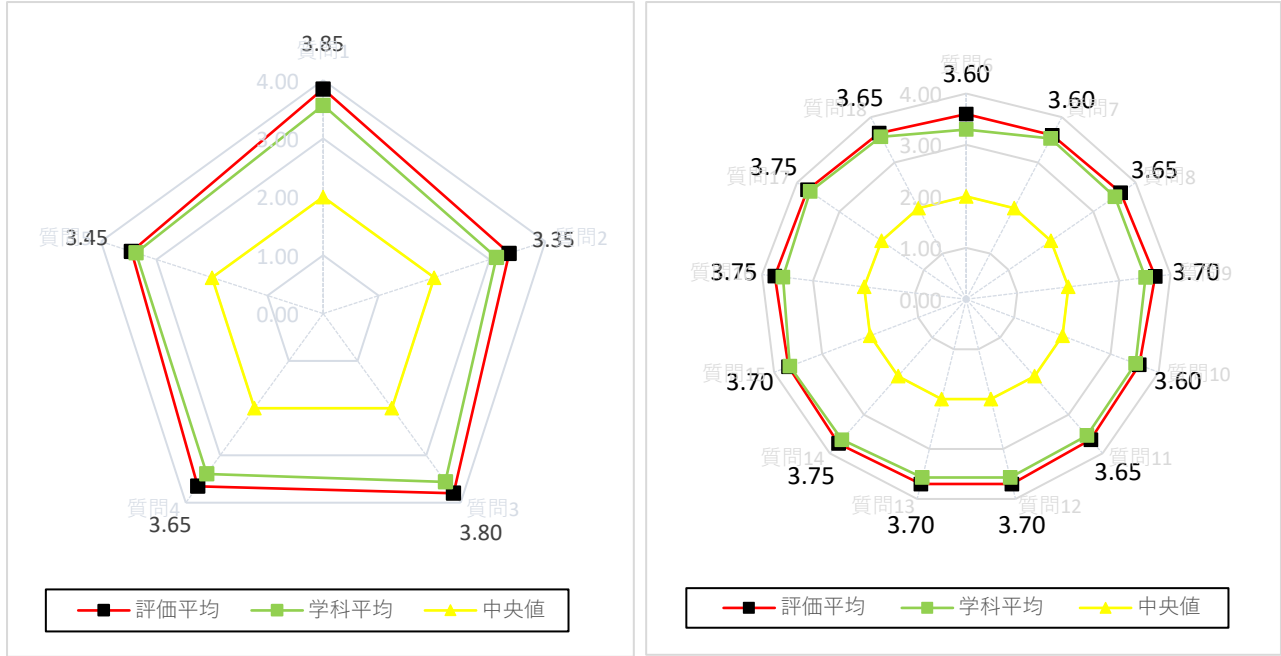
質問7 教員は授業の到達目標を明確にして、授業を展開していましたか。
 以外の項目で、学科平均得点より高い評価を得た。

（３）次年度に向けての取り組み

質問7 教員は授業の到達目標を明確にして、授業を展開していましたか。
 については、次年度、オリエンテーションだけの説明でなく、ゼミ指導の中でも学生へ周知を図るよう努める。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		小学校教育実習指導	50名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

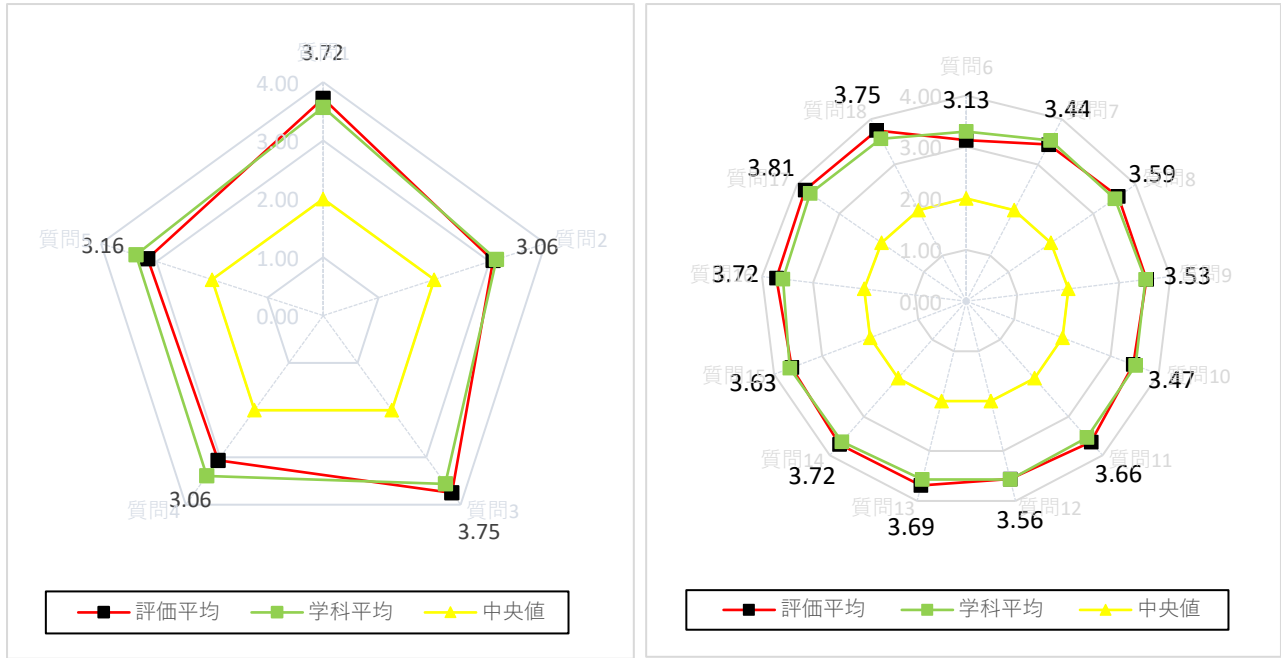
令和2年度「小学校教育実習」については、5月25日(月)～6月19日(金)までの4週間実施予定を、コロナ禍により、10月12日(月)～11月27日(金)までの7週間内で3週間実施と変更して実施した。これに関連して、小学校教育実習指導では、4年生は一人一教科、6月20日(土)1～5限に国、算、理、社、外・道の模擬授業を対面で、3年生も一人一教科、後期に対面と遠隔を併用して模擬授業を行った。先の見通しが難しい中、4年生はもちろんのこと、3年生も意欲的に模擬授業に取り組んでいた。

（３）次年度に向けての取り組み

令和3年度小学校教育実習については、5月24日(月)～6月18日(金)までの4週間実施予定と、佐賀市教育委員会・佐賀市校長会と確認している。(3月3日時点)4年生については、今後とも佐賀市教育委員会・佐賀市校長会との連絡・連携を密にしながら、実習生の「授業力」向上等に向けての指導はもちろんのこと、日頃からコロナ感染予防・健康維持対策等についての指導を確実に行之、万全の体制で小学校教育実習に臨むようにする。3年生についても、教職についての意識を確かなものにし、「授業力」向上等に向けての指導とコロナ関連の指導を徹底して行う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		暮らしに潜む罠	32名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

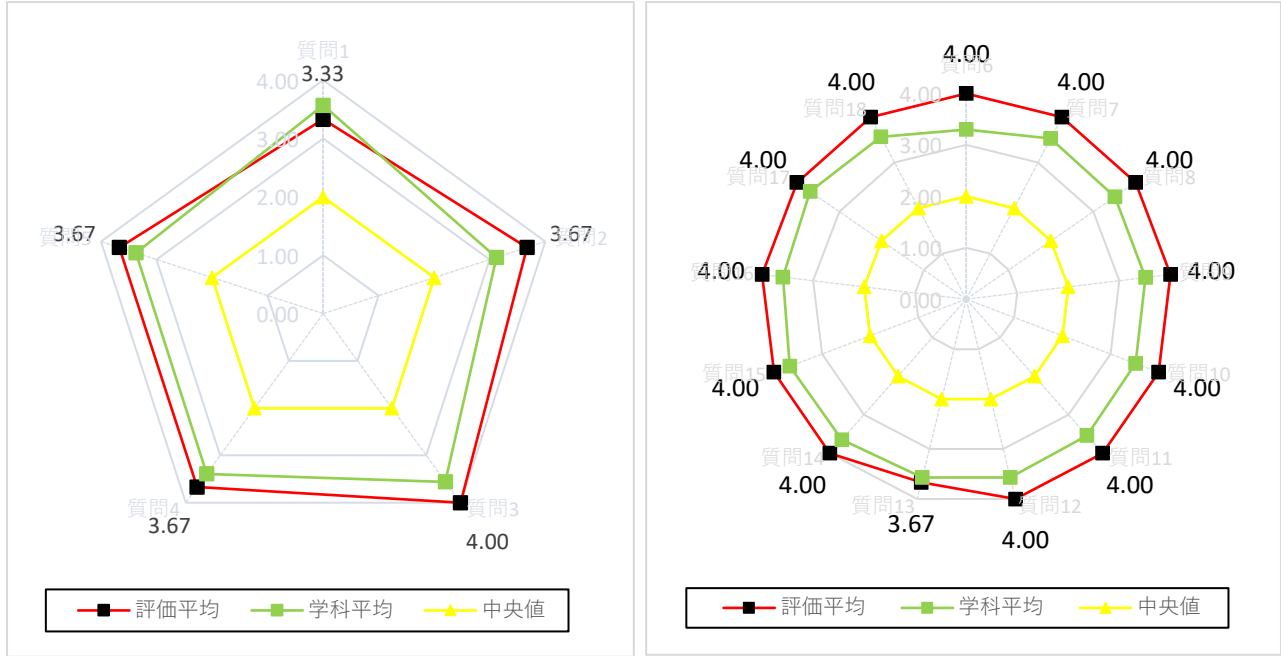
質問4 あなたはこの授業を理解するために自分で何か工夫をしましたか。
質問6 シラバス（授業計画）について説明がありましたか。
以外は、学科平均と同等の得点で会った。

（３）次年度に向けての取り組み

質問4 あなたはこの授業を理解するために自分で何か工夫をしましたか。
質問6 シラバス（授業計画）について説明がありましたか。
が、学科平均得点より下回ったことから、次年度は、シラバスの説明と、復習ポイントを学生に説明することに取り組む。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナールⅡ	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

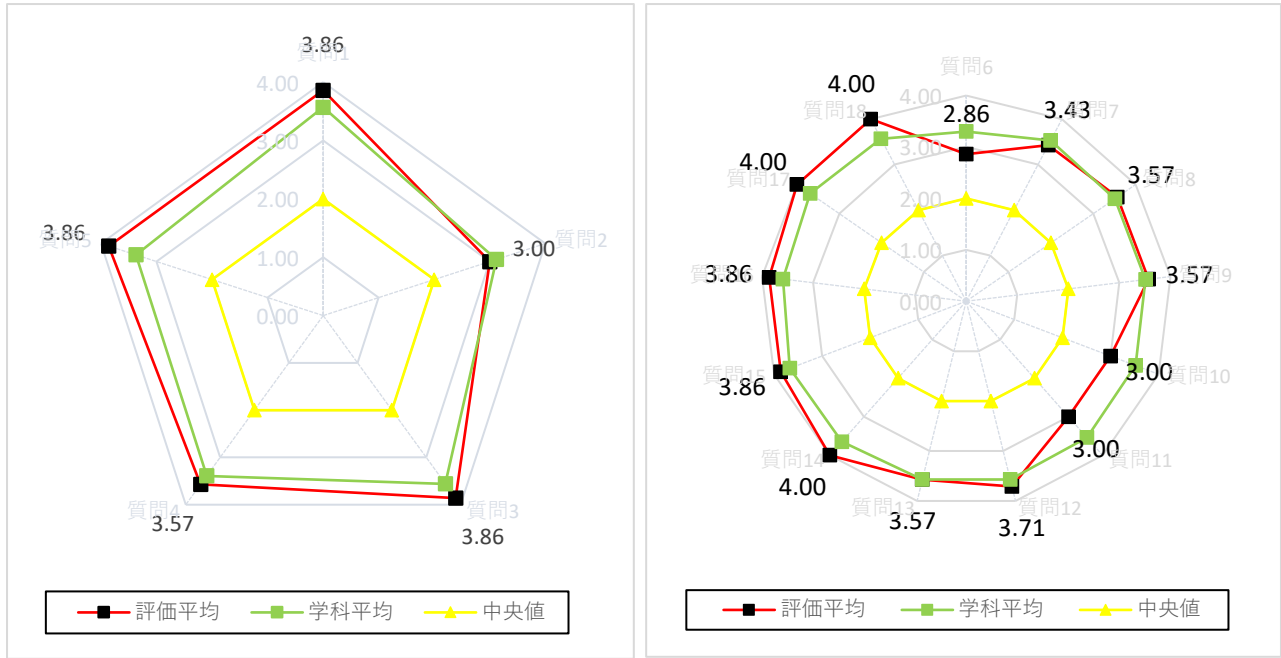
前期と比較すると、後期は講義を欠席する者が若干多かった。その結果が質問 1 の結果に繋がっていると考える。
欠席が続いている学生には、細目に連絡をおこない出席を促したり、生活状況をより丁寧に聴いたりする配慮・工夫が必要であると考える。

（３）次年度に向けての取り組み

前期の評価を踏まえて、質問 6 に関しては、講義の冒頭（導入）で、「今から何を学ぶのか」「なぜそれを学ぶのか」といった点をしっかりと伝えた上で、授業展開していったことで、前期よりも高い評価を得ることができていたと考える。
質問 1 3 に関しては、一人一人の進捗状況をしっかりと確認しながら個々のペースに応じた対応ができるよう、工夫・配慮していくことが必要と考える。
（今年度は、特にオンライン形式での講義を併用しながらの講義ということで、より丁寧に個々の状況を把握・確認しながら授業展開をおこなうことが必要であったと考える）
今後は、この点を自身の課題としながら、講義を進めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		キャリアアップ講座Ⅰ	11名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

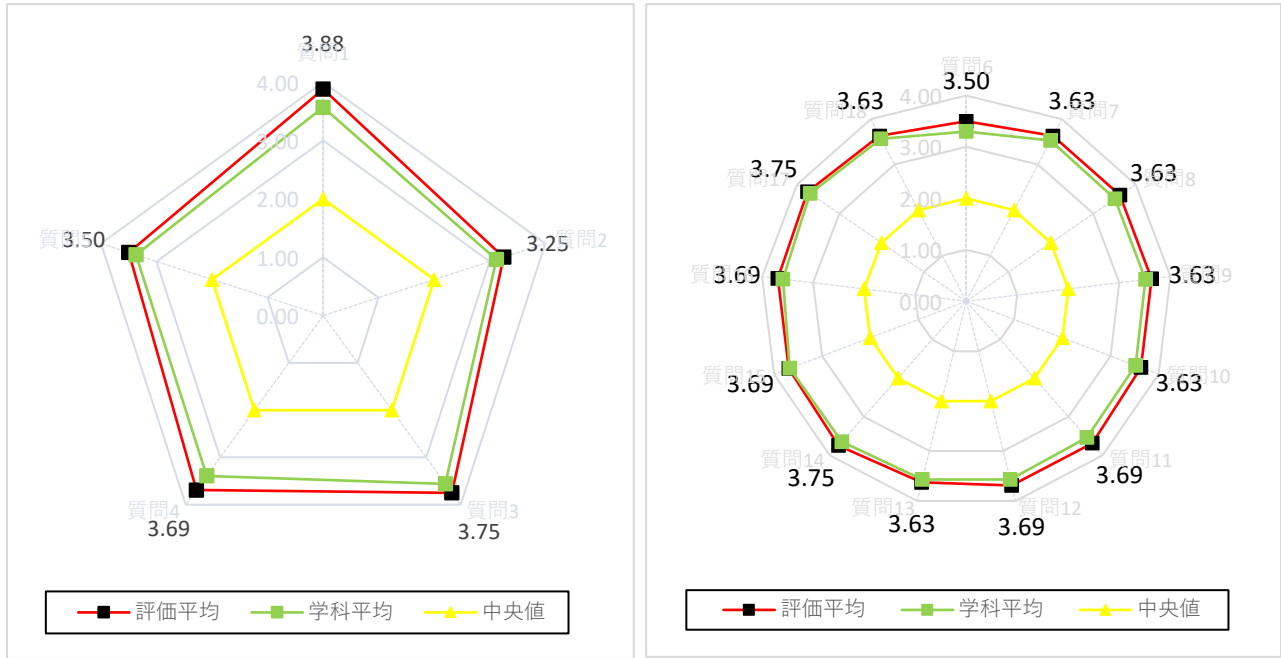
質問2 シラバス（授業計画）を活用しましたか。
質問6 シラバス（授業計画）について説明がありましたか。
質問10 視聴覚機器や板書の用い方は適切でしたか。
質問11 教科書・配布資料等は役に立ちましたか。
以上の評価が低かった。

（３）次年度に向けての取り組み

次年度は、シラバスの確認を授業ごとに行うことと、教材研究に取り組む。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		小学校教育実習	50名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

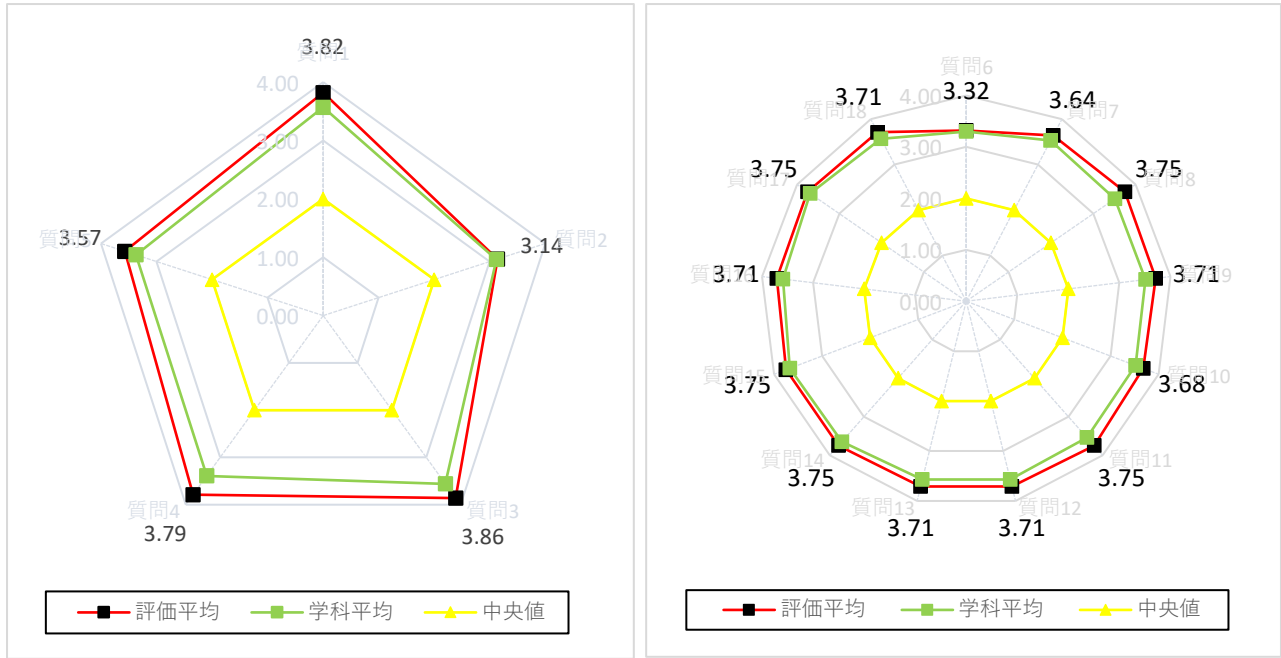
令和2年度「小学校教育実習」については、5月25日(月)～6月19日(金)までの4週間実施予定を、コロナ禍により、10月12日(月)～11月27日(金)までの7週間内で3週間実施と変更して実施した。このことについては、文部科学省の通知を受け、本学と佐賀市教育委員会・佐賀市校長会が検討を重ね、「子どもたちの安全安心」、「実習の効果成果」、「実習校の負担軽減」等々を踏まえたうえでの変更であった。実習生も日頃の感染予防に努め、実習2週間前から全員県内居住、検温・健康観察・行動記録を行い、万全の体制で実習に臨むことができたと思う。コロナ禍の下、小学校教育実習が実施できたことについて、佐賀市教育委員会・佐賀市校長会、そして、実習校の先生方・子どもたち・保護者等に心から感謝している。

（３）次年度に向けての取り組み

令和3年度小学校教育実習については、5月24日(月)～6月18日(金)までの4週間実施予定と、佐賀市教育委員会・佐賀市校長会と確認している。(3月3日時点)今後とも佐賀市教育委員会・佐賀市校長会との連絡・連携を密にしながら、実習生の「授業力」向上等に向けての指導はもちろんのこと、日頃からコロナ感染予防・健康維持対策等についての指導を確実に言い、万全の体制で小学校教育実習に臨むようにする。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		小学校教育実習	48名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

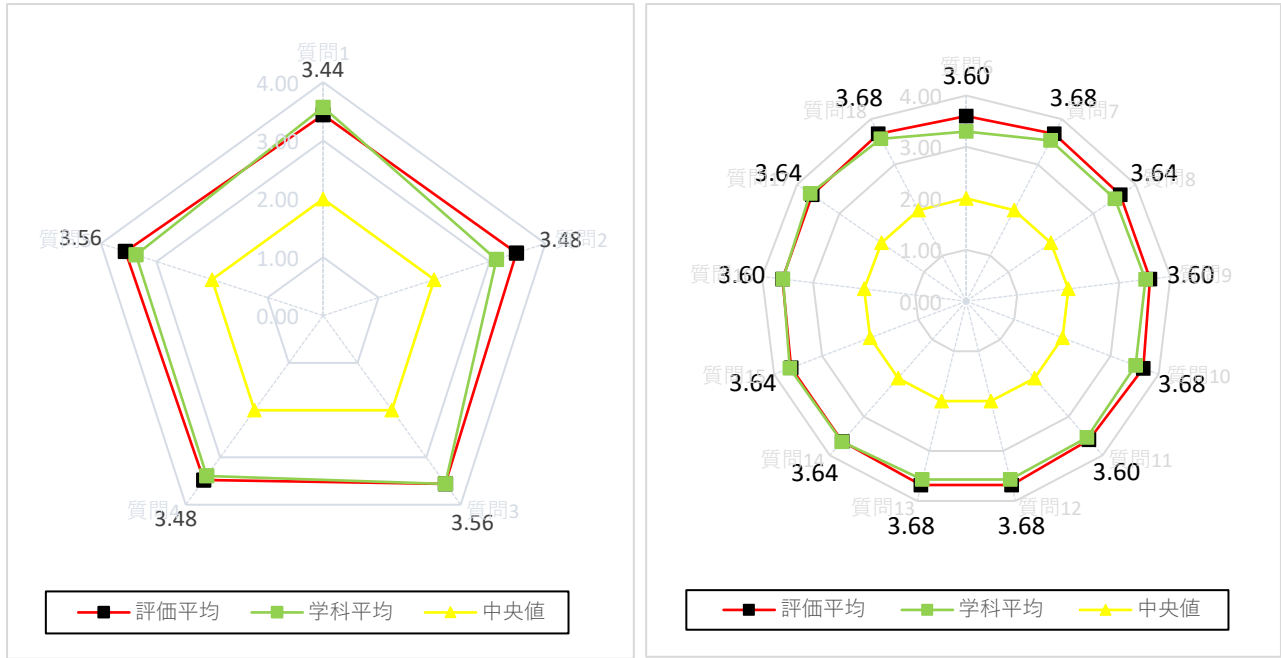
令和2年度「小学校教育実習」については、5月25日(月)～6月19日(金)までの4週間実施予定を、コロナ禍により、10月12日(月)～11月27日(金)までの7週間内で3週間実施と変更して実施した。このことについては、文部科学省の通知を受け、本学と佐賀市教育委員会・佐賀市校長会が検討を重ね、「子どもたちの安全安心」、「実習の効果成果」、「実習校の負担軽減」等々を踏まえたうえでの変更であった。実習生も日頃の感染予防に努め、実習2週間前から全員県内居住、検温・健康観察・行動記録を行い、万全の体制で実習に臨むことができたと思う。コロナ禍の下、小学校教育実習が実施できたことについて、佐賀市教育委員会・佐賀市校長会、そして、実習校の先生方・子どもたち・保護者等に心から感謝している。

（３）次年度に向けての取り組み

令和3年度小学校教育実習については、5月24日(月)～6月18日(金)までの4週間実施予定と、佐賀市教育委員会・佐賀市校長会と確認している。(3月3日時点)今後とも佐賀市教育委員会・佐賀市校長会との連絡・連携を密にしながら、実習生の「授業力」向上等に向けての指導はもちろんのこと、日頃からコロナ感染予防・健康維持対策等についての指導を確実にを行い、万全の体制で小学校教育実習に臨むようにする。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		体育	88名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

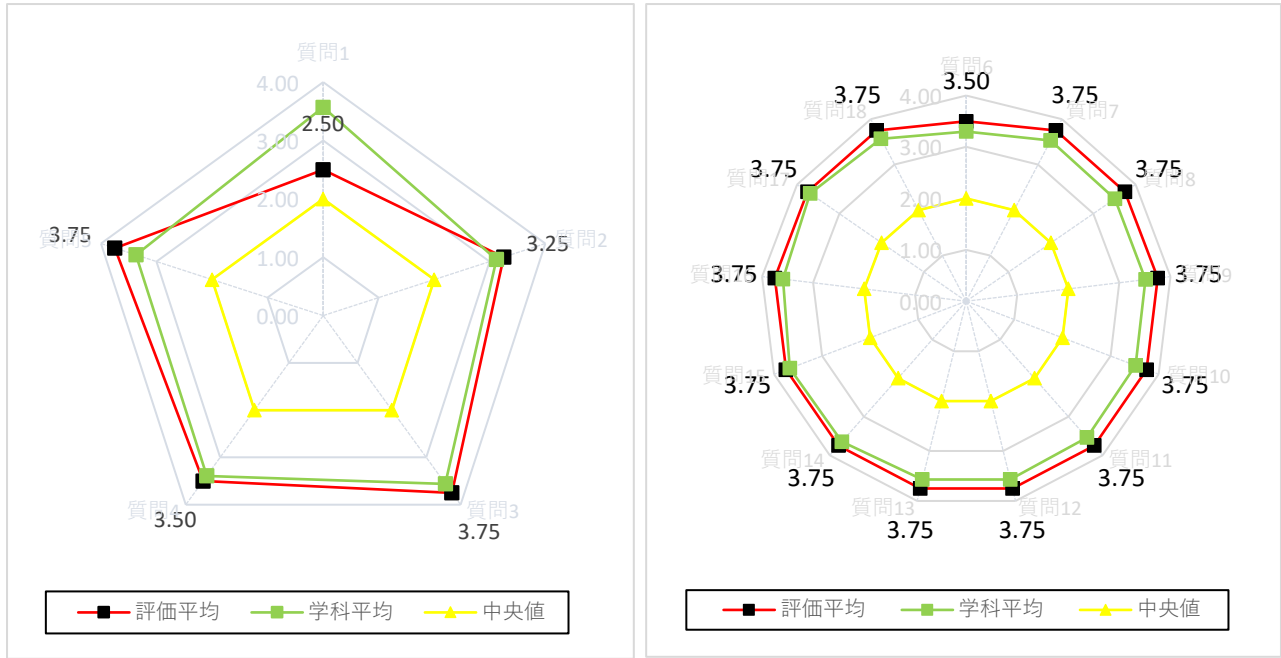
全ての項目で学科平均ほぼ同程度かそれ以上の評価である。高評価であったと捉えている。今年度はコロナの影響で本来実技の授業が一部オンラインでの講義になってしまったが学生が真摯に対応してくれた結果であるといえる。今年度からオンライ教材を用いた講義も新たに導入したがこれも高評価であった。

（３）次年度に向けての取り組み

今年度も昨年度様に質の高い講義を目指して取り組んでいく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	5名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

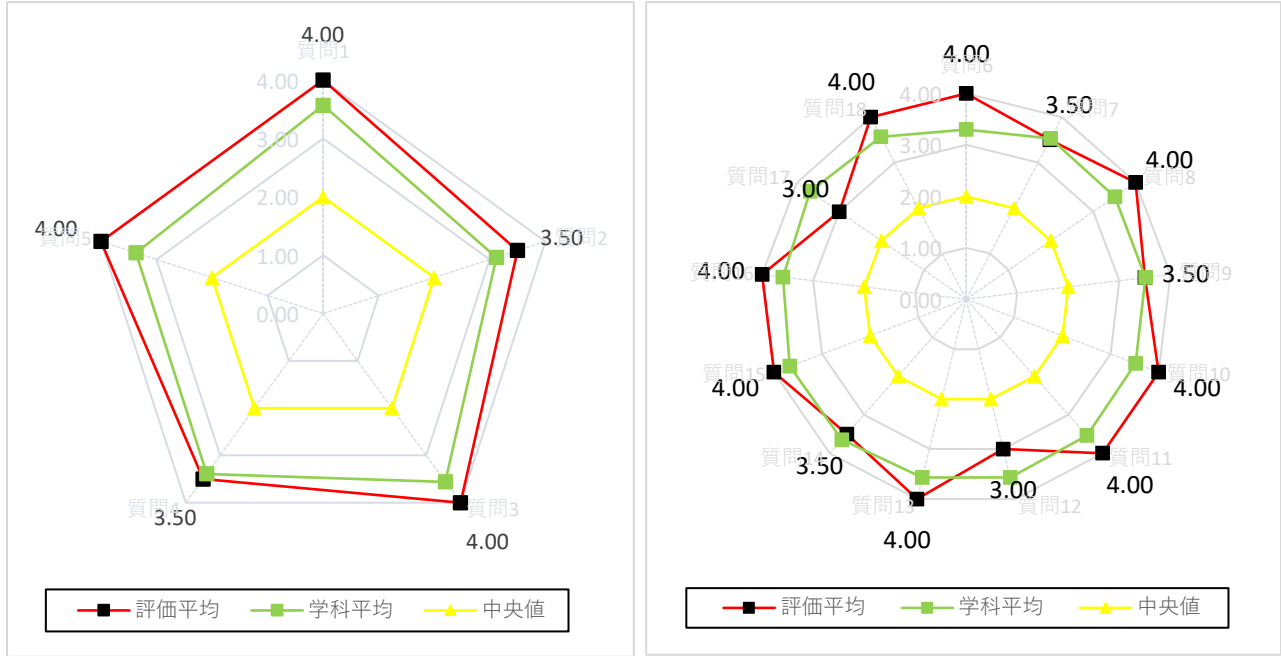
質問 1 の評価が低いですが、ゼミ全員の年間欠席総数は公欠(小学校教育実習による欠席) 1 4、病欠 1 であり、全員ほぼ皆勤といえるので、ゼミ生の自己評価が厳しいのかもしれない。他の質問項目については、概ね良好な評価が得られていると思う。

（３）次年度に向けての取り組み

次年度は担当せず

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		卒業研究	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

令和2年度の回答者数が受講者の一部となったことが結果に影響していると思われる。本授業は、covid-19の影響や時間割の関係で前期後期共に遠隔にての授業となり、6月以降は主にZoomによる同時双方向型の遠隔形式で、時間を区切って個別的に指導を行ったが、一人にかけられる時間が学生の側からすると少ないとの思いがあったと推察される。また、短時間で多くの情報を伝えようとする際に、学生によっては話すスピードが速いとの思いを抱くことにつながったことも考えられる。学生自身の総合自己評価や、授業についての総合評価についてはどちらも高く、covid-19で様々な制限がある中でも自分なりに納得のいく卒業論文を仕上げる事ができたと回答学生が考えていることがうかがえる。

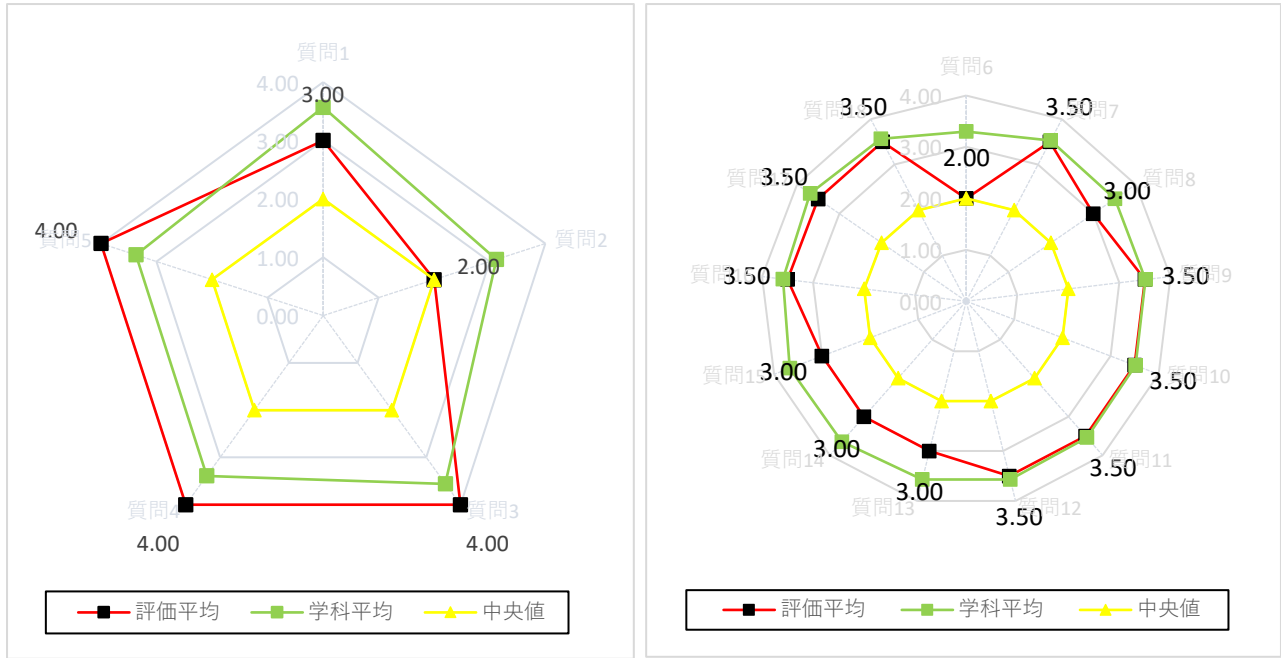
（３）次年度に向けての取り組み

卒業研究指導の終了時や発表会后などに十分な回答時間の確保ができず、回答数が少なかったことは課題であるため、次年度以降は最終授業終了時や発表会后などに授業評価に取り組む時間を確保することを意識したい。

令和2年度は時間割の関係で前期後期共に遠隔授業となり、同時双方向型の遠隔システムで個別指導を行ったが、次年度以降は出来る限り対面での指導を行い、学生に集団指導と個別指導のバランスを取りながら、効果的な指導を行うことを意識したい。学生それぞれの理解度等を見極めながら、助言のタイミングや情報量を検討することも必要だと思われる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		卒業研究	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

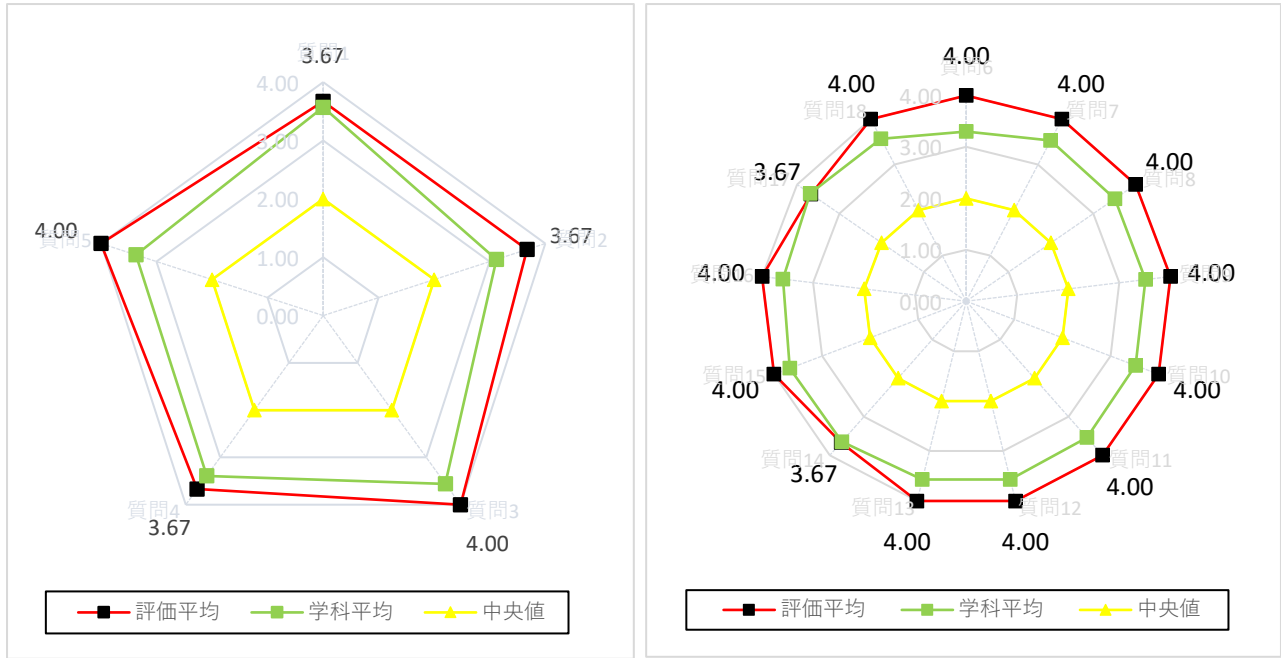
シラバスについて、卒業研究は教員間で方針が異なることから学生には自身の授業としての授業計画を示していたが、その説明が足りなかったと思う。また、学生の個性により進度が大きく異なったことで、課題提出や達成度に個人差が生まれた。

（３）次年度に向けての取り組み

1回目の授業で大学発行のシラバスを配布してこれについて説明したうえで、自身の授業としての授業計画を説明するようにする。また、卒業研究の遂行計画を学生自身に組み立てさせ、その計画と照合させながら、卒業研究指導を行うようにする。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	5名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

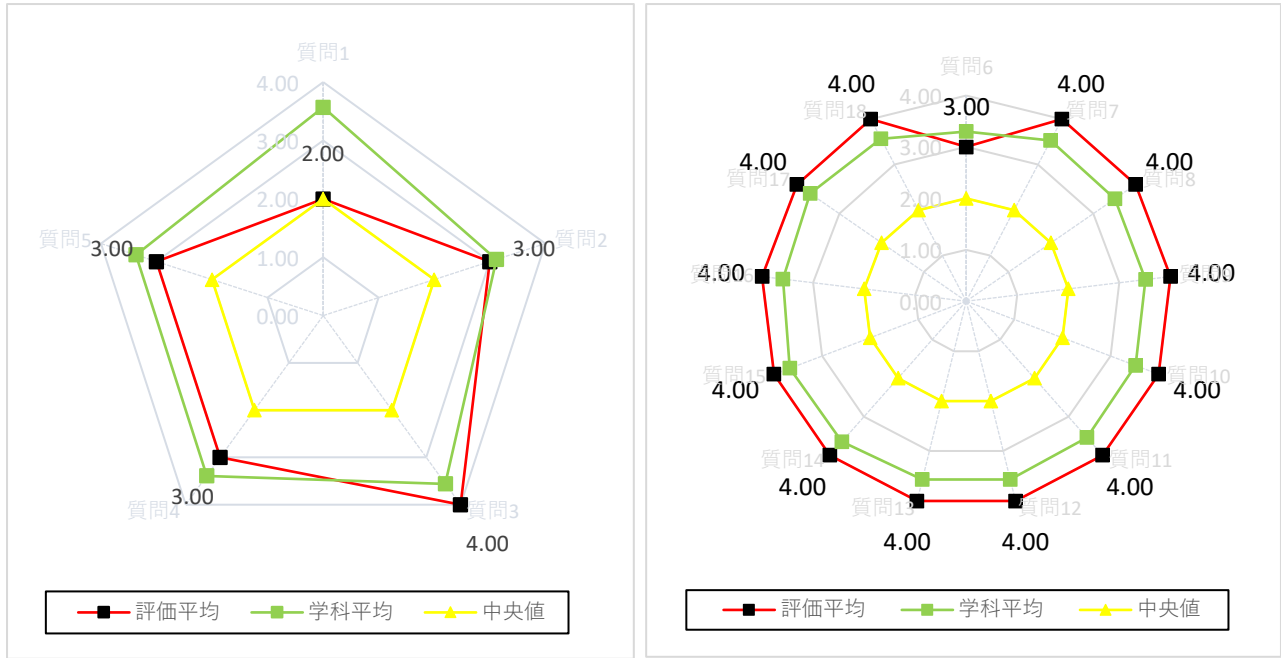
回答者は5名中3名である。全般に、自己評価も授業のやり方についても大変良い評価である。卒業研究は、学生が主体的に進めていくものである。そして、学生は、非常に満足したと言えよう。実際、学生たちは、オンラインのゼミ活動でも、協力的な関係の中で、良いゼミ運営をした。卒業論文も早くに出来上がり、12月初めに提出することができた。積み重ねの努力を行うことができた。その成果である。卒論発表会はポスター形式で、ポスターも完成したが、直前にオンライン発表会に変わり、PPT形式に変更された。柔軟な対応ができた学生たちである。その協力に深く感謝をしている。

（３）次年度に向けての取り組み

今年度の学生との学習活動の積み重ねを糧として、またその成果を力として、学生が自主的に、ある程度満足のいく成果を収められるように、今後も、学生自身と対話し、学生間のコミュニケーションを円滑にしながら、ゼミ運営がなされるように、指導・伴走していくことを肝に銘じる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		障害児の理解と支援	11名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

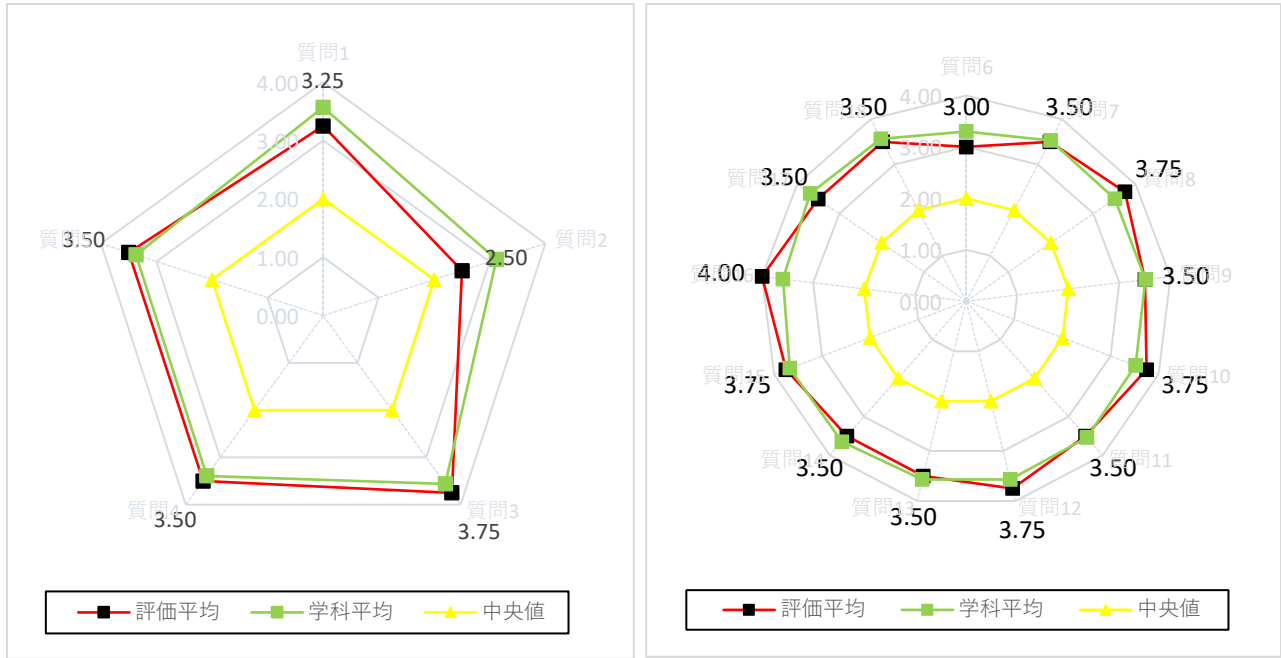
回答数：1/10
総合評価：3.67
回答者が1名のため分析とはいかないが、質問6のシラバスに関する説明について以外は高い評価を得た。

（３）次年度に向けての取り組み

第1回目の授業でのシラバス説明だけでは、理解が得られにくい。
毎回の授業を通しての説明を検討したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		卒業研究	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

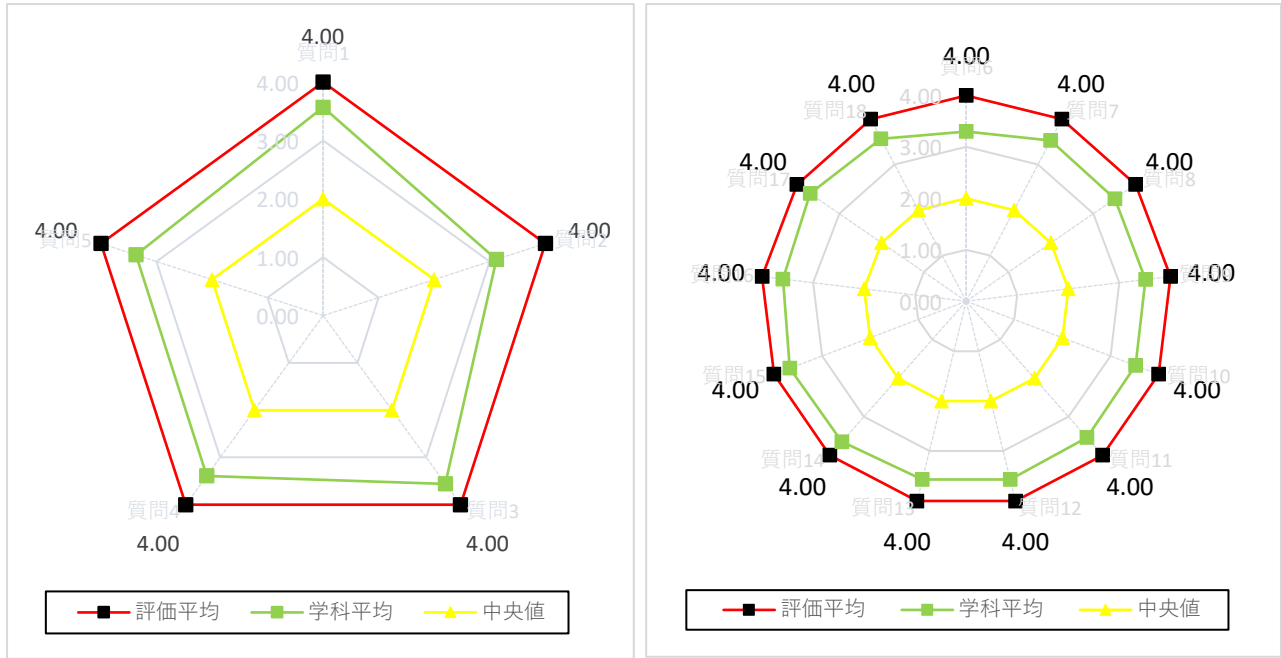
質問2 シラバス（授業計画）を活用しましたか。
 質問6 シラバス（授業計画）について説明がありましたか。
 が、学科平均得点より低かった。

（３）次年度に向けての取り組み

次年度は、授業内でシラバスの確認を綿密に行う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	5名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

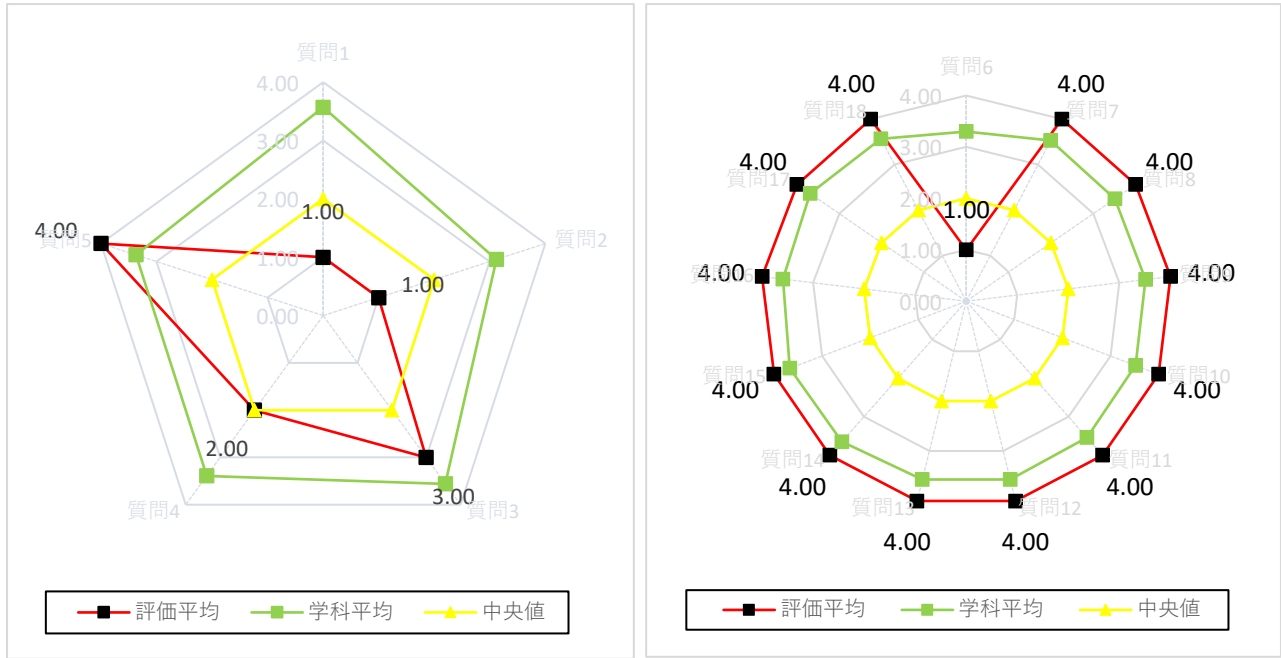
- ・評価平均値を見ると、学生の満足度は高かったものと考えられる。
- ・卒業研究に係る教員と学生の個別の意見交換に重点を置いた学修プロセスが奏功したものと推察する。

（３）次年度に向けての取り組み

- ・卒業研究を進めるにあたっての学生のその時点でのニーズを的確に把握しながら、適切な情報提供や意見交換に努める。
- ・卒業研究の方向性にブレがないか随時確認しながら、主体的に研究が進められるよう、支援的対応に努める。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		卒業研究	9名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

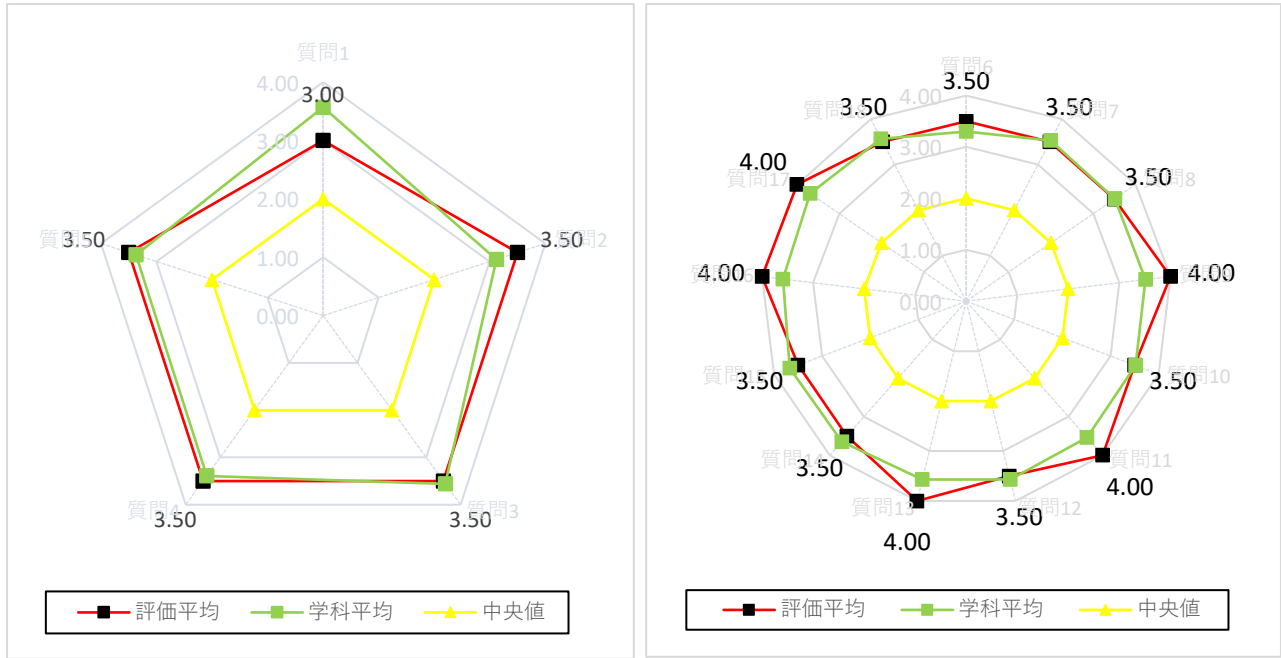
シラバスについてはきちんと説明しておらず、卒業論文の着手と研究準備等の説明に終わっている。また後半は個別指導しながら卒業論文を仕上げているので、正規の時間通りには時間配分できていない。しかし、全員が指導内容には満足していると思われ、評価は高い。中には学部紀要に掲載可能な内容の論文が完成している。

（３）次年度に向けての取り組み

コロナ禍の中ではあるが、個別指導を中心に大学生活の集大成である卒業論文に着手できるよう早めのスタートを切りたい。また、卒業論文を通してアカデミックに学問として心理学を勉強してほしいと願う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	6名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

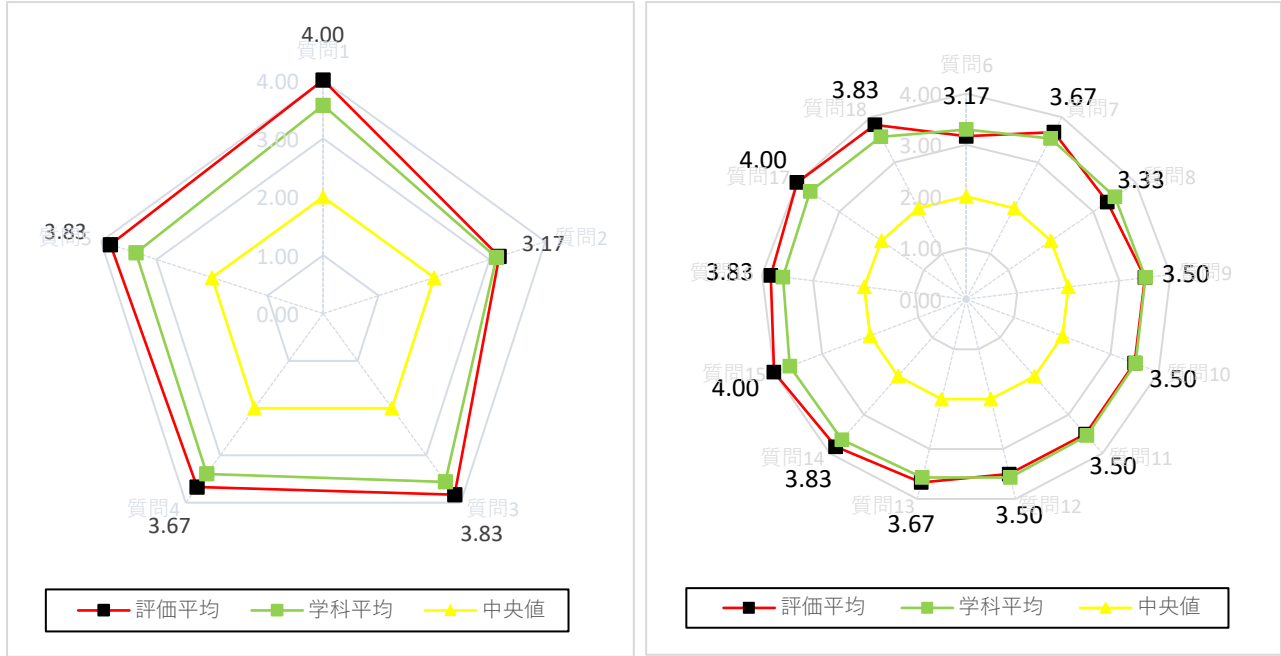
回答数 : 2/6
 総合評価 : 3.61
 質問9・11・13・16・17の項目で4.0の評価を得た。一人ひとりの実態に応じた指導を行った結果と考えられる。
 授業の出席については、就職活動や実習のため学生間のばらつきが大きかった。

(3) 次年度に向けての取り組み

欠席分の補講の実施について、学生への説明が必要である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	7名

(1)
学生による授業評価結果



(2)
結果の分析と評価

「子ども学」領域において、各分野・学問に応じた教育研究や学術研究等を遂行し、その結果を提出・報告することが求められている。本ゼミにおいては「子どもの環境と文化」に視点を置き、さまざまな角度からアプローチして疑問に思ったこと、もっと知りたいと思ったことなど、身近な内容で興味や関心をもった研究テーマを各自選択し、深めている。

集大成である「卒業論文」作成については、本年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から対面授業が6月中旬から行われたこと、例年はアンケート調査を夏休み前に行い余裕をもって分析・考察することができたが、それも不可能であったためなかなか進めるのが難しかった。その結果、7名の学生の取り組みの姿勢や進度に大きな個人差が見られた。結果としては何とか論文を完成し、発表まで行うことができたことは学生の努力によるものであった。

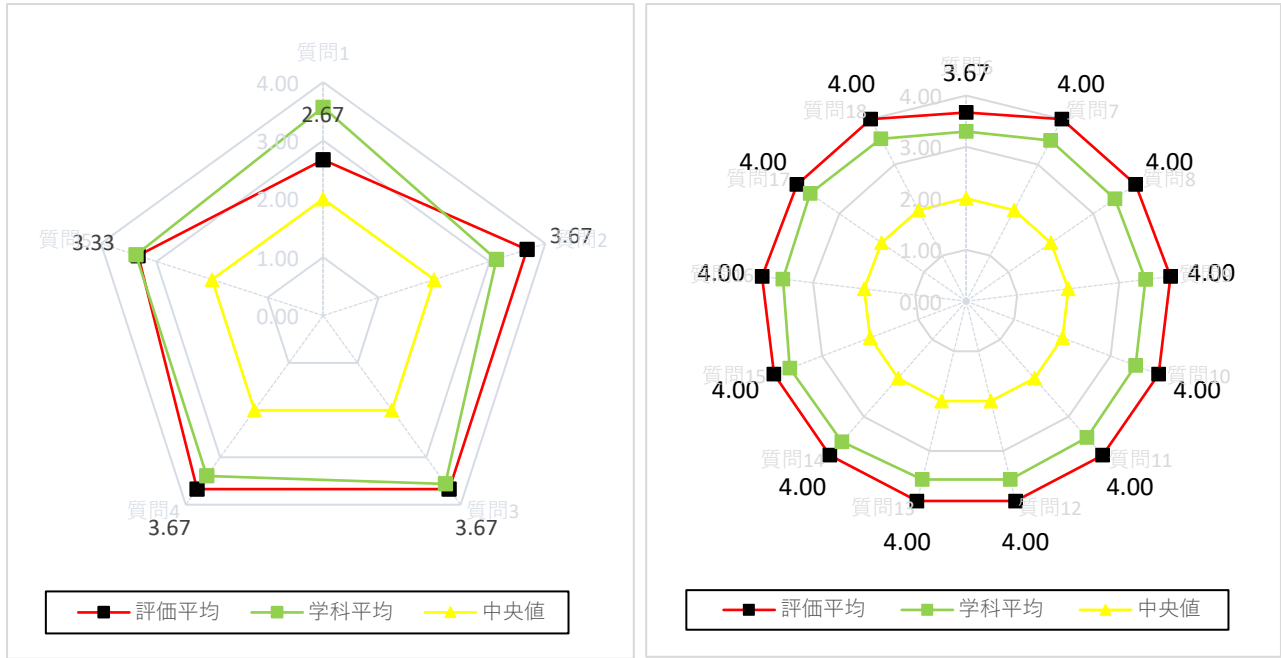
授業評価については、すべての項目について非常に高い評価を得ている。

(3)
次年度に向けての取り組み

令和3年度も新型コロナウイルスの状況に影響を受けることが考えられる。オンライン授業も含め、工夫しながら行えるよう臨機応変な対応が求められるであろう。3年生の段階からすでに仮のテーマを設定し、先行研究についてもある程度深め、ゼミ全体で中間的な発表も行っている。今後は、学生が自らの「卒業論文」に対して主体的に取り組み、無理のないスケジュールで完成に至ることができるようしっかりとサポートをしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	4名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

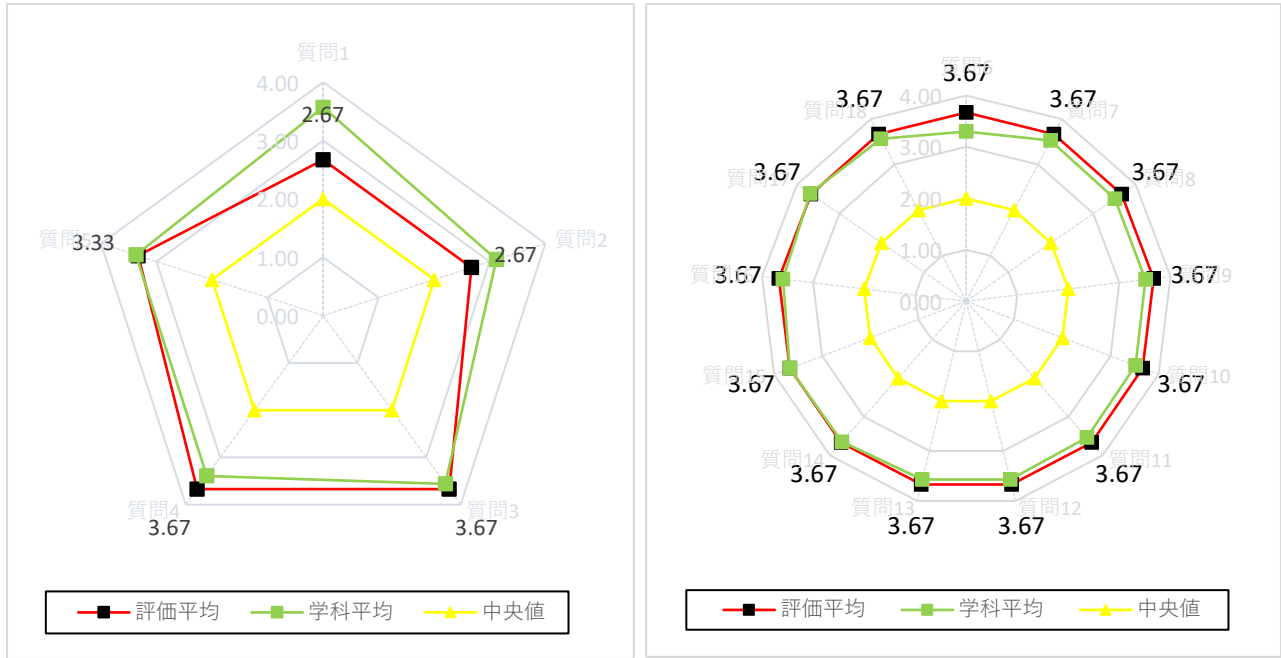
本科目受講学生の回答率は、4名中3名で、回答率75%であった。本科目への総合評価は3.81と高評価であり、学生の総合自己評価は3.33、授業に関する評価は4.00と共に高評価であった。本授業は、学生の興味関心の深い課題をもとに、研究を進めていった。また、その方法について、教員側で計画的に進め、学生は見通しを立てながら、進めることができたため、学びに対する充実感を持つことができたと考える。オンラインと対面の併用ではあったが、学生と共に授業内容と方法を検討して行った結果での高評価と言える。

(3) 次年度に向けての取り組み

来年度は、学生全員からの回答が得られるように、授業時に計画的な投げかけを、さらに意識を高く持ち、授業に取り組んでいきたい。授業については、今年度同様、学生一人一人の興味関心と作業の進捗状況を十分に把握し、学生にとっての学び（研究）に対する達成感がより充実するように進めていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	6名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

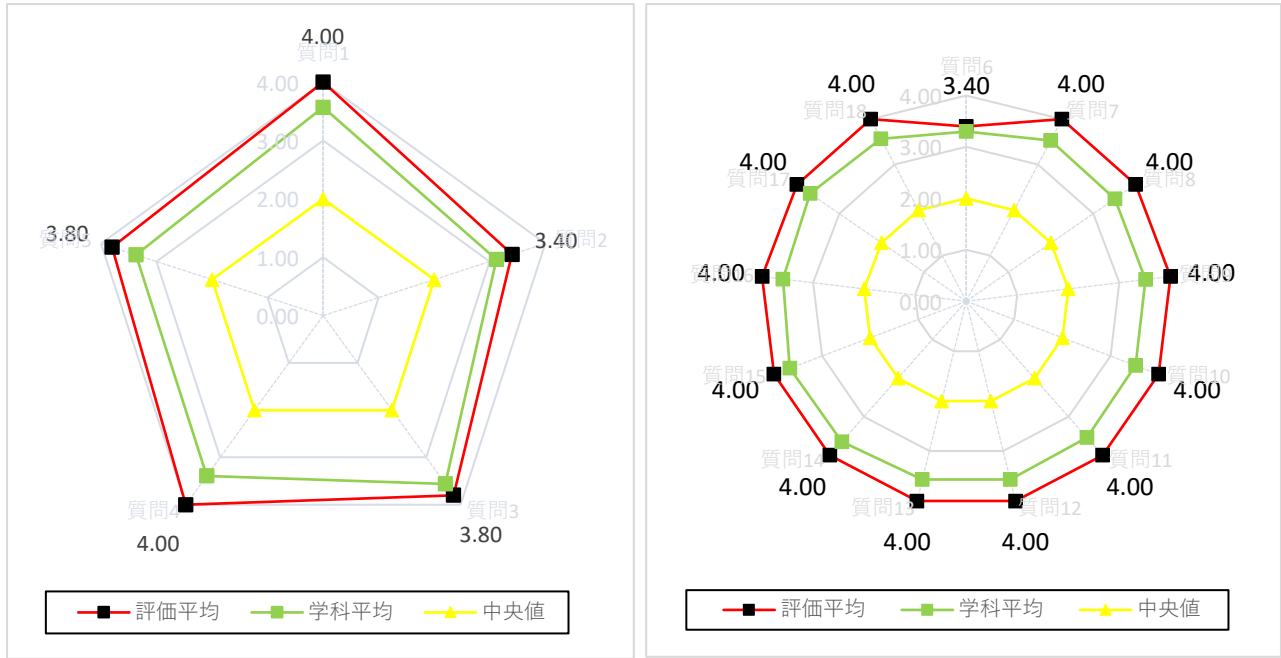
質問1から質問5は、学生自身が自らを評価したものである。ゼミ生の中には、かなり厳しい自己評価をしている者がいたといえる。卒業研究は免許取得のための学外実習や就職活動と並行して進めていくため、時期によっては進捗状況が滞ることもあった。しかし、それらが一段落すると熱心に取り組み、計画的に取り組む姿が見受けられた。いずれの学生も、自分なりに研究成果をまとめることができていた。質問6以降の教員に対する補油化は、全ての項目において学科平均を上回る評価を得た。個々の学生の質問に対し、その都度、丁寧に対応していったことが、この評価に?がったものと思われる。

(3) 次年度に向けての取り組み

卒業研究は、ゼミ生に対して個別に対応することができる貴重な時間である。研究に関する指導は勿論のこと、就職等の進路指導に関しても丁寧な指導を心掛けていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	5名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

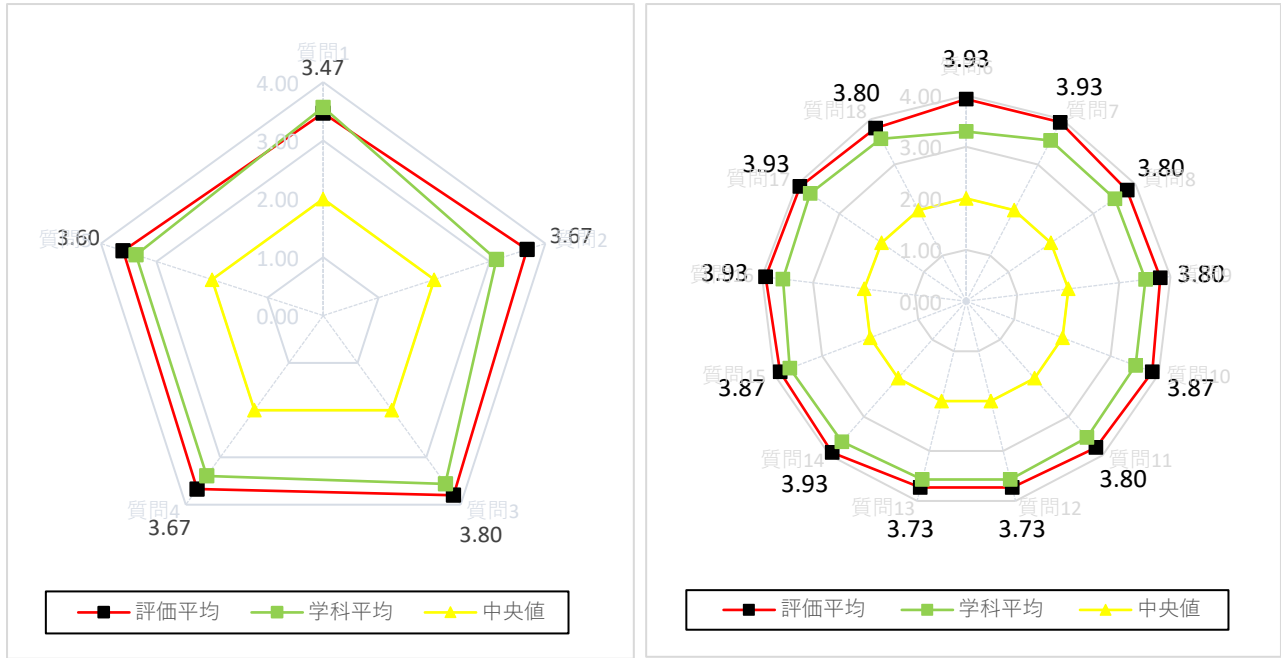
コロナ禍のため、臨機応変、試行錯誤という面は否めなかったものの、ゼミ生一人一人が粘り強く、最後まで、高みを目指した取り組みを行ってくれた成果である。「先生のご指導でこれまでで一番自分のためになる学習になりました」と記した受講生の声が心に響いた。

（３）次年度に向けての取り組み

次年度は男女各3名、計6名の受講生である。今年度の成果を踏まえながら、次年度も学生と一緒に自分も伸びていくという心を忘れず、学びを楽しんでいきたい。
年間の見通しを明確に持ちながらも、学生個々の実態や思いをしっかりとくみ取り、指導に当たっていき
たい。四年間の集大成である卒業研究。私も集大成のつもりで頑張っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理演習	38名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

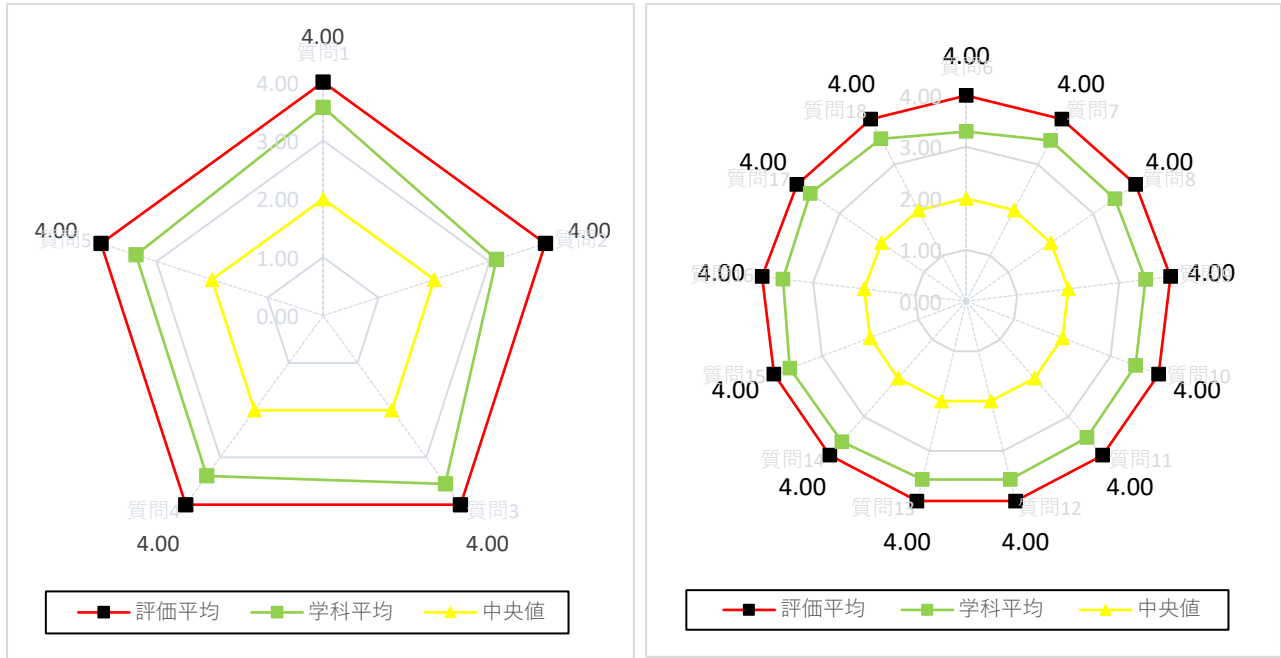
全項目で高評価を得た。

（３）次年度に向けての取り組み

引き続き、授業を行う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

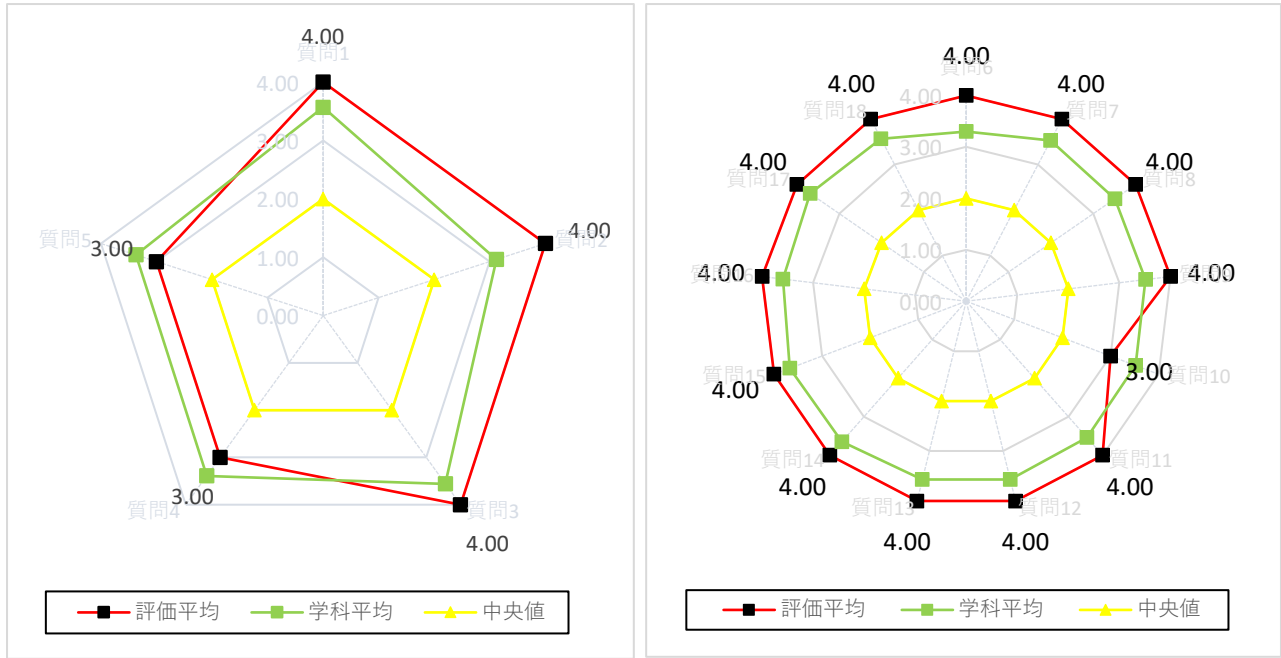
全項目が満点である。高評価であったと捉えている。

（３）次年度に向けての取り組み

今年度も引き続き、学生の考える力の育成を主にゼミ活動を行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子育て支援	1名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

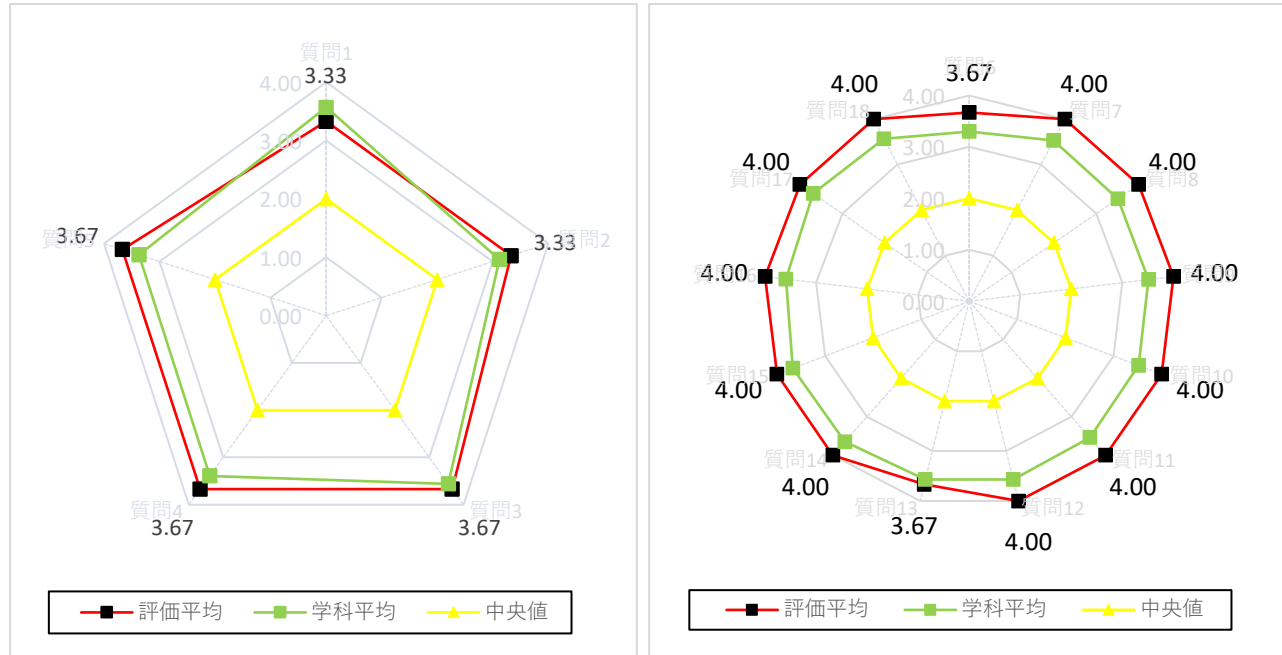
本科目受講学生1名による評価であった（回答率100%）。本科目への総合評価は3.83であり、学生の総合自己評価は3.00、授業に関する評価は4.00であった。1名についてはあるが、マンツーマン指導によるものであったことから、学生自身の学びと授業内容について、大変充実していたことが窺える。

（３）次年度に向けての取り組み

来年度も今年度同様、学生自身の興味関心を大切にし、学びが深まるように進めていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		ゼミナールⅡ	9名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

令和2年度の回答者数が受講者の一部となったことは今後の課題である。本授業は、covid-19の影響や時間割の関係で前期後期共に遠隔にての授業となり、6月以降は主にZoomによる同時双方向型の遠隔形式で、個別指導や全体指導をおこなったが、教員に対する評価については全ての項目で学科平均を上回り、双方向性や公平性等などに留意しながら指導を行ったことが結果に反映していると考えられる。

学生が臨床心理学分野の文献をまとめたり、自分の関心あるテーマについてレポートをまとめ発表するという授業の流れの中で学生自身も主体的に取り組んだことが質問4・5などの結果につながったと思われる。学生が提出した課題や発表の際などに適切なフィードバックを行うことを意識して指導を行ったことも評価につながったと考えられる。授業の進捗についての評価は比較的低かったが、課題提示から発表までの時間についてが速いと思っているのか、もしくは遠隔個別指導時に待ち時間が生じることで遅いと感じられたかが今回の評価では明らかではないが、課題提示と締め切りまでの期間の検討や、対面での指導を増やすなどが今後求められる。

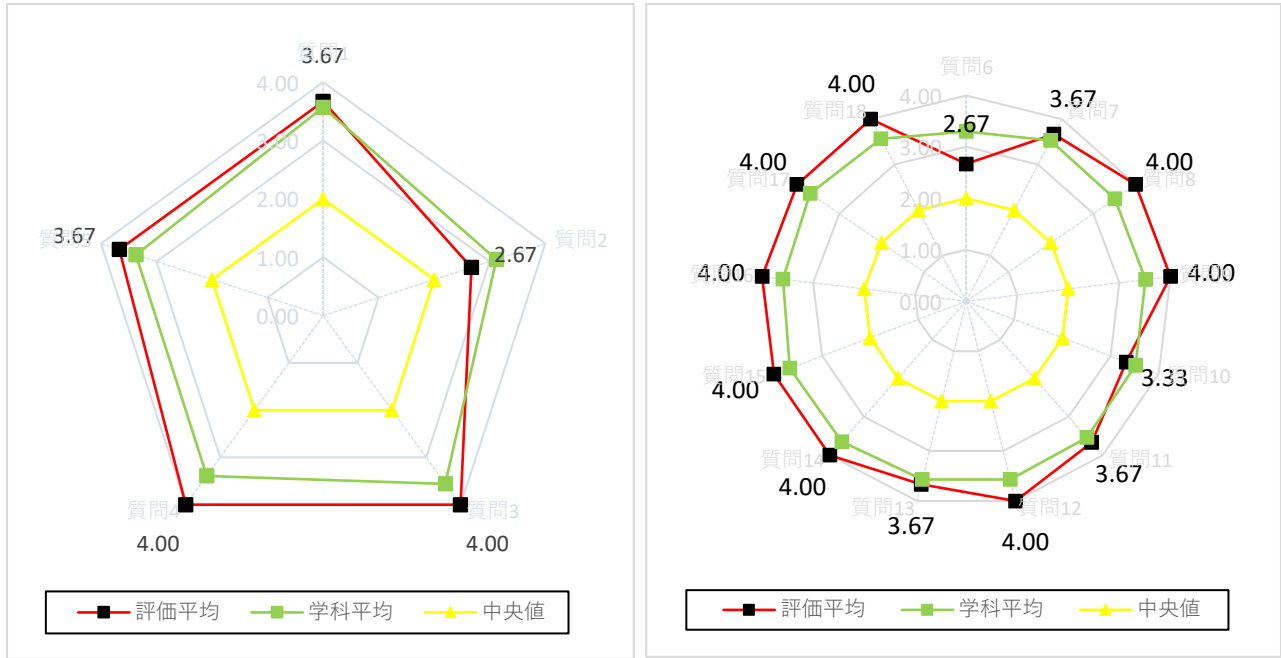
(3) 次年度に向けての取り組み

授業終了回に十分な回答時間の確保ができず、回答を行っていない学生が複数いたため、次年度以降は最終授業日に授業評価に取り組む時間を確保することを意識したい。

令和2年度は時間割の関係で前期後期共に遠隔授業となり、同時双方向型の遠隔システムで全体指導や個別指導を行ったが、次年度以降は出来る限り対面での指導を行い、学生に集団指導と個別指導のバランスを取りながら、効果的な指導を行うことを意識したい。課題提示と締め切りまでの期間の検討については、学生の状況を確認しながら行っていく必要があると思われる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		ゼミナールⅡ	10名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

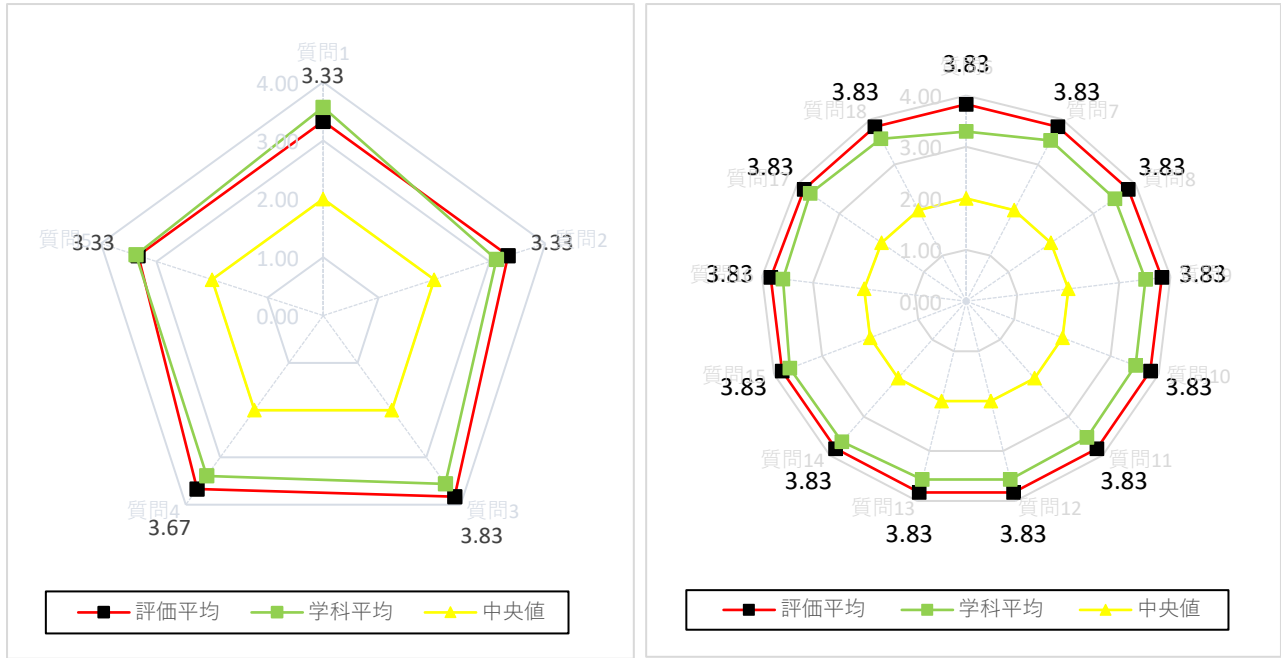
十分なシラバスの説明をしなかったのは反省点である。このゼミが卒業論文作成につながるよう指導しているため、文献収集や論文の書き方など細かく指導をおこなった。学生は文献を一人4本ほど収集し、まとめたりしていた。学生は熱心に取り組み、個別指導を重視しながら展開したため学生も満足したと思われる。そのため評価も高い。

（３）次年度に向けての取り組み

やはり、きちんと最初にシラバスを通して授業内容を展開することを伝えたい。特にゼミナールⅡは専門科目を論文等を通して深めていく作業を行ため、文献収集について説明し、少しでも専門書に触れる時間を取ってあげたいと思う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		ゼミナールⅡ	10名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

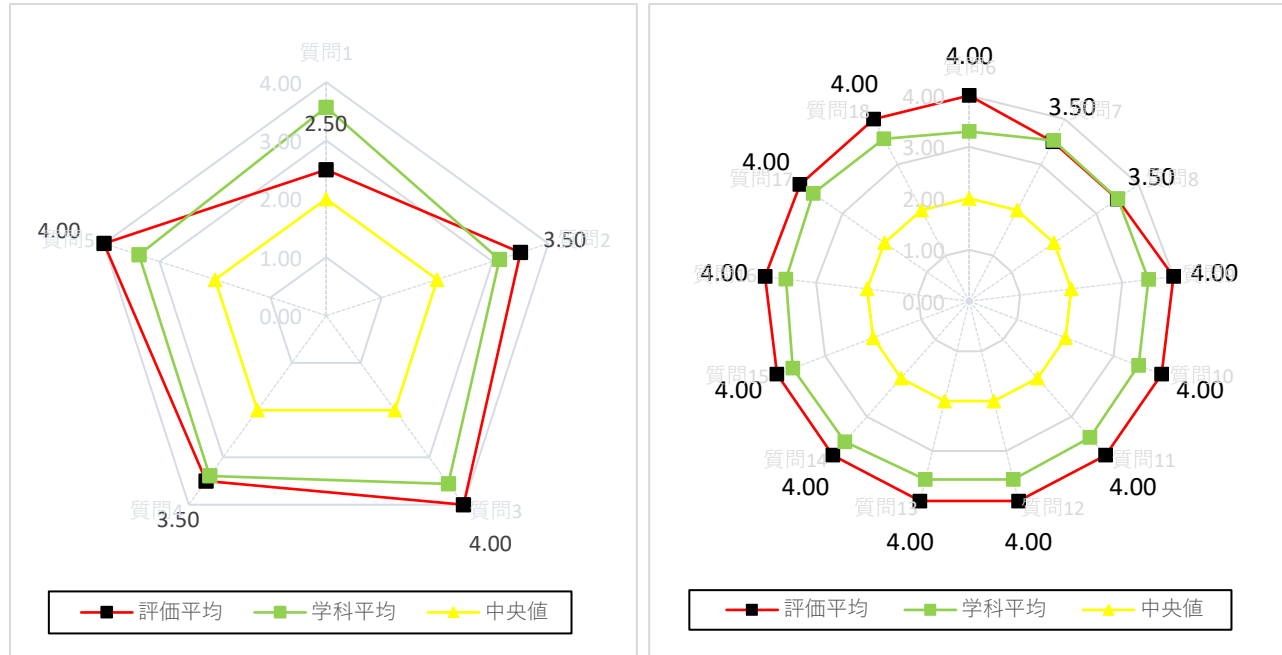
全項目で、学科平均と同様の結果を得た。

（３）次年度に向けての取り組み

次年度も、今年度と同様に取りくむ。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		ゼミナールⅡ	9名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

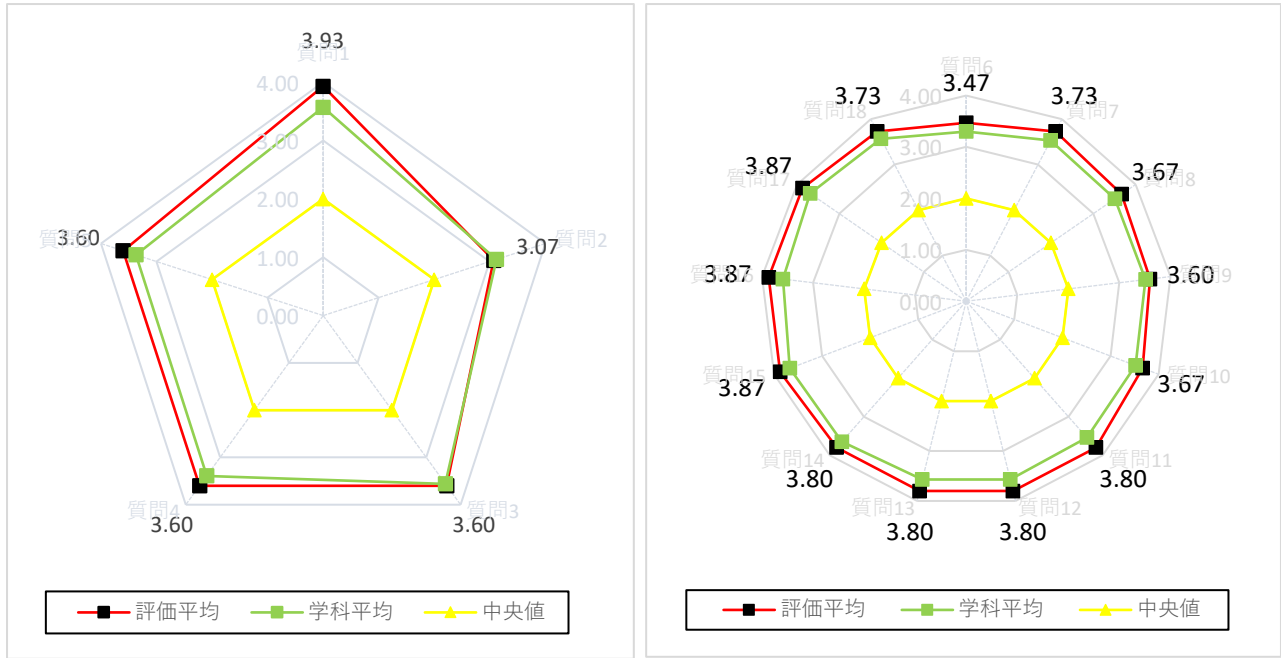
概ね、授業評価は高いものと判断できるため、現状を維持できるようにしたい。また、オムニバスでの実施している講義内容が一部あるため、不明確な部分が多いこともあると思われる。次に、質問7は真摯に受け止めて、到達目標を明示し、それと対応させて各学生に課題を提出するなど、積極的に関与する必要があると考えられる。一方で、あまり多くの課題を与えても、クリアできない可能性もあるため、慎重に検討したい。また、質問8についても、真摯に受け止めて関心の持てる内容や、それぞれに合った内容、そして講義形態や課題提出の在り方を検討しなければならない。最後に、ゼミナールでの形式であるため、否定的な評価はしにくい点も考慮すべきであろう。そのためには、この結果を鵜呑みにせず、他のアンケートや資料などを活用しながら、授業を改善していくことも必要であると思われる。

(3) 次年度に向けての取り組み

まず学生が主体的に関心を持ち、関与できるように、ワークやディスカッションを取り入れることも検討しなければならない。本年度は新型コロナウイルスの影響により、対面授業ができず、グループワークやディスカッションなどが十分に行えなかった。本年度が初めての開講科目でもあり、戸惑いもあったが、FormsやTeams等を利用して、より今ここでの体験を重視していきたい。そのため、シラバスにも明記したり、講義時にも丁寧にアナウンスするなどして、ワークなど主体的に取り組む学修を増やしていきたい。また、これに関しては他の教員とのすり合わせ、調整も必要になるため、随時提案や調整をするなどして、オムニバス形式の箇所に関して、刷新していきたい。さらに、学生の興味関心に耳を傾けて、講義計画を練り直すことが重要であろう。また、到達度は学生により異なるため、明言していない部分があったが、きちんと明示していきたい。そのためには、それぞれの学生の進捗状況に合わせて、目標提示をし改善したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼稚園教育実習Ⅰ	45名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

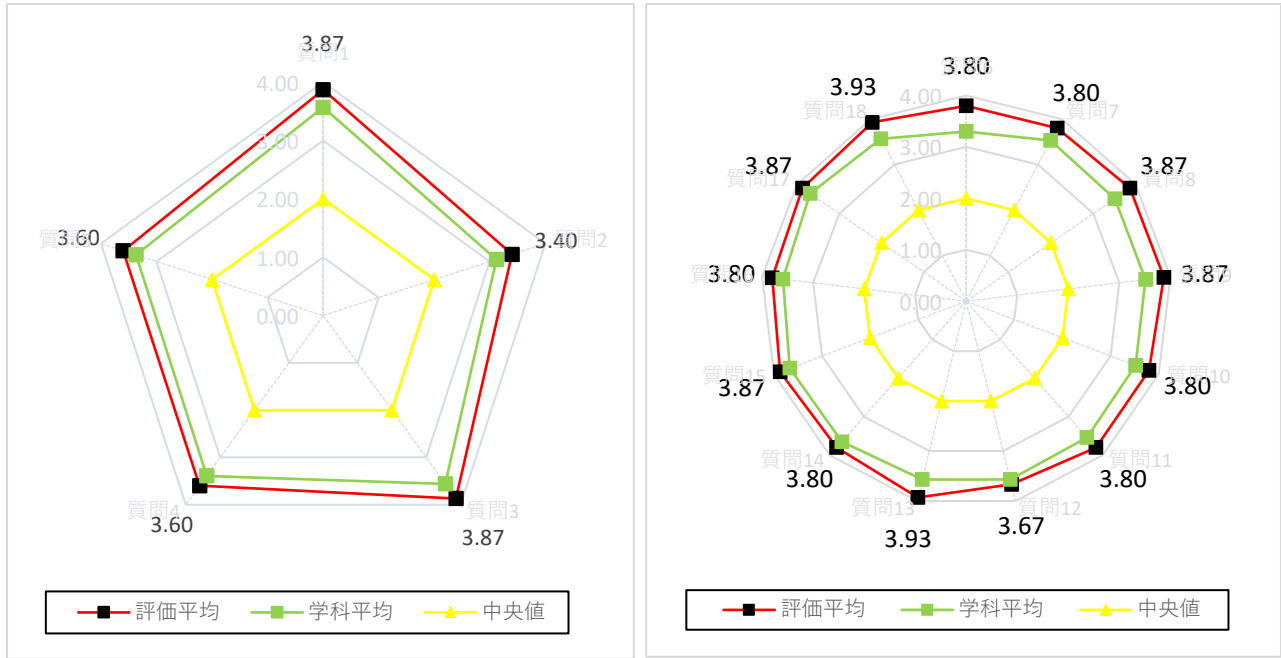
幼稚園実習Ⅰは、学生にとっての初めての实習であり、附属幼稚園での実習である。コロナ禍であっても早い段階から実習受け入れを表明していただき、感染予防に気を付けながらも安心して実習に臨むことが出来た。実習生の自己評価は真剣に取り組めたと数値が高かった。現場の受け入れ体制が整っているので、実りある実習になってると分析できる。実習日誌からも実際に子どもにかかわり、体験からたくさんの学びを獲ていることがうかがえる。園のクラスに配属された実習生同士の助け合いや学び合いも観察できた。今回は実習指導の対面授業の回数が十分確保できず、夏休みから現場の先生に指導計画案の添削を委ね、接触を避けて紙面でのやり取りとなった。観察実習、参加実習、部分実習、責任実習の段階を踏まえ、子どもや保育者から多くを吸収していると捉えている。何より、園からの実習態度の評価は高く、例年より実習生の人数が15人ほど少なく、保育を学ぶ意識も高かったことも一因と考えられる。今年度もA,Bクラスが実習を継続的行えたので、実習の学びの図解づくりがスムーズに進んだ。そして、学びを報告できたことは教育効果が高かったと捉えている。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度の学生も準備を整え、礼儀やマナーに気をつけ、謙虚な気持ちで実習に励んでほしい。幼稚園実習Ⅰが以降の実習の取り組みに大きく影響するので、個人の実習への姿勢や取り組みを重視していきたい。また、現場の先生との連携を図り、実習生の指導をより充実させたいと考えている。今回指導計画案に時間をかけられなかったのを改善し、コロナの影響があっても工夫して事前事後指導をもう少し改善・対応できるようにしたい。実習で学びたい目標について、意識して1日を振り返り、日誌に残せるようにしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		肢体不自由者教育	41名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

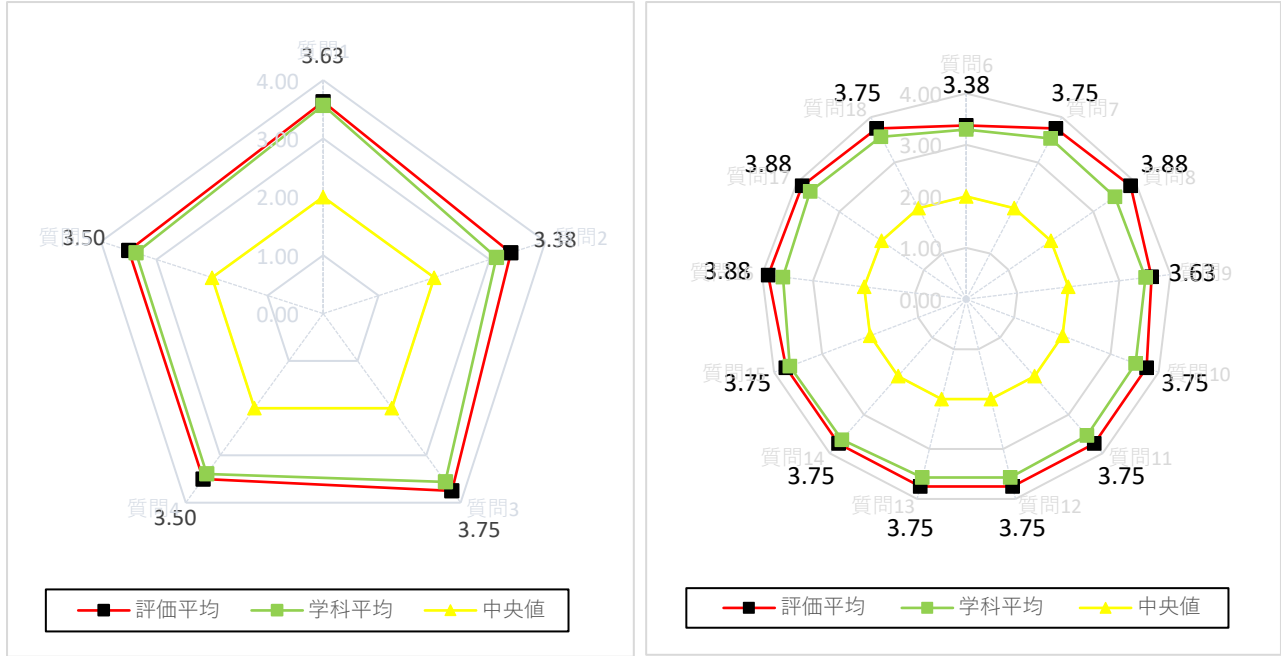
評価平均が3.79と、学科平均よりすべての項目で高かった。
 コロナの関係でズームでの遠隔授業を行ったため、シラバスを変更して授業を行った。
 41名の授業参加者であったため、zoomでの遠隔授業ではワークショップを入れることができず、講義形式での授業になってしまった。
 毎回課題を提出し、その課題の回答でやり取りするように進めていった。
 評価は、授業への参加度、課題の提出と最後のレポートで総合的に行った。
 この科目は、実際の指導場面等を見学させて考えることが必要だと思い、授業見学を企画したいと考えていたが、コロナの関係で困難であった。

（３）次年度に向けての取り組み

実際の授業場面等を見学して、指導方法等を理解させたいが、コロナの関係で今後も困難であろうと想定できる。
 そのため、DVDを視聴して、分析的に指導を理解するように検討していきたい。
 遠隔授業で実施するにしても、ワークショップ形式で話し合う時間を設定し、思考力を高めるように、授業を組み立てて生きた。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		特別支援教育実習事前事後指導	19名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

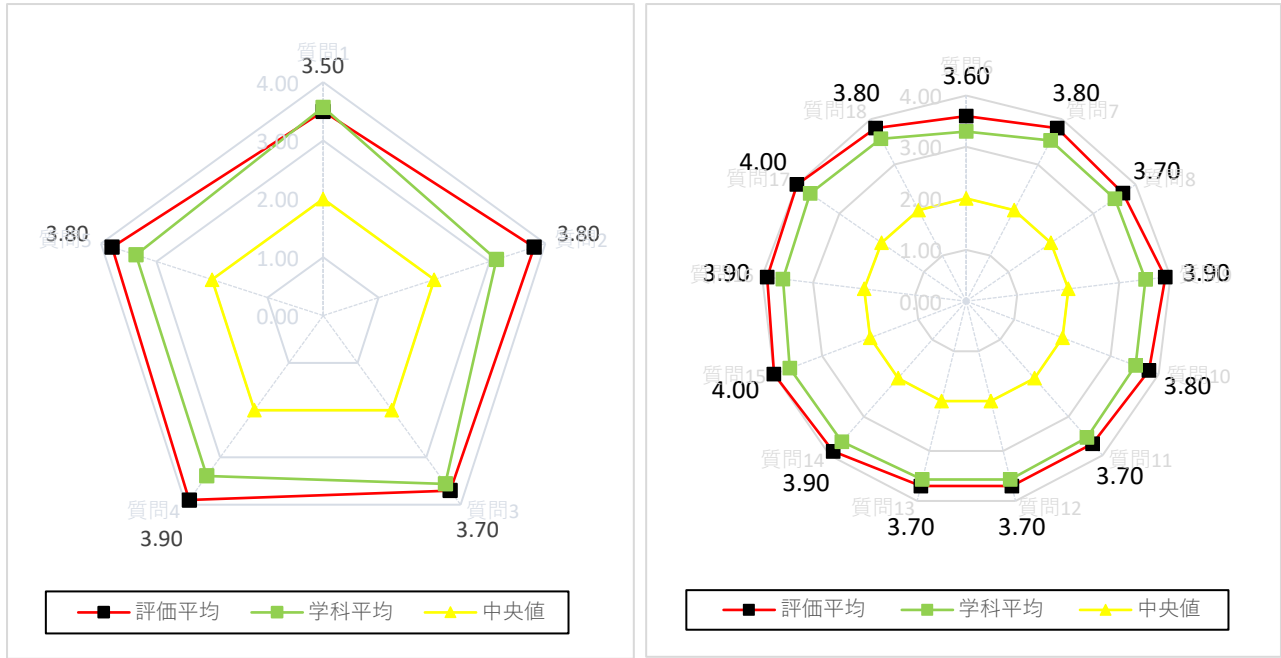
- ・評価平均は、ほとんどの項目で3.5を上回っており、おおむね良い結果となっていると思われる。
- ・シラバスの説明、活用に関する項目の評価が、他の項目に比べて低かった。
- ・年間8コマ設定しているが、教育実習の時期は学生ごとに異なっており、全体としては9月から12月までと長期間にわたるため、学習指導案の作成については、個別に時間を確保して指導している。
- ・事後指導として報告会を実施しており、次年度の実習を希望する学生へのメッセージも含め、有意義なものになっている。

（３）次年度に向けての取り組み

- ・実習生は各自別の実習校で実習を行うため、実習校の障害種別等に応じた具体的な指導に努める。
- ・学習指導案の作成演習に力点を置き、特別支援学校の学習指導案に特徴的な内容、作成手順等の理解を促進する。
- ・実習後の振り返りを小集団で行い、他の実習生の振り返りを基に自身の振り返りを深化、ブラッシュアップさせるような取組みを進める。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		肢体不自由者教育の理論と実際	31名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

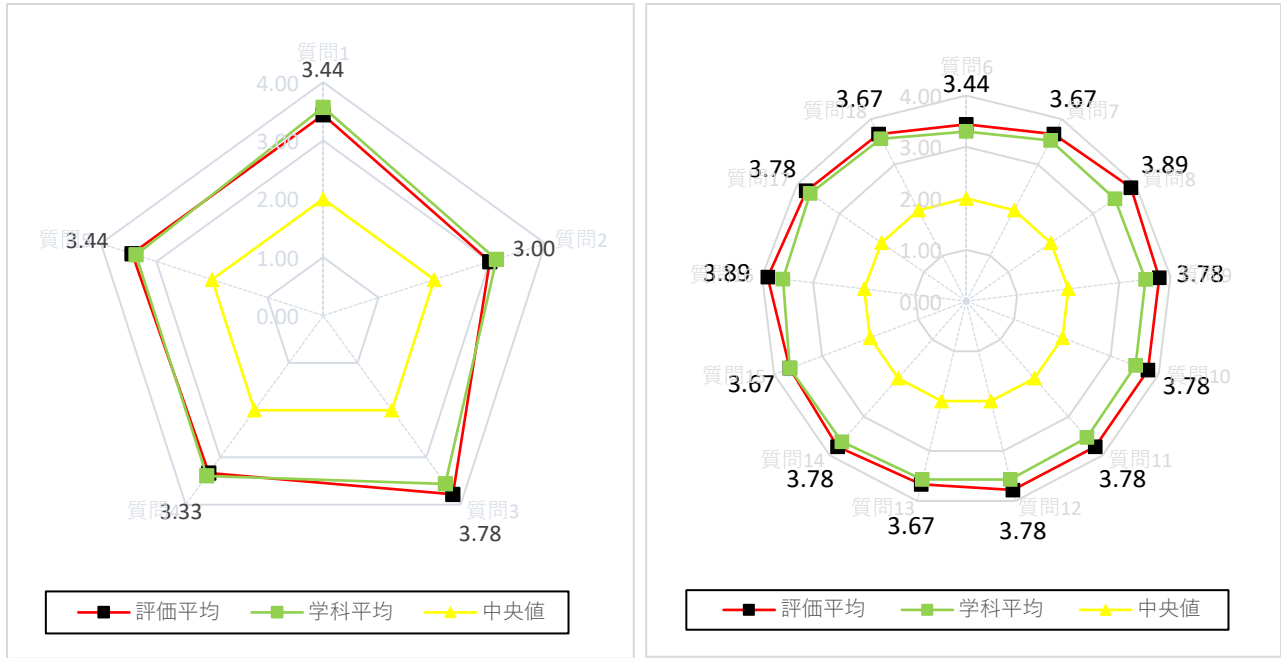
- ・評価平均が、おおむね学科平均より高い評価になっている。
- ・前半の授業は対面授業を行ったが、幼稚園の教育実習や介護等体験の実習と重なり、公欠の学生が10名を超え、またバラバラでの欠席になったため、事例を使った指導計画の作成のワークショップが進めづらかった。コロナの関係で話し合う環境設定ができず、グループでの話し合いができずに、それぞれ机間巡視しながら進めていった。
- ・後半の実技の指導はリモートで進めているが、興味を持って視聴しているようであったが、具体的な方法が対面での実技指導ほど定着しているかどうか、リモートでは定着しづらいように思う。

（３）次年度に向けての取り組み

- ・実際の具体的な実践事例等をビデオ資料しながら、その事例をワークショップ形式で、個別の指導計画（自立活動）の作成をさせていきたい。
- ・後半の授業は、リモートでの授業であったが、できるだけ対面で実技の指導ができればと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		体育（応用）	16名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

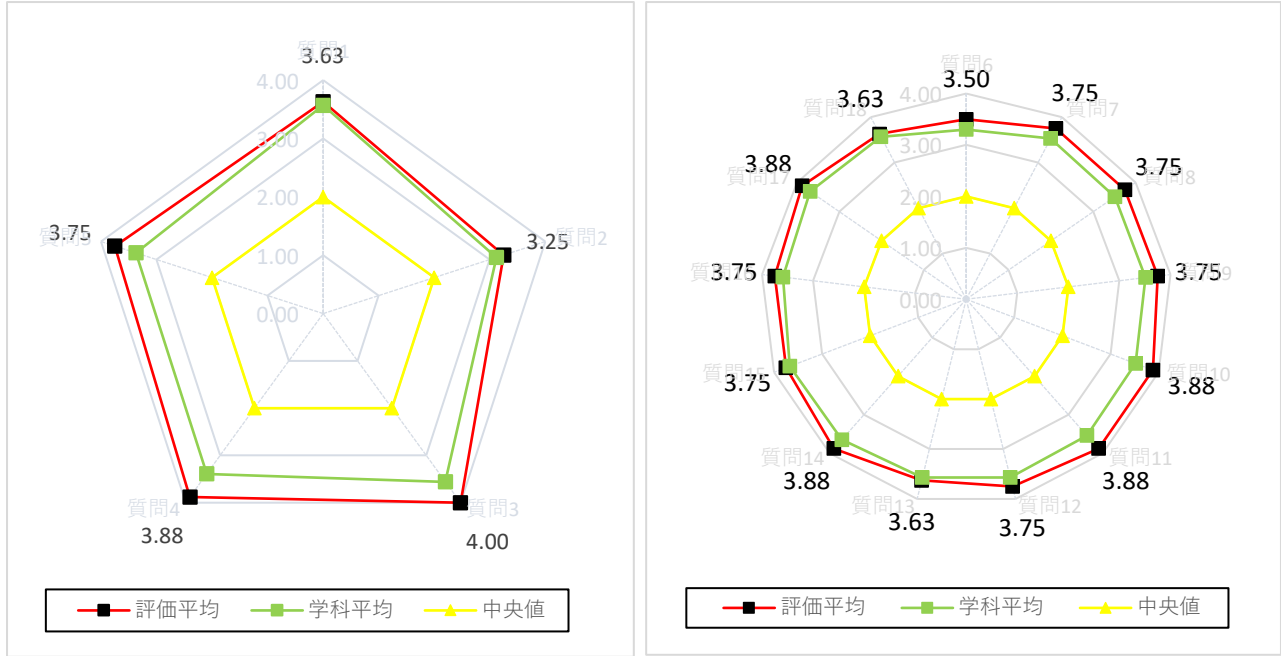
全ての項目で高得点である。高評価であると言える。より高評価を目指し、内容を改善する。

（３）次年度に向けての取り組み

引き続き、学生の主体的な活動と実践的な力量形成に寄与する内容を構成したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		特別支援教育実習	19名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

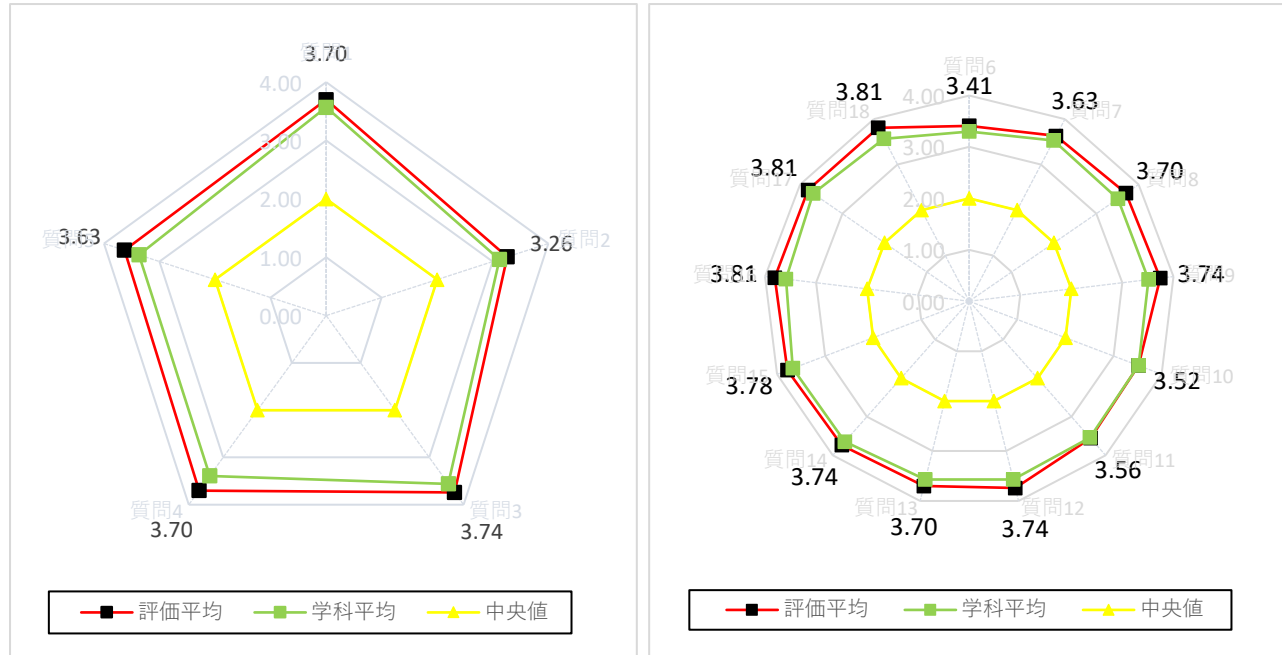
- ・ほとんどの項目で評価平均が3.5を上回り、総合評価も3.74と、おおむね良い結果となっていると思われる。充実した教育実習が実施できたものと推察できる。
- ・実習報告会では、児童生徒の実態把握の難しさが各実習生に共通した課題として挙げられた。

（３）次年度に向けての取り組み

- ・特別支援教育実習事前事後指導において、児童生徒の実態把握のための視点を明確化するなど、実習中の課題解決につながる学修を充実させる必要がある。
- ・実習希望者が増加傾向にあるが、特別支援学校教員免許を取得することの意味や意義の十分な理解に努めるとともに、実習に向けた意識、意欲の高揚を図ることが必要である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		音楽表現指導法	56名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

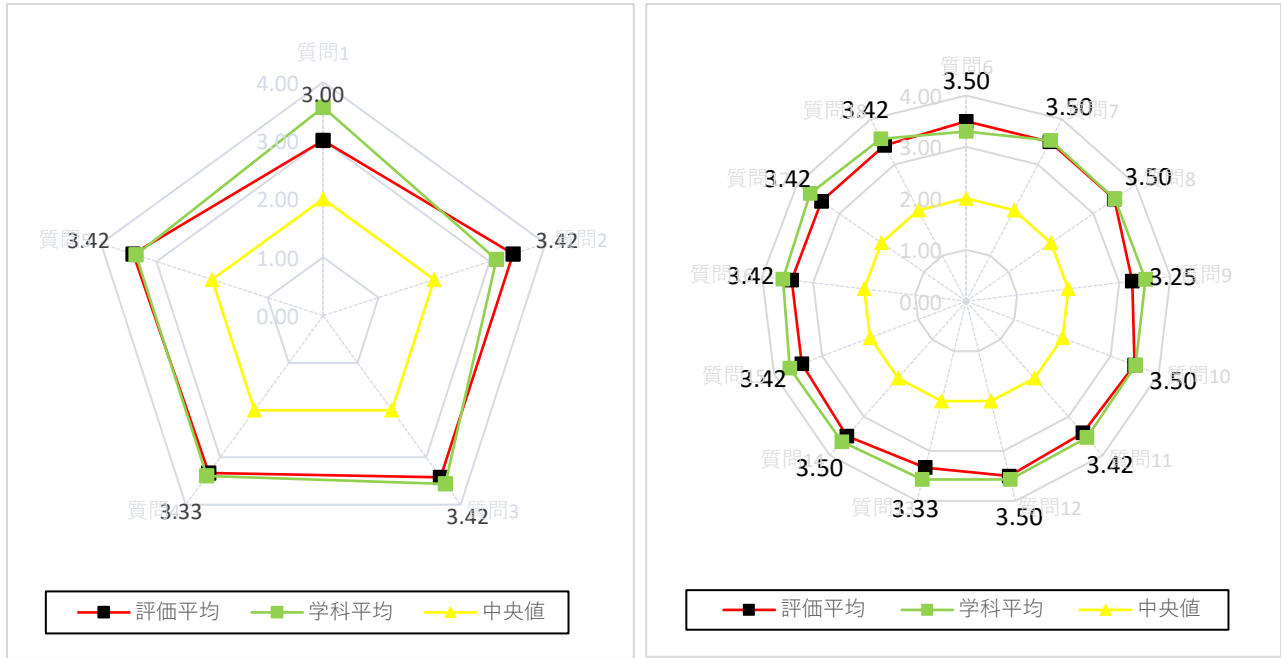
この科目は、保育士資格及び幼稚園教諭免許取得のための専門科目として、子ども学科の2年次生を対象に開講している。例年は、保育所や幼稚園における様々な音楽表現活動例を紹介しながら、グループ活動等の演習を通して乳幼児期の子どもの発達に応じた音楽表現活動の内容及び指導法について指導している。今年度前期は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の為、6月中旬の対面授業開始前までは遠隔で授業を行なわざるを得ない状況が続いた。質問1「出席状況」、質問4「授業を理解するための工夫」における学生の自己評価は高い。確かに遠隔授業期間中の学生の出席状況は極めて良好であったことに加え、レポートの記述も学生なりに内容を整理し、要点を踏まえた記述が多くみられた。授業に対する学生の取組の姿勢が、質問5の「学生自身の総合評価」に現れている。質問6以降の教員に対する評価のうち、質問15（学生への公平さ）・16（双方向的なやり取り）・17（授業への教員の熱意）に関しては、次年度以降も重視しながら指導していく。

(3) 次年度に向けての取り組み

音楽表現活動における学生の実践力育成のためには、種々の演習を組入れながら指導する必要がある。その際には、諸々の楽器や楽曲を活用しながら、歌う・聴く・動く・奏でる・つくるといった種々の実技を通して授業を進めていく。しかし令和2年度前期は、6月中旬まで対面授業を行うことができなかった。そのため前半の授業期間は、やや理論的内容の比重の方が高かった。次年度は、コロナ対策を講じながら、理論と実技を絡めながらバランスの取れた授業を進めていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		国語科演習	28名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

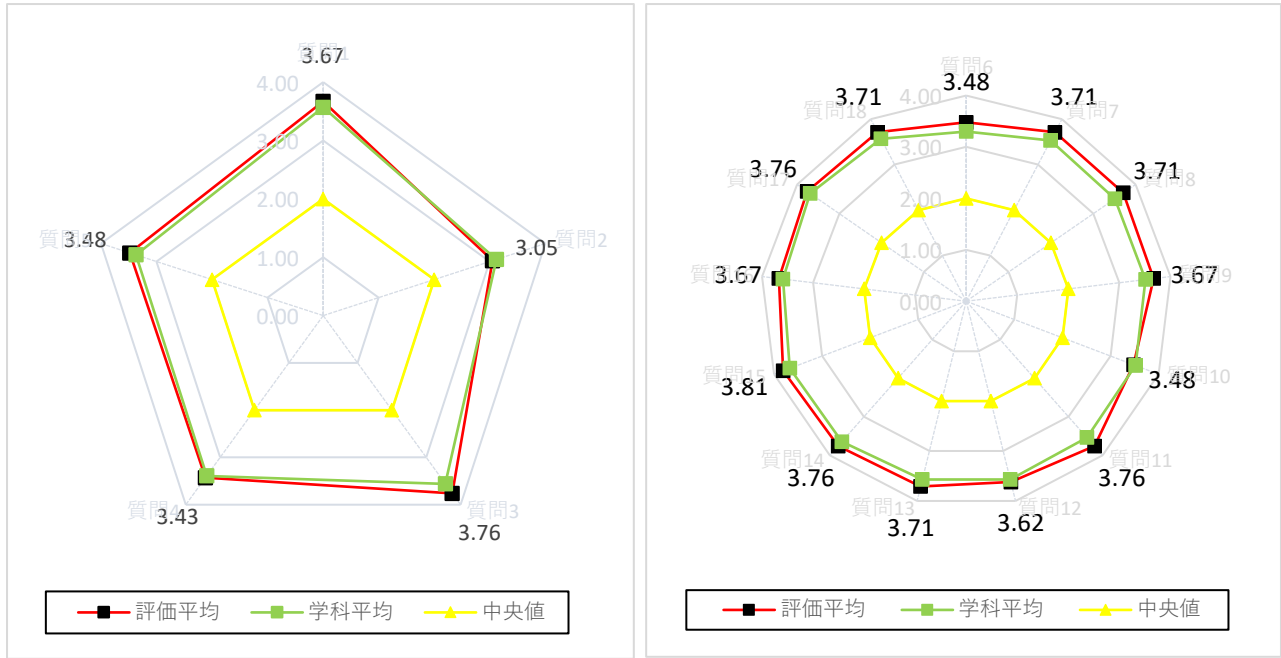
本授業の大きな課題の一つに出席率の低さが挙げられる。この原因の一つとして考えられるのは、本授業の開講日と様々な実習期間が重なるからであろう。結果、受講者間の理解度及び学力の差になって現れており、このことが授業評価の低さに影響しているのではないかと考えている。

（３）次年度に向けての取り組み

「（２）結果の分析と評価」で述べたことと関連するが、次年度は、受講者個々の学びが途切れぬような手立てを考えていきたいと思う。例えば、課題について早めに連絡をすること、授業と家での学習をつなげる資料を工夫すること、授業の中に「復習の時間」を位置付けること、などが考えられる。いずれにしても、受講者の意欲を大事にした授業づくりに努めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		リズム表現指導法	37名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

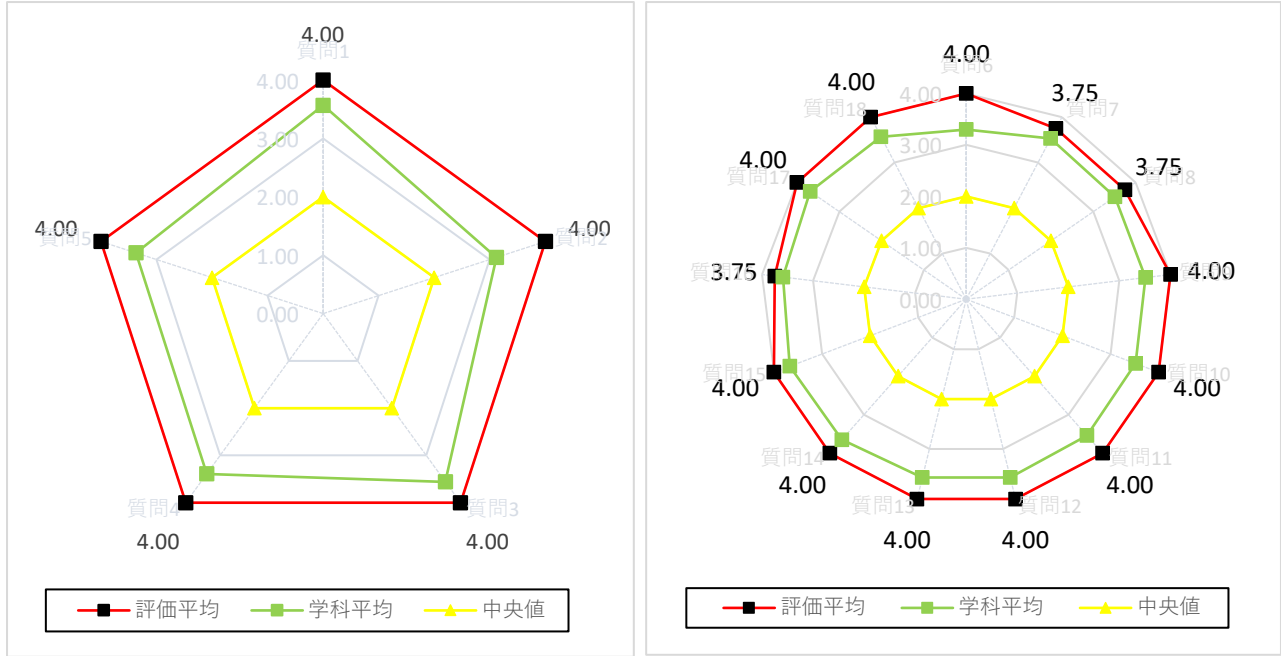
本年は、コロナによる影響が多大にあったと思われる。シラバスについて、第一回目の遠隔授業時に、資料をつけ説明したつもりだが効果はなかったようである。実技である本科目は、子どもたちが喜んでダンスをするにはというところから入る。しかし、中にはダンスをしたことがない人が多い上に、リズム符さえ理解できていない。そのリズム符を理解できるように言葉で説明した資料を添付し課題を出したが、難しい状況が続いた。対面授業は9週目からだったが、対面授業での理解はスムーズに運び、実技テストを楽しんで受けるまでになった。残りの時間で授業内容を詰め込んだ感があり、双方向的なやり取りができなかったことが、反省の一つである。また、対面授業を受けた学生の表現力が、一回一回向上していくのがわかり、指導に熱が入ったことも確かであった。コロナを共にした授業は、指導者の私にとっても、良き学びとなった。

（３）次年度に向けての取り組み

次年度は、反省も含めて資料の検討がまず課題となる。また、創作部分でのソーシャルディスタンスをもう少し緻密に計画することが必要である。表現力は伸ばせても、創作力の伸びは少なかったので、方法の検討を模索することになるであろう。コロナ禍にあっても、学生が受講してよかったと思える授業の内容や方法を研究し、次年度に繋げたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		社会科演習	24名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

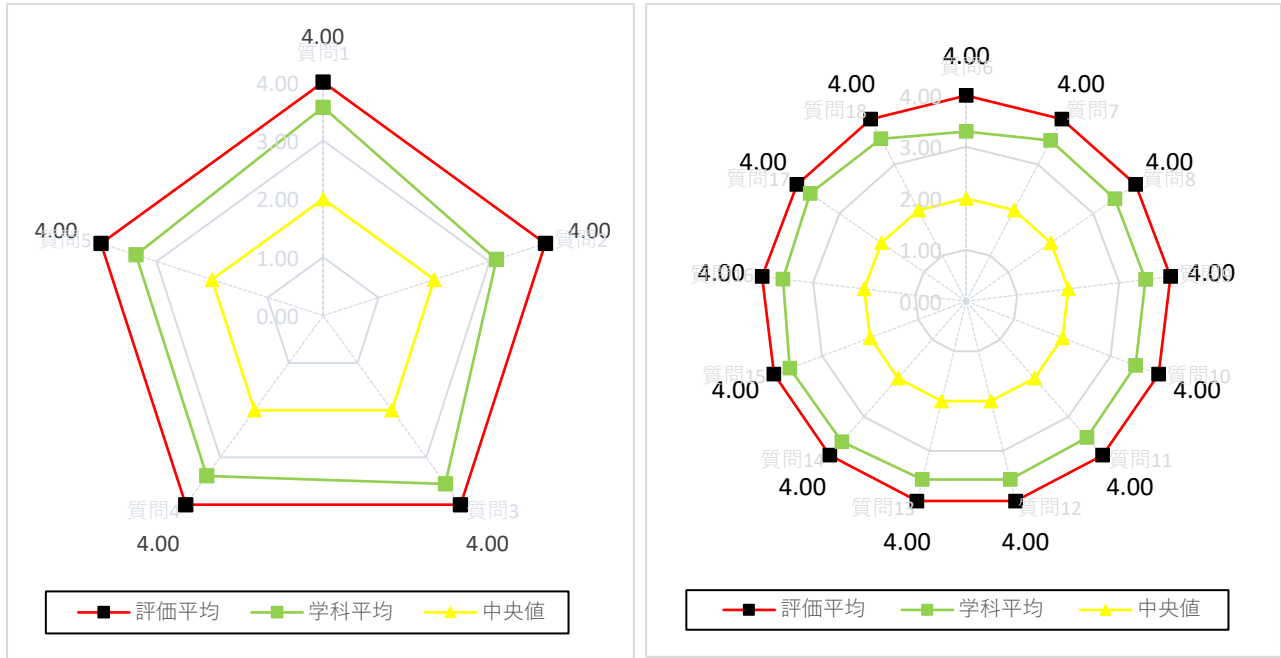
受講者は、概ね良好な評価をしていると考える。受講者全員が二人一組で模擬授業に向けての「授業構想・学習指導案づくり→授業実践→授業評価→その評価を下に次時の授業構想・学習指導案づくり（PDCAサイクル）」に取り組み、小学校教諭に必要な「実践的指導力」向上の一助になったと考えている。模擬授業の実施にあたっては、学校現場におけるＩＣＴ利活用の現状から、「電子黒板」活用についての事前指導が不十分だったと反省している。また、コロナ禍における「遠隔授業」についても、ＩＣＴ利活用能力を一段と高める必要があると痛感している。

（３）次年度に向けての取り組み

コロナ禍の下、また、将来の社会状況からして、電子黒板を含め、ＩＣＴ利活用能力を一段と高め、アクティラーニング、質の高い授業を行うことが、学校現場で質の高い授業、そして、子どもたちの「生きる力」の育成につながると考える。より一層の研鑽を積んで、授業に臨みたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	6名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

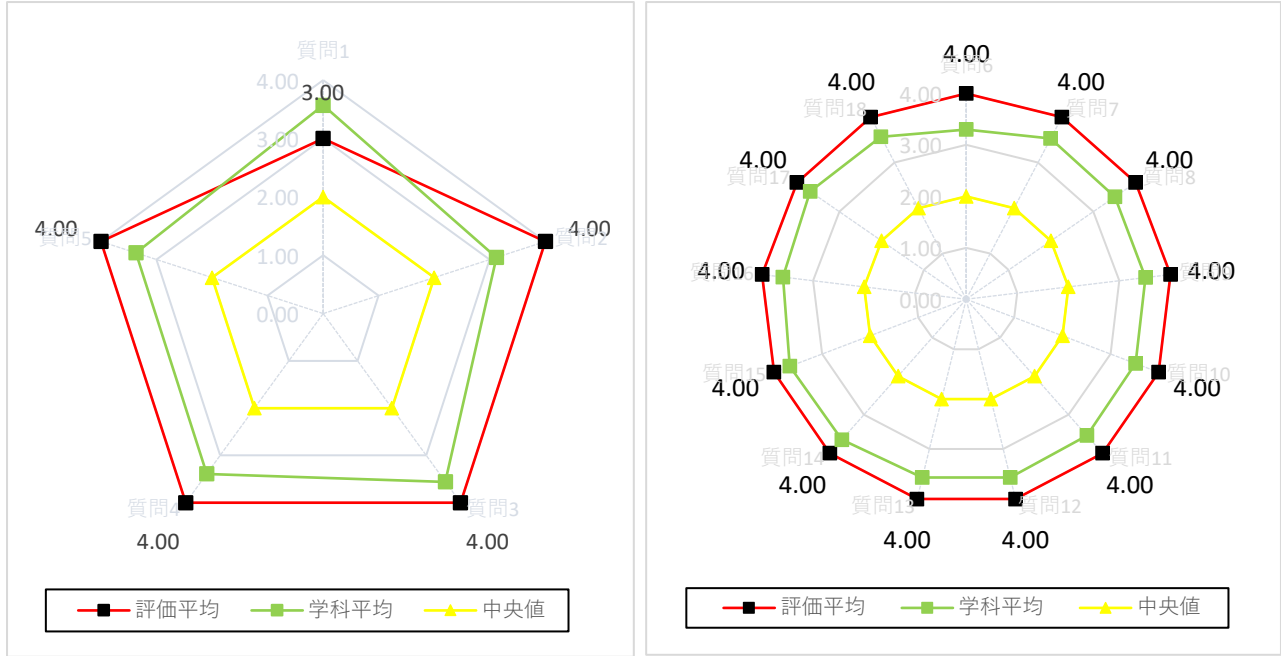
演習を重ねるごとに、個々の学生のよさや個性を見出すことができて嬉しかった。教師冥利に尽きることが何度もあった。よい結果が得られたと思う。

（３）次年度に向けての取り組み

次年度は「子ども学演習」は担当しないが、受講生は引き続き「卒業研究」に入る。このことについては、次年度の「卒業研究」の取り組みに記したとおりである。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	6名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

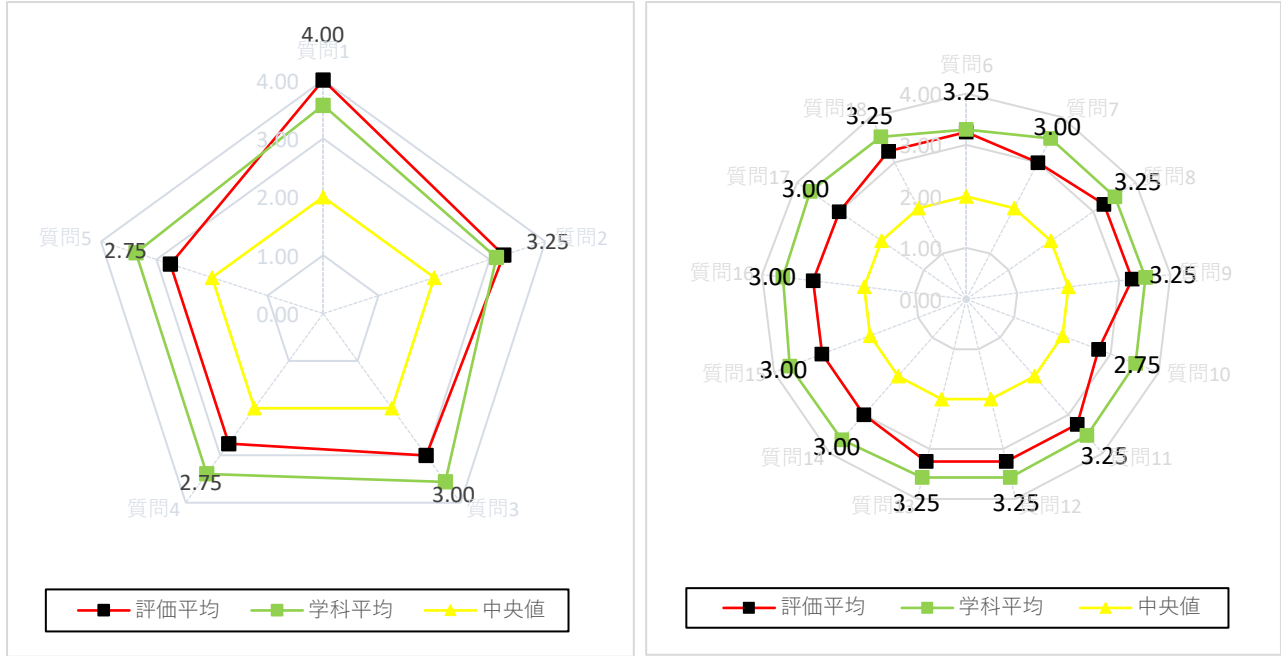
1/6の回答である。したがって、授業評価としては成立しないものである。しかし、一人の学生がすべての項目に4点をつけてくれたことは、ゼミの進め方としては好意的に受け止められている部分も大きいと考えられる。

（３）次年度に向けての取り組み

次年度も、アンケートに回答しなかった学生も含めて充実した研究指導を継続していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

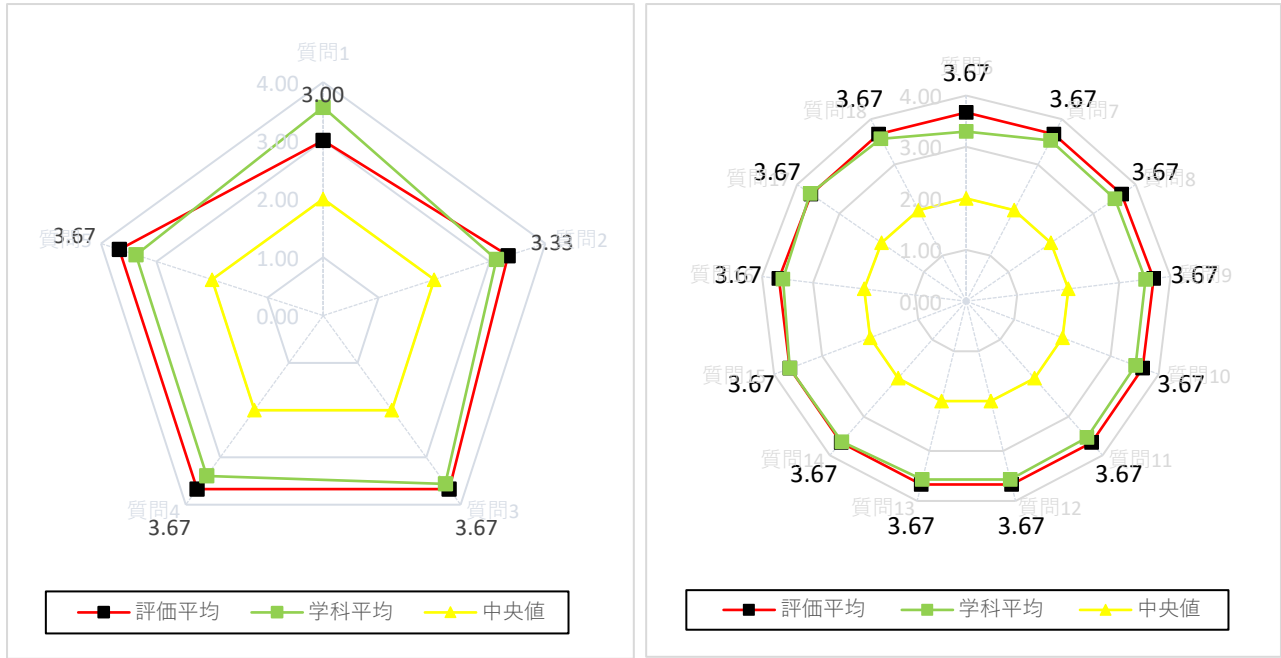
例年、子ども学演習の授業では、地域の乳幼児の子どもとその保護者を対象に「子どもミュージアム」を開催している。しかし令和2年度はコロナ対策として対面での活動は取りやめ、動画配信に切り替えた。この授業では、音楽の様々な実技を通して、音楽表現に関する学習を深めていく。そのためには、遠隔ではなく、対面授業でじっくり取組んでいくことが不可欠である。令和2年度は年間を通じてコロナ対策を講じる必要があったため、様々な縛りが多かった。例年のような取組を行うには困難を極めたことが、質問6以降の評価に現れている。

（３）次年度に向けての取り組み

音楽の場合は、入学前からのピアノレッスンや音楽系部活動等での音楽経験の有無によって、個々の学生が培ってきた音楽表現力の個人差はかなり大きい。興味や関心、取り組んでみたいと思っている音楽表現活動等に対しても個人差がある。次年度受け持つゼミ生の状況を把握したうえで、個別に適切な指導を行っていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

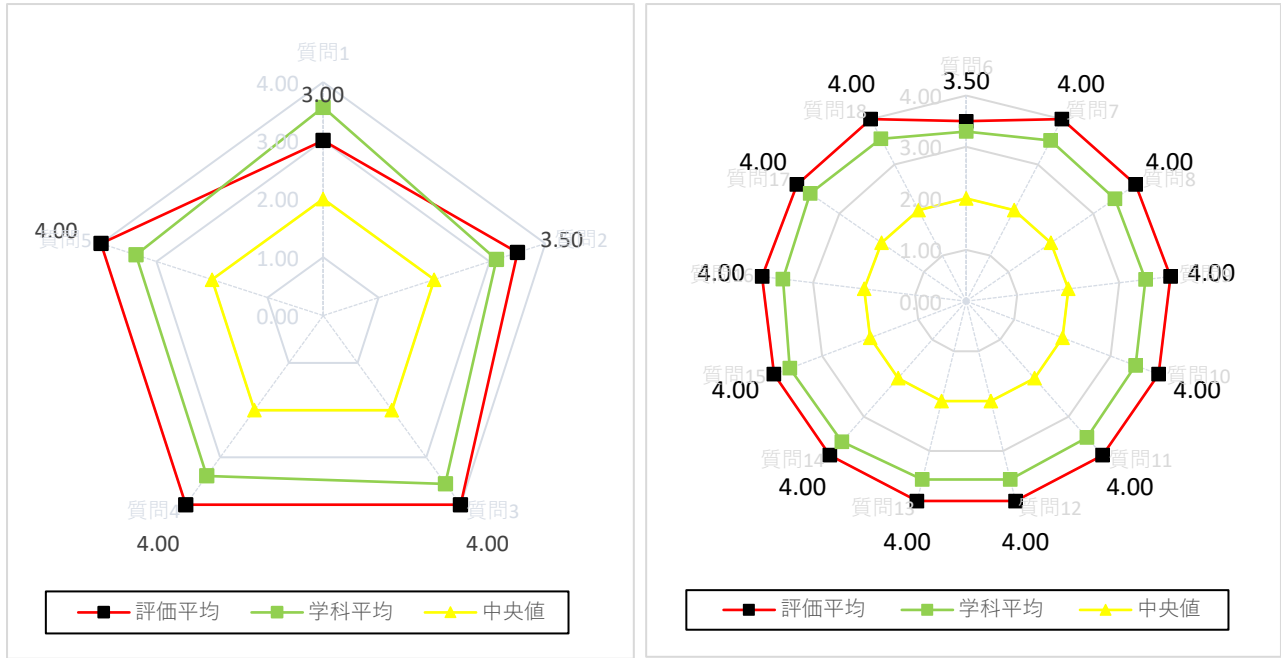
少人数の演習科目であるため、評価は学生の特性等の偶然性に大きく影響を受けることが予想される。質問1以外すべて学科の平均と変わらないか、それ以上の評価を得ている。

（３）次年度に向けての取り組み

学生の特性をしっかりとらえた授業の展開を実践すべきことと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

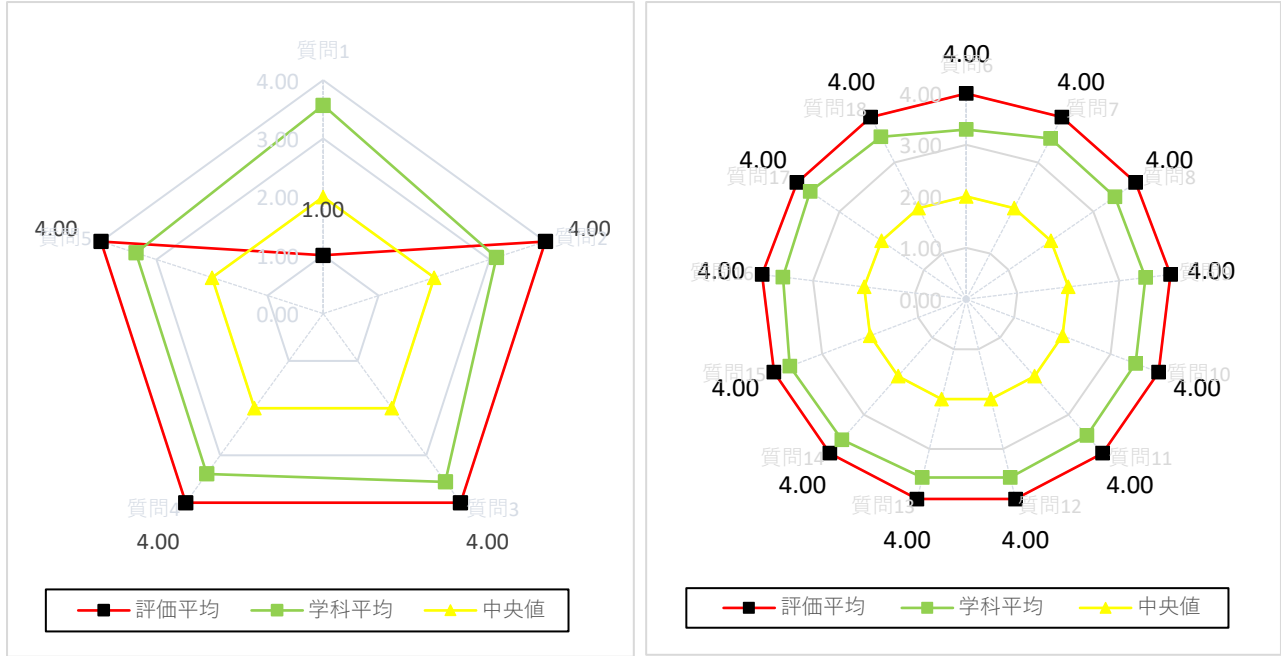
多くの項目が満点である。高評価であったと捉えている。
質問1に関しては学生の出席状況を改善したい。質問6に関しては今年度はより丁寧にシラバスの説明を行いたい。

（３）次年度に向けての取り組み

シラバスの説明を丁寧に言いながら、主体的に参加できるゼミを目指す。今年度も引き続き、学生の考える力の育成を主にゼミ活動を行っていきたい

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	8名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

回答者は5名中1名である。回答率が低い。しかし、自己評価も授業のやり方も、4で、非常に良い評価である。出席回数の回答が極端に低いが、これは勘違いであろう。本演習の授業は、学生の主体的な取り組みで成り立っている。評価項目が演習の評価に適するとは言えないが、制度上、評価回答が増えるように働きかけたい。

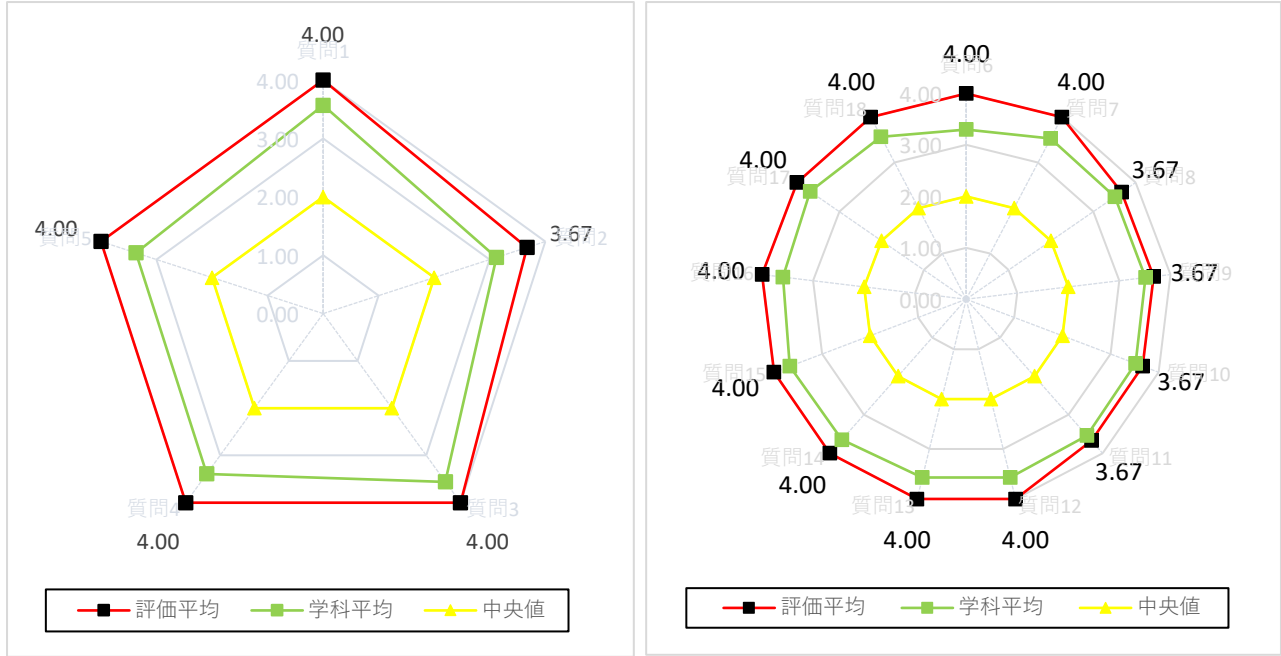
今年度は、コロナ・パンデミックのため特別な対応を迫られ、予定通りの活動を行うことができず、ほとんどオンラインで行わざるを得なかった。しかし、子どもミュージアムの準備を始め、皆協力して熱心に活動した。良い状況であった。学生の協力に感謝する。

（３）次年度に向けての取り組み

引き続き、学生の主体的な参加を中心に、学生と協力・協議しながら、学生との信頼関係を打ち立てるよう努力する。また、学生とともに授業の方法や進め方を工夫していく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	6名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

すべての項目について、一定以上の高い評価を得ている。本年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、対面授業が6月中旬まで行われず、オンライン授業による発表をとおして学生相互でテーマを共有し意見を出し合うなど、できる限り双方向的な授業ができるよう心がけた。「子ども学演習」については、4年次の卒業研究の基礎になるものであり、論文作成に向けてさまざまな工夫をしているところである。現在は仮テーマを設定し、それに基づいた先行研究検索やその内容について検討しレジュメを作成し、中間発表を行った段階である。学生にとっては、自分が興味ある分野において自らテーマを設定し文章を書くという経験があまりないため、かなり細かい部分まで指導する必要があった。

これらのことを踏まえると、一人ひとりの学生の個性や能力に応じた個別対応が不可欠であり、細やかな配慮が求められていると考える。

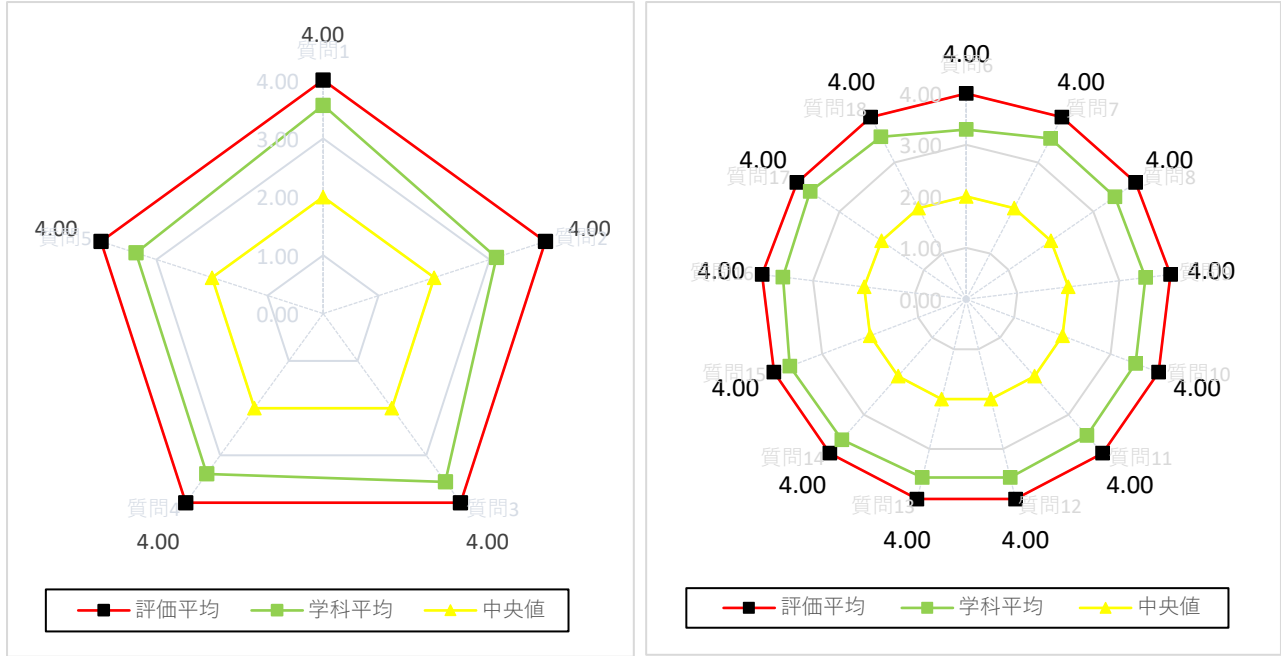
（３）次年度に向けての取り組み

一人ひとりの学生の状況に応じた細やかな配慮を怠らず、学生が自分の考えをまとめて文章で表現したり、他人に対して自分の意見を発表するスキルを身に付け、4年次の卒業研究にすすむことができるようしっかりと指導をしていきたい。

さらには、それぞれの考え方や研究成果をゼミの学生間で共有できるようにアクティブラーニング的な授業を進めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	5名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

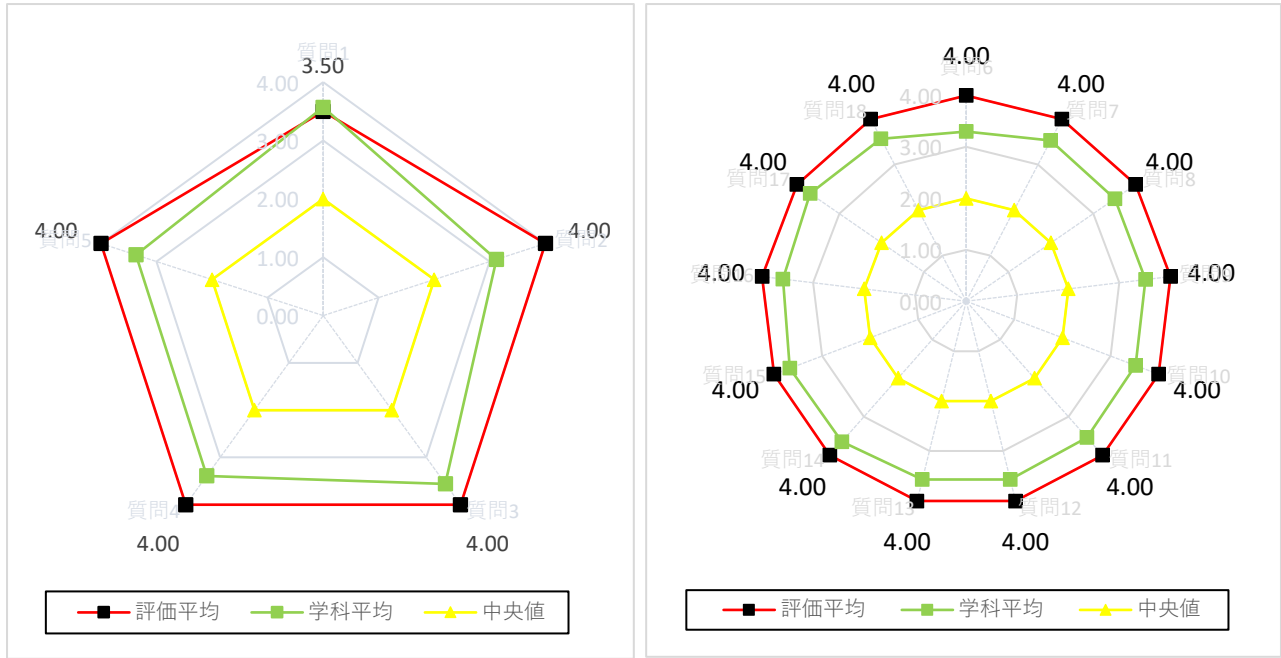
- ・アンケートの回答数が少なかったため、評価平均値に対するコメントは差し控える。
- ・新型コロナの影響で、予定していた学外交流活動を自粛せざるをえなかった。代替として、交流相手の方々へのビデオメッセージ等の間接的な交流活動に切り替えた。

（３）次年度に向けての取り組み

- ・ゼミナール科目であり、授業のスケジュールや取り扱う内容について、柔軟に対応していく方針に変わりはないが、引き続きシラバスをよく説明し、学生が見通しをもって学習に取り組めるよう、一層工夫していく。
- ・学生の学びのニーズを常にゼミ全体で共有することにより、授業の目的や学生個人の目標を確認し、主体的な学修につなげるようにする。
- ・新型コロナの状況次第ではあるが、可能であれば学外活動の場を確保できるよう、状況を見極めながら模索する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	6名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

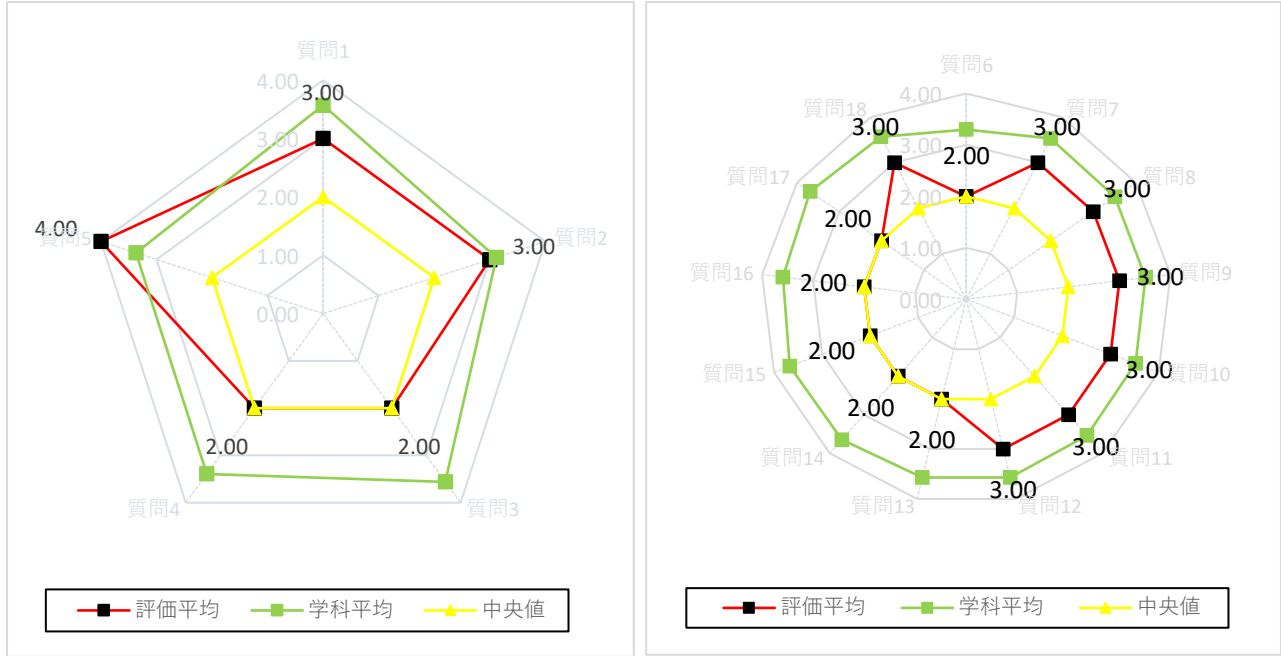
本科目受講学生の回答率は、6名中2名で、回答率33%で大変低かった。本科目への総合評価は3.97であり、学生の総合自己評価は3.97、授業に関する評価は4.00であった。2名についてはあるが、自身の学びと授業内容について、大変充実していたことが窺える。

（３）次年度に向けての取り組み

来年度は、学生全員からの回答が得られるように、授業時の投げかけを確実に行っていく。授業については、今年度同様、学生自身の興味関心を大切にし、学びが深まるように進めていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		乳児保育Ⅱ	2名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

新カリキュラム移行時期に関連して「乳児保育」を受講していない学生を対象に特別に受け持ち、授業を行った。

受講対象者は2名であり、そのうちの1名の評価である。授業はゼミ形式で行い、乳児を対象とする指導計画を立案するなど具体的な方法で行った。どちらの学生も課題や発表に対してあまり積極的ではなく進めることが難しかった。回答学生の自分自身の総合自己評価が満点であることにも疑問を覚える結果である。

（３）次年度に向けての取り組み

令和3年度から3年生を対象に改めて「乳児保育Ⅰ」を担当する。「乳児保育Ⅱ」については、保育現場の保育士が担当することになる。お互いに共通認識をもち保育現場で重視されている「乳児保育」について学生がしっかりと学び、実習等の活動がスムーズにできるようサポートしていきたいと考える。